

ISBN 978-4-902325-51-5

地球研言語記述論集 2

大西正幸・稲垣和也（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所
インダスプロジェクト

2010年3月

地球研言語記述論集 2

目次

巻頭言	長田 俊樹	i
序文	大西 正幸	iii
チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚え書き	林 範彦	1
ジンポー (カチン) 語における動詞連続の文法化	倉部 慶太	15
ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話	仲尾 周一郎	39
神奈川県座間市の方言における、「必要」を表す「ようだ」	野島 本泰	73
ブヌン語の、「望ましくない状態」「姿勢」を表す形容詞の派生に 用いられる接頭辞 matu- — 形態分析と意味記述	野島 本泰	87
ヒャルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言の格体系	鈴木 博之	97
硬口蓋調音の多様性とその表記 —雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察— ...	鈴木 博之	107
伊良部島方言における述語部分の焦点化について	下地 理則	115
ナゴヴィシ・シベ語の類別詞	稲垣 和也	135
モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化	大西 正幸	165

巻頭言

長田 俊樹

この『地球研言語記述論集』は2009年3月に第一号を発刊しました。ここに第二号を皆様にお届けします。この論集は地球研(正式には総合地球環境学研究所)のインダス・プロジェクトの成果として毎年一回発刊しています。このプロジェクトや論集の成り立ちについては第一号に書きましたので、ここでは繰り返すことはしません。ここでは、プロジェクト・リーダーとして、この『論集』にかかる思いや言語学研究に対する考えを書いておきたいと思います。

私が言語学をはじめてから、早いもので30年以上がたちました。その間に、言語学のトレンドほど流行に左右されてきたものはないのではと思えるほど、次から次と新しい理論が提唱されては廃れていきました。そのような流れのなかで、言語学徒は競って新しい理論を追いかけていきました。私はそれを「最新理論追跡症候群」と名付けて、今は休刊になった『月刊言語』に書いたことがあります。言語学者と名乗る以上、最新理論を知らなくては一人前の言語学者ではないと言わんばかりです。裏を返せば、かつて亀井孝が『言語学』と揶揄したように、言語学は言語の学ではなく、言語理論の学になってしまった。そんな印象をいただくのは決して私一人ではないと思います。やはり言語学という以上、言語の学であってほしい、そう願ってやみません。

言語学が直面する、もう一つ重要な問題があります。それが学問の細分化です。これは言語学に限ったものではなく、すべての学問分野にいえるかもしれません。言語学に関して言えば、音声学者は音声だけを対象とし、統語論研究者は統語論だけに専念するといった分野の細分化だけではなく、個別の論文の対象も「語のにおける××について」と細分化されていく傾向にあります。また、言語学会で、日本語の助詞ハとガの区別を扱った研究者に対する質問が、助詞ノに及んだときに、「助詞ノについては私の専門ではありません」と答えたとしても、誰もとがめたりはしません。専門がどんなに細分化されていったとしても、それについてはだれもが目をつぶって仕方がないと思ってしまう。それが現状ではないでしょうか。

私が博士論文でムンダ語の文法を書いたときに、ある日本の先生に文法を書くにはまだ早いと言われたことがあります。その先生にとっては、今の私の年齢(55才)で文法を書いたとしたら、まあ文法を書いてもいい年齢になったと感ずるのかもしれませんが、しかし、私の実感としていえば、まだ30代だったので文法を書くことができましたが、今この年齢で文法を書くのは正直しんどくて、書く自信がありません。つまり、徹夜がまったく苦にならないような若いときにこそ文法を書くべきです。

私自身文法を書いて思ったのは、自分の弱点は統語論にあるということです。その反省から、後には統語論的視点に立った論文を書くことができました。文法を書くには、すべての分野に関心を持たないと、偏った記述になってしまいます。最初から、得意な分野だけをとりあげた博士論文では、自分の弱点もわかりませんし、当該言語の全体像を知ることはなかなかできません。文法を書くことで、自分の弱点を知ることができ、当該言語をさらに深く知ろうとつとめることになって、音韻論から統語論まで、語彙論から語用論までと、言語学の総合力が自然とあがっていきます。このことは私自身の経験からはっきりと言えます。

また、理論を追っていても、当該言語の網羅的な記述はなかなかできません。というのも、すべての分野にまたがる言語理論がなく、音韻論か、あるいは統語論に偏った理論が多いからです。かつてムンダ語に取り組んだことのある言語学者のなかに、日本語にも翻訳された『英語変形文法の要点』の著者、ランゲンドンがいます。彼はムンダ語が変形文法の枠組（その時点では標準理論）ではうまく記述できないと、論文のなかで告白しています。結局、ランゲンドンはムンダ語については二つ論文を書いただけで、それ以上は取り組みませんでした。ここでムンダ語記述から新たな文法理論を導こうとしなかったことに、大げさかもしれませんが、理論の限界をみたような気がします。

この『論集』の執筆者の多くは、個別言語に取り組む、若い言語学者たちです。ここまで文法を書くことの重要性を説きましたが、千田君や稲垣君のように、博士論文ですでに文法を書き上げた人もいます。日本でも、博士論文ではあまり記述されていない言語の文法を書くという、新たな伝統が生まれつつあるように思います。この『論集』もそういう伝統を支える一翼を担えることを願いつつ、この巻頭言を終えることにします。

2010年3月18日
娘の二十歳の誕生日に

「地球研言語記述論集」第2号

序文

大西 正幸

「地球研言語記述論集」第2号が発刊の運びとなった。

毎年3月に出版されるこの論集の母体は、地球研のインダス・プロジェクト言語研究WGが毎月一度地球研で主催している、「言語記述研究会」である。長田さんの巻頭言にあるように、この研究会は、主に若手の、言語記述を専門にした研究者を中心に運営されている。論集の第1号を昨年3月に出してからこの一年の間に、新たなメンバーが3名加わった。今号では、そのうち倉部さんと仲尾さんが、力のこもった論文を書いてくれた。研究会が着実に活動を続け、このような若手の研究者が育って行くのを見るのは、本当にうれしい。

「論集」に掲載された論文の多くは、定例の研究会での発表や、初稿の段階での読み合わせ、メールでのやりとり等を通して、メンバー同士での議論を繰り返している。さらに、最終稿を入稿する前に、少なくとも2名のメンバーが細部まで読んでコメントする手続きを経ている。こうした丁寧な手順を踏んでいるので、どの論文/資料集も、内容的に充実したものとなっていると確信する。

ここで、前号にならって、「論集」第2号に掲載された論文/資料集の内容を、順を追って紹介することにしよう。

まず、巻頭を飾るのは、林範彦さんの「チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚え書き」である。チノ語は、中国の雲南省で話されているチベット・ビルマ諸語のひとつで、林さんは、昨年、この方言のすぐれた記述文法を出版している。掲載論文の細部にまで行き届いた議論は、この言語の文法の全体像をつかんだ研究者でなければ、よくなし得ないと思う。また、論文で扱われている「間接疑問文」は、記述の面でも類型論研究の面でも、比較的未開拓の領域である。本論で、林さんは、このトピックをめぐる記述/類型論的研究の現在の水準を見据え、文/節境界をめぐる統語構造を柱に類型論的な規準を立てて、チノ語内部における異なったタイプの疑問文の記述と、日本語、タイ語、漢語普通話との比較による言語横断的な分類を、同時に試みている。類型論と個別言語の記述が密接な関係にあることを示す好例である。

続く倉部慶太さんの「ジンポー(カチン)語における動詞連続の文法化」は、ビルマ(および、チノ語と同じく中国雲南省、さらに東北インド)で話されるチベット・ビルマ諸語のひとつ、ジンポー(カチン)語の、動詞連続をめぐる詳細な記述である。この構文の共時的な記述に焦点を置いているが、動詞連続をいくつかの形態統語的基準によって定義し、先行する動詞が副詞

や補文標識になったり、後続動詞が補助動詞になったりという文法化の程度を、それらの定義によって測ることで、通時的な側面にも注意を払っている。そのため、ややもすればデータの羅列になりがちなこの種の記述に、厚みを与えることに成功していると思う。

仲尾周一郎さんの「ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話」は、スーダン南部で話されるこのピジンクレオール語の簡易文法と、フィールドで収集した二つの民話テキストから構成されている。簡易文法の部分は、この言語の音韻、形態、統語が見渡せるように過不足なくまとめられており、後半のテキストを読む時に大変役に立つ。論集第1号の林由華さんの「池間方言の談話テキスト資料集」に続く、すぐれた資料集である。テキストデータを文法記述の一環として提示することは、個別言語の記述の大きな目的の一つであり、毎号このような成果が積み重ねられて行くことは、嬉しいことである。

野島本泰さんは、2篇の論文を寄せている。最初の論文、「神奈川県座間市の方言における、「必要」を表す「ようだ」は、彼自身の母方言における「ようだ」の意味分析を詳細に行いながら、日本語の他方言におけるさまざまな用例と比較している。後ろの補遺は、データ収集のお手本のような記述となっている。もう一つは、「ブヌン語の、「のぞましくない状態」「姿勢」を表す形容詞の派生に用いられる接頭辞 *matu-* — 形態分析と意味記述」と題されている。彼が長年かかわっている、台湾のオーストロネシア語であるブヌン語南部方言についての論考で、この接頭辞の記述分析に関する中間報告といった内容である。中間報告と書いたが、限られたデータを整理して、その形態、意味をさまざまな観点から丁寧に記述し、その限界点を見ながら次の調査へと繋げて行く手順がよく見える。この2篇の論文を読んでいると、野島さんがフィールド調査を楽しんでいる様子が目の前に浮かび、その息遣いまで感じられてくる。

これに続き、鈴木博之さんも、2篇の論文を寄せている。最初の「ヒャルチベット語松潘・山巴方言 [sKyangtshang] の格体系」は、ヒャルチベット語のこの方言の格体系を、中核項を示す文法格と、それ以外の格の、二つに分けて記述している。中でも、能格や与格の、標示される場合とされない場合の条件をめぐる記述が、詳細で興味深い。また、二篇目の「硬口蓋調音の多様性とその表記」では、現在の国際音声字母 (IPA) には存在しない、2種の (前部 / 後部) 硬口蓋音を区別する記号の必要性を、カムチベット語の諸方言の記述をめぐる具体的な事例をもとに詳しく論じている。専門の音声学をめぐる論文だけあって、論理の展開が緻密で説得的である。

下地理則さんの「伊良部島方言における述語部分の焦点化について」は、彼の両親の母語である南琉球宮古伊良部方言の、歴史的には「係り結び」に相当する文法現象のうち、動詞語幹の焦点化を扱ったものである。この現象は、従来の琉球語学では、動詞、焦点助詞、軽動詞の組み合わせによる分析的な構文として解釈されてきたが、下地さんはこの解釈に疑義を呈し、焦点助詞に相当するものを動詞の屈折接辞とする新たな分析を提示している。伊良部方言の超分節レベルでの音韻論に関する彼自身の研究成果を生かし、また語 / 倚辞 (クリティック) / 接辞の分節に関する近年の類型論研究の成果に目を配りながら、議論を展開している。一昨年以上梓された記述文法の細部をさらに深めたものである。

論集の最後に掲載された稲垣和也さんと大西による2篇の論文は、パプアニューギニアのブーゲンヴィル島南部で話されるパプア語、ナゴヴィシ・シベ語とモトゥナ語を扱っている。

稲垣和也さんの「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」は、ナゴヴィシ・シベ語の類別詞の体系を、音韻論、形態論、意味論の観点から、詳細に記述している。「南ブーゲンヴィル語族」の4つの大きな言語の中で、ナゴヴィシ・シベ語だけが、これまでほとんど信頼できるデータが収集されていない。これらの言語に共通する、典型的に特に興味深い現象のひとつである名詞類別に関して、この言語のこれだけ詳細なデータが記述されるのは、もちろんはじめてである。またこのテーマに関する類型論研究の現在の水準にもよく目が配られていて、多角的なすぐれた分析となっている。この語族の諸言語の比較言語学的研究にとって、きわめて重要な記述であることは、言うまでもない。

大西の「モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化」は、モトゥナ語の Ci/Cu 音節が規則的にコーダ子音の /h/、/ʔ/、鼻音と交替する現象を、まず共時的観点から記述分析したあと、通時的な観点からこの現象の起源を検証している。共時的な音韻現象を自然音韻変化として扱う、ブレヴィンスの「進化音韻論」の方法論を取り入れ、共時的な記述と通時的な記述との接点を探る試みである。また、モトゥナ語が属する「南ブーゲンヴィル語族」の主要言語（ナゴヴィシ・シベ語を含む）の比較音韻データ用い、特にコーダ子音に絞って再構を試みているが、これはこの語族の音韻体系全体の再構に向けての出発点を標したものである。

以上、掲載された論文／資料は、前号に続いて、どれも読み応えのある内容となった。執筆者の皆さん、建設的なコメントを寄せてくれたメンバーの皆さん、そして特に、最後の一ヶ月間、編集作業にかかりきりだった稲垣さん、ご苦労さまでした。

大西正幸

チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚え書き

林 範彦

キーワード: チノ語、チベット・ビルマ諸語、間接疑問文、直接疑問文、補足節、文末標示、節末標示

1 はじめに

記述言語学の趨勢を鑑みると、間接疑問文の研究は直接疑問文のそれに比べてあまり積極的になされていないように思われる。直接疑問文の構造を詳細に検討するだけでも非常に多くの難問が生じてくる。そのため、更に多くの問題をはらみうる間接疑問文にまで論究できない事情があるかと考えられる。疑問文の問題に加えて、発話の間接性とは何かというもう1つの問題を同時に解明しなければならないからである^{注1}。

筆者はこれまで中国雲南省景洪市で話されるチノ語悠楽方言^{注2} (チベット・ビルマ語派口口・ビルマ語支) の記述研究を行ってきた^{注3}。しかし、とりわけ間接発話に関する問題には十分な検討を加えてこな

^{注1} 言語類型論的な観点から、Sadock and Zwicky (1985) は 'dependent interrogatives' としてこの問題を記述している。しかし、主節動詞の意味と補足節との構造的な関係等に若干言及する程度である。この論文の「改稿版」とも言える König and Siemund (2007) では間接疑問文そのものに対してほとんど言及していない。

また一方で、英語や日本語、漢語など比較的研究の進んだ言語については、間接疑問文の研究も進んでいる。ただし、やはり直接疑問文に比べてより進んでいるとは言えないだろう。日本語の間接疑問文に関する研究は高宮 (2003, 2005) など、漢語普通話に関しては邵 (1996) などを参照されたい。

^{注2} チノ語は中国雲南省景洪市に主に居住するチノ族の話す言語である。2000年の人口統計によるとチノ族の人口は中国全土では20,899人である。そのうち景洪市には19,250人が暮らしている。しかし、実際にチノ語を流暢に話せる人口は不明である。チノ族は周辺諸民族に比して母語の保有率は高いと考えられるが(戴 [主編] 2007)、すでに漢語雲南方言しか話せないチノ族も少なくない。チノ語の話者総人口は多く見積もって1万数千人程度にとどまると考えられる。

チノ語は大きく悠楽方言と補遠方言の2つに分かれる。話者人口の約9割が悠楽方言を話すとされる(蓋 1986)。

以下に、筆者の分析によるチノ語悠楽方言の音素目録を示す。

[チノ語悠楽方言の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音] /p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, tʂ, tʂh; m, m̥, n, n̥, ŋ, ŋ̊; l, l̥; f, v, s, z, ʃ, r, ʑ, j, x, ɣ; (w) /, [母音] /i, e, ø, ε, œ, a, ə, ɔ, ɤ, o, u, u/ である。声調素は /55, 44, 33, 35, 42/ である。音節構造は頭子音 + 介音 + 主母音 + 末子音/声調で構成される。またチノ語では m, m̥, n, ŋ が成節鼻音 (syllabic nasal) となりうる。

なお、本文中で同じ形態素ながら調値が相互に異なることがある。これらは環境によって声調が交替する場合である。その場合、本文中で引用する際、声調を表記しないことがある。

更に、チノ語文法の言語類型論的特徴としては以下のとおりである。基本語順はSOVで、形容詞は名詞の後ろから修飾し、関係節は名詞の前から修飾する。チノ語は膠着性の高い言語であり、動詞が述部となる際、動詞語根を中心に多くの接尾辞類・接頭辞類が付加しうる動詞複合形式 (verbal complex) を構成する。

以上、音韻ならびにチノ語文法全体に関する概要については林 (2006, 2009) を参照されたい。

^{注3} 本稿で取り扱うデータは筆者が中国雲南省景洪市で2003年から2009年にかけて断続的に行った現地調査に基づいている。主にデータを提供してくださった王阿珍氏 (1980年生、女性)、玉納氏 (1950年頃生、女性) に心から感謝申し上げます。なお、2003年および2005年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別

かった。またすでに林 (2007b) としてチノ語悠楽方言の直接疑問文について記述した。だが、そこでも間接疑問文に関しては全く触れていない。林 (2007a, 2009) ではチノ語悠楽方言の間接疑問文について若干言及しているが、データはわずかにとどまる程度である。

本稿ではチノ語悠楽方言の間接疑問文について簡潔に記述し、直接疑問文や他の補文を含む節などとの構造的な共通点・相違点について検討したい。ただし、本稿での記述および分析ははまだ初歩的な段階であることを断っておく。

2 先行研究と直接疑問文について

2.1 先行研究とその問題点

チノ語悠楽方言における文法全般にわたる先行研究としては蓋 (1986) と林 (2007a, 2009) がある。

蓋 (1986) では直接疑問文に関する助詞について羅列的に記述してある。しかし、間接疑問文の構造については言及が一切ない。

他方、間接疑問文について林 (2007a, 2009) では以下のように記述した。

「『…』と尋ねた」などの文を表す場合に、チノ語でも直接疑問^{注4}的な手法と間接疑問的な手法がある。

(320) a. khɣ⁴² ɲɔ³⁵ ‘a³³tʃa⁵⁵ m³³+tʃa⁵⁵+sɔ³⁵-ɔ⁴⁴-la⁴², ɲɔ³³-mɣ³⁵.
3sg.NOM 1sg.OBL 料理 作る + 料理する + 終わる-PFT-Q 聞く-PAST

「彼は私に『ご飯を作ったのかい?』と尋ねた。」

b. ɲɔ⁴² khɣ³⁵ lɔ⁵⁵po⁴⁴ tʃhi⁵⁵ ma³³-tʃhi⁵⁵+le⁴⁴ ɲɔ³³-mɣ³⁵.
1sg.NOM 3sg.OBL 茶 摘む NEG-摘む + 行く 聞く-PAST

「私は彼/彼女にお茶を摘みに行くかどうか聞いた。」

(320a) は被質問者である「私」に対して「ご飯を作りましたか?」と直接疑問的に聞いている。一方、(320b) は「彼/彼女」に対して「お茶を摘みに行くか否か」を間接疑問的に聞いている(間接疑問文^{注5}は sans serif 体で表示している)。それらの違いは疑問文末助詞が現れているか否かである。直接疑問的にある文の中に埋め込まれている場合、単文で問われる直接疑問文と同様、疑問文末助詞((320a)の例では -la⁴²)が現れるが、間接疑問的^{注6}である場合は、(320b)のように疑問文末助詞が現れず、「動词语根-ma (否定辞)-動词语根」の形式が用いられる。

すなわち、間接疑問文であるとき、疑問文末助詞を付けると(321b)^{注7}のように非文となる。

(321) a. nɔ⁴² pja⁴² khɣ⁴² lɔ³³ ma³³-lɔ³³. 「彼が来るかどうか言いなさいよ。」
2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る NEG-来る

b. *nɔ⁴² pja⁴² khɣ⁴² lɔ³³-la⁴² ma³³-lɔ³³-la⁴².
2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る-Q NEG-来る-Q

(林 2009: 149–150)

この記述は実際には真偽疑問に関わる間接疑問文しか行っておらず、後述する間接疑問文の補足節末

研究者奨励費)の援助を、2004年および2007年、2008年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読—」(研究代表者 長野泰彦)の援助を、2009年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究B)「チノ語の記述調査と言語接触・言語類型論から見た東南アジア諸語研究」(研究代表者 林 範彦)の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げます。

注4 ここでは直接疑問が従属節的に埋め込まれている場合、それを *italic* にしている。

注5 林 (2009) での「間接疑問文」は本稿での「間接疑問文の補足節」を指す。注意されたい。

注6 現時点でのデータでは直接疑問的なのは質問者あるいは被質問者のいずれかが1人称または2人称である場合が多く、間接疑問的なのは被質問者あるいは質問内容の当事者が3人称である場合が多い。

注7 (321)の例では、主節動詞 pja⁴²「言う」が補足節よりも前に現れている。実際にこのような例も特に年齢層の若い話者に散見される。

境界に関わる現象や、疑問語疑問に関わる間接疑問文については一切述べていない。

また記述上の問題も窺える。(320a)のような直接疑問的な手法は台詞が文中に埋め込まれている形式をとる。これは厳密には狭義の間接疑問文に含められない可能性が強い。本稿では(320a)のような台詞が含まれる直接疑問的な手法を排除し、狭義の間接疑問文と考えられる例のみ記述・分析を試みる。

チノ語悠楽方言の直接疑問文の構造については2.2で簡潔にまとめる。

2.2 チノ語悠楽方言における直接疑問文の構造

チノ語悠楽方言の直接疑問文の構造はすでに林(2007b)で記述した。基本的には文末に疑問を標示する助詞・倚辞を置くことによって直接疑問文は構成される。その助詞・倚辞を網羅的に列挙すると、(1)の5種類がある。

(1) $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$, $-jo^{44}$, $=\varepsilon^{44}$

(1)のうち、前3者である $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$ と後2者である $-jo^{44}$, $=\varepsilon^{44}$ では機能が異なる。前者は質問者が相手に対して回答を要求する意図を表示する機能が明確で、真偽疑問文、疑問語疑問文、選択疑問文を構成する。一方、後者は異なる指向性を持つ。 $-jo^{44}$ は基本的に自問を表し、回答を要求する機能を持たない^{注8}。また $=\varepsilon^{44}$ は疑念が生じたことを表すときに用いられるもので、真偽疑問・疑問語疑問だけでなく、発話者の主観を表示するのに用いられる^{注9}。

前3者の生起条件の概要をまとめると以下の(2)のようになる。なお、後2者の生起条件は現時点では特に定められない。

- (2) a. 形式的な条件として、 $-la^{42}$ は真偽疑問文の文末に生起する一方、 $-na^{42}$ は真偽疑問文・疑問語疑問文のいずれにも生起する。前者は述語の名詞性・動詞性に関与しないのに対し、後者は述語が動詞性を持つ場合にのみ生起可能である。 $-a^{44}$ は疑問語疑問文で述語が名詞性を持つ場合に生起する。
- b. 意味的な条件として、 $-la^{42}$ は文全体を焦点とする例に生起する傾向があるのに対し、 $-na^{42}$ は文の一部のみを焦点とする例に生起する傾向がある。

3 チノ語悠楽方言の間接疑問文の記述

間接疑問文の補文(以下では、「補足節」と呼び変える)が文の構成要素となるということは、すなわち主語あるいは目的語の位置を補足節が占めるということである。本稿ではそのうち目的語の位置を占める場合を典型的な用法と見て主たる対象とする^{注10}。

チノ語悠楽方言の基本構成素順序はSOVである。すなわち、目的語の位置に入る補足節も述語動詞の前に置かれることを意味する。チノ語悠楽方言における間接疑問文の構文パターンは以下の(3)のように模式化できる。

^{注8} 日本語でいえば、文末に置かれる「かしら」のようである。ただし、日本語の「かしら」のように、チノ語悠楽方言の $-jo^{44}$ も文脈に応じて回答を要求することがある。

^{注9} より正確には「 $=\varepsilon^{44}$ は発話者の主観を表示するために用いられ、その実際の意味・用法は文脈ならびに語用論的条件によって決定される」と記述すべきかもしれない。 $=\varepsilon^{44}$ 自体は発話の相手に対して回答を要求する機能をもたない。

^{注10} 日本語でいうところの「[彼がどのように事を運んだか]が問題だ」といったような間接疑問文の補足節が主節の主語位置に生起する例は本稿執筆時ではほとんど得られていないため、詳述は別稿に譲る。

(3) < 間接疑問文の構文パターン >: S [疑問を含む補足節] V.

一般的に、間接疑問文において主節動詞 ((3) では 'V' で表示) の意味は知覚・思考系 ('知る」「考える」「思う」「疑う」等) および伝達系 ('言う」「伝える」「話す」「聞く」等) に偏りがあると考えられる。チノ語悠楽方言もその例に漏れない。

また一般言語学的に、直接疑問文と間接疑問文では疑問の性格上相互に大きく異なる。典型的な直接疑問文は発話者が相手に対して回答を要求する^{注11}のに対し、典型的な間接疑問文は発話者は聞き手に対して回答を要求しない。後者は基本的に発話者が何らかの疑問を持っていることを聞き手に対して表明しているだけに過ぎない。その点で両者を共通の「疑問文」というカテゴリーにまとめるべきか否かが問われるべきところであろう。しかし、本稿では両者は何らかの意味/機能上あるいは構造上の共通性があると考え、記述・分析を進めていく。

以下では、疑問を含む補足節を中心に、間接疑問文の構造を記述していく。具体的に記述に入る前に、間接疑問文を便宜上意味的に2種類に下位分類する。疑問を含む補足節が意味的に真偽疑問に関与している間接疑問文を「間接真偽疑問文」と呼び、疑問語疑問に関与しているものを「間接疑問語疑問文」と呼ぶ。前者を3.1で、後者を3.2で記述する。なお、以下の例文中の補足節は[]で表示することとする。

3.1 間接真偽疑問文

本小節では間接真偽疑問文を記述する。まず、代表的な補足節を含む例である(4)を見られたい。

- (4) a. $\eta\text{ɔ}^{42}$ [ja⁵⁵ŋ⁴⁴ ʃi³³xao³⁵ =e⁴⁴] kjo³³-mɛ³⁵.
1SG.NOM 今日 10日 =POSS 思う-PAST
「私は今日10日だと思った。」
- b. $\eta\text{ɔ}^{42}$ [ja⁵⁵ŋ⁴⁴ ʃi³³xao³⁵ ηw^{33} mo³³- ηw^{44} =e⁴⁴] $\eta\text{ɔ}^{33}$ -mɛ³⁵.
1SG.NOM 今日 10日 COP NEG-COP =POSS 聞く-PAST
「私は今日10日なのかどうかと聞いた。」

(4a) は補足節が平叙文的であるのに対し、(4b) は補足節が意味的に真偽疑問を含むものとなっている。すなわち、後者は間接真偽疑問文である。両者に共通しているのは、補足節が後置詞 =e⁴⁴ で閉じられていることである。後置詞 =e⁴⁴ は主に名詞句に後接し、所有者を標示するのに用いられる。一方で、Hayashi (in print a) で述べられているように、節末に生起し、補文(本稿での補足節)末の標示ならびに話者の推測や義務などのモダリティーを表すことができる。

次に特徴的なのは、(4b) においては、補足節末で2個のコピュラが生起していることである。これは <COP mo-COP> となっていると解釈され、コピュラの肯定形式と否定形式の並列であると見なせる。

このコピュラの肯定形式と否定形式の並列は次の(5)にも同様に当てはまる。

- (5) khɤ⁴² $\eta\text{ɔ}^{35}$ [a⁵⁵san⁴⁴ lo³³si⁵⁵ ηw^{33} mo³³- ηw^{44} =e⁴⁴] $\eta\text{ɔ}^{33}$ -mɛ³⁵.
3SG.NOM 1SG.OBL アサン 先生 COP NEG-COP =POSS 聞く-PAST
「彼は私にアサンが先生かどうか聞いた。」

^{注11} 相手に対して回答を要求する疑問文を特に「質問文」として区別する立場もあり得る。しかし、本稿では詳細を論ずるに至らない。

(4b, 5) の例はいずれも補足節内部の述語 (各例の下線部^{注12}) が名詞性を持っている。これまでをまとめれば、名詞性をもった述語が補足節に含まれ、間接疑問に関与する際、述語の後でコピュラの肯定形式と否定形式が並列し、補足節末で所有格後置詞 =ε⁴⁴ によって補足節の境界を標示しうる、ことが分かる。一方で、補足節内部が動詞性をもった場合は以下の (6) のようになる。

- (6) a. khɿ⁴² ɲɔ³⁵ [nə⁴² le³³ mɔ⁵⁵-le³³ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 3SG.NOM 1SG.OBL 2SG.NOM 行く NEG-行く =POSS 聞く -PAST
 「彼は私にあなたが行くのかどうか聞いた。」
- b. ɲɔ⁴² [a⁵⁵san⁴⁴ tʃɔ³⁵ mɔ³³-tʃɔ³⁵] mɔ⁵⁵-suw⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM アサン いる NEG-いる NEG-知る
 「私はアサンがいるのかいないのか知らない。」

(6a) および (6b) とともに、補足節内部の述語は動詞性を持つ。いずれも補足節内部で動詞の肯定形式と否定形式が並列している。(6a) では補足節の境界を所有格後置詞 =ε⁴⁴ によって標示している。他方、(6b) では =ε⁴⁴ が生起していない^{注13}。(6a) の =ε⁴⁴ も生起しなくてもよい。

ここで振り返ると、補足節内部の述語が名詞性を担っているときはコピュラの肯定形式と否定形式が補足節内部で並列した。チノ語悠楽方言のコピュラは Hayashi (2009, in print b) でも述べたように、形態統語論的に動詞であると考えられる。このことから、チノ語悠楽方言の間接真偽疑問文は補足節内部の動詞性/名詞性に関わらず、動詞の肯定形式と否定形式が並列する、と整理することができる。

ただ、一般に補足節内部の述語が名詞性を担っているときは補足節末の境界を明示化する目的で =ε⁴⁴ が通常生起するのに対し、補足節内部の述語が動詞性を担っているときはその生起が随意的であることは注意しておくべきことであろう。

さて、やや問題があると言えるのは、補足節内部の述語が形容詞である場合である。チノ語悠楽方言では形容詞の引用形 (肯定形とも考えられる) が [a-/ la-/ jɔ- + 動詞語根] の形式をとる (林 2009)。接頭辞 a-/ la-/ jɔ- はいずれも名詞化の機能を持つ。そのため、形容詞の引用形はすべて形態的には名詞性を持つと言える^{注14}。

一方、形容詞の否定形は [ma- ~mɔ- + 動詞語根] の形式をとる。この形式は動詞の否定形式と全く同一であるため、形容詞の否定形は形態的に動詞性を持つと考えられる。

補足節内部の述語が形容詞であるような例を以下の (7) に掲げる。

- (7) a. ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ lo³³ mɔ³³-lo⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 熱い NEG-熱い =POSS 聞く -PAST
- b. ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ a³³-lo⁵⁵ ɲu³³ mɔ³³-ɲu⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 PREF-熱い COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
- c. *ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ a³³-lo⁵⁵ mɔ³³-lo⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 PREF-熱い NEG-熱い =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/ 彼女に水が熱いかどうかを尋ねた。」

注12 本稿では後述するように「述語」と「述部」の区別を行っている。「述語」は節内で主語に対応する単位である。「述部」は「述語」を含み、より更に大きな単位であると考えられる。(4b) であれば、ji³³xao³⁵ が「述語」、ji³³xao³⁵ ɲu³³ mɔ³³-ɲu⁴⁴ が「述部」となる。

注13 (6b) においても =ε⁴⁴ は生起してもよい。

注14 一般にチノ語悠楽方言の形容詞における動詞語根は単独で生起することができない。何らかの接頭辞的要素が付加された形でしかほとんどの場合現れることができない。

(7a, b) は容認可能なのに対し、(7c) は容認不可能である。なお、(7a, b) のいずれの例にも当てはまることだが、補足節末に置かれる所有格後置詞 $=\varepsilon^{44}$ の生起は随意的である。また、(7) のいずれの例も現時点の調査では文の意味において有意な差異は認められない。

チノ語悠楽方言で「熱い」を表す形容詞引用形は $a^{33}l_0^{55}$ である。これは(7)の例でも明示したように、 $a^{33}l_0^{55}$ のように形態素分析が可能であり、 a^{33} - は名詞化接頭辞、 l_0^{55} の部分は動詞性を持った語根である。

(7a) では、形容詞の語根の肯定形式と否定形式が並列している。上述したように、形容詞の語根部分は動詞性を持つ。よって、この現象は補足節内部の述語が動詞であった場合と同様であると見なせる。

また(7b) は形容詞引用形の後にコピュラの肯定形式と否定形式が並列している。形容詞引用形は形態統語的に名詞性を持つと考えられることから、これは補足節内部の述語が名詞であった場合と同様であるとえられる。

容認不可能となっている(7c) は補足節内部で形容詞の引用形と否定形式が並列している。チノ語悠楽方言において形容詞の肯定形式とはすなわち引用形であるため、単純に肯定形式と否定形式の並列により補足節末の疑問標示が可能であるとすれば、(7c) も容認可能であると予測されるはずである。しかし、実際にはそうではない。これはおそらく形容詞の肯定形式、つまり引用形が形態的に名詞性を有する一方、形容詞の否定形式が形態的に動詞性を持つためである。言い換えれば、名詞性要素と動詞性要素が並列しているのは本言語において容認しにくいということであろう。

ここでまとめると、間接真偽疑問文を作る際、補足節内部の述語が形容詞である場合、形容詞語根、すなわち動詞語根を取り出して、その肯定形式と否定形式を補足節末に並列させるか、形容詞引用形の後にコピュラの肯定形式と否定形式を並列させるかのいずれかの手法がとられる。

このような補足節内部の述語が形容詞である際の原則は以下の(8, 9)でも守られる。

- (8) a. $kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{mjo^{33}} \quad \underline{m\sigma^{33}-mjo^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 (背が) 高い NEG-(背が) 高い =POSS 聞く -PAST
 b. $kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{la^{55}-mjo^{42}} \quad \eta\mu^{33} \quad m\sigma^{33}-\eta\mu^{44} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 PREF-(背が) 高い COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
 c. $*kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{la^{55}-mjo^{42}} \quad \underline{m\sigma^{33}-mjo^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 PREF-(背が) 高い NEG-(背が) 高い =POSS 聞く -PAST
 「彼/彼女は私にあの子は背が高いかどうかを聞いてきた。」

- (9) a. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{x\gamma^{55}} \quad \underline{m\sigma^{55}-x\gamma^{55}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 大きい NEG-大きい =POSS 聞く -PAST
 b. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{la^{55}-x\gamma^{44}} \quad \eta\mu^{33} \quad m\sigma^{33}-\eta\mu^{44} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 PREF- 大きい COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
 c. $*\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{la^{55}-x\gamma^{44}} \quad \underline{m\sigma^{33}-x\gamma^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 PREF- 大きい NEG-大きい =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/彼女にあの服は大きいかどうか聞いた。」

(8) では形容詞 $la^{55}-mjo^{42}$ 「(背が) 高い」が、(9) では形容詞 $la^{55}-x\gamma^{44}$ 「大きい」が補足節内部の述語となっている。いずれも接頭辞 $la-$ を除去した部分である mjo^{42} と $x\gamma^{44}$ は動詞語根となる。これらの補足節内部での振る舞いは(7)で見た場合と全く同様である。

以上から、補足節内部の述語が名詞・動詞・形容詞のいずれに関わらず、間接真偽疑問文について以下の特徴 (10) が現時点で結論付けられる。

- (10) a. 補足節末境界を明示するために所有格後置詞 =ε⁴⁴ が生起しうる
 b. 補足節末において動詞の肯定形式と否定形式が並列される

ここで、述語よりも 1 段階上位の単位として「述部」を設定すると、補足節内部の述語が名詞の場合も動詞性をもったコピュラの肯定形式と否定形式が並列されることから、補足節内部の述語が名詞性であれ、形容詞性であれ、補足節内部の節末述部形式は動詞句 (VP) であると結論づけられる。

3.2 間接疑問語疑問文

本小節では間接疑問語疑問文について記述する。以下の (11, 12) を見られたい。

- (11) a. ɲɔ⁴² [nɔ³⁵ kɔ⁵⁵tʰ⁴⁴ kha⁵⁵-lo⁴⁴ -a⁴⁴/ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 2SG.OBL 服 どれ-ように -PART/ =POSS 聞く -PAST
 「私はあなたの服がどんななのか聞いた。」
 b. ɲɔ⁴² khɻ³⁵ [jɔ³³ma⁵⁵ khɔ³³su⁵⁵ -a⁴⁴/ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 3PL.NOM 誰 -PART/ =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/彼女に彼らが誰なのか聞いた。」
- (12) a. ɲɔ⁴² [khɻ⁴² khɔ³⁵ le³⁵+ja⁵⁵ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-su⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM 3SG.NOM どこ いく + しまう =POSS NEG-知る -PART
 「私は彼/彼女がどこに行ってしまったのか知らない。」
 b. ɲɔ⁴² [khɻ⁴² khɔ⁵⁵ɬur⁴⁴ pja³³ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-ɲɔ⁵⁵+su⁵⁵jɔ⁴⁴-khju⁴².
 1SG.NOM 3SG.NOM 何 話す =POSS NEG-聞く + 知る -AUX
 「私は彼/彼女が何を言っているのかわからない。」
 c. khɻ⁴² ɲɔ³⁵ [khao⁴² phɔ⁵⁵ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 3SG.NOM 1SG.OBL 何 買う =POSS 聞く -PAST
 「彼/彼女は私に何を買ったのか聞いた。」
 d. ɲɔ⁴² [khɻ³⁵-pɔ⁵⁵ khɔ⁵⁵-pu⁴⁴ tʰhu⁵⁵ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-su⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM あれ.OBL-方 どれ-くらい 寒い =POSS NEG-知る -PART
 「私はあちらの方がどれくらい寒いのか知らない。」

現時点までに採録したデータでは補足節内部の述語が名詞 (11) あるいは動詞 (12) となる場合のみである。この両者に共通している点は (13) である。

- (13) 補足節内に疑問語を配置し、補足節末の境界に =ε⁴⁴ を生起させうる^{注 15}

両者に共通する点は多く、補足節内の述語の名詞性ないし動詞性が補足節全体の構造的な問題に発展することは少ないと考えられる。補足節内部の述語において動詞の肯定形式と否定形式を並列させることもない。補足節内部が疑問要素を含んでいることは形式的にも疑問語が配置されていることすでに明示的である。

注 15 間接疑問語疑問文内の補足節末における =ε⁴⁴ の生起は随意性が高いと現時点では考えられる。

ただし、これまでの調査で、補足節内の述語が名詞である場合と動詞である場合に補足節末境界における差違も認められる。

- (14) a. 補足節内部の述語が名詞である場合、補足節末の境界の明示を文終止助詞 $-a^{44}$ で行いやすい
 b. 補足節内部の述語が動詞である場合、補足節末の境界の明示を時制接尾辞 $-m\gamma$ (過去)/ $-me$ (未来)で行える

(14b) に関連して、補足節内の述語が動詞である場合、以下のような例 (15, 16) も容認可能である。

- (15) a. $kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kha\sigma^{42} \text{ph}\sigma^{55} =\epsilon^{44}/ -m\gamma^{44}] \quad \eta\sigma^{33} -m\epsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL 何 買う =POSS/ -PAST 聞く -PAST
 「彼/彼女は私に何を買ったのかを聞いてきた。」
 b. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kha^{55} -l\sigma^{44} \quad a^{33}tja^{55} \text{kh}\sigma^{33} =\epsilon^{44}/ -m\gamma^{44}] \quad \eta\sigma^{33} -m\epsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どのように 料理 作る =POSS/ -PAST 聞く -PAST
 「私は彼/彼女にどうやって料理を作ったのかを聞いた。」
- (16) a. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kha^{55} =\epsilon^{44} \quad m\sigma^{55} -l\epsilon^{44} =\epsilon^{44}/ -me^{35}] \quad \eta\sigma^{33} -m\epsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どの=POSS NEG-行く =POSS/ -FUT 聞く -PAST
 「私は彼/彼女にどうして行かないのか聞いた。」
 b. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\sigma^{55} \text{l}\epsilon^{44} =\epsilon^{44}/ -me^{35}] \quad \eta\sigma^{33} -m\epsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どこ 作る =POSS/ -FUT 聞く -PAST
 「私は彼/彼女にどこに行くのか聞いた。」

補足節内部の述語が動詞である場合、補足節末の境界の明示を接尾辞 $-m\gamma$ / $-me$ で行える理由は単純である。すなわち、これら 2 種の接尾辞は動詞語根にのみ後接し、意味的には $-m\gamma$ が過去を、 $-me$ が未来を表すからである。これらの時制を表す接尾辞は、形態統語的には動詞を名詞化する機能があり^{注16}、その点で所有格後置詞 $=\epsilon^{44}$ と平行しているように見える。ただし、実際のプロセスは $=\epsilon^{44}$ と時制接頭辞 $-m\gamma$ / $-me$ では異なると見た方がよい。つまり、前者はそれが後接する節全体が名詞節であることを標示するのに対し、後者はそれを含む動詞複合形式全体を名詞化していると考えねばならない。

この点を踏まえれば、以下の例 (17) において、 $-m\gamma$ の生起が不可能であることも当然と言えよう。 $-m\gamma$ の後接する要素が名詞 ($kh\sigma^{33}su^{55}$) だからである。

- (17) $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [j\sigma^{33}ma^{55} \text{kh}\sigma^{33}su^{55} -a^{44}/ =\epsilon^{44}/ * -m\gamma^{44}] \quad \eta\sigma^{33} -m\epsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 3PL.NOM 誰 -PART/ =POSS/ -PAST 聞く -PAST
 「私は彼/彼女に彼らが誰なのか聞いた。」 (= 11b)

反対に、(14a) に関連して、補足節内部の述語が名詞である場合に、補足節末境界の標識として $-a^{44}$ を用いやすいのは、 $-a^{44}$ が直接疑問文における疑問語疑問文で、名詞述語文に後接できるからであろうと考えられる。

^{注16} 倉部慶太氏のご教示によれば、ジンポー語の未来を表す形式 na^{33} も名詞化の機能があるようである。チノ語悠楽方言の形式とは異なるが、今後チベット・ビルマ諸語において未来形式の形態統語的性格を研究する価値は十分にあると考えられる。これについては別稿に譲る。

4 今後の展開に向けて — 記述的および対照的観点から —

3では、チノ語悠楽方言に間接真偽疑問文および間接疑問語疑問文が用いられることを簡潔に記述した。本節では、チノ語悠楽方言における間接疑問文の記述・分析を更に進める上で、現時点で重要だと思われる問題点を記述的および対照的観点からいくつか言及しておきたい。

4.1 間接疑問文の下位分類と補足節の内部構造

前節で述べたように、間接真偽疑問文は補足節末において動詞の肯定形式と否定形式の並列が見られる。これは明らかに間接疑問語疑問文と構造上異なっている。すなわち、間接真偽疑問文の構造は肯定形式と否定形式を並列されることによって、「問われる命題の真偽」にまつわる選択肢を提示しているわけであり、より正確には「間接選択疑問文」と呼ぶべきかもしれない。

実はこのことは記述言語学的にも言語類型論的にも重要な問題を示唆している。すなわち、間接疑問文も直接疑問文と同様の下位分類の設定が可能か否か、という問題である。

益岡・田窪 (1992: 184) は現代日本語の間接疑問文について、「疑問表現の補足節」の項目において、「補足節になるのは、疑問語疑問文と選択疑問文である」と簡明に記述し、以下の例文 (18) をあげている (例文内の [] の標示は本稿筆者による)。

- (18) a. [太郎がどこで被疑者に会ったか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (22))
b. [太郎が被疑者に会ったか会わなかったか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (23))
c. [太郎が被疑者に会ったかどうか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (24))

もちろん、現代日本語の間接疑問文はこの記述では不十分である。(19) のような例文も存在することから、真偽疑問文も補足節になりうる。

- (19) [太郎が被疑者に会ったか] が問題だ。

現代日本語の間接疑問文における内部構造の更なる問題については江口 (1998)^{注17}、高宮 (2003) などに譲る。ここでは間接疑問文における類型に着目する。現代日本語の間接疑問文の下位分類として意味的には少なくとも「間接真偽疑問文」「間接疑問語疑問文」「間接選択疑問文」の3種を設定することが可能であると言えよう。

一方、漢語普通話では、Li and Thompson (1981: 554–557) で概括するように、補足節内の類型は、疑問語を内包した構造、選言的構造 (disjunctive questions, 「あるいは」を意味する接続詞 *háishi* を挟む)、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造 (A-not-A questions) を持つとされる。

Li and Thompson (1981) の例 (20) を引用しておこう。補足節標示 ([]) および強調は本稿筆者による。

- (20) a. nǐ kàn [tā xiě shénme]
you see 3SG write what
'You see what s/he writes.' (Li and Thompson 1981: 554)

^{注17} 江口 (1998) では「どのくらい集まったのか 尋ねた」「参加人数を訪ねた (ママ)」の2文を並列させ、後者の「参加人数」は「参加人数がどれだけであったか」という間接疑問節と同様の解釈をもっていると述べている。このような名詞句は「潜伏疑問名詞句 (Concealed Question)」と呼ばれている。本稿では潜伏疑問名詞句の統語的振る舞いに関する分析には立ち入らない。今後の研究課題としたい。

b. wǒ bu xiǎode [shi tā qù hái shì nǐ qù]

I not know be 3SG go or you go

‘I don’t know whether it’s the case that s/he’s going or you’re going.’ (Li and Thompson 1981: 555)

c. wǒ bu zhīdao [tā lái bu lái]

I not know 3SG come not come

‘I don’t know whether s/he is coming or not.’ (Li and Thompson 1981: 556)

(20) の間接疑問文の補足節において、(20a) は疑問語を内包した構造、(20b) は選言的構造を、(20c) は動詞の肯定形式と否定形式の並列構造を有している。(20b, c) はいずれも補足節内に選択肢を提示した構造を持っていると見なせる。以上を整理すると、疑問語を内包した構造は間接疑問語疑問文と関与する。一方、後二者の選言的構造、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造は間接選択疑問文と関与すると考えてよい。漢語普通話の間接疑問文が間接選択疑問文と間接疑問語疑問文の 2 種に分類される点はチノ語悠楽方言と類似していると言える。

他方、チノ語悠楽方言の動詞の肯定形式と否定形式の並列形式は、林 (2007b, 2009) でも提示したように、(21) のような直接疑問文としては生起できない。

(21) *nə⁴² le⁵⁵ ma⁵⁵-le⁵⁵?

2SG.NOM 行く NEG- 行く

「あなたは行くのか、行かないのか?」(林 2007b: 70[脚注])

(21) と同内容を表現する際には、以下の (22) のような 2 種類の手法をとらねばならない。

(22) a. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴²?

2SG.NOM 行く-Q

「あなたは行くの?」

b. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴², ma⁵⁵-le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴²?

2SG.NOM 行く-Q NEG- 行く-Q

「あなたは行くの、それとも行かないの?」

(22) の 2 例はいずれも直接疑問文である。(22a) は真偽疑問文、(22b) は選択疑問文である。(22a) と (22b) は互いにニュアンスが異なる。しかし、両者は「あなたが行く」という命題の真偽を問う」という点では共通する部分がある。直接疑問文においては (22) の 2 例にみるように、-la⁴²/-ŋa⁴² といった疑問文末を標示する助詞が生起しなければならない。

したがって、真偽疑問を直接疑問文あるいは間接疑問文の補足節で表現する際、両者の構造は全く異なっている。よって、その相互の関係は相補分布をなしていると言ってよい。

漢語普通話では、直接疑問文においても、間接疑問文の補足節においても、動詞の肯定形式と否定形式の並列が可能であることから、この点においてチノ語悠楽方言とは異なると言える。

2.1 の (321b) ですでに見たように、チノ語悠楽方言の真偽疑問が間接疑問文の補足節内に表現される場合、補足節内では文終止助詞の生起が不可能である。このことから、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造によって補足節内が疑問であることを標示していると考えられよう。

4.2 補足節末境界と「間接性」

チノ語悠楽方言の間接疑問文において、前節までにも見たように、補足節末境界として所有格後置詞 =ε⁴⁴ やテンス接尾辞 -mɣ~-mɛ および -me が用いられる。

これらは実際には、補足節末だけではなく、直接疑問文末/ 主節末にも用いられる。

- (23) a. sɔ̃³³-mjo⁵⁵ li³³-mjo⁵⁵ ŋu³³-xɔ̃⁵⁵=ε⁴⁴?
 3-CL 4-CL COP-PART-POSS
 「(それは) 3 年か 4 年前のことだったか?」
 b. khɔ̃³⁵=jə⁴⁴ lə⁴⁴-lu⁵⁵=ε⁴⁴?
 どこ.OBL=から ずっと-来る=POSS
 「(あなたは) どこから来たの?」
- (24) a. khɣ⁴² pu⁵⁵ɕhɛ⁵⁵ ŋu³³=ε⁴⁴.
 3SG.NOM ダイ族 COP=POSS
 「彼/彼女はダイ族だろう。」
 b. khɣ⁴² mi⁵⁵ʃɔ̃⁵⁵ŋ⁴⁴ lɔ̃³³=ε⁴⁴.
 3SG.NOM 明日 来る=POSS
 「彼/彼女はおそらく明日来るだろう。」
- (25) a. ŋi⁵⁵ŋ⁵⁵ a⁵⁵ʃɛn⁴⁴ ŋu³³-mɛ⁴²?
 2DU.NOM アチエン (PSN) COP-PAST.Q
 「(それはおまえと) アチエンの、おまえたち 2 人だったのか?」
 b. nə⁴² khɣ³⁵ lɛ³⁵-mɛ⁴²?
 2SG.NOM あそこ.OBL 行く-FUT.Q
 「あなたはあそこに行くのか?」
- (26) a. ji⁵⁵ji⁵⁵ a⁵⁵phi⁵⁵jo³³kha³³ji⁵⁵-vu⁴⁴, thi³³-mɔ̃⁵⁵ se⁴²-mɛ⁴⁴.
 昔 祖母 死ぬ-ので 1-CL 殺す-PAST
 「昔、祖母が死にそうになったとき、(豚を) 1 頭殺した。」
 b. tɕe³³phu⁵⁵ tɔ̃³³+je³⁵-mɛ³⁵.
 酒 飲む + 行く-FUT
 「(彼は) 酒を飲みに行ってしまうだろう。」

(23) は =ε⁴⁴ が直接疑問文末に、(24) は =ε⁴⁴ が主節末に生起している例である。また (25) は -mɣ/ -me が直接疑問文末に、(26) は -mɣ/ -me が主節末に生起している例である。4.1 までに見てきた例を含めて検討すると、=ε⁴⁴ ないし -mɣ/ -me が節末の標示に関与していることまでは言えても、補足節末あるいは主節末のいずれかを標示しているとまでは言明しがたい。

標準タイ語 (27) や日本語 (28) においては、間接疑問文の補足節はそのまま直接疑問文としても成立する構造をとっている。なお、標準タイ語のグロスには本稿筆者による。

- (27) a. ca klàp khuun ní máy?
 IRREAL 帰る 晩 この Q

「(あなたは) 今晚戻りますか?」(Smith 2002: 170)

b. kháw thǎam wâa [ca klàp khuən ní máy]?

3SG 尋ねる COMP IRREAL 帰る 晩 この Q

「彼は(私が) 今晚戻るかどうかが尋ねた。」(Smith 2002: 170)

(28) a. 彼は明日学校へ行くのか?

b. 私は友人に [彼は明日学校へ行くのか] 聞いた。

標準タイ語も日本語も、直接疑問文の構造 (27a, 28a) をそのまま間接疑問文の補足節として配置することが可能である (27b, 28b)^{注18}。

これらの事実は各個別言語の言語学的な単位としての文と節の区別が明瞭か否かという問題に直結する。チノ語悠楽方言を再確認すると、間接選択疑問文と直接真偽疑問文が補足節において相補分布することから (4.1 参照)、形式的に補足節と文終止助詞が付加された主節を明確に区別することができる。主節が文の全体像であると解釈すれば、チノ語悠楽方言において文と節の区別が可能であると言えよう^{注19}。

ここでは間接疑問文の構造の問題を通して、文と節の区別の問題にまで触れた。今後は双方の視点を重視して、更に深い段階に研究を進めたいと考えている。

注18 標準タイ語において máy は直接疑問文の疑問標識としても、間接疑問文の補足節末にも生起しうる。ただし、直接疑問文内部に補足節が存在するとき、その直接疑問の標識として生起し得ない場合がある。このことは田中 (2004: 347) の掲げる次の例 (i) から明らかである (訳の下線は田中 2004 によるが、グロスとタイ語音韻表記は本稿筆者による)。

i) a. dâw khàaw wâa [kháw ca tɛŋjaan] { rú-plàaw / *máy } ?

得る 知らせ COMP 3SG IRREAL 結婚する Q

b. dâw khàaw { rú-plàaw / *máy } wâa [kháw ca tɛŋjaan] ?

得る 知らせ Q COMP 3SG IRREAL 結婚する

「あの人が結婚することを聞きましたか。」

しかし、máy が補足節をもつ直接疑問文に生起できないというわけではない。以下の例 (ii) では直接疑問文末に生起可能である (田中 2004: 347)。

ii) khun khít wâa [phaasǎa-Yiipùn yâak] { rú-plàaw / máy } ?

2SG 考える COMP 言語-日本 難しい Q

「日本語は難しいと思いますか。」

田中 (2004: 347) は (ii) を「特定の対象に関する個人的な情報ではなく、一般的な話題への言及に関しては、rú-plàaw も máy も同様に機能する」例 (つまり、補足節内部の意味が máy の生起に関係している) として掲げている。しかし、実際には máy の補足節をもった直接疑問文での生起は主節動詞の意味と主節主語の人称、主節の時制 (三上 (2002: 115) によれば、máy は過去の動作を質す文には生起できない。そのため (i) で máy の生起した例が非文となっている可能性がある) などと関係がある可能性もあろう。いずれにせよ、この点での研究は今後の進展が必要である。

注19 チノ語悠楽方言で文と節の区別は以下の例 (i) でも問題となる。

i) a.ne³³mjɔ⁵⁵tʃoŋ⁵⁵ʃuo³³svŋ⁵⁵ŋu³³-me³⁵. 「来年は(彼は) 中学生だ。」

来年 中学生 COP-FUT

b.ne³³mjɔ⁵⁵tʃoŋ⁵⁵ʃuo³³svŋ⁵⁵ŋu³³-me³⁵-nɔ⁴⁴.

来年 中学生 COP-FUT-SFP

チノ語悠楽方言の文終止助詞は平叙文末を示す -nɔ⁴⁴、疑問文末を示す -la⁴²、-na⁴² などがある。これらは文の末尾であることを標示しているため、それを含む形態素列は「文」である。この観点から考えれば、(ib) は「文」である。一方で、文終止助詞を欠いた形態素列は、述語が存在していても、厳密には「節」と呼ばねばならない。便宜上、それが「文」として事実上用いられていても、それは「節の文的使用」と考えられる。(ia) は厳密には「節」であり、「文」ではないこととなる。

5 おわりに

以上の初歩的なデータの記述と分析によって、チノ語悠楽方言の直接疑問文および間接疑問文の特徴は以下の表1のようにまとめられるだろう。

表1 チノ語悠楽方言の直接疑問文と間接疑問文の特徴

発話の直接性/間接性 疑問語の存在	直接疑問文		間接疑問文	
	[-wh]	[+wh]	[-wh]	[+wh]
a) 疑問を含む節の文内位置	主節と同値		補足節	
b) 疑問を含む節の節末述部形式	NP, VP	NP, VP	VP (V mɔ-V)	NP, VP
c) 節末境界の標示	-la ⁴² , -ŋa ⁴²	-ŋa ⁴² , -a ⁴⁴	共通するのは =ε ⁴⁴	

表1では、まず発話の直接性/間接性の観点から、疑問文を「直接疑問文」「間接疑問文」の2種に分類する。加えて、疑問を含む節内に「誰」「何」などの疑問語が存在するかいなかで更に2種に分類する。存在する場合を [+wh] で、存在しない場合を [-wh] で表示している。すなわち、節のレベルでは4種類の分類を行うこととなる。

次にそれぞれの節に対して、a) では疑問を含む節の文内の位置について、b) では疑問を含む節の節末述部形式が名詞述語であるか、動詞述語であるか、c) では疑問を含む節の節末境界がどのように表示されているのかについて、提示している。

直接疑問文の特徴については林 (2007b, 2009) の結論を整理したものにすぎない。よって、説明を省略する。ここでは間接疑問文の特徴 (表1の右側のコラム) に着目したい。

疑問を含む節の文内位置としては、主節内の補足節に位置づけられる。これは一般言語学的な特徴として見なしてよい。次に、疑問を含む節の節末述部形式であるが、補足節内に疑問語が含まれる間接疑問語疑問文の場合 ([+wh]) では、NP および VP が配置されうる一方で、疑問語が含まれない間接真偽疑問文の場合 ([-wh]) では、VP のみが配置されうる。後者の節末述部形式は上記の通り固定されている (V mɔ-V)。また、疑問を含む節の節末境界の生起については、多様な条件を考える必要がある。現時点で間接真偽疑問文・間接疑問語疑問文のいずれにも共通するのは所有格後置詞 =ε⁴⁴ を用いることであろう。今後は =ε⁴⁴ などの補足節末に生起する要素の多様な条件の記述を進めていかねばならない。

また、4でも述べたように、本稿では扱えなかった問題も含めて、記述言語学的・言語類型論的に今後展開されるべきテーマは少なくない。より一層の研究の進展を図っていきたいと考えている。

[追記・謝辞]:

本稿の作成において、京都大学大学院の倉部慶太氏・富田愛佳氏のご助言とご指摘を頂いた。ここに記して深謝したい。なお、本稿におけるあらゆる事実誤認・誤謬は当然ながら筆者個人に帰する。

略号一覧

文頭の * は非文であることを示す。また ‘-’ は接辞類・助詞類の境界を、‘=’ は倚辞の境界を、‘+’ は語根の境界を表す。

AUX: 助動詞、CL: 類別詞、COMP: 補文標識、COP: コピュラ、DU: 双数、FUT: 未来、IRREAL: 叙想法、NEG: 否定、NOM: 主格、OBL: 斜格、PART: 助詞、PAST: 過去、PFT: 完了、PL: 複数、POSS: 所有格、PREF: 接頭辞、PSN: 人名、Q: 疑問、SFP: 文終止助詞、SG: 単数

参考文献

- 江口正 (1998) 「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部 紀要 言語・文学編』30: 325–344.
- 戴慶廈 (Dai Qingxia) (主編) 2007. << 基諾族語言使用現狀及其演變 >> 北京: 商務印書館.
- 蓋興之 (Gai Xingzhi) (1986) << 基諾語簡誌 >> 北京: 民族出版社.
- 林範彦 (2006) 「チノ語悠楽方言」『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』 pp. 243–270. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 林範彦 (2007a) 「チノ語悠楽方言の記述的研究」京都大学博士論文.
- 林範彦 (2007b) 「チノ語の疑問文末に現れる 3 つの助詞について」『言語研究』第 131 号. pp. 45–76.
- 林範彦 (2009) 『チノ語文法 (悠楽方言) の記述研究』(神戸外大研究叢書第 43 冊) 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
- Hayashi, Norihiko (in print a) The so-called possessive marker in Youle Jino. In *The Collection of the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. Harbin: Heilongjiang University Press.
- Hayashi, Norihiko (in print b) A Brief Description of Youle Jino Copula. 『アジア言語論叢 8』 pp. 1–25. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
- König, Ekkehard and Peter Siemund (2007) Speech act distinctions in grammar. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description 1: Clause structure*. (Second Edition) pp. 276–324. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese — A Functional Reference Grammar —*. Berkeley, Los Angeles and London: California University Press.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』東京: くろしお出版.
- 三上直光 (2002) 『タイ語の基礎』東京: 白水社.
- Sadock, Jerold M. and Arnold M. Zwicky (1985) Speech act distinctions in syntax. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description 1: Clause structure*. pp. 155–196. Cambridge: Cambridge University Press.
- 邵敬敏 (Shao, Jingmin) (1996) << 現代漢語疑問句研究 >> 上海: 華東師範大学出版社.
- Smith, David (2002) *Thai: An Essential Grammar*. London: Routledge.
- 高宮幸乃 (2003) 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14: 116–104.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16: 104–92.
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』東京: ひつじ書房.

ジンポー(カチン)語における動詞連続の文法化

倉部 慶太

1 はじめに

ジンポー語¹は、ビルマのカチン州やシャン州北部、中国の雲南省、東北インドなどで話されている、チベット・ビルマ系の言語である。ジンポー語はカチン語という名称でもよく知られている。本稿で扱うジンポー語は、主にビルマのカチン州ミッチーナで話されているジンポー語である²。本稿では、ジンポー語の動詞連続の文法化には、副詞化と補助動詞化、補文標識化の3つがあることを示し、それぞれ具体的に見ていく。また、特に副詞化と補文標識化については文法化の度合いを測ることも試みる³。

2 動詞連続

2.1 動詞連続の規定

本稿では、ジンポー語の動詞連続を(1)のように規定する。この規定のポイントを①から③に示す。

(1) 複数の動詞が動詞間の関係を示す標識を伴わずに同一節中に現れる現象

①動詞間の関係を示す標識が伴わない

次の文では、複数の動詞が現れているが、動詞間の関係を示す標識は現れていない。

(2) *sháhpa t̄am shá ai* (食べ物 探す 食べる VA) 「食べ物を探して食べた」(K2: 30)

②複数の動詞が同一節中に現れる

(2)の文が複数の節からなるのではなく単一の節であるということは、動詞接辞(VA)である *ai* がこの文に一度しか現れないことから分かる⁴。この他にも、否定辞 *ń-* や命令標識 *ùʔ*、疑問標識 *î*、名詞化・関係節化標識 *ai* なども動詞連続に一度しか現れない。このことから、ジンポー語の動詞連続はひとつの述語をなして、動詞連続を述語にもつ節は単一の節であると考えることができる。

¹ ジンポー語では正書法が確立している。正書法はおおむね音素表記であるが、声調、緊喉母音、声門閉鎖音などは正書法では表記されないため、以下ではそれらも付け加えて表記する。緊喉母音はアンダーラインで示す。母音(短母音): *i, e, a, aw[o], u, i, e, a, aw[o], u*。母音(二重母音): *wi[ui], oi, ai, au, wi[ui], oi, ai, au*。子音: *p, t, k, hp[p^h], ht[t^h], hk[k^h], ts[ts~s], s[s^h], chy[tʃ], sh[ʃ], m, n, ng[ŋ], l, r, w, y[j], ?*。原則として *p, t, k, ts, chy* は非緊喉母音の前ではそれぞれ *b, d, g, z, j* と表記される。声調: *má* 高平, *ma* 中平, *mà* 低下降, *m̄a* 高下降。

² 調査はビルマのヤンゴン(2009年8月、9月)、およびミッチーナ(2010年2月、3月)で行なった。

³ 本稿を執筆するにあたり、加藤昌彦先生、高橋慶治先生、総合地球環境学研究所の言語記述研究会の皆様から大変貴重なご教示をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

⁴ 動詞接辞は主にアスペクト的な意味を表し、主語や目的語の人称、数を表すこともある。

③複数の動詞から成る

ジンポー語の動詞連続を構成する動詞は、複数の動詞なのであって、複合動詞という単一の動詞なのではない。まず、次の例を見られたい。

- (3) gwì hpé? mawdaw hawn dùm jähkrit ai (犬 NS 車 警笛 鳴らす 脅かす VA)
「犬を車の警笛を鳴らして脅かした」(T123)

この文では、2つの動詞が各自の目的語をとっている。そして、どのような目的語を取るかということは、動詞によって決まっている。このようなことは複合語の場合には起こらないので、(3)の例文は複数の動詞からなっていると考えることができる。

以上、ジンポー語の動詞連続の規定について述べた。ジンポー語の動詞連続は、2つの動詞からなるものが最も基本的であるため、本稿では主に2つの動詞からなる動詞連続について見ていく。その際、先行する動詞をV1、後続する動詞をV2と呼ぶことにする。

2.2 動詞連続の意味

ジンポー語の動詞連続には、継起的な事象を表すもの(4)、V1がV2の動作の様態・方法を表すもの(5)、V1がV2の目的を表すもの(6)、V1が補文のようにになっているもの(7)がある。

- (4) gáp shá mà?ai (撃つ 食べる VA) 「撃って食べた」(K1:3)
(5) gähhtë shága gà?ai (ささやく 話す VA) 「ささやいて話した」(T277)
(6) jùm mări sa mà?ai (塩 買う 行く VA) 「塩を買いに行った」(K3:34)
(7) shäpre shá rà? ai (豆 食べる 好く VA) 「豆を食べるのが好きだ」(T22)

なお、(6)のようなV1がV2の目的を表す動詞連続におけるV2は、sa「行く、来る」やwà「帰る」のような、基本的な移動動詞に限られるようである。移動動詞であっても、様態の意味を含むhkawm「歩く」やgät「走る」のような動詞では、やや不自然な文になる。hkawmやgätのような動詞をV2に用いて目的を表す動詞連続を作りたい場合は、これらの動詞の後にsaやwàを置く方がよい。

ところで、次のようなV1とV2が同義・並列の関係にある例は、(1)で示した本稿での動詞連続の規定を満たしており、また動詞連続の研究においても動詞連続のひとつのタイプとされることがある。

- (8) lägaw ni hpé? shämu shämàwt rà ai (足 PL NS 動かす 動かす 義務 VA)
「(泳ぐときは)足を動かさなければならない」(T238)

しかし、ジンポー語のこのような例は先に見た動詞連続の例とは次の点で異なる。①否定辞がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。②同一の副詞がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。③(同一の)名詞句がV1の前とV2の前の両方に置かれることがある。このような違いが

あるため、(8) のような例を動詞連続の例と同一視することはできない。本稿では、このような例は動詞連続ではなく、対句法 (parallelism) (加藤 2005) の例であると考え⁵。なお、ジンポー語の対句法の配列順序には音的要因が関与している。戴・徐 (1992) によると、対句法では、前に来る語の母音の高さは後に来る語の母音の高さよりも高いか、または両者の母音の高さは同じでなければならない (仮に規則 1 と呼ぶ)⁶。この規則は戴・徐 (1992) の示した例 (動詞の例は 29 例) に加え、筆者がニュースなどから集めた動詞の対句法 137 例のうち 119 例にも当てはまる (「高一低」の順に並ぶ例が 72 例、母音の高さが同じ例が 47 例)。反例 (「低一高」の順に並ぶ例) は 18 例のみである。また、単音節語は多音節語よりも先に置かれるという規則 (仮に規則 2 と呼ぶ) を考えれば、反例のうち 7 例は説明できる⁷。このように対句法の配列順序には音的要因が関与するのだが、動詞連続の配列順序には音的要因は関与しないため、この観点から見ても対句法と動詞連続は区別する必要があるだろう。

2.3 動詞連続の否定

ここでは、ジンポー語の動詞連続を否定した場合、否定辞がどこに置かれるかを見ておく。

まず、継起的な事象を表す動詞連続 (9) と V1 が V2 の動作の様態・方法を表す動詞連続 (10) に否定辞を付加した場合、一般的に否定辞 *n-* は V1 の直前に現れる⁸。否定辞は V1 と V2 の両方を否定する。

(9) *n sa shá ai* (NEG 行く 食べる VA) 「行って食べなかった」^{9 10}

(10) *n mǎrǎwn shǎga ai* (NEG 叫ぶ 話す VA) 「叫んで話さなかった」

次に、V1 が V2 の目的を表す動詞連続では、否定辞は V2 の直前に付加される。

(11) *jùm mǎri n sa ai* (塩 買う NEG 行く VA) 「塩を買いに行かなかった」

⁵ 対句法は *couplets* (Hertz 1911: 26–27) などと呼ばれることもある。また、ジンポー語では *Gà Mǎrún* または *Gà Shǎgùp* などと呼ばれている (Maran 2004, Laika Uma 2009: 26–47, Labya 2009: 8–10)。

⁶ 詳しくは戴・徐 (1992: 398–408) を参照。また、規則 1 は戴・徐 (1992) が示す通り、名詞などの、他の品詞の対句法にも当てはまる。例えば、ジンポー語では「東西南北」は「東西北南」(*sinpráw? sinná? dǐngdung dǐngdǎ?*) の順序で配列されるのだが、この順序も規則 1 に従っているのである (p.400)。なお、ジンポー語のオノマトペの配列順序もこの規則に従っているように思われる。

⁷ 対句法のような例の配列に音的要因が関与しているということは、日本語や朝鮮語、満州語などにも見られる (早田 1977)。早田 (1977: 126–127, 130) では、ジンポー語の対句法の規則 1 や規則 2 で見たようなことは世界の言語に広く見られるのではないかと述べられている。また、この論文では、現代日本語について、成員の一方が漢語である場合、漢語は後に並べられる例が目につくと述べられているが (p.131)、戴・徐 (1992: 405) もジンポー語について同様の観察をしている。つまり、ジンポー語の対句法が借用語を含む場合、借用語は後に置かれる。今後はジンポー語の対句法についてさらに詳しく調べる必要がある。

⁸ 話者によっては、一般的ではないが、V2 の直前に否定辞を置いて理解はできるとすることもある。また、話者によっては、V2 の直前に否定辞を付加する方がよいとすることもある。

⁹ 否定辞 *n-* は中平調の直前では変調して中平調で現れる。

¹⁰ 出典が明記されていない例文は作例である。以下、同様。

最後に、V1が補文のようにになっている動詞連続では、否定辞はV1に付加される場合とV2に付加される場合とがある。また、どちらに付加してもよい場合もある(12)(13)。このタイプの動詞連続における否定辞の位置は、話者によって判断が異なることもある。

(12) shǎpré n̄ shá shǎráwng ai (豆 NEG 食べる 好く VA) 「豆を食べるのが好きではない」

(13) shǎpré shá n̄ shǎráwng ai (豆 食べる NEG 好く VA) 「豆を食べるのが好きではない」

2.4 動詞連続の文法化

本稿では、Heine and Kuteva (2002: 2) にしたがって、文法化を「語彙的な形式の文法的な形式への発展」と考える。ジンポー語の動詞連続において、2つの動詞が連続したときに、一方の動詞が文法化するという現象がみられる。ジンポー語におけるこのような文法化には、V1の副詞化(4節)とV2の補助動詞化(5節)、V1の補文標識化(6節)の3つが見られる。

3 先行研究

Matisoff (1974) は、文法化については述べていないのであるが、本稿で扱うものと重なる部分を扱っていて、「動詞連続に比較的自由に現れる動詞」を *versatile verb* と呼んでいる。Matisoff (1974: 189) での *versatile verb* の規定は「他の動詞の前か後に、通例または特徴的に現れる動詞」となっている。また、Matisoff (1974) は *versatile verb* を2つのタイプに分類し、主動詞の前に現れるものを *adverbial verbs* (副詞的動詞)、主動詞の後に現れるものを *complementary verbs* (補助動詞) と呼んでいる。

4 副詞化

動詞の副詞化を見る前に、ジンポー語の副詞には否定辞を付加することはできないということを見ておく(14)。この文において、否定辞は動詞 shá「食べる」に付加しなければならない。

(14) *n̄ láw?láw? shá ai (NEG たくさん 食べる VA) 「たくさん食べなかった」

4.1 副詞化の例

ここでは、副詞化していないV1と副詞化したV1との違いを見る。次の文では、どれもV1の位置にある形式が意味的にV2を修飾していて、V1は副詞のように機能している。そして、これらのV1は、Matisoff(1974)ではすべて副詞的動詞として分類されている。

(15) hkàm shá (hkàm 食べる) 「耐えて食べる」(Matisoff 1974: 194)

(16) mǎrèn shá (mǎrèn 食べる) 「同様に食べる」

(17) bái shá (bái 食べる) 「また食べる」

これらの形式のうち *hkàm* と *mǎrèn* は単独で動詞として用いることができる(その場合の意味は、それぞれ「耐える」「同様だ」である)。単独で動詞であることは、否定辞や動詞接辞を付加すること

ができることから分かる。否定辞や動詞接辞は動詞にのみ付加できるからである。最後の *bái* は否定辞や動詞接辞を付加することができないため、動詞ではなく副詞であるのだが、本来は「繰り返す」という意味の動詞であったことが分かっている。これについては後述する。

さて、上の文に否定辞を付加すると、否定辞 *ń-* の位置に違いが出てくる。

(15)' *ń hkâm shá* 「耐えて食べない」¹¹

(16)' *mǎrèn ń shá* 「同様に食べない」

(17)' *bái ń shá* 「また食べない」

これらを見ると、(15)' の例では否定辞が V1 の直前に現れており、その他の例では否定辞が V2 の直前に現れている。また、次のようにこれらの否定辞の位置をそれぞれ入れ替えることはできない。

(18) **hkâm ń shá*

(19) **ń mǎrèn shá*

(20) **ń hái shá*

以上のように (15)' の例とその他の例では、否定辞の位置に違いがある。V1 の直前という (15)' の否定辞の位置は、2.3 で述べたように、V1 が V2 の動作の様態・方法を表す一般的な動詞連続に否定辞を付加したときの否定辞の位置と同様である。この事実から、本稿では (15) は 2.2 の (5) の例と同様に、V1 が V2 の動作の様態・方法を表すタイプの一般的な動詞連続であると考え、(15) の *hkâm* は動詞であるとする。Matisoff (1974) で副詞的動詞とされているもので、このタイプに属するものは他にもあり、それらは 4.2 に列挙する。

一方、(16) の *mǎrèn* は、*hkâm* と同様に単独で動詞として用いることができるが、V1 に置かれた場合は否定辞を前接することができない。このことは、一般的な V1 が V2 の動作の様態・方法を表す動詞連続には見られないことである。否定辞を前接できないことは 4 節の最初で述べた副詞の持つ特徴と同様である。この事実から、本稿では、V1 の位置にある *mǎrèn* は副詞化しているものとする。このタイプのものは、4.3 に列挙する。

最後に、(17) の *bái* について述べる。この形式は、筆者のインフォーマントによれば単独で否定辞や動詞接辞を付加することができないため、そもそも動詞であると見なすことはできない。ただし、かつては「繰り返す」という意味の動詞であったことが分かっている。最も古いジンポー語の辞書とされる Hanson (1906) では *bái* は動詞と記述されているのである。また、Matisoff (1974: 192) はビルマのジンポー語を扱ったものであるが、'to repeat' の訳を与えている。また、徐ほか (1983: 53) を見ると、中国のジンポー語では *bái* はいまでも動詞としても用いられていることが分かる。これらのことを考え合わせると、*bái* はもともとは動詞であったが、完全に副詞化してしまったものであると考えることができる。このタイプのものは、4.4 に列挙する。

¹¹ 低下降調の単語に否定辞を付加した場合、低下降調は高下降調に変調する。

以上述べてきたことから考えると、本小節の最初で取り上げた3つの形式は、(15)から(17)に行くに従って、文法化の度合いが増し、副詞に近づいているものと考えることができる。

4.2 hkàm と同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、(15) の hkàm と同様に否定辞の前接を許す。

[1] hkàp 「待ち伏せする」

(例) hkàp mù (hkàp 見る) 「待ち伏せして見る」 (Matisoff 1974: 193)

[2] lǎgyím 「こっそり行なう」

(例) lǎgyím yu (lǎgyím 見る) 「こっそり見る」 (Matisoff 1974: 194)

[3] mǎyún 「こっそり行なう」

(例) mǎyún yu (mǎyún 見る) 「こっそり見る」 (Matisoff 1974: 194)

[4] shǎyáwm ～ shìyáwm 「減らす」

(例) shìyáwm tsun (shìyáwm 言う) 「減らして言う」 (Matisoff 1974: 194)

[5] gǎjàwng 「驚く」

(例) gǎjàwng yu (gǎjàwng 見る) 「驚いて見る」 (Matisoff 1974: 195)

[6] lǎnyàn 「ゆっくりだ」

(例) lǎnyàn hkawm (lǎnyàn 歩く) 「ゆっくり歩く」 (Matisoff 1974: 195)

[7] jáwm 「協力する」。V1 としては「みんなで」という意味を表す。

(例) jáwm hpai (jáwm 担ぐ) 「みんなで担ぐ」 (Matisoff 1974: 194)

[8] kām 「意志がある」。V1 としては「ある動作をする意志がある」という意味を表す。この形式は V2 の位置にも現れうるので、補助動詞と考えた方がよいかもしれない(5.4 [67] を参照)。

(例) kām hí (kām 読む) 「読む意志がある」 (KT)

[9] dāng 「勝つ」。V1 としては「できる」という意味を表す。この形式は V2 の位置にも現れうるので、補助動詞と考えた方がよいかもしれない(5.4 [68] を参照)。

(例) dāng tsun (dāng 言う) 「言うことができる」 (K2: 18)

4.3 mǎrèn と同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、V1 の位置に置かれたとき、否定辞を前接することができない。

[10] hkrák

「よく」という意味を表す。単独では「よい」という意味の動詞である。

(例) hkrák chyē (hkrák 知る) 「よく知っている」(KNG)

[11] nìngnan~n̄nan

「新しく」という意味を表す。単独では「新しい」という意味の動詞である。

(例) n̄nan paw (n̄nan 現れる) 「新しく現れる」(KNG)

Matisoff(1974) では挙げられていないが、次の形式もこのタイプに属する。

[12] gǎja

「本当に」という意味を表す。単独では「よい」という意味の動詞である。

(例) gǎja shá (gǎja 食べる) 「本当に食べる」

[13] lǎwʔ

「さらに」という意味を表す。単独では「多い」という意味の動詞である。

(例) lǎwʔ shǎga (lǎwʔ 話す) 「さらに話す」

[14] lòi

「少し」という意味を表す。単独では「簡単だ」という意味の動詞である。

(例) lòi tsun (lòi 言う) 「少し言う」

[15] lau

「速く」という意味を表す。単独では「速い」という意味の動詞である。

(例) lau gǎlaw (lau 行なう) 「速く行なう」

4.4 báí と同じタイプ

Matisoff (1974) の副詞的動詞のうち、以下に示すものは、(17) の báí と同様、筆者のインフォーマントによれば動詞ではないのだが、Hanson (1906) の記述からかつては動詞であったと考えられる形式である。以下に挙げる動詞の英語訳は Hanson (1906) による。

[16] grài

「とても」という意味を表す。動詞 grài ‘good’ に由来する。筆者が作ったコーパス (約 400 万語) では直後に動詞接辞が後接した grài ai や grài sai は見つからなかった¹²。Matisoff (1974: 189) には ‘be very’ の訳がある。徐ほか(1983: 200) では動詞としても記述されている¹³。

(例) grài mu (grài おいしい) 「とてもおいしい」(K2: 10)

[17] shawng

「先に、最初に」という意味を表す。動詞 shawng ‘to go or be first, ahead’ に由来する。コーパスでは shawng ai は 1 例、例が見つかった。徐ほか(1983: 800) では動詞としても記述されている。

(例) shawng mǎri (shawng 買う) 「先に買う」(KT)

[18] hkùm

禁止を表す。動詞 hkùm ‘to prohibit’ に由来する。コーパスでは hkùm ai は見つかった。Manam (1977: 405) には「動詞」とある。徐ほか(1983: 263) では副詞とのみ記述されている¹⁴。

(例) hkùm shākàwn (hkùm ほめる) 「ほめるな」(エ)

[19] ràu

「一緒に」という意味を表す。動詞 ràu ‘to be or act together’ に由来する。コーパスに ràu ai や ràu sai はない。徐ほか(1983: 687) では副詞とのみ記述されている。

(例) ràu sa (ràu 行く) 「一緒に行く」(エ)

[20] yép

「一緒に」という意味を表す。動詞 yép ‘to be close together, to adjoin’ に由来する。コーパスに yép ai や yép sai はない。徐ほか(1983: 892) では副詞とのみ記述されている。

(例) yép shá (yép 食べる) 「一緒に食べる」(Matisoff 1974: 194)

[21] tút

「いつも」という意味を表す。動詞 tút ‘to be joined’ に由来する。コーパスに tút ai や tút sai はない。徐ほか(1983: 850) では副詞とのみ記述されている。

(例) tút hkàmshá (tút 感じる) 「いつも感じる」(歌)

¹² 動詞接辞を付加できるならば、動詞であると見なせる。ai と sai は最もよく用いられる動詞接辞である。

¹³ 徐ほか(1983) では形容詞とされているが、ジンポー語では形態統語的に見て、形容詞と動詞を区別する必要はないと思われる。例えば、これらに付加される動詞接辞の形式は同様である。したがって、本稿では、徐ほか(1983) で形容詞と記述されているものを動詞として扱う。

¹⁴ hkùm+V2 は意味的な要因で否定辞 ñ- を付加することができないため、否定辞の位置を確かめることはできないが、この形式は本来は動詞であるが、共時的には動詞として用いることができないため、このグループに加えてよいと考えられる。

[22] hkrài

「ひとりで」という意味を表す。動詞 hkrài ‘to be alone’ に由来する。コーパスに hkrài ai や hkrài sai はない。徐ほか(1983: 248–249)では副詞とのみ記述されている。

(例) hkrài shá (hkrài 食べる) 「ひとりで食べる」(Matisoff 1974: 194)

Matisoff(1974)では挙げられていないが、grau もこのタイプに属する。

[23] grau

「さらに」という意味を表す。動詞 grau ‘to exalt, promote’ に由来する。コーパスやラジオ放送、歌では動詞としての例もいくつか見つかった。徐ほか(1983: 202)では動詞としても記述されている¹⁵。

(例) grau tsàwm (grau 美しい) 「さらに美しい」(K2: 19)

5 補助動詞化

本稿では、動詞の後ろに置かれて動詞を修飾し、単独の動詞としても用いられうるものを、仮に「補助動詞」と呼ぶことにする。

5.1 補助動詞化の例

ここでは、補助動詞化した動詞の例を挙げる。まず次の例を見られたい。

(21) hpa gǎlaw taw ai ta (何 する taw VA 疑問) 「何をしていますか」(チ)

この文において、V2 の位置にある taw は、<継続>の意味を表している。この形式は、単独で動詞として用いることもできる(その場合の意味は、「横たわる、位置する、ある」である)。単独で動詞であることは、この形式を単独で用いたとき、否定辞や動詞接辞を付加することができることから分かる。(21) の文では、taw が gǎlaw 「する」を意味的に後ろから修飾していて、補助動詞として用いられている。このような補助動詞は、動詞連続の V2 が文法化して発展したものであると考えられる。ただし、前節で見たような副詞化した動詞の場合とは異なり、この(21)の例の taw が動詞としての特徴を失っているということをはっきりと示すような文法的な証拠は現段階では見つかっていない。とはいうものの、(21) の taw は、もとの意味を失っており、また<継続>の意味では単独では用いることができないので、ある程度は文法化していると考えてよいと思われる。したがって、本稿ではこのようなものを補助動詞として記述することにする。

¹⁵ exceed のような意味の動詞が、比較級的な意味を表すために用いられるということは、世界の言語でよく見られることである(Heine and Kuteva 2002: 123–126, Aikhenvald 2006: 27)。

5.2 補助動詞

ここでは、補助動詞を具体的に記述し、例を示す。以下に挙げる補助動詞のいくつかは Matisoff (1974) でもリストされているのだが、そこでの意味の記述はあまり詳しくないので、本稿では意味の記述を詳しくした。また、本稿で筆者が新たに加えた形式は 14 ある ([25] [28] [29] [30] [31] [32] [37] [42] [46] [49] [50] [52] [57] [58])。なお、Matisoff (1974) では、意味の変化が認められず、したがって補助動詞とは認められないような例も挙がっている。それらの例は、本稿では補助動詞とは考えず、ここでの記述から外すことにする。また、Matisoff (1974) の挙げている例で、筆者のインフォーマントがそのような意味はないとしたものや、動詞に由来するとはいえないものも、以下の記述から除外してある。以下の記述では、補助動詞を主に意味的な観点から分類して示すが、これは便宜的な分類である。

5.2.1 ボイス

[24] shǎngún<使役>

使役を表す。V1 が動作動詞のときは被使役者に指示してさせるという意味を表し (例 1)、V1 が状態動詞のときは被使役者のある状態になるようにするという意味を表す (例 2)。(例 3) のように許容的な使役も表すこともできる。動詞 shǎngún 「遣わす」に由来する¹⁶。

(例 1) gǎlaw shǎngún (する shǎngún) 「(畑仕事を)させる」(KT)

(例 2) gǎbu shǎngún (喜ぶ shǎngún) 「喜ばせる」(T189)

(例 3) n h̄tēnzà shǎngún mǎyu (NEG 壊れる shǎngún したい) 「(土地を)壊れさせたくない」(MYU7:3)

[25] jaw?<受益>

利益・恩恵を与えることや (例 1)、損・不利益を与えることを表す (例 2)。動詞 jaw? 「与える」に由来する¹⁷。jaw? は V1 の位置に来ることもある (5.4 [74] を参照)。

(例 1) gǎlaw jaw? (する jaw?) 「してあげる」(K2:40)

(例 2) hkà? hkǎnù? jaw? (水 汚す jaw?) 「(なぜ)水を汚してくれる(のか)」

¹⁶ Maran and Clifton (1976) は shǎngún を接尾辞と見ており、これをもとに Dixon (2000: 68, 75–77) も shǎngún を接尾辞と見て、ジンポー語を直接使役と間接使役をともに形態的な方法で表すタイプの言語として分類している。しかし、shǎngún は接尾辞ではない。例えば次の文では、shǎngún は shǎkùt 「努力する」と ram 「十分だ」の両方の動詞を修飾しているが、shǎkùt と shǎngún は形態的に隣接しておらず、離れた位置にあるため、shǎngún を接尾辞と考えることはできない。したがって、Dixon (2000) の分類法では、むしろジンポー語は直接使役を形態的方法で表し (接頭辞 shǎ-)、間接使役を複雑述語で表す (補助動詞 shǎngún) タイプの言語に分類されると考えられる。

(例) mà yán lǎhkāwng hpé? jawng lǎika shǎkùt, lǎika ram shǎngún mǎyu ai
子 両 二 NS 学校 勉強 努力する 勉強 十分だ shǎngún したい VA
「子ども 2 人に学校の勉強を努力させ、勉強を十分にさせたい」(KNG)

¹⁷ 「与える」という意味の動詞が、受益や使役を表すために用いられるということは、東南アジアの言語ではしばしば見られることである (Matisoff 1991: 427–431)。

[26] ya<受益>

利益・恩恵を与えることや(例1)、損・不利益を与えることを表す(例2)。動詞 ya「与える」に由来する。ya は斜格項を目的語項にする機能があるため、アプリカティブであると考えられる(例3)(例4)。ただし、話者によっては(例4)のような文は認めにくいとすることもある。なお、jàw? との違いは jàw? が口語で用いられるのに対して、ya が文語で用いられることが多いということのようである。また、ya は jàw? と異なり、V1 の位置に置くことはできない。なお、V+ jàw? ya の形で用いられることもある(例5)。jàw? ya は対句法であるが、その順序は 2.2 で見た対句法の配列規則 1 に従っている。

(例1) mǎdāt ya (聞く ya) 「聞いてあげる」(映)

(例2) hkà? hkanù? ya (水 汚す ya) 「(なぜ)水を汚してくれる(のか)」(K2: 15)

(例3) ngai nang ná mǎtǔ gǎbu ai (私 あなた 属格 ために 喜ぶ VA) 「私はあなたのために喜んだ」

(例4) ngai nang hpé? gǎbu ya ai (私 あなた NS 喜ぶ ya VA) 「私はあなたのために喜んでやった」

(例5) gǎrum jàw? ya (助ける jàw? ya) 「助けてあげる」(コ)

[27] láwm<共同>

「一緒にする」という意味を表す。動詞 láwm「参加する、含まれる、備わる」に由来する。láwm は斜格項を目的語項にする機能があるため、アプリカティブであると考えられる(例2)(例3)。ただし、話者によっては(例3)のような文は認めにくいとすることもある。

(例1) gǎsát láwm (戦う láwm) 「一緒に戦う」(MYU6: 35)

(例2) gǎnù gǎw mà htè? yúp ai (母 主題 子 共格 寝る VA) 「母は子と寝た」

(例3) gǎnù gǎw mà hpé? yúp láwm ai (母 主題 子 NS 寝る láwm VA) 「母は子と一緒に寝た」

[28] hkrúm<受け身>

受け身を表す。被害を受ける場合(例1)と恩恵を受ける場合(例2)とがある。また、持ち主の受け身文のような例もある(例3)。この形式は自動詞の後に置くこともできる(例4)(例5)。V1 に状態動詞が来ると「～になる」というような意味を表す(例5)。動詞 hkrúm「会う」に由来する。

(例1) gwì gǎwá hkrúm (犬 噛む hkrúm) 「犬に噛まれる」(エ)

(例2) shǎgrau hkrúm (ほめる hkrúm) 「ほめられる」(KNO)

(例3) ngai gǎw baw gǎyàt hkrúm (私 主題 頭 殴る hkrúm) 「私は頭を殴られた」

(例4) mǎshà lǎw?lǎw? si hkrúm (人 たくさん 死ぬ hkrúm) 「人がたくさん死んだ」(KNO)

(例5) kǎw?si hkrúm (空腹だ hkrúm) 「空腹になる」(K2: 67)

[29] gǎtút<受け身>

受け身を表す。hkrúm との違いは、gǎtút が「突然に受けた」という含みを持つのに対して、hkrúm はそのような含みを持たないということである。動詞 gǎtút「予期せず会う」に由来する。なお、gǎtút

は、状態動詞には付加できないようである (例 2)。また、V+hkrúm gătüt の形で用いられることもある (例 3)。hkrúm gătüt は対句法であるが、その順序は 2.2 で見た対句法の配列規則 2 に従っている。

(例 1) gwì gǎwá gătüt (犬 噛む gătüt) 「犬に噛まれる」(エ)

(例 2) *kǎw?si gătüt (空腹だ gătüt)

(例 3) gwì gǎwá hkrúm gătüt (犬 噛む hkrúm gătüt) 「犬に噛まれる」

[30] hkàm<受け身>

自ら進んで行為を受けるという意味を表す。動詞 hkàm 「受ける、耐える」に由来する。

(例) gwì gǎwá hkàm (犬 噛む hkàm) 「自ら進んで犬に噛まれる」

5.2.2 アスペクト

[31] taw<継続>

動作の継続や (例 1)、結果状態の継続を表す (例 2)。また、状態や (例 3)、反復・習慣も表す (例 4)。

動詞 taw 「横たわる、位置する、ある」に由来する。

(例 1) shǎchyút taw (追いかける taw) 「追いかけている」(映)

(例 2) dù taw (着く taw) 「着いている」(チ)

(例 3) kǎw?si taw (空腹だ taw) 「お腹が減っている」(エ)

(例 4) gǎlaw taw (する taw) 「(学生ではなく今は)仕事をしている」(チ)

[32] ngà<継続>

動作の継続 (例 1) や結果状態の継続を表す。また、状態や反復・習慣も表す。動詞 ngà 「いる、ある」に由来する。taw との違いは、taw は口語で用いられることが多いのに対して、ngà は文語で用いられることが多いということのようである。また、V+taw ngà の形で用いられることもある (例 2)。

taw ngà は対句法であるが、その順序は対句法の配列規則 1 に従っている。

(例 1) hkràp ngà (泣く ngà) 「泣いている」(歌)

(例 2) là taw ngà (待つ taw ngà) 「待っている」(チ)

[33] dá<結果保持>

結果の保持を表す (例 1)。また、「着る」などの動詞の後では結果状態の継続を表す (例 2)。動詞 dá 「置く」に由来する。

(例 1) gǎlaw dá (作る dá) 「作っておく」(K2: 76)

(例 2) chyáwp dá (かぶる dá) 「(帽子を)かぶっている」(T47)

[34] tawn<結果保持>

結果の保持を表す。動詞 tawn 「置く」に由来する。dá との違いはまだ分からない。なお、V+tawn dá の形もよく用いられる (例 2)。tawn dá は対句法だが、その順序は対句法の配列規則 1 に従っている。

(例 1) bang tawn (入れる tawn) 「入れておく」(K3: 8)

(例 2) shǎdu tawn dá (料理する tawn dá) 「料理しておく」(K3: 8)

[35] má?<完全さ>

「～し尽くす」「ことごとく～」という意味を表す。動詞 má? 「終わる」に由来する。

(例) shá má? (食べる má?) 「食べ尽くす」

(例) hkyeng má? (赤い má?) 「ことごとく赤くなる」

[36] màt<完了>

動作が完了することを表す。「～してしまう」。動詞 màt 「なくなる」に由来する。

(例) hprawng màt (逃げる màt) 「逃げてしまう」(K2: 36)

[37] byin<実現>

動作が実現することを表す。「～しおおせる」。動詞 byin 「起こる、なる」に由来する。

(例) sa byin (行く byin) 「行く」

[38] lai<現在時への移動>

lai wà sai (lai wà VA) 「過ぎ去った」の形で現在時への移動や (例 1)、過去を表す (例 2)。動詞 lai 「通り過ぎる」に由来する。wà については[51]を参照。

(例 1) gǎja lai wà sai (よい lai wà sai) 「よくあり続けてきた(親友)」(映)

(例 2) gǎlaw lai wà sai (行なう lai wà sai) 「(4回目の会議を)行なった」(KT)

[39] hpang<開始>

開始の局面を表す。動詞 hpang 「始める」に由来する。

(例) Mǎnàu nau hpang (マナウ 踊る hpang) 「マナウの踊りを踊り始める」(KNG)

[40] ngút<終了>

終了の局面を表す。動詞 ngút 「終わる」に由来する。次の文はジンポー語のあいさつ。

(例) shàt shá ngút sai î (ご飯 食べる ngút VA 疑問) 「ご飯を食べ終わりましたか」(エ)

5.2.3 モダリティ

[41] rà<義務>

義務を表す。動詞 rà 「必要である」に由来する。なお、rà は V2 に来たとき否定辞が rà の直前に現れることもあるという点で特殊である (例 2)。動詞+補助動詞では、否定辞は V1 の直前に付加されるのがふつうである。

(例 1) jàw? rà (与える rà) 「与えなければならない」(エ)

(例 2) hkìt tsàng í rà (恐れる 心配する NEG rà) 「恐れ心配する必要はない」(MYU2:4)

[42] ging<当為>

当為を表す。動詞 ging 「価値がある」に由来する。

(例) tai ging (なる ging) 「(女王に)なるべきだ」(K2:46)

[43] mai<許可>

許可「～してもよい」や (例 1)、評価「～するのがよい」を表す (例 2)。また、可能や (例 3)、当為を表す (例 4)。動詞 mai 「よい」に由来する。mai は V1 の位置に来ることもある (5.4 [73] を参照)。なお、mai は V2 に来たとき否定辞が mai の直前に現れることもあるという点で特殊である (例 3)。また、否定辞が V1 の直前と mai の直前の両方に置かれることもあるという点でも特殊である (例 5)。

(例 1) shàng mai (入る mai) 「入ってよい(か)」

(例 2) rawng mai (持つ mai) 「(愛する心を)持つのがよい」(K2:14)

(例 3) hkawm n mai wà (歩く NEG mai なる) 「歩けなくなる」(KNG)

(例 4) hkìt mai (恐れる mai) 「(ヤマアラシは)恐れるべきだ」(K2:57)

(例 5) n sa n mai (NEG 行く NEG mai) 「行かないといけない」(KNG)

[44] hkráw<意志>

意志を表す。「快く～する」。動詞 hkráw 「同意する」に由来する。

(例) ya hkráw (与える hkráw) 「快く与える」(K1:15)

5.2.4 態度

[45] gwi<勇敢さ>

勇敢さを表す。「～する勇気がある」。動詞 gwi 「勇気がある」に由来する。gwi は V1 の位置に来ることもある (5.4 [70] を参照)。

(例) pru gwi (出る gwi) 「出る勇気がある」(K2:17)

[46] wam<勇敢さ>

勇敢さを表す。「～する勇気がある」。動詞 wam「勇気がある」に由来する。wamは V1 の位置に来ることもある(5.4 [69]を参照)。gwi との違いはまだ分からない。

(例) shá wam (食べる wam) 「食べる勇気がある」

[47] mäsù?<振り>

「～のふりををする」という意味を表す。動詞 mäsù?「だます」に由来する。

(例) si mäsù? (死ぬ mäsù?) 「死んだふりををする」(K2: 27)

5.2.5 もくろみ

[48] yu<試行>

試行を表す(例 1)。また、経験したことがあるという意味も表す(例 2)(例 3)。また、思考・知覚動詞の後に置かれることもある(例 4)。動詞 yu「見る」に由来する。

(例 1) sèp yu (剥く yu) 「(ココヤシの実の皮を)剥いてみる」(K1: 20)

(例 2) mù yu (見る yu) 「見たことがある」(K1: 19)

(例 3) n mächyí? yu (NEG 痛い yu) 「(それ以来足が)痛くなったことはない」(K1: 28)

(例 4) hkámshá yu (感じる yu) 「(心臓がどきどきしていると)感じる」(T192)

[49] dán<提示>

提示を表す。動詞 dán「見せる」に由来する。

(例) tsun dán (言う dán) 「言ってみせる」(K2: 10)

5.2.6 移動

[50] hkawm<移動>

あちこち移動することを表す。動詞 hkawm「歩く」に由来する。

(例) pyen hkawm (飛ぶ hkawm) 「あちこち飛んでまわる」(K3: 8)

[51] wà<移動>

移動することを表す。移動する方向は関係ない(例 1)(例 2)。また、物事が発生することや(例 3)、状態変化を表す(例 4)。「～しようとする」という意味も表す(例 5)。動詞 wà「帰る」に由来する。

(例 1) shàng wà (入る wà) 「(私)が家にいるとき彼らが家に入ってくる」

(例 2) prū wà (出る wà) 「(私)と共に家にいるとき彼らが家から出て行く」

(例 3) byin wà (起こる wà) 「起こる」(KNG)

(例 4) mai wà (よい wà) 「よくなってくる」(K2: 18)

(例 5) sàt wà (殺す wà) 「殺そうとする」(Matisoff 1974: 196)

[52] hkràt<下方移動>

下方へ移動することを表す。動詞 hkràt 「落ちる」に由来する。

(例) lwi hkràt (流れる hkràt) 「(川上から水が)流れる」(K2: 17)

5.2.7 強意

[53] káu<徹底>

徹底を表す。「きちんと〜」。動詞 káu 「棄てる」に由来する。

(例) lù káu (得る káu) 「きちんと得る」(コ)

[54] dāt<徹底>

徹底を表す。「きちんと〜」。動詞 dāt 「放つ」に由来する。káu との違いはまだ分からない。また、V+káu dāt という形も用いられる (例 2)。káu dāt は対句法であるが、その順序は対句法の配列規則 1 に従っている。

(例 1) shǎgá dāt (呼ぶ dāt) 「はっきり呼ぶ」(T10)

(例 2) nà káu dāt (聞こえる káu dāt) 「はっきり聞こえる」(T5)

[55] jāt<付加>

「もっと」という意味を表す。動詞 jāt 「加える」に由来する。

(例) gǎlù jāt (長い jāt) 「もっと長くなる」(K1: 36)

[56] bù?<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 bù? 「熱がある」に由来する。

(例) mǎsìn pàwt bù? (心 怒る bù?) 「ひどく怒る」(K1: 40)

[57] si<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 si 「死ぬ」に由来する。

(例) pyaw si (楽しい si) 「とても楽しい」

[58] sāt<甚だしさ>

「ひどく、とても」という意味を表す。動詞 sāt 「殺す」に由来する。この形式は、話者によっては用いられないこともある。

(例) shǎpyaw sāt (楽しませる sāt) 「とても楽しませる」

[59] dik<甚だしさ>

「極めて」や(例1)、「最も～」という意味を表す(例2)(例3)。動詞 dik 「満ちる」に由来する。

(例1) pyaw dik (楽しい dik) 「極めて楽しい」(Hanson 1906: 113)

(例2) ?ähkyäk dik (重要だ dik) 「(全ての中で)最も重要である」(KNG)

(例3) námbát 2 gǎbà dik (数2 大きい dik) 「2番目に大きい」(KNG)

[60] htùm<最上>

「最も～」という意味を表す。動詞 htùm 「終わる、なくなる」に由来する。なお、htùm は V1 の位置にも来うる可能性がある (5.4 [75] を参照)。また、V+dik htùm という形も用いられる (例2)。dik htùm は対句法であるが、その順序は対句法の配列規則1に従っている。

(例1) tsàwm htùm (美しい htùm) 「最も美しい」(K2: 19)

(例2) pyaw dik htùm (楽しい dik htùm) 「最も楽しい」(歌)

5.2.8 その他

[61] chye<性質>

人間の性質・習性や(例1)、物の性質を表す(例2)。また、能力や(例3)、可能性を表す(例4)。動詞 chye 「知る」に由来する。なお、chye は V1 の位置に来ることもある (5.4 [71] を参照)。chye は V2 に来たとき否定辞が chye の直前に現れることもあるという点で特殊である(例3)。

(例1) pyaw chye (楽しい chye) 「(この人は)楽しい」(T133)

(例2) lāwm chye (備わる chye) 「(シャツには袖が)付いている」(T215)

(例3) hpùngyàwt n chye (泳ぐ NEG chye) 「泳げない」(Hertz 1895: 15)

(例4) byìn wà chye (起こる 来る chye) 「起こるかもしれない」(KNG)

[62] lù<状況可能>

状況可能(例1)、ものの性質(例2)などを表す。知覚・感覚動詞の後に来ることもある(例3)。動詞 lù 「得る」に由来する。なお、lù は V1 の位置に来ることもある(例1)(5.4 [72] を参照)。lù は V2 のとき否定辞が lù の直前に現れることがある点で特殊である(例4)。

(例1) ín lù lù? (NEG lù 飲む) 「(熱いから)飲むことができない」(T226)

(例2) hkrù lù (燃える lù) 「(草葺の家は火がつくとはやく)燃える」(K2: 32)

(例3) hkàmshá lù (感じる lù) 「(頬に雨が当たるのを)感じる」(T47)

(例4) shǎmu shǎmàwt ín lù (動く 動く NEG lù) 「動くことができない」(K2: 70)

[63] hkrùp<不注意>

うっかりやったことを表す。動詞 hkrùp「ぶつかる」に由来する。Matisoff (1974) では、状態動詞の後に置かれる例も挙げられているが、筆者のインフォーマントによるとこのような例は容認されない。

(例) hkrúm hkrùp (会う hkrùp) 「うっかり会ってしまう」(K2: 58)

(例) *chyang hkrùp (黒い hkrùp) 「たまたま黒い」(Matisoff 1974: 200)

[64] lá<取得>

「～して取る」という意味を表す。動詞 lá「取る」に由来する。

(例) shárin lá (勉強する lá) 「学習する」

5.3 完全に補助動詞化 (助動詞化) した動詞

次の形式は、Hanson (1906) では動詞と記述されていて、もともとは動詞であったと思われるのだが、筆者のインフォーマントによると単独で用いることはできないという。したがって、これらは共時的には動詞ではないということになる。これらはもともと動詞であったけれども、完全に補助動詞 (助動詞) になりきってしまったものと考えられる¹⁸。以下に挙げる動詞の英語訳は Hanson (1906) による。

[65] hkát<相互>

相互を表す。動詞 hkát ‘to dispute’ に由来する。徐ほか (1983: 237) では古い意味として「戦う」という意味があると記述されている。Hertz (1911: 40) には動詞としての例が挙がっている。また、Lungjung (2002) では動詞としても記述されている。

(例) tsáwʔràʔ hkát (愛する hkát) 「お互いに愛し合う」(K2: 34)

[66] măyu<願望>

願望を表す。動詞 măyu ‘to wish’ に由来する。徐ほか (1983: 516) では動詞とは記述されていない。ただし、戴・徐 (1992: 160) では動詞とも記述されている。

(例) sa măyu (行く măyu) 「行きたい」(エ)

5.4 V1としてもV2としても用いるもの

次の形式は、本来の動詞の意味が変わっていて、補助動詞などとして扱われると思われるものがあるが、V1の位置にもV2の位置にも現れるという点で特殊である。Matisoff (1974) では、これらがV1の位置にもV2の位置にも現れうるということは述べられていない。

¹⁸ 本稿では補助動詞は動詞としても用いられうるものとしたので、もはや動詞としては用いられないここでの形式を補助動詞と呼ぶのは正確でない。本稿では補助動詞と区別して助動詞と呼ぶ方がよいかもしれない。

[67] kam<意志> (=4.2[8])

「ある動作をする意志がある」という意味を表す。動詞 kam 「意志がある」に由来する。Matisoff (1974) では、副詞的動詞とされている。確かに V1 の位置に来ることが多いのであるが、V2 の位置に来ることもあるようである。筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようであるが、V2 に来た方が文語的であるとする話者もいる。

(例 1) kam shāga (kam 話す) 「話す意思がある」(チ)

(例 2) shāga kam (話す kam) 「話す意思がある」

[68] dang<可能> (=4.2[9])

可能を表す。動詞 dang 「勝つ」に由来する。Matisoff (1974) では、副詞的動詞とされている。確かに V1 の位置に来ることが多い。実のところ、筆者のインフォーマントによると V2 の位置に置くことはできない。ただし、Hertz (1895: 7, 18) や Hertz (1911: 19) には V2 の位置にこの形式が置かれている例が挙げられている。また、コーパスや歌でも V2 の位置に置かれる例が見られるので (例 2)、仮にこのグループに含めておく。dang は V2 に来的时候、否定辞が V2 の直前に置かれることもある (例 3)。

(例 1) dang tsun (dang 言う) 「言うことができる」(K2: 18)

(例 2) hī dang (数える dang) 「数えることができる」(コ)

(例 3) tsun ní dang (言う NEG dang) 「言うことができない」(歌)

[69] wam<勇敢さ> (=5.2.4[46])

「ある動作をする勇気がある」という意味を表す。動詞 wam 「勇気がある」に由来する。筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようである。

(例 1) wam shá (wam 食べる) 「食べる勇気がある」

(例 2) shá wam (食べる wam) 「食べる勇気がある」

[70] gwi<勇敢さ> (=5.2.4[45])

「ある動作をする勇気がある」という意味を表す。動詞 gwi 「勇気がある」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされている。確かに V2 の位置に来ることが多いようであるが、V1 の位置に来ることもある。なお、筆者のインフォーマントによると V1 に来たときと V2 に来たときの意味の違いはあまりないようである。

(例 1) gwi pru (gwi 出る) 「出る勇気がある」

(例 2) pru gwi (出る gwi) 「出る勇気がある」(K2: 17)

[71] chye<性質> (=5.2.8 [61])

V1 の位置に来たときは「能力がある」という意味を表し (例 1)、V2 の位置に来たときは「性質・習性がある」という意味を表すことが多いようである (例 2)。動詞 chye 「知る」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされているのだが、V1 の位置に来ることも多い。

(例 1) chye dùm (chye 弾く) 「(ピアノを)弾くことができる」(T188)

(例 2) pyaw chye (楽しい chye) 「(この人は)楽しい」(T133)

[72] lù<状況可能> (=5.2.8 [62])

状況可能などを表す。動詞 lù 「得る」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされているのだが、V1 の位置に来ることも多い。V1 に来たときは状況可能を表し (例 1)、V2 に来たときは性質を表すことが多いようであるが、まだはっきりしないことが多い (例 2)¹⁹。

(例 1) lù pyaw (lù 楽しい) 「(この人はお金があるから)楽しめる」

(例 2) pyaw lù (楽しい lù) 「(この人はお金はないかもしれないけれども)楽しい」

[73] mai<許可> (=5.2.3 [43])

許可や評価などを表す。動詞 mai 「よい」に由来する。Matisoff (1974) では、補助動詞とされている。V1 に来たときと V2 に来たときとは意味の違いがあるようだが、まだはっきりとは分らない。

(例 1) n mai gínsúp (NEG mai 遊ぶ) 「(マッチで)遊んではいけない」(T168)

(例 2) rawng mai (持つ mai) 「(愛する心を)持つのがよい」(K2: 14)

[74] jàw?<受益> (=5.2.1 [25])

V1 の位置に来たときは使役を表し (例 1)、V2 の位置に来たときは受益を表す (例 2)。動詞 jàw? 「与える」に由来する。

(例 1) jàw? hí (jàw? 読む) 「読ませる」

(例 2) gǎlaw jàw? (する jàw?) 「してあげる」(K2: 40)

[75] htùm<最上> (=5.2.7 [60])

「最も～」という意味を表す。動詞 htùm 「終わる、なくなる」に由来する。実のところ、筆者のインフォーマントによると V1 の位置に置くことはできない。しかし、Hanson (1896: 38) や Hertz (1911: 12) には V1 の位置に置くこともできると記述されているので、仮にこのグループに含めておく。ただし、筆者がコーパスや雑誌などから集めた補助動詞 htùm の例 (312 例) のなかではこの形式が V1 の位置に置かれるという例は 1 例もなかった。

¹⁹ Matisoff (1991: 418–427) では、「得る」という意味を表す動詞が補助動詞のように用いられ、意味の違いをもたって V1 と V2 のどちらの位置にも現れうるというパターンを持つ言語が東南アジアの言語に広く見られるということを指摘し、ラフ語などの例を挙げている。

(例1) htùm gǎja (htùm よい) 「最もよい」 (Hertz 1911: 12)

(例2) gǎbà htùm (大きい htùm) 「最も大きい」 (K2: 9)

6 補文標識化

次の文は、ngú「言う」と shǎdù?「思う」が連続して現れており、動詞連続のように見える。

(22) jà mǎri na ngú shǎdù? ai (金 買う 未来 ngú 思う VA)

「金を買うのだろうと思った」 (KNO)

しかし、(22)の文を否定する場合、否定辞 í- を ngú に付加することはできない。

(23) jà mǎri na ngú í shǎdù? ai (金 買う 未来 ngú NEG 思う VA)

「金を買うのだろうと思わなかった」

このように、ngú には否定辞を付加することができないため、ngú は否定辞を前接できるという動詞の特徴を失って、補文標識に移行しているものと考えられる。そのことは、(24) のような ngú と動詞の間に主文の主語の名詞句が介在する例が見られることから明らかである。

(24) báí wà na ngú ngai myit t̃im (また 帰る 未来 ngú 私 思う けれども)

「また帰ってくるだろうと私は思ったけれども」 (歌)

また、次の文では2つの ngú が並んで現れており、もしも両方とも「言う」という意味の動詞であるならば冗長的である。この文の最初の ngú も補文標識なのである。

(25) hkun ngú ngú ai (クン ngú 言う 関係節化) 「クンという(シャン族の藩侯の名前を)」 (コ)

補文標識 ngú の後に来る動詞については、次のような動詞が来る例が見つかっている。

(26)

tsun 「言う」 nga 「言う」 ngú 「言う」 shǎkr̃am 「あいさつする」 shǎlá 「冗談を言う」 mǎráwn 「叫ぶ」
jähtáu 「叫ぶ」 ngoi 「騒ぐ」 shǎdù? 「思う」 myit 「思う」 dúm 「思い出す」 myit yu 「考える」 dǎwdǎn 「決
定する」 myit dá 「決定する」 yáw shǎda 「計画する」 mying 「名づける」 shǎmying 「名づける」 ʔǎmying
jàw? 「名前を与える」 mǎsət 「記念する」 shǎgá 「呼ぶ」 shǎkàwn 「ほめる」 shǎgrau 「ほめる」 shǎmán
「祈る」 kyú hpyí 「祈る」 hpyí 「請い求める」 myit mǎda 「願う」 k̃am 「信じる」 k̃am shám 「信じる」 ht̃et
「命じる」 ʔǎm̃ing jàw? 「命じる」 sán 「尋ねる」 htán 「答える」 chỹe 「知る」 chỹe nà 「理解する」 hk̃am
lá 「認める」 myit hkr̃um 「同意する」 mù 「と見る」 yúpm̃ang mù 「夢に見る」 mǎdún 「示す」 k̃á 「書く」
shǎfín ya 「教える」 shǎgyeng 「口論する」

以上みたように ngú は補文標識への移行が完了しているのであるが、次の (27) のように単独で動詞として用いることもできる。また、この動詞は (28) のように quotative な用法で用いることもできる。

(27) hpa hpé? ngú mǎyu ai rái ní (何 NS ngú したい VA 疑問 疑問) 「何を言いたいのか」(コ)

(28) nang mùng shá ù? ngú ai (あなた も 食べる 命令 ngú VA)

「あなたも食べなさいと言った」(K3:9 一部変更)

Lord (1993: 180) によると、「言う」という動詞の補文標識への発展は、「言う」の quotative な用法を経て発展することが多い。ジンポー語の場合も、ngú は (28) のような quotative な用法を経て、補文標識へと発展したのかもしれない²⁰。ところで、ジンポー語には、ngú と同じく「言う」という意味を表し、音形も似ている nga 「言う」という動詞がある。そして、この nga にも quotative な用法がある。しかし、nga が補文標識として用いられることは少ないようである²¹。

7 まとめ

本稿では、ジンポー語の動詞連続の文法化として、副詞化と補助動詞化、補文標識化についてそれぞれ具体的に見た。また、否定辞の位置や名詞句の介在などの点を基準に副詞化と補文標識化の文法化の度合いを測ることを試みた。補助動詞については現時点で出来る限り意味の記述を詳しくし、また V1 と V2 の両方の位置に現れうるものがあるということも述べた。

略号

LOC: 場所格、NEG: 否定、NS: 非主語、PL: 複数、V: 動詞、VA: 動詞接辞

資料

(K1) (K2) (K3) 物語、(KNG) (KNO) (KT) ニュース、(MYU) 雑誌、(T) Thida Moe and Lillian Hka Nau (2006)、(歌) 歌、(映) 映画、(エ) 加藤 (1998) のジンポー語訳、(コ) コーパス、(チ) チャット

²⁰ 以上のような、補文標識が「言う」という動詞から歴史的に発展するということは、世界の言語に広く見られることである (Matisoff 1991: 398–399, Lord 1993: 151–213, Heine and Kuteva 2002: 261–265, Aikhenvald 2006: 32)。

²¹ 本稿で見てきたもの以外では、動詞連続を構成する一方の動詞が、側置詞や格に発展するということはよく知られている (Lord 1993)。ジンポー語ではこのような例はいまのところ確認されていない。ところで、次の文では nga 「いる」と gǎbà 「大きい」という動詞が連続しており、nga 「いる」は位置関係を示す後置詞のように用いられているようにも見える。

(例) Duk Dang mǎre htà? ngà gǎbà wà ai (Duk Dang 町 LOC いる 大きい なる VA)

「Duk Dang 町で育った」(KNG)

しかし、この文で位置関係を示しているのは場所格の htà? なのであって、この文から htà? を取り除くと不自然な文になるため、このような例を ngà の後置詞化であると考えすることはできない。この文を否定した場合、否定辞は ngà に付加されるため、この文において ngà は動詞であると考えられる。

参考文献

- Aikhenvald, A.Y. (2006) Serial Verb Constructions in Typological Perspective. In Aikhenvald, A.Y. and Dixon, R.M.W. (eds). *Serial verb constructions: a cross-linguistic typology*, pp. 1–68. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. (2000) A typology of causatives: form, syntax and meaning. In Dixon, R.M.W. and Aikhenvald, A.Y. (eds). *Changing valency: case studies in transitivity*, pp. 30–83. Oxford: Oxford University Press.
- Hanson, O. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hanson, O. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Heine, B. and T. Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hertz, H. F. (1895) *Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Superintendent Printing, Burma
- Hertz, H. F. (1911) *A Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Superintendent Printing, Burma
- Labya, Paul Naw Tawng (2009) *Jinghpaw hti ai laika level 1 (A)*. Myitkyina.
- Laika Uma (2009) *Jaw hkra hti, jaw hkra ka*. Myitkyina.
- Lord, C. (1993) *Historical change in serial verb constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Lungjung, Tu Raw (2002) *The Kachin to Kachin Dictionary. (Jinghpaw Ga Si Htai Laika.)* Myitkyina.
- Manam, H pang (1977) *English Kachin Burmese Dictionary. (Inglik Jinghpaw Myen Ga Htai Chyum.)* Myitkyina: Universal Literature Press.
- Matisoff, J. A. (1974) Verb Concatenation in Kachin. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 1 (1): 186–207.
- Matisoff, J. A. (1991) Areal and universal dimensions of grammatization in Lahu. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds). *Approaches to Grammaticalization*. Vol II, pp. 383–453. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Maran, L.R. and Clifton, J.R. (1976) The causative mechanism in Jinghpaw. In Shibatani, Masayoshi (eds). *Syntax and Semantics*, Vol. VI, *The grammar of causative constructions*, pp. 443–458. New York: Academic Press.
- Maran, Zau Tawng (2004) *Jinghpaw Wunpawng Laili Laika Ga Marun*. Myitkyina.
- Thida Moe and Lillian Hka Nau (2006) *Trilingual Illustrated Dictionary, English-Myanmar-Kachin*. Yangon: Pan Aung Publishing House.
- 加藤昌彦 (1998) 『エクスプレス ビルマ語』 東京: 白水社
- 加藤昌彦 (2005) 「ポー・カレン語の対句法 (parallelism)」 中山俊秀・塩原朝子 (編) 『記述研究から明らかになる文法の諸問題』 pp. 145–159. 東京: アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 早田輝洋 (1977) 「対語の音韻階層—なぜ「こっちあっち」と言わないか—」 『文学研究』 74: 123–152. 九州大学文学部.
- 戴慶厦・徐悉艱 (1992) 『景頗語語法』 北京: 中央民族学院出版社
- 徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦 (編) (1983) 『景漢辭典』 昆明: 雲南民族出版社

ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話¹

仲尾周一郎

1 はじめに

ジュバ・アラビア語（略号 JA）は、伝統的に南部スーダン・エクアトリア地域諸民族間のリンガフランカとして使用されている、アラビア語系「ピジンクレオール (pidgincreole²)」である。

話者人口に関する統計は存在しないが、スーダン第 5 回国勢調査 (2008) 等から数百万人を想定できる。語彙供給言語はアラビア語スーダン方言の諸変種と考えられ、現在も、スーダンの口語レベルでの威信方言であるハルツーム方言から強い影響を受けている。また、話者の母民族語である、西ナイル諸語や東ナイル諸語などの南部スーダン諸民族語の影響を受けている。

以下、2 節・3 節では 4 節の民話テキスト本文分析の補助的な資料として、JA の概略を示す。

2 表記・音韻の概略

2.1 本稿における表記

現時点まで、JA には法規上の公的地位は与えられておらず、正書法も存在しない。しかし、近年キリスト教の宣教を目的とする著作や、北米や豪州で発行されている難民支援用パンフレット等において、ラテン文字によるある程度一定した表記方針が採られ始めている。

以下、本稿ではそうした表記方針を参考に筆者が設定した、暫定的な形態音韻表記に基づき JA の音韻を記述している。但し、以下で示すように JA における音韻的変異は非常に多様である。

2.2 分節音

2.2.1 母音

諸先行研究に倣い、JA の単母音は長短を弁別しない 5 母音体系/a, e, i, o, u/を持ち、二重母音には/ai, au, (ou), (ei)³/を認め得るとする。しかし実際には様々な自由異音が存在し、個人や民族によっても複雑な様相を呈す。但し、Miller (2006), Manfredi (2005) は、民族により/ε, ɔ/を認め得るとしており、شول (2005) はこれを加えた 7 つの単母音、及び弁別的な母音の長短を認めている。

母音連続は、片方の母音を完全同化・脱落させることにより回避する傾向が広く見られる (e.g. /gi/+/á.mu.lu/→[gá.á.mu.lu]~[gá.mu.lu]「作っている」、以下「~」は全て自由変異を表す)。

¹ 本稿は 2008~2009 年度科学研究費基盤研究 (B)「アフリカ諸語における統語構造と声調」代表：梶茂樹 (京都大学) (研究課題番号 20320059) による研究費補助を受け、筆者が 2009 年 8-9 月の約 1 ヶ月間、南部スーダン中央エクアトリア州ジュバ市にて行った調査に基づく。この調査をご支援頂いた梶茂樹先生、現地にて調査指導や JA 話者のご紹介等を頂いた大阪大学の栗本英世先生、調査にご協力頂いた Emmanuel Uthuo Akio さん並びにご家族の皆様、また本稿執筆の機会並びにご助言を頂いた言語記述研究会の皆様、本稿の内容に関し貴重なご指摘を頂いた、言語記述研究会メンバーの大西正幸先生・野島本泰さん・松本亮さん・林由華さん、並びに大阪大学の小森淳子先生に、ここに記して謝意を表します。

² “A pidgincreole is a former pidgin that has become the main language of a speech community and/or a mother tongue for some of its speakers” (Bakker 2008:131)、この術語を用いる理由については註 10 を参照。

³ /ei/は/e/、及び/ou/は/o/と弁別されない傾向が広く見られる。

2.2.2 子音

子音体系は個人レベルでのアラビア語化の程度や民族方言等による揺れが強く現れるが、概ね /f, b, m, w, t, d, s, (z), n, l, r, ch[tʃ], j[j], (sh[ʃ]), ny[nj], y[j], k, g[g], ng[ŋ], (h), (ʔ)/⁴の体系を標準的とする認識が存在するようであり、これら以外の子音は一般的に非JA的な借用音素と捉えられている(特に男性には、ハルツーム方言の影響から軟口蓋摩擦音[x, ɣ]を獲得している話者が多い)。

表記上、ngは語中で[ŋg]の音価を(e.g. bangú [banjú]「大麻」、少数の語彙に於いてshは[ʃ]の音価を持つ(e.g. ishál [ishál]「下痢」)。そうした表記上の例外は本稿で必要に応じて記述する。また、[x, ɣ]はkh, ghと表記されることがあるが、本稿では音素として認めずk, gで表記している。

2.3 音節構造

開音節が好まれ、語彙供給言語からの借用に際し、子音連続・重子音は脱落や母音挿入により回避される傾向がある。(e.g. /ish.tá.kal/~i.shá.ka.lu/「働く」、/ál.la/~á.la/「神」)。但し、閉音節(C)VCや、子音連続の内#Cw-, -CC#等(e.g. gwám「早く」 hárb「戦争」)も一般的に許容される。重子音も一人称複数代名詞の代表的な変異形 aína, taína (cf.3.2.1(a)) 等数例では一般的に許容される。

2.4 プロソディ

プロソディ類型上、基本的にピッチアクセント言語と考えられ、概ね1音韻語に1拍のみHが現れる(e.g. shéjèrà「木」 sèrègà「盗み」 shéjèrát「木(複数形)」)。複合名詞では最後部要素のアクセントのみが保持される(e.g. mòyò-énà「涙(目-水)」, sidù-mèhèl-zàrà「畑の主(主-[所-耕])」)。

但し、非アラビア語系の語彙には上記の原則に合わないものが多い(e.g. dwàr「狩猟<Shilluk?」、dángá[dángá]「弓<Bari?」)。若年層スラングでは短縮語に於ける/HH.HL/のピッチパターンが発達している(e.g. símòò「タバコ<Eng. smoke?」、méeríi「ビール<JA. merisa」)。また、動詞活用に見られるピッチパターン(cf. 3.3.3(a,b))にもこの原則に当てはまらない形式が存在する。

以下ではHを持つ音節の母音にのみ鋭アクセントを付すことにより、これを表記している⁵。

3 形態・統語構造の概略

3.1 基本構成素順

文の基本構成素順は仮に[(主題)[主語[述語(目的語/補語)]]]とすることができる。主題位置には主語・目的語・前置詞句等が移動し得る。主語位置には名詞句、述語には動詞句・所有詞句・形容詞句・名詞句・前置詞句・副詞句が、目的語位置には名詞句、補語位置には名詞句・形容詞句が入る。また、以上の基本構成素順に当てはまらない代表的な語類には、主語の前に現れる法副詞類(cf. 3.2.6)、主語を内項に取る存在詞(cf. 3.2.7(a))・動詞受動態(cf. 3.3.3(a))などがある。

⁴ ()内に示したものは特に揺れの大きい音素であり、/z/は/j/[j]に、/sh/[ʃ]は/s/に合流、/h/及び/ʔ/は脱落する傾向が民族・個人を問わず広く見られる。また、有声阻害音の語末での無声化も広く見られる。

⁵ 基本的にアクセントを持つ音節以外の音節はLで実現するが、一部の音節語にのみ部分的な下降調・平板調の対立が見られる(e.g. 下降調:kál [kal̩]「母方のおじ」、平板調:kál [kal̩] <キャッサバの一種?>)。-CC#を持つ語(hárb「戦争」、árd「地」等)も平板調で出現することから、何らかの関係があると思われるが、不明な点が多いため、本稿では語末での下降調・平板調の対立を記述していない。

3.2 機能語

3.2.1 代名詞類

(a) 人称代名詞

- ・独立代名詞：統語的振る舞いは名詞的であり、形容詞限定用法の主要部にもなりうる。
1SG *ána*, 2SG *íta~ínta*, 3SG *úwo*, 1PL *anína~aína~nína~ína*, 2PL *ítakum~íntakum*, 3PL *úmon~úm*
- ・所有代名詞：前置詞 (bi)ta (cf. 3.2.2.(a)) と同源の要素を持ち、単独で名詞としても機能する。
1SG (bi)taí, 2SG (bi)táki, 3SG (bi)tó, 1PL (bi)tanína~taína~teína, 2PL (bi)tákum, 3PL (bi)tómon
また、前置詞 (bi)ta+独立代名詞の形式も存在する (e.g. ta *ána* = taí, ta *úwo* = tó)。
- ・再帰代名詞表現：néfsa+単数所有代名詞、néfsa~bádu+複数所有代名詞
e.g. néfsa taí 「私自身」、néfsa tanína~bádu tanína 「我々自身・我々相互」
- ・接尾人称代名詞 2PL -kum~takum：複数主語の命令形にのみ現れる (cf. 3.2.5(b))。
e.g. Jére. 「走れ (単数)」、Jére-kum.~Jére-takum 「走れ (複数)」

(b) 指示詞：dé「これ・この」、dél「これら (の) <複数形>」、dák「あれ・あの<遠称>」

- ・指示詞は指示代名詞、または主要部名詞に後置され指示形容詞としての機能を持つ。
- ・déが無標の形式であり、délやdákの使用は特に強調される場合以外は随意的である。
- ・修飾を伴う名詞句末や関係節末に現れ、句末指定標識としての非直示的機能を持つ。
e.g. jéna taí dé (child 1SG DEM) 「私の子供」、Sudán íni dé (Sudan here DEM) 「ここスーダン」
zól al dúrubu dé (man REL hit DEM) 「殴った人」

(c) 疑問詞

- ・疑問代名詞/疑問形容詞：shunú「何・何の」、munú「誰・(尋名表現の) 何」
e.g. ayán shunú (sickness what) 「何の病気」、Ísim táki munú? (name 2SG who) 「君の名は何だ?」
- ・疑問副詞：wén「どこ」、mitén「いつ」、kéf~kefín「どのように」、leé, ashan shunú「なぜ」
malú「どうして、どうした」 e.g. Malú ita? (what's.up 2SG) 「君どうしたの?」
- ・疑問数量詞 (cf. 3.3.6)：kám「幾つ (の)」、yatú「どれ・どの」
- ・疑問存在詞 (cf. 3.2.7)：wenú「どこにある」

(d) 照応代副詞：fógo「そこ」

既述の場所 (前置詞句・副詞句) を照応する際、代副詞として機能する。

e.g. Fi Junúb ta Sudán, Islám kán má ketír fógo.
PRP South PRP Sudan Islam TMA NEG many ANP
「スーダンの南部では、(そこには) イスラームは多くなかった」

3.2.2 前置詞

(a) 基本的な前置詞

- ・ta~bita 「の」 所有・所属・属性などの関係を表す
また、複合名詞 (cf. 2.4.) は生産的に ta により迂言的に言い換えることができる。
e.g. moyo-éna~móyo ta éna 「涙」、Arabi-Júba~Árabi ta Júba 「ジュバ・アラビア語」

- le 「へ・に」 方向、受益者、所有者、他動性の低い目的語などの関係を表す。
e.g. Jíbu le ána móyo. (bring PRP 1SG water) 「私に水を下さい」(受益者)
Fí le íta gurúsh? (EXS PRP 2SG money) 「あなたには錢がありますか」(所有者)
Áinu le ána. (see PRP 1SG) 「私の方を見なさい」(他動性の低い目的語)
- fi 「に・で」 基本的に場所名詞のみを目的語にとり、方向・所在などを表す。
e.g. fi bét (PRP house) 「家(場所名詞)に」
*fi kúrsi (PRP chair) 「椅子(非場所名詞)に」(*は非文を表す)⁶
- min 「から」 場所副詞 wén 「どこ」、híni 「ここ」、fógo 「そこ」等も目的語となりうる。
- ma, bi 「と・で」 随伴者・道具などを表すが、両形式の機能上の違いは不明。
- その他 : ashan 「の為」、ze 「の様」、fútu 「より」、lahádi 「迄」、bodún 「を除き」、ya <呼格>等

(b) 複合前置詞

複合前置詞は、前置詞+[関係名詞-N]_ω、又は前置詞+関係名詞+(bi)ta+N の形式をもつ⁷。

- min juwa N~min júwa (bi)ta N 「Nの中から」、fi ras N~fi rás (bi)ta N 「Nの上に」
fi tehet N~fi téhet (bi)ta N 「Nの下に」 e.g. fi juwa bét táki (PRP inside house 2SG) 「君の家の中に」

3.2.3 取り立て詞

取り立て詞は名詞に後置され、主題句または副詞句を形成する。

- yaú <主題標識> 「(こそ) が/は」 e.g. Dé yaú kwés. (DEM TOP good) 「これが(一番)良い。」
- その他 : zátu 「こそ」、bés 「だけ」、baráu 「のみ」、bárdú~kamán 「も」、madúm 「なしで」等

3.2.4 否定辞

否定辞 má は存在詞句 (cf. 3.2.7(a)) を除く様々な述語(動詞句・所有詞句・名詞句・形容詞句・副詞句・前置詞句など)や修飾語の直前に前置され、否定を表す。

- e.g. Úwo má bi já (3SG NEG TMA come) 「彼は来ない(だろう)」(動詞)
- Úwo má réis. (3SG NEG president) 「彼は大統領ではない」(名詞)
- Úwo má moksút. (3SG NEG happy) 「彼は幸せではない」(形容詞)
- Úwo má bita shókol. (3SG NEG PRP work) 「彼は活動的でない」(前置詞句)

3.2.5 TMA 標識類

TMA 標識は述語に側置され、時制・相・法等を表す。JA の述語は TMA 標識の振る舞いより、動詞述語と非動詞述語(名詞・形容詞・存在詞・副詞・前置詞句等)に大別でき、以下では動詞に側置されるものを「動詞 TMA 標識」、非動詞に側置されるものを「非動詞 TMA 標識」と呼ぶ。但し本稿の逐語訳では、以下の内 bi, gí, kán のみ「TMA」と表示している。尚、JA の TMA 標識についての詳細な研究に、Tosco (1995) がある。

⁶ この制約により、「椅子に」に当たる代替の表現としては、前置詞 le による表現 (e.g. le kúrsi 「椅子の方に」)、又は複合前置詞を用いた表現 (e.g. fi ras kúrsi 「椅子の上に」) が取られる。

⁷ 「関係名詞」は relational noun の訳で、「上」「中」「下」のように相対的な位置を表す一群の名詞を指す。ω は「音韻語」を表し、ここでは関係名詞と後続の名詞が音韻的に一語をなすことを表す。(cf. 2.4)

(a) 動詞 TMA 標識 (直説法)

φ V <過去・完了>

e.g. Ána límu ma úwo. (1SG meet PRP 3SG) 「私は彼と会った。」

bi V <未来> 動詞に前置される。

e.g. Ána bi límu ma úwo. (1SG TMA meet PRP 3SG) 「私は彼と会う (つもりだ)。」

gí V <継続・習慣> 動詞に前置される。

e.g. Ána gí límu ma úwo. (1SG TMA meet PRP 3SG) 「私は (今) 彼と会うところだ。」

dér V <近接未来> 動詞に前置される。

e.g. Ána dér límu ma úwo. (1SG want meet PRP 3SG) 「私は彼と会いたい/会う予定だ。」

kán V <過去完了> 動詞または否定辞に前置される。

e.g. Ána kán límu ma úwo. (1SG TMA meet PRP 3SG) 「私は彼と会っていた。」

kán bi V <反実仮想> 「～するんだったのに」 動詞に前置される。

e.g. Ána kán bi límu ma úwo. (1SG TMA TMA meet PRP 3SG) 「私は彼と会えば良かった。」

kalás V, VP kalás <完了> 「もう～した」 動詞 (句) に前置または後置される。

e.g. Ána límu ma úwo kalás. (1SG meet PRP 3SG already) 「私はもう彼と会った。」

lísa má V <未然> 「まだ～していない」 動詞に前置される。

e.g. Ána lísa má límu ma úwo. (1SG yet NEG meet PRP 3SG) 「私はまだ彼と会っていない。」

(b) 動詞 TMA 標識 (命令法)

φ V <命令> 複数主語 V-kum~V-takum 「～せよ」

e.g. Jére. (run) 「走れ (単数主語)。」、Jére-takum (run-2PL) 「走れ (複数主語)。」

máta V <禁止> 複数主語 máta(-kum/takum) V(-kum/takum) 「～するな」

e.g. Máta-takum jére. (don't-2PL run) 「走るな(複数主語)。」

lázim máta V <禁止の強調> 上記の形式の法副詞 lázim による強調 「～してはいけない」

e.g. Lázim máta jére. (must don't run) 「走ってはいけない。」

kedé-ta V~kelí-ta V <依頼> 複数主語 kedé-takum V~kelí-takum V 「～して (下さい)」

e.g. Kedé-ta jére. (MDA-2SG run) 「走って。」

kedé-na V~kelí-na V <勧誘> 「～しましょう」

e.g. Kedé-na jére. (MDA-1PL run) 「走ろう。」

(c) 非動詞 TMA 標識 : 名詞・形容詞・存在詞述語に付加される。

φ <現在> 「～である」 e.g. Úwo giyáfa. (3SG beautiful) 「彼女は美しい。」

kán <過去> 「～だった」 述語に前置/後置される。

e.g. Úwo kán giyáfa. (3SG TMA beautiful) 「彼女は美しかった。」

bi kún <未来> 「～であろう、～になる」 述語に前置される。

e.g. Úwo bi kún giyáfa. (3SG TMA COP beautiful) 「彼女は美しいだろう/美しくなるだろう。」

*kún は非現実法にのみ現れ、非動詞述語の支えとなるコピュラ。

bíga <変化> 「～になった」 形容詞述語に前置/後置される。

e.g. Íta tabán bíga? (2SG tired become) 「あなたは疲れましたか？」

3.2.6 法副詞

法副詞は[(主語) [法副詞 [主語 動詞句]]]の構成素順において文または節のモダリティを表す。以下のように動詞句にどのような TMA 標識を伴うかにより分類することができる。

(a) 動詞に TMA 標識を伴わず、節または文を形成するもの

kedé~kelí <接続法> 非動詞述語の直前にはコピュラ kún を要求する。

e.g. Rabúna kedé báriku íta. (Lord MDA bless 2SG) 「主が汝を祝福されますように。」

Kedé-na kún nás ta shókol. (MDA-1PL COP people PRP work) 「勤勉な人間になろう。」

kan <仮定条件>

e.g. Kan úwo já, kedé nadí le ána. (MDA 3SG come MDA call PRP 1SG) 「彼が来たら私を呼んで。」

(b) 動詞に TMA 標識 bi (または上記の kedé) を伴い、文を形成するもの

lázim <義務・必然> 「～せねばならない、～に違いない」

e.g. Lázim kedé-na fêkir. (MDA MDA-1PL think) 「我々は考えなければならない。」

máfi dáya <非義務> 「～しなくても良い」

múmkin <許可> 「～しても良い」、akér <推奨> 「～した方がよい」

(c) 動詞に任意の TMA 標識を伴い、文を形成するもの

bikún <推量> 「～だろう」

e.g. Bikún úwo bi já. (MDA 3SG TMA come) 「彼女は来るだろう。」

seí <疑問の強調> 「一体/本当に～か」

e.g. Seí íta bi já? (MDA 2SG TMA come) 「貴方は本当に来るつもりか。」

3.2.7 存在詞・所有詞

(a) 存在詞

存在詞は[(主語) [存在詞 主語 (場所前置詞句)]]の構成素順をとり、非動詞述語として機能する。

・平叙存在詞 fí 「ある/居る」

e.g. Fí móyo. (EXS water) 「水がある」、Móyo fí. (water EXS) 「水はある」

・否定存在詞 máfi 「ない/居ない」(平叙存在詞+否定辞の形式*má fi は非文)

e.g. Máfi teríga. (EXS means) 「仕方がない」

Árabi máfi. (Arabic EXS) 「アラビア語はない (知らない)」

・疑問存在詞 wenú 「どこにある/居る」

e.g. Wenú gurúsh táí? (EXS money 1SG) 「私の錢はどこにあるの？」

Yába wenú? (father EXS) 「お父ちゃんはどこにいるの？」

・提示存在詞 yaú~yaú dé 「(ほら) ここにある/居る (ぞ)」

e.g. Yaú ákil. (EXS food) 「ほら、ごはんだよ。」

Sudán jedíd yaú dé. (Sudan new EXS DEM) 「新生スーダンここにあり」

(b) 所有詞 : *índu* 「持っている」

所有詞は目的語をとり、非動詞述語として機能する。

e.g. *Ána bi kún índu taláta iyál.* (1SG TMA COP have 3 child.PL) 「私は3人の子を持つことになる。」

3.2.8 接続詞類

(a) 等位接続詞

文と文を接続し、一文を形成する。また、文中の語や句を統語上対等な関係で接続する。

wa~u~ma 「と・そして」、*áú~wele* 「か・または」、*bé* 「それに加えて」*lakín* 「しかし」、*yani* 「つまり」、*manáto* 「つまり」 < 「その意味 : *mána tó* (meaning 3SG) 」等。

e.g. *ána ma íta* (1SG CNJ 2SG) 「私と貴方」

(b) 接続副詞 (分離接続詞)

個別の2文間の接続関係を示す。*taraú* 「実は」、*fá* 「そして」、*yála* 「それから」、*bíga* 「そこで」、*ligó* 「そうすれば」、*leánu* 「それ故」等。

e.g. *Ligó, íta bi ligó árda.* (CNA 2SG TMA find white.ant) 「さすれば君は白蟻を見つけるだろう。」

(c) 従位接続詞

文に前置され、節を形成する。

・時間節 : *wokit~zaman* 「時」、*mínma* 「時から」、*lahádi* 「迄」、*gablima* 「前」、*baadma* 「後」等。

e.g. *zaman úmon já* (CNJ they come) 「彼らが来た時に」

・条件節 : *izakán* 「(もし〜) ならば」、*salakún* 「(もし〜) ても」など

e.g. *salakún úwo má já* (CNJ 3SG NEG come) 「彼がこなくても」

・理由/目的節 : *ashan~leánu* 「から・ので」、*ashan kedé* 「ために・ように」

e.g. *ashan kedé úmon já* (CNJ MDA 3PL come) 「彼らが来るように」

・引用節 : *gál~galí* 「〜と (いうこと)」 (cf. 3.3.4(d))、*kan* 「〜か (どうか)」

e.g. *gál úwo giyáfa* (CNJ 3SG beautiful) 「彼女が美しいと (いうこと)」

kan íta bi ámulu shunú (CNJ 2SG TMA do what) 「あなたが何をするか」

(d) 関係辞 : *al~abu~φ*

・限定用法の関係節を形成する。

e.g. *agáni al gunaú dé* (song.PL REL sing.PS DEM) 「歌われた歌」

・形容詞に前置され、形容詞限定用法として機能する。

e.g. *zól al kebír* (man REL big) 「大きい人/重要な人」

・属性辞 *abu* N 「N (の属性) を持つ (もの)」 (限定用法・名詞節として機能する)

e.g. *abu dígin* (*abu* beard) 「鬚持ち」、*zól abu dígin* (man *abu* beard) 「鬚持ちの人」

3.2.9 文末辞

・*ke~kedé* <主張・婉曲> 「よ、ぞ」

e.g. *Ána má áruфу ísim táki ke.* (1SG NEG know name 2SG MDP) 「僕は貴方の名前知らないよ。」

・ *músh* <確認> 「ね」

e.g. *Íta fähimu músh?* (2SG understand MDP) 「君は分かったよね？」

3.3 内容語

3.3.1 名詞

(a) 名詞の定義・分類

JA における名詞は、概ね「前置詞の目的語となりうる内容語」と定義でき、非動詞述語になりうる。更に、名詞は統語上、場所・非場所名詞 (cf. 3.2.2(a))、形態上、可算・不可算名詞などに分類できる。また、前置要素となり、生産的に複合語(cf. 2.4)を形成する一群の名詞が存在する。(e.g. *ras-N* 「Nの上」 *juwa-N* 「Nの内」 *awal-N* 「第一 N」 *godur-N* 「N ぐらい」 *nas-N* 「N 達」) ⁸

(b) 名詞複数形

可算名詞に関しては語彙的に決定されている複数形が存在し、無標の名詞複数形語尾-*át* をもつものが多い。但し、語尾-*in* を持つもの、不規則複数形を持つ語も多い。また、名詞複数形を表示する別の手段として、[*nas-N*]_ωによる迂言的複数形が存在する (*nás* の原義は「人々」)。

e.g. *hájer* “stone (単数)”, *hajerát* “stones (語彙的複数)”, *nas-hájer* “stones (迂言的複数)”
bágara “cow (単数)”, *bugár* “cows (語彙的複数)”, *nas-bágara* “cows (迂言的複数)”

(c) 名詞句の構成素順

名詞句は[数量詞 名詞 所有代名詞 形容詞 関係節 前置詞句 指示詞]の構成素順を持つと考えられる。形容詞限定用法は関係節の一種と考えられ、(随意的に) 関係辞に導かれる (cf. 3.2.8(d))。

3.3.2 形容詞

(a) 形容詞の性質及び定義

JA に於いて、形容詞は基本的に名詞的であり、非動詞述語になりうる。形容詞は関係辞を直接前置し関係節化することにより、名詞を修飾することができる (cf. 3.2.8(d))。

(b) 形容詞複数形

形容詞の一部には語彙的に複数形が存在する。最も無標の複数形語尾は-*in* であるが、名詞複数形同様、不規則複数形も見られる。e.g. *kebír* 「大きい (単数形)」、*kubár* 「大きい (複数形)」

また、叙述用法において主語名詞、限定用法において被修飾語名詞と随意的に数を一致させる。
e.g. *Ítakum kwesín?* (2PL good.PL) 「あなた方は元気か。」、*nás batalín* (people bad.PL) 「悪い人々」

(c) 動詞的形容詞

感情等を表す一部の形容詞 (*zalán* 「怒っている」等) は、動詞 TMA 標識 *bi* をとりうる⁹。

e.g. *S bi zalán.* (S TMA angry) ~ *S bi kún zalán.* (S TMA COP angry) 「S は怒るだろう。」

⁸ これらの名詞は自立した名詞としても機能し、その場合本来のアクセントを保持する。(e.g. *rás* 「上・頭」)

⁹ 但し、JA の動詞の定義 (3.3.3(a)) の内、満たすのはこの条件のみであり、基本的には形容詞と言える。

機能語類が発達している。

e.g. Úkut tó gí dóuru gí dúsu néfsa tó.
sister 3SG TMA walk.about TMA hide self 3SG
「彼の妹は歩いて行って、身を隠しました。」

(a) 補助動詞

ágder V 「V することができる」、báda V 「V し始める」、géni V 「V している、居て V する」
rúwa V 「V しに行く、行って V する、向こうで V する」
já V 「V しに来る、来て V する、こちらで V する」

e.g. Úmon bi rúwa téisu biníya. (3PL TMA go court girl) 「彼らは娘に言い寄りに行く。」

(b) 使役動詞「～させる」: kútu (<置く)、kelí (<許す)、síbu (<捨て置く)、ámulu (<する)

e.g. Máta síbu jéna gí álabu bára. (don't leave child TMA play outside) 「子供を外で遊ばすな。」

(c) 接続副詞 (3.2.8(b)): biga 「そこで/それで (<なる)」、ligó 「そうすれば (<手に入れる)」

(d) 補文標識 (3.2.8(c)): gál~galí 「～と (<言う)」

e.g. Úwo árufu gál ita gí ágara. (3SG know CNJ 2SG TMA study) 「彼は君が学んでいるのを知った。」

3.3.5 副詞

時間副詞・場所副詞を除く副詞は基本的に修飾する句に後置される。

副詞の重複には語彙的なもの (e.g. kúlu kúlu~ta kulu-kúlu 「全然」< kúlu 「全ての」、seí seí 「とても」< seí 「本当に」) と単純な強調を表す生産的なもの (e.g. shedíd shedíd 「とてもとても」< shedíd 「とても」) が存在するが、何れの場合も各要素の本来のアクセントが保持されている。

3.3.6 数量詞

数量詞は主要部名詞に前置される。主要部となる可算名詞に語彙的複数形を取るものと、単数形を取るものにより分類することができる。

(a) 複数形: 数詞 2-10、báad 「幾らかの」、shwíya 「少しの」等

e.g. itinín banát (2 girl.PL) 「2 人の娘」、báad marát (some time.PL) 「幾度か」

(b) 単数形: 数詞 1、数詞 11 以上、kúlu 「全ての」、kám 「幾」等

e.g. wáhid u ishirín séna (1 and 20 year) 「21 年 (間)」、kám séna (how.many year) 「何年間」

(c) 一般的には数量詞には含まれないが、yatú 「どの・どれ」は形態統語上数量詞に属する。

e.g. yatú béled (which country) 「どの国」

3.3.7 間投詞

否定諾否疑問文に対しては英語同様、命題の真偽に関わらず応答文中に否定要素を持たなければ yes に相当する ai~áiwa~áike 等が、否定要素を持っていれば no に相当する lá~lá が使用される。

JA に限らず南部スーダン地域では舌打ちが間投詞<驚嘆・意外>として頻繁に使用される。本稿の民話テキストではこの舌打ちを ch!、連続的な舌打ちは chchchch! のように表記している。

4 ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話テキスト

パリ民族 (Päri) は、南部スーダン東エクアトリア州のラフォン地域で話される、北ルオ諸語の一つ、パリ語を母語とする民族集団である。系統上、エチオピア・ガンベラ地域のアニューワ民族 (Anywa, Anuak) と非常に近く、アニューワ語とパリ語もほぼ完全な相通性をもつようである。

以下は、パリ人のジュバ・アラビア語話者¹⁰によるパリ民族の笑い噺 2 話を書き起こしたテキストである。語り手は 10 年間のハルツーム滞在経験のある 32 歳男性であるが、アラビア語ハルツーム方言の影響はジュバの若年層に標準的に見られる程度である。JA 本文におけるハルツーム方言・パリ語・英語からの一時的借用は、イタリック体によって表記している。

4.1 ウムア王のおはなし

[1] **Ána háse dé, dér wónusu gísa táni, gí já min Päri.**
ISG now DEM want talk tale another TMA come PRP Päri
「私は今からパリ (民族) から来た、別のお話を話したいと思います。」

[2] **Yála, ána bi wónusu ma Arabi Júba al besít.**
CNA ISG TMA talk PRP Arabic Juba REL easy
「それでは、私は簡単なジュバ・アラビア語で話します。」

[3] **Gísa dé bita mélik.**
tale DEM PRP king
「このお話は王様の (お話) です。」

[4] **Mélik dé gí géni fi juwa gába hinák.**
king DEM TMA live PRP inside forest there
「この王様は森の中に住んでいました。」

[5] **Mehél tó beíd beíd beíd min nás.**
place 3SG far far far PRP people
「彼の土地は人々から遠く離れていました。」

[6] **Yála, kán fí mushákil hásil.**
CNA TMA EXS problem.PL occur
「そして (ある日)、ある問題が起こりました。」

¹⁰ DeCamp (1977:4) は JA について、「恐らく誰もが認めるピジンであり、殆どの集団の母語としては話されて居らず、使用は交易や異言語間コミュニケーションに限定される」(下線筆者)と述べている。現在の状況はこの記述と比べて劇的に変化してはいないが、殆どの話者は幼少時より習得しており、単純に「第二言語」とは言えない。当民話テキスト 2 編の提供者 Emmanuel Uthuol Akio 氏の第一言語はパリ語及び JA、第二言語は英語及び (南部人訛りの) アラビア語ハルツーム方言と言えそうである。しかし乍ら、こうした言語を単純に従来通り「クレオール」と呼ぶには尚問題があると思われる為、本稿では註 2 に示した通り、JA は Bakker (2008) が定義する所の「ピジンクレオール」と考えたい。

[7] **Zaman** **mushákil** **já,** **múshkila** **já,**
 CNJ problem.PL come problem come
jésh **bita** **béled** **dé** **úwo** **rúwa** **fi** **gába** **hinák.**
 army PRP country DEM 3SG go PRP forest there
 「問題が起こったとき、(それは) その国の兵隊さん達はその森に行ったのです。」

[8] **Úmon** **rúwa** **fi** **gába,** **úmon** **rúwa** **fi** **gába,**
 1PL go PRP forest 3PL go PRP forest
úmon **rúwa** **fi** **gába,** **úmon** **rúwa** **fi** **gába,**
 3PL go PRP forest 3PL go PRP forest
wósulu **beíd,** **mótoro** **já** **dúgu** **úmon.**
 arrive far rain come hit 3PL
 「彼らは森へずんずんずんずん行き、遠くまで行った所で雨が彼らを打ちました。」

[9] **Mótoro** **dúgu** **úmon** **shedíd** **shedíd** **shedíd.**
 rain hit 3PL very very very
 「雨が彼らをビシビシ打ちました。」

[10] **Nás,** **bíga** **jésh,** **tabanín.**
 people CNA army tired.PL
 「人々、兵隊さんは疲れてしまいました。」

[11] **Ákil** **máfi,** **nár** **máfi,** **fi** **bérid** **ketír** **ketír** **ketír** **ketír.**
 food EXS fire EXS EXS coldness much much much much
 「食べ物もなく、火もなく、あったのは大変な大変な寒さでした。」

[12] **U** **ísim** **ta** **mélik** **dé,** **samaú** **bi** **ísim** **ta** **Umúa.**
 and name PRP king DEM name.PS PRP name PRP PSN
 「そしてその王の名は、『ウムア (パリ語でサイ)』 という名で名付けられていました。」

[13] **Umúa** **yani** **rhíno** **bi** **Injilízi.**
 PSN CNJ rhino PRP English.
 「『ウムア』 はつまり英語でライノ[犀]です。」

[14] **Bi** **Árabi,** **gírin.** **Kalás.**
 PRP Arabic horn that's.all
 「(ジュバ・) アラビア語ではギリン (角、但し普通 abu gírin と呼ばれる) です。」

[15] **Zól** **al...** **al** **kebí** **bita** **jésh** **dé,** **úwo** **rásulu** **jésh**
 man REL REL big PRP army DEM 3SG send army

gál "Rúwa-takum **fi** **gába,** **u** **rúwa-takum** **fétish** **nár."**

say go-2PL PRP forest and go-2PL look.for fire

「この兵隊の隊長は、『諸君は森へ行け、そうして火を探しに行くのだ。』と言って、
 兵隊を送りました」

[16] **Jésh** **dé** **rúwa,** **jésh** **dé** **rúwa,** **jésh** **dé** **rúwa,** **jésh**
 army DEM go army DEM go army DEM go army

dé **rúwa,** **úm** **ligó** **mélik** **dé,** **al** **úwo** **Umúa** **dé.**
 DEM go 3PL find king DEM REL 3SG PSN DEM

「兵隊はどんどんどんどん行き、彼らはこの王つまりウムアを見つけました。」

[17] **Úmon** **rúwa** **le** **úwo.**
 3PL go PRP 3SG

「彼らは彼の所に行きました。」

[18] **Umúa** **dé** **fok** **jébel,** **shwíya** **kída.**
 PSN DEM up mountain little like.this

「ウムアは少し山の上に居ました。」

[19] **Úmon** **ásalu** **gál** **"Íta,** **anína** **dér** **nár."**
 3PL ask say 2SG 1PL want fire

「彼らは『王様、我々は火が欲しいのですが』とたのみました。」

[20] **Mélik** **dé** **gál** **"Yáki,** **nár** **taí** **dé,** **má** **gí** **shilú.**
 king DEM say INTJ fire 1SG DEM NEG TMA take.PS

「王様曰く、『のうお前、儂の火はやれんのだ。』

[21] **Íle** **kan** **zól** **táni** **áu** **ítakum** **wónusu** **le** **ána** **gísa**
 CNA if man another or 2PL talk PRP 1SG tale

giyáfa, **al** **ána** **bi** **átagu.**

beautiful REL 1SG TMA laugh

「ただ、もし誰か別の者かお前たちかが、儂が笑うような素晴らしい話を
 してくれたならば（やらんこともない）。」

[22] **Leánu** **ána** **má** **gí** **átagu** **filu...** **fi** **hayá** **taí** **kúlu."**
 CNJ 1SG NEG TMA laugh ? PRP life 1SG all

「なぜなら儂は儂の一生の中で笑ったことがないのだ。』」

[23] **"Kalám dé ze dé?" Galí "Aí."**
 matter DEM PRP DEM say.PS yes

「『そういうことですか。』 曰く 『そうだ。』」

[24] **Jésh al rúwa dé áu asákir al rúwa dé,**
 army REL go DEM or soldier.PL REL go DEM
úmon báda wónusu gísa.
 3PL begin talk tale

「出向いた兵隊、出向いた兵士はお話を話しはじめました。」

[25] **Gísa dé hílu hílu hílu hílu hílu le mélik dé.**
 tale DEM sweet sweet sweet sweet sweet PRP king DEM

「このお話は王様にとって、とてもとてもとてもとても素晴らしいものでした。」

[26] **Ch! Mélik dé má gí átagu.**
 INTJ king DEM NEG TMA laugh

「(しかし) 王様は笑いません。」

[27] **Á! Gáid zalán bés, mélik dé má gí átagu.**
 INTJ stay angry only king DEM NEG TMA laugh

「怒っているだけで、王様は笑っていません。」

[28] **Á! Galí, "Ítu má derín nár? Yála rúwa-takum."**
 INTJ say.PS 2PL NEG want.PL fire CNA go-2PL

「王様曰く 『お前たちは火が要らぬのか？ しかれば出て往け。』」

[29] **Úwo túrudu nás dé wára.**
 3SG expel people DEM back

「彼は兵隊さんを追い返してしまいました。」

[30] **Nás dé já le... le cómmander, a... bita jésh,**
 people DEM come PRP PRP commander FIL PRP army
galí "Yáki, anína ligó nár hinák, lakín mélik dé gálu,
 say.PS INTJ 1PL find fire there but king DEM say
déru gísa hílu hílu hílu hílu.
 want tale sweet sweet sweet sweet

「人々は本隊のコマンダー[司令官]の元へ行き、曰く 『その…我々はあそこで火を見つけたのでありますが、この王様がとってもとっても素晴らしい話を、と所望されるのです。』」

- [31] **Anína wónusu l-ú gísa, úwo má gí átagu."**
 1PL talk PRP-3SG tale 3SG NEG TMA laugh
 「我々は彼にお話を語りましたが、彼は笑いませんでした。』」
- [32] **Há... Shilú jésh táni.**
 INTJ take.PS army another
 「ああ…。(そして) 別の兵隊が送られました。」
- [33] **Jésh rúwa gí wónusu le úwo gísa, gísa al hílu.**
 army go TMA talk PRP 3SG tale tale REL sweet
 「兵隊さんは彼にお話、素晴らしいお話をしに行きました。」
- [34] **Zól dé má gí átagu.**
 man DEM NEG TMA laugh
 「それが中々笑いません。」
- [35] **Á! Kalám dé bíga sáab. Áiiii! Chchchch!**
 INTJ matter DEM become difficult INTJ INTJ
 「事は難しくなりました。ああ…もう！」
- [36] **Úmon áinu ze dé, fí wáhid táni.**
 3PL look PRP DEM EXS one another
 「彼らが見ると、もう一人、人が居ました。」
- [37] **Galí, "Yá akwána taí,**
 say.PS PRP brother.PL 1SG
kedé ána bi rúwa le zól kedé. Ará."
 MDA 1SG TMA go PRP man MDP INTJ
 「(彼) 曰く、『同志たちよ、(それでは) 私がその人の許へ参りましょう。いざ。』」
- [38] **Zól dé rúwa le zól.**
 man DEM go PRP man
 「この男が王様の許へ行きました。」
- [39] **Úmon rúwa, úmon rúwa, úmon rúwa, úmon rúwa.**
 3PL go 3PL go 3PL go 3PL go
 「彼らはどんどんどんどん行きました。」

[40] **"Taraú zól dé, índu tandúra, tandúra al sérétú-seretu."**
 CNA man DEM have skirt skirt REL rip-rip
 『見てみろ、この王様はスカートを持っているぞ、ズタズタのスカートを。』

[41] **Yani sérétú-seretu. Bíga shíkil tó shén ze dé.**
 CNJ rip-rip CNA shape 3SG ugly PRP DEM
 「ズタズタです。だからその形はこう不細工でした。」

[42] **Úmon rúwa le zól.**
 3PL go PRP man
 「彼らは王様の許へ行きました。」

[43] **Zól yaú zól, rúwa fádulu úmon téhet.**
 man TOP man go welcome 3PL down
 「その人[王様]は、彼ら[兵隊たち]を下に[座前に]迎えました。」

[44] **Ligó úmon lísa má áinu zól dé,**
 CNA 3PL yet NEG look man DEM
tuwáli úwo líbisu tandúra tó dé.
 at.once 3SG put.on skirt 3SG DEM
 「そして彼らがまだ王様に会わない内に、すぐさま彼は王様のスカートを穿きました。」

[45] **Líbisu tandúra tó, u líbisu táni jílid. Yála, úmon rúwa.**
 put.on skirt 3SG and put.on again lether CNA 3PL go
 「彼のスカートを穿き、また皮を着ました。そして、彼らは行きました。」

[46] **Galí "Ya"... "Ya mélik," "Aí," "Anína já."**
 say.PS PRP PRP king INTJ 1PL come
 「曰く『王様』『何だ』『我々が参りました。』」

[47] **Galí "Dé ákir tákum. Átagu-kum bíga le ána.**
 say.PS DEM last 2PL make.laugh-2PL CNA PRP 1SG
 「(王様) 曰く『これが最後だ。それでは儂を笑わせてみい、』

[48] **Kan máfi gísa hílu, ána bi túrudu ítakum bára.**
 CND EXS tale sweet 1SG TMA expel 2PL out
 「もし話が面白くなければ、お前たちを追い出すぞ。」

[49] **Máta** **já-kum** **já** **le** **ána** **táni."**
 TMA come-2PL come PRP 1SG again

「二度と農を訪れるでない。』」

[50] **Kalás,** **gál** **"Yani** **ya** **áinu,** **ya** **mélik,**
 that's.all say CNJ PRP look PRP king
dé, **zól** **al** **líbisu** **tandúra** **dé** **yaú** **gí** **wónusu."**
 DEM man REL put.on skirt DEM TOP TMA talk

「そして、男は言いました。『王様こちらをご覧ください、このスカートを穿いた男がお話し申し上げます。』」

[51] **Gál** **"Áinu** **le** **ána** **hína."** **Mín** **mélik** **áinu** **le** **úwo**
 say look PRP 1SG here since king look PRP 3SG
ze **dé,** **úwo** **ámulu** **úwo** **ámulu** **yaú** **"kólóng!"**
 PRP DEM 3SG make 3SG make TOP ONM

「曰く『こちら私の方をご覧ください。』王様がそうして彼を見た時、彼がしたのは『コロン！』（逆立ち）でした。」

[52] **Úwo** **ágilibu** **rás** **tó** **téhet** **ze** **dé,**
 3SG reverse head 3SG down PRP DEM
yála **úwo** **wága** **ma** **idén** **tó** **dé,** **kureén** **tó** **fók.**
 CNA 3SG fall PRP hand.PL 3SG DEM leg.PL 3SG up

「彼はこのように頭を下にひっくり返して手で地面に逆立ち、足を上に上げたのです。」

[53] **Yála** **tandúra** **dé** **bíga** **amulú** **kída.**
 CNA skirt DEM become make.PS like.this

「すると、スカートはこんな風になりました。」

[54] **"Yá!"** **Mélik** **átagu,** **mélik** **átagu,** **átagu** **shedíd.**
 INTJ king laugh king laugh laugh very
Mélik **tála** **murtá** **murtá.**
 king become happy happy

『ウヒョー！』王様は笑って笑って笑い転げました。王様は至極満足しました。」

[55] **Úwo** **gáli** **le** **asákir** **de** **gál,** **"Yála!** **Yála!**
 3SG say PRP soldier.PL DEM say INTJ INTJ
Shílu-takum **nár.** **Shílu-takum** **ákil."**
 take-2PL fire take-2PL food

「彼は兵隊に『さあさあ！火を持ってけ、食べ物を持ってけ』と言いました。」

[56] **Úwo bíga moksút ma zól dé.**
 3SG become happy PRP man DEM
 「彼はこの男によって、幸せになりました。」

[57] **Bés kan úwo gí áinu zól ze dé, úwo gí átagu.**
 only MDA 3SG TMA look man PRP DEM 3SG TMA laugh
 「彼はこの男がそうしているのを見ただけで笑っていたのです。」

[58] **"Hahaha!" Úwo gí átagu shedíd,**
 INTJ 3SG TMA laugh very
gál "Gísa dé hílu shedíd! Hílu, hílu, hílu, hílu!"
 say tale DEM sweet very sweet sweet sweet sweet
 『「ハハハ！」彼は大笑いして、『この話は大変大変結構だ』と言いました。』

[59] **Dé yaú gísa al besít ána dér wónusu,**
 DEM TOP tale REL easy 1SG want talk
al mélik ísim tó "Umúa." Shúkran táki
 REL king name 3SG PSN thank.you 2SG
 「これが私の話したかった簡単なお話、ウムアという名の王様（についての話）です。
 有り難う。」

4.2 動物のおはなし

[1] **A, háse dé, ána déru wónusu gísa ta Pári.**
 FIL now DEM 1SG want talk tale PRP Pári
 「えー、今からパリ（民族）の昔話をお話したいと思います。」

[2] **Gísa dé, gísa ta haiwanát. Haiwanát dé, úmon árba.**
 tale DEM tale PRP animal.PL animal.PL DEM 3PL four
 「このお話は動物たちのお話です。動物たちは四匹です。」

[3] **Awálan, fí haiwán bi gul-l-ó ásed,**
 at.first EXS animal TMA called lion
fí táni bi gul-l-ó nímir,
 EXS another TMA called leopard
 「先ず、獅子という動物がおります。次に豹という動物がおります。」

[4] **fí táni bi gul-l-ó morfoín, fí táni bi gul-l-ó kélib.**
 EXS next TMA called hyena EXS another TMA called dog
 「次にハイエナという動物、その次に犬という動物がおります。」

[5] **Haiwanát árba dé, úmon sabi-sabí.**
 animal.PL four DEM 3PL friend-friend
 「この四匹の動物たちは友達同士でした。」

[6] **Yála fi yóm, úmon géni wónusu kedé úmon rúwa fi dwar.**
 CNA EXS day 3PL stay talk MDA 3PL go PRP hunting
 「そしてある日、彼らは狩に行こうと座って話していました。」

[7] **Úmon rúdu gál, "Kalás kedé-na rúwa."**
 3PL accept say that's.all MDA-1PL go
 「彼らは『それじゃあ行こう』と、意見が一致しました。」

[8] **Zaman úmon rúwa hinák, úmon rúwa fi gába.**
 CNJ 3PL go there 3PL go PRP forest
 「彼らがそこに行く時、彼らは森に行きました。」

[9] **Úmon rúwa ámulu mehél tómon ashan kedé úmon géni fógo.**
 3PL go make place 3PL CNJ MDA 3PL stay ANP
 「彼らはそこに座るための場所を作りに行きました。」

[10] **Yála, auwal yóm úmon síbu morfoín**
 CNA first day 3PL leave hyena
fi mehél ta géni tómon.
 PRP place PRP stay 3PL
 「そして第一日目、彼らはハイエナを彼らの居場所に置いて行きました。」

[11] **Yála, nímir u ásed u kélib, úmon rúwa fi dwar.**
 CNA leopard and lion and dog 3PL go PRP hunting
 「そして豹とライオンと犬は狩に行きました。」

[12] **Úmon rúwa gábudu haiwanát kutár.**
 3PL go seize animal.PL many.PL
 「彼らは行って沢山の動物を捕まえました。」

[13] **Úmon kátulu. Úmon jíbu láham dé, fi mehél tómon.**
 3PL kill 3PL bring meat DEM PRP place 3PL
 「彼らは殺し、その肉を彼らの居場所に持って帰りました。」

[14] **Yála** **úmon** **géni** **ákulu,** **úmon** **moksutín** **áu** **murtaín.**
 CNA 3PL stay eat 3PL happy.PL or contented.PL
 「そして彼らは座って食べ、彼らは幸せ、満足でした。」

[15] **Sabá** **tó,** **úmon** **gúm** **táni.**
 Morning 3SG 3PL get.up again
 「その朝、彼らはまた起きました。」

[16] **Úmon** **báda** **kélimu,** "Morfoín, kedé ita **géni** **jambu láham dé."**
 3PL begin speak hyena MDA 2SG stay near.by meat DEM
 「彼らは『ハイエナ、君はこの肉の近くに座っていてくれ』と言い始めました。」

[17] **Úmon** **rúwa.** **Úmon** **rúwa** **wósulu hinák,**
 3PL go 3PL go arrive there
úmon **rúwa** **gábudu haiwanát** **tanín** **ketír.**
 3PL go seize animal.PL another.PL many
 「彼らは行きました。彼らは行ってそこに着くと、また沢山の動物を捕まえに行きました。」

[18] **Wára** **tómon,** **fí** **haiwán bi** **gul-l-ó wólf.**
 backside 3PL EXS animal TMA called wolf
 「(ところが、) 彼らの後ろに、狼という動物が居たのです。」

[19] **Wólf** **dé,** **úmon** **já** **kutár.**
 wolf DEM 3PL come many.PL
 「狼は沢山やって来ました。」

[20] **Úmon** **bíga** **dér** **ákulu** **láham.** **Úmon** **nyákamo** **morfoín.**
 3PL become want eat meat 3PL attack hyena
 「彼らは肉を食べたくなりました。彼らはハイエナを襲いました。」

[21] **Morfoín** **shákila** **ma** **úmon,** **dé** **bi** **ádi** **dáhar** **ta** **morfoín.**
 hyena fight PRP 3PL DEM TMA bite back PRP hyena
 「ハイエナは彼らと闘います。これがハイエナの背に噛みついたと思ったら、」

[22] **Táni** **bi** **ádi** **kureén** **ta** **morfoín,** **táni** **bi** **ádi**
 another TMA bite foot.PL PRP hyena another TMA bite
rás **ta** **morfoín,** **táni** **bi** **ádi** **gísim** **ta** **morfoín.**
 head PRP hyena another TMA bite body PRP hyena
 「別のがハイエナの両足に、また別のが頭に、また別のが体に噛みつきます。」

[23] **Morfoín áinu ze dé, úwo báda jére.**
 hyena look PRP DEM 3SG begin run
 「ハイエナはこれを見て、逃げだしました。」

[24] **Úwo síbu láham kúlu.**
 3SG leave meat all
 「彼は肉を全部捨て置きました。」

[25] **Wólf dé ákulu láham kúlu, "Nyám!" bára.**
 wolf DEM eat meat all ONM out
 「狼は肉を全て、ペロッと平らげてしまいました。」

[26] **Morfoín jére, le nas sabí tó.**
 hyena run PRP people friend 3SG
 「ハイエナは彼の友達たちのところに逃げました。」

[27] **Zaman úwo wósulu hinák, asalú "Malú íta?"**
 CNJ 3SG arrive there ask.PS what's.up 2SG
 「彼がそこへ着くと、『君、どうしたんだ?』と尋ねられました。」

[28] **Galí "Fí haiwanát já hinák, úmon ákulu láham kúlu.**
 say.PS EXS animal.PL come there 3PL eat meat all
 「曰く、『ある動物たちがそこへ来て、肉を皆食ってしまった。』

[29] **Úmon báda já.**
 3PL start come
 「奴らが来はじめたんだ。」

[30] **Zaman úmon já, úmon síbu láham dé téhet, úmon géni.**
 CNJ 3PL come 3PL leave meat DEM down 3PL stay
 「奴らが来た時、肉を下に[地面に]落として座ったんだ。』」

[31] **Sabá táni, galí "Kalás, kedé nímir yaú géni."**
 morning next say.PS that's.all MDA leopard TOP stay
 「次の朝、曰く『よし、豹が番をしてくれ。』」

[32] **Nímir géni. Nímir rúwa. Nímir rákab.**
 leopard stay leopard go leopard cook
 「豹が番をしました。豹は行って、料理をしました。」

[33] **Úwo** **árkab** **fi** **ras** **kásab** **u** **géni.**
 3PL get.on PRP top wood and stay
 「彼は木（で作った物置）の上に登って座りました。」

[34] **Wólf** **dé** **táni** **já** **kutár** **kamán.**
 wolf DEM again come many.PL also
 「狼は再度またたくさん来ました。」

[35] **Úm báda** **nyákamo** **láham** **táni** **min** **nímir.**
 3PL start attack meat again PRP leopard
 「彼らは豹から再び肉を強奪しはじめました。」

[36] **Nímir** **báda** **shákila** **ma** **úmon.** **Há...** **Múshkila** **bíga** **kebír.**
 leopard begin fight PRP 3PL INTJ problem become big
 「豹は彼らと戦いだしました。ああ！えらいことになりました。」

[37] **Táni** **gí** **nútu** **fi** **rás** **ta** **nímir** **gí** **ádi,**
 another TMA jump PRP head PRP leopard TMA bite
táni **gí** **nútu** **fi** **gísim** **ta** **nímir** **gí** **ádi.**
 another TMA jump PRP body PRP leopard TMA bite
 「別の（狼）が豹の頭に跳んで噛みついたと思えば、別のが体に跳んで噛みつきます。」

[38] **Úmon** **bíga** **ketír** **gí** **nyákamo.**
 3PL become many TMA attack
 「彼らは数を増して襲いかかりました。」

[39] **Nímir** **kamán, bé** **láham** **dé,** **kúlu.**
 leopard also with meat DEM all
 「豹はまたもや（やられてしまい）、その上肉も全部（取られました）。」

[40] **Nímir** **báda** **jére** **kamán.** **Dél** **ákulu** **láham** **dé** **kúlu.**
 leopard start run also DEM eat meat DEM all
 「豹はまた逃げだしました。こいつらは肉を全部食べてしまいました。」

[41] **Tani** **yóm** **kamán, ásed** **bíga** **yaú,** **bíga** **háris,**
 next day also lion become EXS become guard
gí **hárisu** **láham** **dé.**
 TMA guard meat DEM
 「次の日もまた、ライオンが居て番をするようになって、肉を番しました。」

[42] **Lísa,** **anas** **wólf** **dé** **já.**
 still people wolf DEM come
 「まだ狼たちはやって来ました。」

[43] **Úm** **géni** **shákila** **kamán** **ma..** **ma** **ásed.**
 3PL stay fight also PRP PRP lion
 「彼らはライオンとも戦っています。」

[44] **Úm** **jéde** **ásed** **téhet,** **árimu** **ásed** **ti...** **ya...** **hinái,**
 3PL throw lion down throw lion ? ? FIL
yan **yani,** **yan** **téhet,** **úmon** **ádi** **ásed.**
 FIL FIL FIL down 3PL bite lion
 「彼らはライオンを下[地面]へ投げつけ、ライオンを下[地面]に投げて、噛みました。」

[45] **Ásed** **áinu** **ze** **dé,** **úwo** **báda** **jére,**
 lion look PRP DEM 3SG begin run
jére **kamán** **ze** **sabí** **tó.**
 run also PRP friend 3SG
 「ライオンはこれを見て、彼は逃げだしました。彼の友達と同じように逃げました。」

[46] **Galí** "Ya **akwánna.** **Há!** **Haját** **dé** **bíga** **sáab** **shedíd.**
 say PRP brother.PL INTJ thing.PL DEM become difficult very
Áinu **akulú** **gísim** **taí** **kúlu."**
 look eat.PS body 1SG all
 「曰く『兄弟よ、ああ！これはとても大変な事になった。俺の体が皆噛まれたのを見ろ。』」

[47] **Úmon** **géni** **fékir** **bíga,** "Anína bi **ámulu** **shunú** **hása** **dé?**
 3PL stay think CNA 1PL TMA make what now DEM
Anína... **anína** **bi** **ráhalu** **min** **mehél** **dé?"**
 1PL 1PL TMA move PRP place DEM
 「彼らはそこで座って考えました。『俺たち今からどうする？俺たちこの場所から動くか？』」

[48] **Yála,** **kélib** **galí** "Lá, **anína** **má** **bi** **ráhalu**
 CNA dog say INTJ 1PL NEG TMA move
min **mehél** **dé.** **Anína** **kedé** **rúwa** **fi** **mehél** **tanína."**
 PRP place DEM 1PL MDA go PRP place 1PL
 「そこで犬曰く、『いや、僕達ここから動かないよ。僕達は僕達の場所へ行こう。』」

[49] **Úmon** **rúwa** **fógo** **kamán** **táni.**
 3PL go ANP also again
Sabá, **kélib** **gál** "Ána **yaú** **bi** **géni."**
 morning dog say 1SG TOP TMA stay
 「彼らは又そこに行きました。朝、犬が『僕が残ろう』と言いました。」

[50] **Morfoín** **báda** **kélimu** **"Íta** **sukér** **dé,**
 hyena begin speak 2SG small DEM
íta **bi** **ágder** **ma** **haiwanát** **dé?**
 2SG TMA be.able PRP animal.PL DEM
 「ハイエナは言います。『小さなお前（のような奴）が、あの動物を何とかできるのか？』」

[51] **Anína** **al** **kubár** **dé,** **ásed,** **morfoín,u** **nímir,** **haját** **dé,**
 1PL REL big.PL DEM lion hyena and leopard thing.PL DEM
dugú **úmon** **kúlu.** **Bíga** **íta,** **al** **sukér** **dé?"**
 hit.PS 3PL all CNA 2SG REL small DEM
 「大きい俺たち、ライオン、ハイエナに豹、こいつら皆やられたぞ。それなのにお前、この小さい奴が（どうにかできるとでも言うのか。』」

[52] **Kélib** **gáli** "Ána **bi** **géni.** **Kan** **já** **turudú** **ána** **bíga,**
 dog say 1SG TMA stay CNJ come chase 1SG become
ána **kamán** **bi** **jére** **le** **ítakum** **hinák.**
 1SG also TMA run PRP 2PL there
Yála, **min** **hinák** **anína** **bi** **rúwa** **fétisu** **mehél... mehél** **táni."**
 CNA PRP there 1PL TMA go search place place next
 「犬曰く『僕が残る。もしそれで僕がやられたらまた君らの所へ逃げるよ。それで、それから僕たちは別の場所を探したら良いじゃないか。』」

[53] **Kalás,** **kélib** **géni.** **Kélib** **géni,** **kélib** **dákalu**
 that's.all dog stay dog stay dog go.in
fi **téhet** **bita...** **mehél** **al** **salaú** **ta** **láham** **dé.**
 PRP down PRP place REL make.PS PRP meat DEM
 「そして犬が残りました。犬は残って、肉の為に作られた場所の下に入りました。」

[54] **Gí** **nadí** **bi** **rután** **ta** **Árabi** **al** **besít** **"sidáb,"**
 TMA call.PS PRP language PRP Arabic REL easy "sidab"
bi **rután** **ta** **Päri,** **"péém."** **"Péém."**
 PRP language PRP Pári "peem" "peem"
 「(それは) 簡単なアラビア語で『シダーブ』、パリ語では『ペーム』と呼ばれています。」

[55] **Kélib dákalu téhet hinák. Úwo nóm téhet hinák.**
 dog go.in down there 3SG sleep down there
 「犬はそのの下に入りました。彼はそのの下で眠りました。」

[56] **Anas wólf já kamán táni.**
 people wolf come also again
 「狼たちはまたまたやってきました。」

[57] **Úmon já! Úmon já kélib nóm téhet.**
 3PL come 3PL come dog sleep down
 「彼らが来ました！彼らは犬が眠っている（ところ）に来ました。」

[58] **Zaman úmon bíga geríb, ma lahám,**
 CNJ 3PL become near PRP meat
táni gí shílu ze dé, kélib nútu min hinák,
 another TMA take PRP DEM dog jump PRP there
ámsugu ragábtá bita wáhid u kásuru tuwáli.
 seize neck PRP one and break at.once
 「彼らが肉に近づき、一匹が取ろうとした時に、犬はそこから跳び上がって、一匹の首を捕まえてすぐにへし折りました。」

[59] **Úwo nútu kamán, íta áinu, kásuru táni.**
 3SG jump also 2SG see break another
 「彼はまた跳び上がり、えっとね、別のをへし折りました。」

[60] **Bíga nás fi múshkila.**
 CNA people PRP problem
 「そしてみんな大混乱です。」

[61] **Kélib kásuru táni, kélib kásuru táni, bíga áruba.**
 dog break another dog break another become four
 「犬は更に別のを潰し、更に別のをへし折ったので、(やっつけたのは) 4匹になりました。」

[62] **Wólf áinu ze dé, haiwanát báda jére.**
 wolf see PRP DEM animal.PL begin run
 「狼はこれを見て、動物[狼]たちは逃げ出しました。」

[63] **Há!** **Galí** **"Dé, dé** **haiwán káab!"**
 INTJ say.PS DEM DEM animal bad

leánu **kélib** **kamán** **sukér** **ze** **úmon.**
 CNJ dog also small PRP 3PL

「曰く『こいつ、こいつは難儀な動物だ！』なぜなら犬は彼らと同じく小さいのです。」

[64] **Úmon** **má** **bi** **ágder** **ádi** **kélib,** **leánu** **kélib** **sukér,**
 3PL NEG TMA be.able bite dog CNJ dog small

úm **gí** **lákbatu** **ma** **kélib,** **kúlu** **sáwa.**
 3PL TMA confuse PRP dog all together

「犬が小さくて（犬も狼も）みんな同じように見えるので、彼らは犬に噛みつけません。」

[65] **Kélib** **kátulu** **árba,** **úmon** **báda** **jére.**
 dog kill four 3PL start run

「犬は4匹殺し、彼らは逃げだしました。」

[66] **Úmon** **jére,** **kélib** **túrudu** **úmon** **shedíd** **shedíd** **shedíd.**
 3PL run dog chase 3PL very very very

「彼らは逃げ、犬は彼らを完膚無きまでに追放してしまいました。」

[67] **Á!** **Kalás.** **Yála** **kélib** **já** **ríja,** **úwo** **rákab** **ákil**
 INTJ that's.all CNA dog come return 3SG cook food

le **akwána** **bitómon** **al** **lísa** **fi** **dwar** **dé.**
 PRP brother.PL 3PL REL still PRP hunting DEM

「ああ！そして、犬は戻って来ました。彼はまだ狩猟中の兄弟のために、食べ物を料理しました。」

[68] **Úwo** **géni.** **Úwo** **núm** **téhet.** **Ahá,** **baad** **záman** **táni,**
 3SG stay 3SG sleep down INTJ after time another

anas **nímir** **báda** **já,** **u** **ásed** **já,** **u** **morfoín.**
 people leopard start come and lion come and hyena

「彼は座り、下[地面]に寝そべりました。暫くして豹たちが帰ってきはじめました。ライオンも、ハイエナも戻ってきました。」

[69] **Úmon** **zátu** **istágrab!** **"Leé? Leé** **kélib** **má** **jére** **seí?**
 3PL self be.surprised why why dog NEG run MDA

「実に彼らは驚きました！『どうして？どうして犬は逃げなかったのだろうか？』

[70] **Anas haiwanát dé seí úmon já?**
 people animal.PL DEM MDA 3PL come
 「動物[狼]たちは一体来たのだろうか？」

[71] **Bikún haiwanát dé má já."**
 MDA animal.PL DEM NEG come
 「たぶん動物[狼]たちはこなかったんだ。』」

[72] **"Úm já, ya zól, úm jíbu láham táni.**
 3PL come PRP man 3PL bring meat again
 『あいつらは来たよ、君、奴らはまた肉を持って行こうとした。』

[73] **Úm kútu láham dé, yani, téhet."**
 3PL put meat DEM CNJ down
 「あいつらは肉を下[地面]に置いた。』」

[74] **Kélib gál "Kalás géni-takum téhet. Yaú ákil."**
 dog say that's.all stay-2SG down EXS food
 「犬曰く『よし、お座りなさい。ほら、ごはんですよ。』」

[75] **Úmon báda ákulu. Úmon báda ákulu.**
 3PL start eat 3PL start eat
 「彼らは食べ始めました。彼らは食べ始めました。」

[76] **Baadma úmon ákulu, úmon ásalu kélib, "Ya kélib," "Aí."**
 CNJ 3PL eat 3PL ask dog PRP dog INTJ
 「彼らは食べたあと、犬に問いました。『犬さんよ。』『はあ。』」

[77] **"Haját dé má já? Anas wólf, úm má já?"**
 thing.PL DEM NEG come people wolf 3PL NEG come
 『あいつら来なかったの？狼たちは来なかったの？』」

[78] **Kélib gál "Úmon já."**
 dog say.PS 3PL come
 「犬曰く『あいつらは来たよ。』」

[79] **Gál "A? Wén? Kalám táki dé, dé kídib!**
 say INTJ where words 2SG DEM DEM lie
 「曰く『え？どこが？お前の言うことは嘘だ！』」

[80] **Haiwanát dé má já.**
 animal.PL DEM NEG come
 「動物[狼]たちは来なかったんだ。」

[81] **Izekán úmon já, kán úmon ákulu íta bára."**
 CNJ 3PL come TMA 3PL eat 2SG out
 「もしも奴らが来たら、奴らはお前を食ってしまった (はずだ)。』」

[82] **Gál "Úmon já." Gál "Kalás, ítakum má gí rúdu kalám taí."**
 say 3PL come say that's.all 2PL NEG TMA accept words 1SG
 「曰く『来たよ。』曰く『もういい、君らは僕の言うことを信用していないな。』」

[83] **Gál, a, gál "Taálu." Úwo worí wáhid, galí**
 say FIL say INTJ 3SG show one say.PS
"Yáú dé, ána kátulu wáhid dé yáú dé hína.
 EXS DEM 1SG kill one DEM EXS DEM here
 「曰く『いらっしゃい。』彼は一匹見せて言いました。『これ、僕はここで一匹殺った。』」

[84] **Ará, táni! Yáú dé táni, ána kátulu wáhid le hína.**
 INTJ again EXS DEM again 1SG kill one PRP here
 「そら、ここに一匹！ほら、一匹、僕はここで一匹殺った。」

[85] **Ará, táni! Yáú dé, ána kátulu táni. Ará, táni!**
 INTJ again EXS DEM 1SG kill another INTJ again
 「そら、ここにも！ほうら、僕はもう一匹殺った。そら、ここにも！」

[86] **Ána kátulu dé. Árba!" Há! Kalám bíga sáab hína.**
 1SG kill DEM four INTJ matter become difficult here
 「僕はこいつも殺った。四匹も！』ああ！これでえらい事になりました。」

[87] **Morfoín, nímir, u ásed, úmon báda káfu, gál "A... a... a... a..."**
 hyena leopard and lion 3PL start fear say INTJ
 「ハイエナ、豹にライオンは『うわあ…』と言って怖くなってきました。」

[88] **"Taráú kélílib káab ze dé? " Há!**
 CNA dog bad PRP DEM INTJ
 「『実は犬はこんなに難儀な奴だったのか！』ああ！」

[89] **Áyi zól gí géni ma kalám tó fi juwa gélba tó.**
 any man TMA stay PRP matter 3SG PRP inside heart 3SG
 「それぞれはそれぞれの言葉を胸に、座っていました。」

[90] **Bilél, úmon báda núm. Úmon núm, úmon núm,**
 night 3PL start sleep 3PL sleep 3PL sleep
morfoín gúm bilél, úwo rúwa tóuru ásed.
 hyena get.up night 3SG go wake lion
 「夜分、彼らは寝はじめました。彼らが寝付いたかどうかという頃、ハイエナは夜中に起きて、ライオンを起こしに行きました。」

[91] **Gáli "Ásed, ásed, ásed, ásed, íta gúm fók.**
 say.PS lion lion lion lion 2SG get.up up
 「曰く『ライオン、ライオン、ライオン、ライオン、起きろよ。』」

[92] **Íta áinu, kélib dé, dé hai dé haiwán káab.**
 2SG see dog DEM DEM ? DEM animal bad
 「分かっただろう、この犬は難儀な奴だよ。」

[93] **Kan úwo gúm bilél badén, úwo gí já kásuru**
 MDA 3SG get.up night later 3SG TMA come break
ragábta taí, úwo bi kásuru ragábta táki, úwo bi kásuru
 neck 1SG 3SG TMA break neck 2SG 3SG TMA break
ragábta bita... bita nímir.
 neck PRP PRP leopard
 「後で夜中、あいつが起きたら俺の首をへし折りにきて、お前の首を、豹の首をへし折るぞ。」

[94] **Kedé-na jére! Anína kedé síbu kélib dé baráu."**
 MDA-1PL run 1PL MDA leave dog DEM alone
 「逃げよう！俺たちはこの犬を独り捨てっちまおう。』」

[95] **Á! Úwo rúwa tóuru nímir.**
 INTJ 3SG go wake leopard
 「彼は豹を起こしに行きました。」

[96] **"Nímir, nímir, gúm fók! Íta áinu kélib dé sáab!"**
 leopard leopard get.up up 2SG see dog DEM difficult
 「『豹よ、豹、起きろ！この犬はややこしいのが分かっただろう。』」

[97] **Kan úwo gúm badén, úwo bi kátulu anína kúlu.**
 CNJ 3SG get.up later 3SG TMA kill 1PL all

「後で奴が起きたら俺たちをみんな殺してしまう。」

[98] **Úwo bi kásuru ragábta táki, bi kásuru taí,**
 3SGTMA break neck 2SG TMA break 1SG
bi kásuru ta ásed. Kedé-na jére."
 TMA break PRP lion MDA-1PL run

「奴はお前の首をへし折り、俺のを、ライオンのをへし折ってしまうよ。逃げよう。』」

[99] **Úmon báda shílu láham al fi, úmon báda jére.**
 3PL start take meat REL EXS 3PL start run

「彼らは（そこに）ある肉を取り、逃げだしました。」

[100] **Úmon síbu kélib baráú, leánu kélib kán gí nóm**
 3PL leave dog alone CNJ dog TMA TMA sleep
shedíd shedíd, úwo tabán ma... ma shákila al úwo
 very very 3SG tired PRP PRP fight REL 3SG
géni shákila gibél. Úwo gí nóm.
 stay fight before 3SG TMA sleep

「犬は先だって戦った戦いの為に疲れて、熟睡していたので、彼らは犬を独り残しました。」

[101] **Á! Zaman úmon gí jére kalás, úmon kamán nesítu kojorón.**
 INTJ CNJ 3PL TMA run already 3PL also forget pan

「ああ！彼らが逃げおおせた時、彼らは鍋を忘れてしまいました。」

[102] **Úmon nesítu. Úmon jére.**
 3PL forget 3PL run

「彼らは忘れていました。彼らは走りました。」

[103] **Zaman kélib gúm, máfi nás jámbu tó.**
 CNJ dog get.up EXS people PRP 3SG

「犬が起きたとき、彼の近くにみんなが居ません。」

[104] **Sabiát dé kúlu jére.**
 friend.PL DEM all run

「友達はみんな逃げてしまいました。」

[105] **Úwo áinu ze dé... Máfi teríga.**
 3SG see PRP DEM EXS means
 「彼はこれに気づきましたが…どうしようもありません。」

[106] **Kélib, rúwa kútu néfsa tó fi kozorón.**
 dog go put self 3SG PRP pan
 「犬は行って鍋の中に自分（の体）を置きました。」

[107] **Úwo rúwa núm fi juwa... juwa kozorón.**
 3SG go sleep PRP inside inside pan
 「彼は行って鍋の中で眠りました。」

[108] **Ahá! Min hinák, anas morfoín u anas ásed u nas**
 INTJ PRP there people hyena and people lion and
nímír, úmon rúwa gidám, úmon áinu ze dé, máfi kozorón.
 leopard 3PL go forward 3PL see PRP DEM EXS pan
 「ああ、そこからハイエナたち、ライオンに豹たちはずっと先に行ったところで鍋がない、このことに気づきました。」

[109] **"Aléla seí, anína bi rákabu ma shunú?"**
 today MDA 1PL TMA cook PRP what
 『今日は俺たち一体何で料理するんだよ。』

[110] **Gál "Kalás, kedé morfoín ríja táni rúwa jíbu kojorón dé."**
 say that's.all MDA hyena return again go bring pan DEM
 「曰く『よし、ハイエナ、今一度戻って鍋を取りに行ってくれ。』」

[111] **Morfoín jére. Galí Rúwa shílu kojorón, bi jére tuwáli.**
 hyena run say.PS go take pan TMA run at.once
 「ハイエナは走りました。曰く『鍋を取ってすぐに逃げてこい。』」

[112] **Morfoín rúwa. Morfoín jére.**
 hyena go hyena run
 「ハイエナは行きました。ハイエナは走りました。」

[113] **Morfoín mínma gí rúwa ze dé,**
 hyena since TMA go PRP DEM
úwo árufu kozorón bés úwo shílu fi rás tó,
 3SG know pan only 3SG take PRP head 3SG
úwo má árufu galí kélib fi fi juwa kozorón dé.
 3SG NEG know say dog EXS PRP inside pan DEM

「ハイエナはそうして行ってから、鍋だけを頭に（乗せて）とってきたと思い、
 犬がその鍋の中に入っていると知りませんでした。」

[114] **Morfoín jére, morfoín jére gál kalási,**
 hyena run hyena run say that's.all
úwo shílu kélib dé hinák.
 3SG take dog DEM there

「ハイエナは走って、走って『よし』と言ってそこに犬を運んでしまいました。」

[115] **Taráú kélib, juwa kozorón.**
 CNA dog inside pan

「実は犬は、鍋の中です。」

[116] **Kalás. Úwo wósulu le nas ásed u nímír gál**
 that's.all 3SG arrive PRP people lion and leopard say
"Á? Íta jíbu?" Gál "Áí."
 INTJ 2SG bring say INTJ

「そういうことです。彼はライオンと豹たちのところに着くと、曰く『おお、持って来たか』
 曰く『ああ。』」

[117] **Gál "Mínma morfoín gí wósulu fi néfsa tómon ze dé?"**
 say CNJ hyena TMA arrive PRP self 3PL PRP DEM

「曰く『ハイエナは着いてから独りでこう（戻ってきたの）か』」

[118] **Úwo gí kútu kozorón téhet, úmon áinu kélib fógo.**
 3SG TMA put pan down 3PL see dog ANP

「彼が鍋を下に（地面に）おいたところ、彼らはそこに犬を見ました。」

[119] **A... nás báda jére kúlu! Hahaha! Úmon jére kúlu.**
 INTJ people start run all INTJ 3PL run all

「わーい、皆はすっかり逃げだしましたとさ！ハハハハ！彼らは皆逃げ出しました。」

[120] "Á! Morfoín, íta jíbu hája dé táni?"
 INTJ hyena 2SG bring thing DEM again
 『ああ！ハイエナめ、お前またこいつを連れてきたのか？』

[121] Há! Nás báda jére.
 INTJ people start run
 「ああ！みんなは走りだしました。」

[122] Kélib áinu ze dé, bíga máfi teríga.
 dog see PRP DEM CNA EXS means
 「犬はそれを見て、どうしようもなくなりました。」

[123] Kélib límú-limu láham dé kúlu,
 dog collect-collect meat DEM all
 kélib bíga já fi bét ma láham dé kúlu.
 dog CNA come PRP house PRP meat DEM all
 「犬は肉を全部集め、それからその肉を全部持って家に帰りました。」

[124] Gísa, min híni, intáha kída. Shúkran táki.
 tale PRP here end like.this thank.you 2SG
 「お話はこれで終わりです。ありがとうございました。」

略号

- 1SG 一人称単数代名詞：ána, taí およびその変異形
- 1PL 一人称複数代名詞：anána, tanína およびその変異形
- 2SG 二人称単数代名詞：íta, táki およびその変異形
- 2PL 二人称複数代名詞：ítakum, tákum, -kum/takum およびその変異形
- 3SG 三人称単数代名詞：úwo, tó およびその変異形
- 3PL 三人称複数代名詞：úmon, tómon およびその変異形
- ANP 照応代副詞：fógo のみ
- CNA 接続副詞
- CNJ 接続詞
- COP コピュラ：kún のみ
- DEM 指示詞：dé, dél のみ
- EXS 存在詞：fi, máfi, yaú のみ
- FIL フィラー
- INTJ 間投詞
- MDA 法副詞

MDP	文末辞 : kedé のみ
NEG	否定辞 : má のみ
ONM	オノマトペ
PL	複数(名詞・形容詞)
PRP	前置詞
PS	受動態(動詞)
PSN	人名
REL	関係辞 : al のみ
TMA	TMA 標識 : bi, gí, kán のみ
TOP	主題標識 : yaú のみ
?	言い間違い

参考文献

- Bakker, Peter (2008) “Pidgins versus Creoles and Pidgincreoles” in Silvia Kouwenberg and John Victor Singler (eds.), *The Handbook of Pidgin and Creole Studies*. Oxford: Wiley-Blackwell, pp. 74–97.
- DeCamp, David (1977) “The Development of Pidgin and Creole Studies” in Valdman, A. *Pidgin and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press, pp. 3–20.
- Manfredi, Stefano (2005) “Descrizione grammaticale dell’Arabo Juba (Sudan Meridionale) con riferimenti sociolinguistici alla comunità Sudanese del Cairo”. Università degli Studi di Napoli “L’Orientale”, MA thesis.
- Miller, Catherine (2006) “Juba Arabic” in Kees Versteegh a.o. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics Vol.II*. Leiden: Brill, pp. 517–525.
- Payne, Thomas E. (1997) *Describing Morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press
- Tosco, Mauro (1995) “A pidgin verbal system: The case of Juba Arabic” *Anthropological Linguistics* 37. pp. 423–459.

شول, بول دينق (2005) لهجة جوبا العربية, الخرطوم : الدار السودانية للكتب.

神奈川県座間市の方言における、「必要」を表す「ようだ」¹

野島本泰

1 はじめに

神奈川県座間市で話されている方言²には、動詞の非過去形（ル形）に接続して「必要」などの意味を表す「ようだ」という形式がある。この「ようだ」は、共通語の「推定」「比況」などを表す「ようだ」と同じ形をしていながら、意味面、形態・統語面では大きく異なる。本稿では、座間市の方言の「ようだ」の形態・統語、意味を記述する。

座間市を含む神奈川県の方言に関する先行研究で「ようだ」について触れているのは、日野資純(1961)だけである。日野資純(1961)は、相模方言では「ようだ」が動詞終止形に接続して「必要」を表すとし、次の1例のみを挙げている。

(1) マーダ、ケッコー待ツ・ヨーダ（まだかなり待たねばならぬ。）³

「ようだ」の意味については、括弧内の共通語訳があがっているのみであり、「必要」ということばの意味は明らかにされていない。本稿では、座間市の方言の「ようだ」について、先行研究では述べられていなかった形態・統語的側面を詳細に述べるとともに、「当為判断・必要」「当然の結果・自然な成り行き」「不本意」という意味を持つことを主張する。

座間市の方言の「ようだ」にはさまざまな用法があり、共通語の「ようだ」と同じ用法、つまり「推定」「比況」といった用法もある⁴。本稿では、共通語には見られない用法を主な考察の対象とする。座間市の方言の「ようだ」の「推定用法」「比況用法」については、最後に簡単に触れるにとどめる。

¹2004年6月に東京学芸大学で日本語学会第128回大会がおこなわれ、そこで筆者は「神奈川県座間市で話されている方言における「ようだ」という題目で口頭発表した。発表の際、多くのご意見をいただいた。お名前はあげることができないが、謝意を述べたい。本稿は、その発表のときに用いた予稿集原稿に加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたっては、多くの方々にご助言をいただいた。以下の方々特に多大なご指導を賜った：上野善道氏、加藤昌彦氏、亀田裕見氏、小林初夫氏、佐藤亮一氏、白岩広行氏、角田太作氏、中西太郎氏、野島智子氏、日野資純氏、山浦玄嗣氏、吉田浩美氏。ここで謝意を述べたい。

²日野資純(1952)、(1984)で示されている方言区画によれば、座間市で話されている方言は、神奈川県南方言のうちの相模川東部方言のうちの高座・戸塚方言（高座郡と横浜市戸塚区西部）に属する。本稿は、現在の座間市で話されている方言の記述に基づいている。本発表で用いるデータは、著者（40歳、座間市座間出身）および著者の母（76歳、相模原市上溝番田出身）の作例および内省と、著者が自分の家庭における日常会話から採集した実例である。著者の母の出身地である相模原市上溝番田は、座間市座間から8kmほどのところにあり、日野資純(1952)の方言区画では座間市と同じ高座・戸塚方言に属する。著者の母は26歳のときに座間市座間出身の著者の父のところに嫁いで以来、外住経歴はない。本稿をまとめるにあたっては、座間市在住の男女4名に調査協力を依頼し、本稿で用いた例文が適格であることを確認した。

³平山輝男(1993:5330)もこの例文を引用している。

⁴「推定」「比況」の意味は、座間市では「ようだ」ではなく主に「みたいだ」を用いて表す（例：ゆうべ雨が降ったみたいだな）。ただし、「ようだ」で表すことがまったくないわけではない。後述する。

2 共通語の「ようだ」

共通語の「ようだ」は、基本的に、「話し手が観察によってその事態をとらえている」ということを表す。認識のモダリティ⁵に関わる用法としては、「話し手が観察したことそのものを述べる用法」と、「話し手が観察したことに基づいて、あることを推定する用法」とがある（日本語記述文法研究会 2003: 165）。前者の例文としては「[部屋の窓から外を見て] まだ雨はやんでいないようだ」、後者の例文としては「道路が濡れている。どうやら、昨夜雨が降ったようだ」がある。また、比況を表す用法がある。例文としては「このステレオは音質がいい。まるで目の前で演奏しているようだ」がある。

座間市の方言の「ようだ」は、これとは異なり、広い意味での事態の必要を表す。日本語記述文法研究会（編）（2003: 98）の定義に従うならば、評価のモダリティを表す形式だということになる。評価のモダリティとは、日本語記述文法研究会（編）（2003: 5）によれば、「事態に対する必要、不必要、あるいは許容できる、できないといった話し手の評価的なとらえ方を表すもの」である。

3 座間市の方言の「ようだ」

3.1 座間市の方言の形態・統語

同じ「ようだ」という形でも、共通語の「ようだ」と座間市の方言の「ようだ」とでは意味に違いがある。それを反映して、両者の間には形態・統語の面でも大きな違いがある。

3.1.1 座間市の方言の「ようだ」の前に来る言語形式の形態と種類

（あ）動詞の非過去形（ル形）に接続する。

（い）過去形（タ形）は来ない。例えば、《昨日来る必要があった》という意味で、「昨日来たようだ」とは言えない。

（う）否定の形は来ない。例えば、《明日行く必要はない》という意味で、「明日行かないようだ」とは言えない。

（え）受身の形は来ても不自然ではないらしい。例えば、《怒られることになる》という意味で、「そんないたずらすると、後で怒られるようだよ。（作例）」とすることがある。

（お）動詞の意味的なタイプ。「ようだ」の前に来る動詞は主に、動作主が制御可能な動作を表す動詞である。例えば《この字は、知らなければならない》という意味で、「この字は、知るようだ」とは言えない。同様に、例えば《（店を開くには）免許を持っていなければならない》という意味で、「免許を持っているようだ」とは言えない（「免許をとっとくようだ」なら言える）。ただし、後述するように、制御不可能な動作を表す文に「ようだ」が現れることがある。

3.1.2 座間市の方言の「よう」の後ろに来る言語形式の形態と種類

「よう」の直後に来る言語形式には「だ」以外にもさまざまなものがある。以下、列挙する。

⁵ 「認識のモダリティ (epistemic modality)」とは、「事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すもの」「情報伝達文の構成にあたって、その文によって示される事柄や情報に対する話し手のさまざまな認識的態度を表し分けるもの」である（日本語記述文法研究会 2003: 133）。

(ア) 「ようだ」は疑問文にも現れうる。その場合、「明日も行くよう?《明日も行く必要がある?》」のように、「よう」で文を言い切ることができる(尻上がりのイントネーションで)。

(イ) 「よう」+確認「じゃん」。例:「明日も来るようじゃん」《明日も来る必要があるね》。

(ウ) 「よう」+「に」+「なる」。例:「もうそろそろ行くようになる」《もうそろそろ行く時間になる》。

(エ) 「よう」+「に」(+「言った」など)。例:「明日また来るように言った」《明日また来るように言った》⁶。

(オ) 年配の発話では推量「だんべー」が「よう」に後続する。例:「明日も来るようだんべー?」《明日も来る必要があるだろう?》

(カ) 「よう」+丁寧「です」はかしこまった文体で用いられる。

(キ) 「よう」+丁寧・推量「でしょ」。

(ク) 従属節での使用。「ようだけど」「ようだから」「ようなら」「ようじゃ」。例:「明日も来るようじゃ、困るじゃんよー」《明日も来なければならぬなら、困るじゃないのよ。》。「明日も来るようで、困るよ。」《明日も来なければならぬなくて、困るよ》

(ケ) 「ようだ」自体が否定の形になることはない。「…するようじゃない」という形はない。では否定の形はどうかということ、次のようになる:「(コートのベルトを指して)これ、洗わなくてもいいよかなあ。」《これ、洗う必要はないかなあ》。

(コ) 「ようだ」自体が過去形(タ形)になることはある。例:「おまえ歯医者いくようだったんじゃない?」《おまえ歯医者に行くことになっていたんじゃない?》。

(サ) 「よう」には、さまざまな終助詞が後続しうる。「ようだ+な」「ようだ+ね」「ようだ+よ」。「ようだ+ど」「ようだ+で」(主に年配層)。「ようだ+ぜ」(主に若い男性)。「ようだ+わ」。

(シ) 疑問の終助詞「か」が「よう」に後続する場合は、その後ろにさらに終助詞「な/なー」

「ね/ねー」が来るのが普通である。例:「明日も行くようかなー?」《明日も行かなければならぬかなあ》。

(ス) 「よう」+可能性があることを表す助詞「かも」。例:「明日も来るようかも」《明日も来なければならぬかもしれない》。

(セ) 「よう」で文が終わり、ピッチが上昇すると、それだけで疑問になる。例:「明日も来るよう?」《明日も来なければならぬ?》。

3.1.3 動作主の「人称」

動作主が話し手または聞き手である文における「ようだ」は許容度も高く、使用頻度も高い。例:「俺、明日も行くようだな」「お前、明日も行くようだよ」。これに対し、話し手・聞き手以外の第

⁶ 森下喜一(編)(1991: 205-206)に必要な「ようだ」の記述がある。森下喜一氏はそこで「丈夫に育ちますヨーニ」「一日も早く全快なさいますヨー祈ります」という共通語の例文を挙げ、「ヨーニ、ヨー」が「願い、希望の気持ちや軽い命令、注意」を表すこと、この「ヨー」の形や用法が変わって、栃木方言では「本来の行為について予想して、そうするのがいいとか、のぞましいというように、軽い選択、勧誘、さらに当然、義務の用法になった」のだろうと推測している。筆者(野島)は、座間市の方言で「明日また来るように言った」の「よう」と、「明日また来るようだ」の「よう」を共時的に同一形態素とみなしてよいのか、疑問をもっている。

三者を動作主とする文における「ようだ」は、許容度が特に低いわけではないけれども、実際の会話を観察したところでは使用頻度は低い（特に、非情物主語で「ようだ」を用いた文は自然なものが作りにくい）。「本家も行くようだな」のような作例も、話し手が本家のことを心配し、気持ちを代弁する表現となる。

話し手を動作主とする文で「ようだ」を使うケースは、聞き手の存在を前提としないで、自分に言い聞かせるように独り言としていう場合が多い。例：「（時計を見て）あつ、もう行くようだな」とつぶやく場合など。それに対し、聞き手を動作主とする文で「ようだ」を使うケースは、問題の動作の遂行を聞き手に促す場合が多い。例：「（時計を見て）ねえ、もう行くようだよ」と動作を促す場合などである。

3.1.4 座間市の方言の「ようだ」と共起する副詞類

「ようだ」と共起しやすい副詞類が特にある、というわけではない。しかし、「このぶんじゃ」という表現が「ようだ」と共起すると文の許容度が高くなることがしばしばある。また、共起しやすい副詞類としては、「どうしても」「かならず」がある。例：「26日は検査があるから、どうしても（病院に）行くようだよ」《26日は検査があるから、どうしても（病院に）行かなければならないんだよ》。

条件節、理由節は「ようだ」と共起する。例：「佐藤さんが来たら、椅子をもう一個もってくるようだ」《佐藤さんが来たら、椅子をもう一個もってこなければならない》。

3.2 座間市の方言の「ようだ」の意味

すでに述べたように、現在の座間市を含む地域で話されている方言における「ようだ」は、先行研究では「必要」を表すとされている（日野資純 1961: 36）。日野資純(1961)が挙げているのは例文(1)のみである。しかし、「必要」を表す形式には他にも「…しなきゃ {なんない/だめ}」「…しなくっちゃ {なんない/だめ}」などもある。また、どんな種類の「必要」もすべて「ようだ」で表せるわけではない（具体例は後述する）。このことから、「ようだ」の意味を「必要」と記述するだけでは不十分だと考えられる。

本稿では、「ようだ」の意味を次のように記述する：

- [A] 当為判断・必要を表す（特に、制御可能な動作について述べる場合）。「…しなければならない」。
- [B] 当然の結果・自然な成り行きを表す（特に、制御不可能な動作について述べる場合）。「…することになる」。
- [C] 多くの場合、「話し手は問題の事態を「不本意だ、望ましくない」と思っている」という含みを持つ。

以下、例を挙げ、その意味を検討していく。

(2) この本、自分で買うようだ。（作例）

例文(2)は例えば次の場面で使える。問題の本は本来なら著者からもらえるか、あるいは、コピーで済ませられるはずだったが、あてがはずれて、自分で買うことになった。「自分で買う」という動作の遂行には「不本意ながら」という話し手の気持ちがともなう。以上のことを「ようだ」が表している。

「買うようだ」は、「いろいろな状況を考えると、結果的に「自分で買う」という選択をせざるをえない、あまり気が進まないが」、という「不本意な必要」を表している（この点で、共通語の「買うしかない」に似ている）。これに対して、同じく「必要」を表す「買わなきゃ」「買わなくっちゃ」という表現は、「不本意な必要」を表しうだけでなく、例えば自分がいちばん楽しみにしているゼミで使う教科書なので「ぜひとも買う必要がある」というような「普通の（中立的な）必要」をも表しうる。

以下に、同様の意味を持つ「ようだ」を含む例文を挙げる。

(3) 明日、東京駅に3時に集合だったら、1時に家を出るようだ。（作例）

《明日、東京駅に3時に集合だったら、1時に家を出なければならない。》

(4) (赤ん坊を風呂に入れるときに使う、専用の椅子について)

買わなきゃよかったなんて、後で言うようになっちゃう。

《買わなければよかったなんて、後で言うことになっちゃう》

(5) (出かけようとしている話し手が空模様を見て、自分に言い聞かせるように)

傘、もってくようだな。

《傘、もっていかなければならないな》

(6) (おむつは一日に) 下手すると最低だって5,6回はかえるようでしょ。

《下手すると最低だって5,6回はかえなければならいでしょ》

(7) (法要に出かける日の朝、夕食の準備をどうするかについて姑と嫁が話しているときに、姑が嫁に対して) 夕飯は家で食べるようだから (あたしの分も用意しといてよ)。

《夕飯は家で食べることになるだろうから…》

ところで、松田勇一、高丸圭一 (2008)、松田勇一、高丸圭一 (2009) は、「栃木方言」⁷ を研究し、動詞に接続する「よう」を、「当為表現」であるとし (松田勇一、高丸圭一 2008: 19)、「なければならぬ」「なければいけない」という意味を表す、としている。また、「ええ、もう一度、書類、作るようですね」という文について考察し、「作らなきゃならぬですね」よりも「柔らかく、婉曲的な言い方になる」と記述している (松田勇一、高丸圭一 2008: 21)。しかし、この記述は、座間市の方言の「よう」にはあてはまらない。たとえば、次の状況で「よう」が使えるのである：息子は歯医者予約が入っている。もうそろそろ出かせないと間に合わなくなる。それなのに、悠長に本を読みふけていて、なかなか出かせようとしない。そのようなとき、母が怒って次の例文 (8) のように言うことが頻繁にあるのである。

(8) 早くしなさいよ。もう出かけるようだよ!

《早くしなさいよ。もう出かせないとだめだよ!》

つまり、座間市の方言における「よう」は、婉曲表現ではけっしてない。

ところで、すでに確認したように、先行研究では問題の「ようだ」は「必要」を表すとされている。

しかし、もし仮にその「必要」ということばを普通の意味で理解すると、文が正確に解釈できなくなることもある。例えば次の例 (9)：

(9) (赤ん坊を一緒に外に連れて行ったら、その赤ん坊は)

⁷ 松田勇一、高丸圭一 (2008), (2009) は、栃木県のどこの方言を研究対象としているのかを、明示的に述べていない。また、栃木県の方言を研究対象にしていながら、森下喜一 (編) (1991) の存在は知らないらしい。

悪い空気吸うようだから（一緒に連れて行かないほうがいい）

《悪い空気を吸うことになるから…》

例文 (9) が述べているのは、赤ん坊と一緒に外に連れて行けば、当然の結果として（自然な成り行きとして）その赤ん坊は「悪い空気を吸う」という動作をすることになる、困ったことだ、ということであって、「赤ん坊が悪い空気を吸う必要がある」ということではない。このように、制御不可能な動作を表す動詞に「ようだ」がつく場合があり、その場合は「当然の結果」「自然な成り行き」を表していると解釈される。同様の例として、例文 (10) を挙げる。

(10)（北朝鮮の飢餓を報道するテレビ番組で、痩せ細った子供が寝ているのを見て）

人間かと思うようじゃんよー。

《（まるでこれが）人間かと思うほど（ひどい有り様）じゃないかよ》

同様の例として、もう一つ例文 (11) を挙げる。

(11)（病院へ少し遅めに行くつもりだと言っている嫁に対して姑が）

混むと、またイライラするようになっちゃうじゃん。

《混むと、またイライラすることになってしまわないか》

例文 (11) も「イライラする必要がある」といっているのではない。「混めば自然な成り行きでイライラすることになる」と述べているのである。必要というよりは、当然の結果・自然な成り行きを表している⁸。

ここまでは「ようだ」がどういう意味で使われるかについて述べてきた。次は「ようだ」が使えない場合を述べる。

ある事態が必要であると判断する際の根拠が自然の法則や、社会の規則などの場合は、「ようだ」は使われない。それを表すには「ようだ」ではなく、「…しなきゃ」が主に使われる。例えば、《ポイ捨て禁止条例は守らなければならない》という意味で、「ポイ捨て禁止条例は守るようだ」とは言えない。普通は、「ポイ捨て禁止条例は守らなきゃ」と言う。

ところが、違反が話し手に不利益をもたらすものとしてとらえられた場合は、たとえば「明日からポイ捨て禁止条例が施行されるそうだけど、罰金が2万円もとられるようじゃ、ポイ捨て禁止条例は守るようだな」のように、「ようだ」の使用が自然になる。状況（高額な罰金が課されること）を考えると、当然の結果・自然な成り行きとして、「ポイ捨て禁止条例を守る」という動作を話し手がすることになるという意味と、その動作の遂行に伴う「不本意だな、困ったことになるな」という気持ちを話し手がつぶやくという発話行為のあり方に、「ようだ」の意味がぴたりとあうようになるからだろう⁹。

最後に、本稿では主な考察の対象とはしなかった「ようだ」の用例を2つ挙げる。どちらも、共通語の「ようだ」がもつ意味が表されている例である。

(12)（店で見かけた乳母車について）

だけど、ちょっと小さいようだなあと…

⁸同様に、座間市の方言では、「（そんなにワサビがいっぱいついた寿司なんか食べたら）泣くようだよ《泣くことになるよ》」、「（そんなとこに本なんか置いといたら、あとで）転ぶようだよ《転ぶことになるよ》」などといって、大人が幼児に警告するのをたびたび耳にする。ここでは、制御不可能な動作を表す動詞「泣く」「転ぶ」に「よう」が接続しているわけである。加藤昌彦によれば、栃木県宇都宮市の方言では、必要の「よう」は制御不可能な動作を表す動詞にはきわめて接続しにくいという（加藤昌彦氏、私信）。

⁹この「ポイ捨て禁止条例」の例についての考察は、加藤昌彦氏との議論の中で得られた。

《だけど、ちょっと小さいようだなあとって…》 [推定用法]

(13) (小海老の佃煮を食べているときに)

大きいの食べんと口ん中にとげが刺さっちゃようだ。

《大きい目の (小海老を) 食べると、口の中にとげが刺さっちゃようだ》

[「そのような感じがする」という意味の婉曲用法か]

「ようだ」の全体像を理解するためには、こうした「推定用法」「比況・婉曲用法」も含めて包括的に考察する必要がある。今後の課題としたい。

4 おわりに

本論では、共通語では「推定」「比況」の意味を持つ「ようだ」が、神奈川県座間市で話されている方言では「必要」の意味を持つという先行研究を踏まえ、「必要」を表す「ようだ」について次のことをおこなった。

(一) 形態・統語的側面をより詳細に論じた。

(二) 用例の検討を通じて意味分析をより詳細に行い、「ようだ」が次の意味を持つことを論じた：

[A] 当為判断・必要を表す (特に、制御可能な動作について述べる場合)。「…しなければならない」。

[B] 当然の結果・自然な成り行きを表す (特に、制御不可能な動作について述べる場合)。「…することになる」。

[C] 多くの場合、「話し手は問題の事態を「不本意だ、望ましくない」と思っている」という含みを持つ。

付録 他の諸方言における必要を表す名詞「よう」

この付録では、必要を表す「よう」が東北・関東・島根の各地の諸方言にも見られることを概観する。自立名詞用法、動詞接続用法 (後述) またはその両方が、地域により、異なったかたちで分布している。

1 岩手県気仙地方の方言 (ケセン語) における必要を表す名詞「よう」

岩手県気仙地方の方言は、山浦玄嗣氏 (1986), (2000), (2008) において詳細に記述されている。ケセン語の、必要を表す「よう」には、動詞接続用法と、自立名詞用法とがある (山浦玄嗣氏、私信)。

1.1 「よう」の動詞接続用法

山浦玄嗣 (2000: 1000) はケセン語の *yō* (よう) が動詞に接続する用法 (動詞接続用法と呼ぶことにする) を次のように説明している：

動用詞の連体形に下接して、その動用詞の表現する行為が主体にとって必要なものであることを表す抽象静体詞である。但し、*yō dar*, *yō de nag' í gā?* という形で用いられ、そのほかの辞が下接すると (2) に示すような類推、類似、様態の表現になる。この語は、先行文節の内容を、必要性の色付けをした空白の概念空間に取り込み、その概念が静的属性であるとの認識を与える抽象体言である。この表現

は極めてケセン語的なもので、共通語をペラペラ喋っているつもりの人でも、この言い回しの癖だけは最後まで残るようである。共通語で「～ようだ」と言うのは類推・推察を表す表現で、たとえば「ペンを持っているようだ」というのは「ペンを持っているらしい」という意味である。ところがケセン語ではこれは「ペンを持っている必要がある」という意味になる¹⁰ので、まるっきり意味が違う。ケセンに来たばかりのほかの地方の人はこれですいぶん戸惑うらしい。ちなみに「ペンを持っているらしい」というのはケセン語では *Pên mod' tér dar hū dar*. 直訳すれば「ペンを持っているふうだ」と言う。「～ふうだ」という表現は一見共通語にもありそうだが、実はほとんど使わないので、共通語を学びたいケセン人は注意が必要だ。

以下に山浦玄嗣(2000: 1000)から例文を引用する：

Tenkiyohô de a kôsikagúridi a 60-pāsěnto dar dī gara, kasâ mod' té igu yō dar. 天気予報では降水確率が60%だというから、傘を持っていく必要がある。

Yono hitô de a hanasi á tizir-nga' ar' bé gara, ore a igu yō dar nâ. ほかの人では話が通じなからうから、わたしが行く必要があるな。

Anbai a warigi. Kusírî nomú yō dar. 具合が悪い。薬を飲まなければならない。

Gaikogu no ogyakusan ġa kurú n' de a, eġō benkyō siru yō dar. 外国のお客さんが来るのでは、英語を勉強しなければならない。

Warasiādo a asitá a ensogu dar dī gara, kore gara musibi kosir airu yō dar. 子供らが明日は遠足だというから、これから握り飯を作らなければならない。

Omai mo kurú yō de nag' i? お前も来る必要があるのではないか？

ケセン語では、動詞接続用法の「よう」は、山浦玄嗣氏によれば、[C]の「不本意だ」という含みを必ずしも持たないという（山浦玄嗣氏、私信）。たとえば：気仙の生んだ歌手・千昌夫が、ときどき故郷に帰ってコンサートをする。みんな大喜びで聞きに行く。残念ながら自分は千昌夫の大ファンなのに、これまで一度も生の歌声を聞きに行ったことがない。ところが、その千昌夫がいよいよ引退するそう。その最後の公演が4月1日に大船渡のリアスホールであるという。これを逃したら悔いが残る。そんなとき「ううん、これア何としても行くようだ！」と、万障を繰り合わせる。

これに対して、座間市の方言の「よう」の動詞接続用法は、上記の状況では使いにくい。[C]の含みが出てしまうのである。また、「これは恵子ちゃんの形見の品だから、とっておくようだな」というのも、座間市の方言の場合は、《本当は捨てたいのだが、いやいやとっておかざるをえない》というニュアンスが出てしまい、恵子ちゃんに対して失礼な言い方になってしまう¹¹。ところが、ケセン

¹⁰ 座間市の方言では「ペンを持っているようだ」は《ペンを持っている必要がある》という意味にはならない。「ペンを持っとくようだ」なら必要の意味になる。同様に「店ひらくには免許もってるようだ」も必要の意味にはならない。「店ひらくには免許とっとくようだ」などとしなければいけない。

¹¹ 加藤昌彦氏によれば、栃木県宇都宮市の方言でも、座間市の「よう」と似た含みが出てしまうため、「これは恵子ちゃんの形見の品だから、とっておくようだな」とは言いにくいという。また、「コンサートに行くようだ」も、いやいや行くような感じがして、変な感じがするという。無理やり誘われたので、本当は行きたくないコンサートに行かねばならない、そんなニュアンスを感じるという（加藤昌彦氏、私信）。この[C]の含みが出やすい点で、宇都宮市の方言は、ケセン語よりもむしろ座間市の方言に近いと言えよう。

語では、そのようなニュアンスを持つことなく、動詞接続用法の「よう」が使えるという。これは、座間市の方言とケセン語とにおける「よう」の動詞接続用法の大きな違いである。

ケセン語では、「よう」は制御不可能な動作を表す動詞「泣く」「死ぬ」などにも接続しうる（山浦玄嗣氏、私信）。この点で、ケセン語の「よう」と座間市の方言の「よう」は類似している。例：

「サキさんの話ィ聞いてだばんで、とても、泣ぐようだでば！」

《サキさんの（悲しい）物語を聞いているだけで、とても泣かずにはいられませんよ!》

「外ァなにもかにも寒くて寒くて、凍み死ぬようだぜァ！」

《外は何ともかんと（形容できないほど）寒くて寒くて、凍死せずにはいられないほどだぜ!》

「あの糞真面目な面ァして、ぬげぬげどあんなな嘘ォ語るんだ。まったく、笑うようだでば！」

「腹ァ減って、腹ァ減って、てァって（＝絶え入る＝ひもじさのあまり倒れて意識も朦朧となる）しまうようだ。」

「街道（けァド＝道路）ァデラデラど凍みでっから、そんな底のツルツルヅウ靴ゥ履いで歩（あり）ったら、ひっ転ぶようだぞ。」

「あの美人にあんなに色っぼぐ迫らィだら、お前、男たるもの、何としたって奮い立つようだべど。」

1.2 「よう」の自立名詞用法

山浦玄嗣氏の著作には記載がないが、自立名詞として用いられる用法（以下、自立名詞用法と呼ぶ）もある。その例：

「この古雑誌ァ要（よう）が?」「ああ、要だ、要だ、要、要! なげんな（＝棄てるな）よ!」（山浦玄嗣氏、私信）

2 山形県庄内地方の方言における必要を表す名詞「よう」

山形県方言研究会（編）（1970）には次のようにある：

「ヨダ」入用だ。ほしい。「この銭は一」最上郡。鶴岡。酒田。西田川郡加茂。飽海郡平田ほか庄内。「ユーダ」〈用だ〉入用だ。東田川郡大泉。

また、佐藤雪雄（1992）には次のようにある：

「ヨダ」必要だ。要る。ほしい。「こんなはヨダ」（これは必要だ）。

佐藤亮一氏の調査によれば：(a) 東田川郡三川町（山形県庄内方言）の 62 歳男性の話者には自立名詞用法がある。(b) それに対し、山形市（山形県内陸方言）の 72 歳男性の話者には自立名詞用法もない（三川町、山形市ともに動詞接続用法はない）。

以上から、山形県庄内地方で、「よう」が自立名詞用法で使われていることは確実である。

佐藤亮一氏が調べたところでは、山形市の話者は「おれは明日役場に行くヨダ」（おれは多分あす役場に行くことになるだろう）と言えるそうだ。《（はっきりはしないが、諸般の事情を勘案すると）役場に行くことになるだろう》というニュアンスがあるという。これは注目に値する。というのは、共通語では推定の意味で、「彼は明日役場に行くヨダ」とは言えても、動作主が話し手自身である場合には「私は明日役場に行くヨダ」とは言わないと考えられるからだ。山形市の方言における「ようだ」の用法については、さらに考察が必要である。

3 福島県東白川郡塙町における必要を表す名詞「よう」

金澤真紀 (2006) は、福島県南部における「ヨーダ」を調べている。調査は10歳代から70歳代の話者を対象におこなっている。金澤真紀 (2006) によると、福島県東白川郡塙町の必要を表す名詞「よう」には、動詞接続用法と、自立名詞用法とがある。動詞に接続する場合は、「～しなければならない (だから自分もそうするつもりだ)」という用法と、「～する必要がある (客観的に必要性がある)」という二つの用法がある。動詞接続用法の「よう」を含む例文を挙げる：

「明日テストがあるので (私は) 勉強するよーだ。」 「大会が近いから (私は) 練習するよーだ。」

自立名詞用法の「よう」を含む例文を挙げる：

「お弁当ヨーじゃないよね?」 「プリントって今日ヨーナの?」 「着替えがヨーダ。」

4 栃木県宇都宮市の方言における必要を表す名詞「よう」

加藤昌彦氏のウェブページ「栃木のことば」

(<http://www.hcn.zaq.ne.jp/myattun/tochi/>)¹²

によると、栃木県宇都宮市の方言にも、必要を表す名詞「よう」がある。動詞接続用法を次のように記述している：

(～する) ようだ yoHda

[多:多]～しなければならない、～する必要がある。これは埼玉県西部 (川越など)、群馬県、東京都西部 (八王子など)、神奈川県などにもある言い方で、いわゆる標準語にはありません (畏友野島氏の発見による。野島本泰「神奈川県座間市で話されている方言における「ようだ」」『日本言語学会 128 回大会予稿集』2004 を参照されたし)。この用法の「ようだ」を知らない人にはなかなかニュアンスが伝わりにくいのですが、次のように使います。

「雨がふってきたからもちっと待つようだな」 (雨が降ってきたからもう少し待つ必要があるな)、「隣が募金してみて一だながら、うちも払うよーだな」 (隣が募金したようだから、うちも払わねばならないな)、「この報告書もう一度書きなおすようですか?」 (この報告書はもう一度書きなおさなければなりませんか?) など。この「ようだ」は、これを持つどの方言でも頻繁に出てくるので重要です。もちろん栃木弁でも。使っている本人達は標準語にもある言い方だと思って使っています。この前タレントのヒロミ (八王子出身) もテレビでこれと同じ「ようだ」を使っていました。栃木では、次のように、「(～な) くらいだ」の意味でも使います。「このあかんぼ、かわいくてたべっちゃいたいようだな」 (この赤ん坊は可愛くて食べてしまいたいくらいだな)、「うらやましいよーだ」 (羨ましいくらいだ)。

加藤昌彦氏は、最近、宇都宮市にも自立名詞用法があることを発見した。例：「東京に行くには1万円はようだな」。最初はお父様 (70 歳代) で確認し、次にお母様 (60 歳代) で確認したとのことである。お父様は、加藤氏が訊いてもいないのに、「これは漢字で書くとしたら「必要」の「要」だんべな」と教えてくれたという。

¹²2010年2月8日にアクセスした。

不思議なのは、動詞接続用法（例：「明日また来るようだ」）の「よう」は加藤氏も使うのに、自立名詞用法の「よう」は、加藤氏は聞いたこともないということである¹³。

5 埼玉県久喜市の方言における必要を表す自立名詞「よう」

久喜市教育委員会（編）（2009）に、「ヨーダ」（必要だ）の次のような用例が記録されている。
コドモガイチャサトーワヨーダンベッテユッテ
《子供がいては砂糖は必要だろうっていつて》

6 秋田県の方言における必要を現す自立名詞「よう」

秋田県教育委員会（編）（2000: 604）に秋田県の方言として、以下の記述がある。

よー^んだ よんだ・よ^んだ {北・山・南・河・由・仙・平・雄} 入り用である。「用だ」。
必要、入用なことをいう。【用例】にぐ よー^んだて かって こえであ。（肉がいるから、
買って来いよ。）〈飯田川町〉【全国分布】「よー」岩手、島根県隠岐島、「よ」山形

地域は県内を9つに分類して表記している（鹿：鹿角市・鹿角郡；北：大館市・北秋田郡；山：能代市・山本郡；南：男鹿市・南秋田郡；河：秋田市・河辺郡；由：本荘市・由利郡；仙：大曲市・仙北郡；平：横手市・平鹿郡；雄：湯沢市・雄勝郡）

地域名に下線を付してゴシック体で { } 内に示されているものは、「今も使う」「昔は使った」と回答した人が1人でもいた語である。

7 新潟県下越地方の方言における必要の「よう」

大橋勝男（2003: 257）に次の記述がある：ヨンダ（形動）必要だ。要る。〔例〕「それ俺ヨンダ。」
<下>=下越地方

8 福島県南相馬市の方言における、必要を現す名詞「よう」

新妻三男（1973: 167）から引用する：

ヨー（名）

入用。用の字音。それに「で、だ」がついて「用で、用だ」と活く。

ヨーで取って置えたんだ、むだにつかーな。

東京さ行くには何でかんで二十円はヨーだ。

以下の記述は、小林初夫氏の私信による。

「ヨー」に「で、だ」以外にも「な」がつくこともある。

保険証って今日ヨーなの？（保険証って今日要るの？）

肯定では「ヨー」を用いるが、否定では「イラネ」を用いるという。

ほれぐれえの仕事さ、大人3人もヨーダガ？（それくらいの仕事に大人3人も要るか？）

¹³ 嶋均三（2000）は栃木県北部の俚言集だ。そこに「ようだ」という項目があり、次の例が出ている（嶋均三 2000: 212）：「何だ、このスルメは、いんねのが？」「ようだ」（訳：「何だ、このスルメは？ 要らないのか？」「要る」）嶋均三氏は旧・那須郡黒羽町の出身である。自立名詞用法の「よう」が宇都宮市と黒羽町の両方にあるということは、栃木県のかなり広い地域で自立名詞用法が分布していると考えられる。

ほれぐれえの仕事なら、大人3人もイラネ。(それくらいの仕事なら、大人3人も要らない。)

9 島根県の方言における、動詞に接続し必要を現す名詞「よう」

国立国語研究所(編)『方言文法全国地図』

(http://www2.kokken.go.jp/hogen/outline/gaj/gaj_index.html)¹⁴ における第208図の「義務」の表現「行かなければならない」を見ると、島根県の複数地点に「行くような」という表現が分布していることがわかる。中国地方の方言では、形容動詞は連体形が終止形に相当する働きをすることがある。したがって、島根県の「行くような」は関東地方の「行くようだ」に相当するものと解釈できる。

尚学図書(編)(1989)にも次の記述がある。

よーだ(助動詞)しなければならぬの意を表わす。岩手県気仙郡「うちでも見舞いに行くようだ」「そんなの食べて、腹こわすとわるいから、捨てるようだ」(佐藤文治 1965『気仙ことば』)、島根県石見(広戸惇・矢富熊一郎 1963『島根県方言辞典』)「病気をすれば学校を休むよおなけえ、用心せえ」(石田春昭 1932『岩見山間部方言』)《やー》島根県仁多郡「病気で学校を休むやーな」(広戸惇・矢富熊一郎 1963『島根県方言辞典』)

10 島根県隠岐島の方言における、必要を表す名詞「よう」

隠岐の島町の女性(50代)¹⁵によると、必要を表す名詞「よう」は次のように用いられる。

ようなけんもってこいなあ(欲しいから持って来いよ)

ような、ような。(欲しい、欲しい。)

よーだんだけんもらった。(欲しいからもらった)

隠岐島の方言には動詞接続用法はないという。

11 古典文学における必要を表す名詞「よう」

『大辞林』の「用」の項目に次のようにある：

よう【用】(名・形動ナリ)必要なこと。また、そのさま。入用。有用。「さはれ、いづれもいづれも一果てなば賜(た)びてむ/落窪1」「かやうの所に馬など一なる物ぞかしとて/宇治拾遺7」

三谷栄一、稲賀敬二(校注・訳)(1972)、および、小林智昭(校注・訳)(1973)を参照し、『落窪物語』『宇治拾遺物語』で「用」で表記されていることを確認した。

この「よう」が東北から関東にかけて分布する、「よう」の自立名詞用法の起源であり、さらには「…せざるをえない」などの意味を表す動詞接続用法につながった可能性がある。両用法の歴史的関係の研究は、今後の課題である。

¹⁴ 2010年2月8日にアクセスした。

¹⁵ ご出身は中村、結婚して以後、五箇にご在住である。

参考文献

- 秋田県教育委員会（編）（2000）『秋田のことば』無明舎出版
- 大橋 勝男（2003）『新潟県方言辞典』東京：おうふう
- 金澤 真紀（2006）「福島県南部における「ヨウダ」の実態について」文教大学文学部（日本語日本文学科）卒業論文
- 久喜市教育委員会（編）（2009）『聞いてみよう久喜の話しことばCD版』久喜：久喜市教育委員会
- 国立国語研究所（編）（1989-2006）『方言文法全国地図』東京：大蔵省印刷局
- 小林 智昭（校注・訳）（1973）『宇治拾遺物語』（日本古典文学全集 28）東京：小学館
- 佐藤 雪雄（1992）『庄内方言辞典』東京：東京堂出版
- 嶋 均三（2000）『おもしろ方言あいうえお』下野新聞社
- 尚学図書（編）（1989）『日本方言大辞典』東京：小学館
- 新妻 三男（1973）『相馬方言考 改訂版』相馬郷土研究会.
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法<4> 第8部 モダリティ』東京：くろしお出版
- 野島 本泰（2004）「神奈川県座間市で話されている方言における「ようだ」」『日本言語学会第128回大会 予稿集』73-78頁
- 日野 資純（1952）「相模方言の素描（その方言区画）」『国語学』9
- 日野 資純（1961）「神奈川県の方言」神奈川県立図書館シリーズ6『神奈川県歴史』山川出版社
- 日野 資純（1984）「神奈川県の方言」飯豊 毅一、日野 資純、佐藤 亮一（編）『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会
- 平山 輝男（1993）『現代日本語方言大辞典 第6巻』東京：明治書院
- 松田 勇一、高丸 圭一（2008）「栃木方言における当為表現「～ヨウダ」の用法」『宇都宮共和大学論叢』第9号：19-31頁
- 松田 勇一、高丸 圭一（2009）「栃木方言「～ヨウダ」の用法と使用実態—相手の年齢差と親疎による表現の使用差—」『茨城大学留学生センター紀要』第7号：65-77頁
- 三谷 栄一、稲賀 敬二（校注・訳）（1972）『落窪物語 堤中納言物語』（日本古典文学全集 10）. 東京：小学館
- 森下 喜一（編）（1991）『栃木のおもしろ方言』鹿沼市：栃の葉書房
- 山浦 玄嗣（1986）『ケセン語入門』岩手県大船渡市：共和印刷企画センター
- 山浦 玄嗣（2000）『ケセン語大辞典』秋田市：無明舎出版
- 山浦 玄嗣（2007）『ケセン語の世界』東京：明治書院
- 山形県方言研究会（編）（1970）『山形県方言辞典』山形：山形県方言研究会

ブヌン語の、「望ましくない状態」「姿勢」を表す形容詞の派生に 用いられる接頭辞 **matu-** —— 形態分析と意味記述

野島本泰

1 はじめに

本稿ではブヌン語の、「望ましくない状態」を表す形容詞の派生に用いられる接頭辞 **matu-** をとりあげ、形態分析と意味記述を行う¹。

ブヌン語は、台湾の中南部で話されている言語で、オーストロネシア語族に属する。ブヌン語には北部方言、中部方言、南部方言の三つの方言があり（厳密に言えば方言群）、本稿の内容は、筆者が1994年から高雄縣那瑪夏郷（旧 三民郷）民生村でおこなっている言語調査で得た南部方言の言語資料がもとになっている。調査は主にブヌン語と日本語で行い、補助的に媒介言語として中国語を用いた。

南部方言の音素目録は以下のとおり：p, t, k, ' [ʔ], b, d, s, h [χ], v, z [ð], m, n, ng [ŋ], l [ɺ] [以上、14の子音]；i, a, u [u~o] [以上3つの単母音]。アクセントは、音韻的に弁別的ではない。2音節以上からなる語の場合、語末から数えて2番目の母音を含む音節が高いピッチで発音される。

基本語順は VS/VAP。主に従属部標示 (dependent-marking) 型。フィリピン型のヴォイス（いわゆる「焦点」）をもつ。格標示が名詞句の前におかれる小詞とともに、名詞句の末尾に現れる後倚辞指示詞によっても行われる。品詞は、統語的には内容語と機能語の二つの範疇を主とし、形態法により動詞、形容詞、名詞、代名詞、指示詞、間投詞などに細分される。

2 接頭辞 **matu-** の概観

接頭辞 **matu-** を含む語の例を挙げる。

- (1) (a) ma-sanglav 「青い、緑色の」
(b) matu-sanglav 「（痣になって）青くなっている」
- (2) (a) ma-bahis 「熱い、暑い」
(b) matu-bahis 「熱がある」
- (3) (a) ma-haliv 「乾いている」
(b) matu-haliv 「（木の枝が）枯れて乾いている、または、葉が枯れ落ちている」「（子供が栄養不足で）病気ばかりしている、元気がない」「（女が）子供が産めなくなっている」

¹本稿は、2007年11月に、信州大学における日本言語学会第135回大会でおこなった口頭発表をもとに執筆した。発表の際には多くの方からご意見を頂戴した。お名前を挙げることはできないが、ここに謝意を述べたい。

- (4) (a) ma-hatba 「屈強な、体が丈夫な」
 (b) matu-hatba 「(人や動物が死んでから時間が経過し) 肉がかたくなっている」

例 (1a), (2a), (3a), (4a) はいずれも接頭辞 ma-+語根からなる語で、特に価値判断を含まない「普通の状態」を表す。それに対し、例 (1b), (2b), (3b), (4b) はいずれも接頭辞 matu-+語根からなる語で、語根が表す状態が「けが」や「病気」「心身の脆弱」として、つまり「望ましくないこと」として発現していることを表す。接頭辞 matu- の、例 (1b), (2b), (3b), (4b) のような用例を、ここでは便宜的に「用例 A 群」と呼ぶことにする。

一方で、接頭辞 matu- は、次の (5b), (6b), (7b), (8b) のように、「姿勢」や「表情」を表す語にも少数ながら見つかる。例：

- (5) (a) min-duldul 「(寝ている状態から) 立ち上がる (動作)」
 (b) matu-duldul 「立ち上がった状態にいる (状態)」
 (6) (a) tin-sauk 「腰を曲げて顔を下に向ける、うつむく、かがむ (動作)」
 (b) matu-sauk 「うつむいた状態にいる (状態)」
 (7) (a) tin-ngalbah 「ぱっと (意思的に) 口をあける (動作)」
 (b) matu-ngalbah 「ぼかんと口を開けたままの状態にいる (状態)」
 (8) (a) ma-ngiit 「笑みを浮かべる、微笑する (動作)」
 (b) matu-ngiit 「笑みを浮かべた表情にいる (状態)」

例 (5a), (6a), (7a), (8a) はそれぞれ接頭辞 min-, tin-, tin-, ma- が語根に結びついてできている語で、いずれも動作を表す。それに対し、例 (5b), (6b), (7b), (8b) はいずれも接頭辞 matu-+語根からなる語で、動作を終えた結果の状態であることを表す。接頭辞 matu- の、例 (5b), (6b), (7b), (8b) のような用例を、ここでは便宜的に「用例 B 群」と呼ぶことにする。

2.1 先行研究の概観

ブヌン語の先行研究で、接頭辞 matu- を記述、分析しているのは、本論文の著者の知る限り、林太ほか(2001)だけである。林太ほか(2001)は、南部方言の形態論を概観したものである。接辞もほぼ網羅的に列挙し、ひとつひとつの接辞について数多くの例を挙げている点で、学術的価値は高い。しかし、接頭辞 matu- の記述・分析に関しては、林太ほか(2001)には以下の四つの問題点がある：

- (あ) 接頭辞 matu- を、接頭辞 ma- と接頭辞 tu- からなる複合接辞、つまり二つの接辞の連続²だとしながら、その根拠を示していない点。
 (い) matu- の表す意味を「状態を呈する」としか記述していない点。
 (う) 動詞を作り出す接辞だとしている点。
 (え) 生産性に何も言及していない点。

本稿では、以下、接頭辞 matu- の形態分析を行い、その意味を記述する。

²原語(中国語)では「複合綴」のうちの「前綴」となっている(林太ほか 2001: 92)。

2.1 接頭辞 *matu-* の形態分析

2.1.1 語基の種類

接頭辞 *matu-* は語根形態素に結びついて現れる（例外は後で述べる）。語根形態素は、自由形態素であることもあるし、また、拘束形態素である場合もある（拘束形態素の例は *matu-kulaaz* 「痩せている」³など）。

接頭辞 *matu-* は「名詞語根」と呼んでいいものと結びつくこともある。例：

(9) *matu-baning* 「人が誰かに何かするよう命令されたのに対し、それに従いたくなくて、炉のところで火にあたってじっと動こうとしない状態」（*baning* 「炉 (hearth, fireplace)」）

2.1.2 *matu-* は接頭辞連続か

林太ほか(2001)は接頭辞 *matu-* を接頭辞 *ma-*, *tu-* の2つが連続したものと分析している。本稿ではこの分析をとらない。その理由は、1つは *ma* と *tu* の間に他の接頭辞が入りうることがないこと、もう1つは問題の語形が (*ma* なしで) *tu* で始まることがないことである。

ただし、この分析にも例外が一つ見つかっている。「(以前は太っていたが) 痩せた」というのはどう言いますか?」と調査協力者に訊いたところ、次の二つの語形が出てきた、つまり、*matu-kulaaz=in* と *is-tu-kulaaz=in* の2つである (=in というのは新しい事態の成立を表す)。この2つめの語に含まれる接頭辞 *is-* は「弱まって...になる」といった語を派生する接頭辞で、次のような例にも見つかると、かなり生産的な接頭辞である：*is-dumdum=in* / *ma-dumdum=in*。「もう暗くなりました」。 *istu-kulaaz=in* の *istu-* を *is-+tu-* と分析するのであれば、*matu-kulaaz=in* の *matu-* も二つの形態素、つまり、二つの接頭辞の連続と見なすべきで、接頭辞 *tu-* を析出することになる。このような例が他にいくつあるのかについては今後の精査を待ちたい。

2.1.3 接頭辞 *matu-* と語根形態素の間に入り込む接頭辞 *ka-*

次の例 (10b) は、接頭辞 *matu-* と語根の間にも別の形態素（おそらくは接頭辞）が介在している唯一の例である。

(10) (a) *ma-z'av* 「恥ずかしい、恥ずかしがる」

(b) *matu-ka-z'av* 「恥ずかしい、恥ずかしがる」

この *ka-* は、おそらく被動者焦点形 *ka-z'av-un* 「…のことを恥ずかしがる、…に恥ずかしがらせる」や相互形 *ma-pa-ka-z'av* 「お互いに（相手のことを）恥ずかしがる」に現れている接頭辞 *ka-* と同じものである。例 (10b) でなぜ接頭辞 *matu-* と語根 *z'av* の間に接頭辞 *ka-* が介在するのかが不明である。語根の音素配列（2子音連続で始まる）が関係しているのかもしれない。今後のより詳しい分析を俟ちたい。

³ ちなみに、中部方言群のタクバヌアズ方言（南投縣信義鄉明德村）では、「痩せている」を表す語は *matu-dikla'* で、やはり接頭辞 *matu-* を含んでいる (cf. *ma-dikla'* 「悪い」)。

2.1.4 接頭辞 *matu-* を含む語の品詞

ところで、ブヌン語には、名詞や形容詞について「…になる」という意味を表す語を派生するのに用いられる接頭辞 *min-* がある（接頭辞 *min-* は動詞にはつかない。ただし少数の例外があるが）。例：

- (11) (a) *min-danum* […になる－水]「水になる、溶ける」 (cf. *danum* 「水」)
(b) *min-ma-sial* […になる－形容詞派生接頭辞－よい]「よくなる」 (cf. *ma-sial* 「よい」)

この接頭辞 *min-* が、「接頭辞 *matu-* + 語根」のさらに前に結びつきうることがわかっている（許容度はあまり高くないようであるが）。例：

- (12) (a) *min-matu-bahis* […になる－接頭辞－熱い]「熱が高くなる」
(b) *min-matu-kulaaz* […になる－接頭辞－悪い(??)]「痩せる」

この事実を、「接頭辞 *matu-* + 語根」が動詞ではなく形容詞であることを示していると思われる。

2.1.5 接頭辞 *matu-* の意味記述

林太ほか (2001) は接頭辞 *matu-* の表す意味を「状態を呈する」としか記述していない。それは、第2節で A 群と B 群にわけた 2 つの異なる用例群をひとつにまとめて両者に共通する意味を抽出した結果である。接頭辞 *matu-* を含む語には本論文の著者の考えでは「意味の焦点」が 2 つあり、ひとつは用例 A 群の「望ましくない状態」であり、もうひとつは用例 B 群の「姿勢、表情」である。とりあえずこの 2 つに大別しておいてから、両群にまたがる用例やどちらにも入らないように見える用例を検討するほうが妥当だと思われる。

用例 A 群と用例 B 群は完全にわかれて存在するわけではない。たとえば (7b) の *matu-ngalbah* 「ぼかんと口を開けている（状態）」は、具体的にどんな場合に用いられるかということ、例えば「いいたいことがあるのに、言葉が出てこない」「ひとが目の前で歌っているのを聴いて、口を開けっぱなしにしている」「空腹時に他人が食べているのを見て、口を開けっぱなしにしている」など、「口を開けた状態にしている」のを「みっともない」と判断している場合である（ただ単に「口を開けている（状態）」を指す中立的な語としては *ma-ngalbah* がある）。したがって、(7b) は用例 A 群と B 群のどちらにも属するといえるのである。同じことが次の (12) についても言える。

- (12) (a) *ma-nuas* 「声がしゃがれている、かすれている」
(b) *matu-nuas* 「風邪をひいて声がしゃがれている、例えばカラオケで歌いすぎて声がかすれている」

次の (13b) も A 群、B 群のどちらに入るのか、はっきりしない例である。

- (13) (a) *mal-ma-mangha* 「顔を上に向けている、仰ぎ見ている状態にいる」
(b) *matu-mangha* 「顔を上に向けている、仰ぎ見ている状態にいる」

例 (13b) は一見したところ B 群に入るとと思われる（「姿勢」を表している）。しかし、この語が使われるのにふさわしい状況を尋ねてみたところ、たとえば「上ばかり見て、下を（道を）よく見ないから、転んだ」といったことを述べるのに使われるとのことだった。つまり、この語の使用が

ふさわしいのは、「顔を上に向けて、空を仰ぎ見ている姿勢」を「望ましくない状態」としてとらえる場合らしいのである。(13b)は、A群に入れてもいい可能性があることになる。

また、例(9)も、「炉のところで火にあたって、じっとして動こうとしないでいる状態」を表している点では用例B群に入るようにも見える。けれども、「怠惰」あるいは「意地っ張り」という「望ましくない状態」を表している点では用例A群に入るようにも見えるのである。

このように、用例A群と用例B群の二つは、中心的な用例では截然と別れるように見えるけれども、両者が重なり合う領域があるらしい。このことを上記の事実は示しているように思われる。

次は、用例A群にも用例B群にも属さないかのように見える用例である：

(14) (a) ma-nungsiv 「(場所が) 静かな」

(b) matu-nungsiv 「(人が) 声を出さないで押し黙っている、静かにしている」

(15) (a) ma-naskal 「うれしい」

(b) matu-naskal 「うれしい」

例(14a)は例えば「真夜中だから、静かだ(何も音や声がしない)」などというときに使われる。一方、例(14b)は「(集会で)誰かが話し出すのではないかと思って、声を出さないでじっと押し黙っている」などというときに使われる。「黙って声を出さないでいる」のは病気でも怪我でもないから用例A群には入らないように見える。しかし、姿勢や表情でもないから用例B群でもなさそうだ。(15b)はA群にもB群にも入らないように見える例である。

5 接頭辞 matu- と人称制限

次の例を見てみよう。

(16) (a) ma-hanimulmul 「孤独で寂しい」

(b) matu-hanimulmul 「一人で寂しそうにしている」

この2つの語の用法に関して一部の調査協力者から次の内省報告があった：「「私は寂しい」という場合、(16a)を使うことはできるけれども、(16b)は使えない。(16b)は寂しそうにしている人を見て、「あの人は…」と形容する場合に用いるのであって、話し手が自分自身の心の状態を形容するのにはふさわしくない」。これが事実だとすると、本稿で検討した接頭辞 matu- の意味とはどのような関係があるのだろうか。今後の詳しい分析を俟ちたい⁴。

6 接頭辞 matu- の生産性

接頭辞 matu- はどんな語根にも生産的につくというわけではない。これまで結びつきが確認されている語根は40数個しかない。ブヌン語には、人や物の性質や状態を表す語根が少なく見積もっても500個は存在する(おそらく1000個以上あるだろう)。これを考慮すると、上記の事実は接頭辞 matu- の生産性がきわめて低いことを示していると思われる。実際、第4節の意味記述に照らし合わせて「あってもよさそうなのに存在が確認できない語」が多数ある。例えば、ma-bahis「熱い」に対

⁴接頭辞 matu- の使用と人称制限がかかわる語の組は、ここで挙げた matu-hanimulmul 以外には見つかっていない。

応する *matu-bahis* 「熱がある」はあるのに、*ma-kazav* 「寒い」に対応する**matu-kazav* は存在しない。また、*min-duldul* 「座っている状態から立ち上がる」に対応する *matu-duldul* 「立っている」はあるのに、*min-dangkaz* 「横になっている状態から立ち上がる」に対応する**matu-dangkaz* は存在しない。

しかし、その一方で、比喩の原理で作られられたと思われる「新語」に接頭辞 *matu-* が含まれている、そういう用例が1つだけ見ついている。

(17) *matu-babu* 「(人が) 豚のように肥えている」 (cf. *babu* 「豚」)

「新語だ」というのは、調査協力者の内省報告によるものにすぎない。「自分が小さいころはこんな言葉はなかった」という意味の報告があったのである。仮にこの語がほんとうに「新語である」とすると、比喩の原理で「新語」が造られる際に、接頭辞 *matu-* の基本義がまだ生きていて、新語を造る際にその基本義が参照されたことになる。つまり、若干の生産性もあるとっていいように思う。接頭辞 *matu-* は、「限られた数の語に半ば化石化して埋没している接辞」というものではなく、「活きている接辞」だと見なせることになる。

7 結論

本稿の結論は以下の通り：

- (ア) 接頭辞 *matu-* は単一の形態素 (接頭辞) である可能性もある。しかし、二つの接頭辞、つまり接頭辞 *ma-* と接頭辞 *tu-* の連続だと見る可能性もある。
- (イ) 接頭辞 *matu-* を含む語の意味は、次の二つに大別できる：
 - [a] けがや病気、心身の脆弱をはじめとする、望ましくない状態。 (多数)
 - [b] 一定の時間持続する体の姿勢、顔の表情などの状態。 (少数)
- (ウ) 接頭辞 *matu-* を含む語は、大部分は動詞というよりはむしろ形容詞だといえる。
- (エ) 接頭辞 *matu-* はどんな語根にも生産的につくというわけではない。これまで接頭辞 *matu-* との結びつきが確認されている語根は 40 数個しかない。それほど多くはない。しかし、その一方で、比喩の原理で造り出されたと思しき「新語」に接頭辞 *matu-* が含まれているなど、若干の生産性も観察される。

謝辞

1994 年から高雄縣三民郷民生村で十数回にわたって行なってきた言語調査では、多くの方々にお世話になった。中でも、† 林星 (*Wani=Bukun Ismahasan*) 氏 (1916 年生まれ)、朱如寶 (*Lanihu Suhluman*) 氏 (1928 年生まれ)、周文罷 (*Bukun Takistaulaan*) 氏 (1928 年生まれ)、周銀能 (*Lanihu Takistaulaan*) 氏 (1942 年生まれ) には、ブヌン語の分析に関わる煩わしい質問につきあっていただき、多くのことを教えていただいた。ここに記して謝意を表す。

また、言語調査の一部は以下の財団などから経済的な支援を得ておこなった：三菱信託山室記念奨学財団、順益台湾原住民博物館 (林迺翁文教基金会)、日台交流センター (歴史研究者交流事業)、布施基金学術奨励費 (若手研究者研究費)、文部科学省科学研究費特定領域研究「環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究」、日本科学協会「平成 16 年度笹川科学研究助成」。ここに記し、謝意を表したい。

付録 1. 接頭辞 **matu-** を含む単語一覧

以下には、筆者が採集した、接頭辞 **matu-** を含む単語を、アルファベット順に並べた。

matu-babu 「<新>豚のように太る」 cf. **babu** 「豚」

matu-bahis 「熱がある」 cf. **ma-bahis** 「暑い、熱い」

matu-balva 「晴れている」

matu-baning 「<古>人に命令されても、囲炉裏のところで日に当たって、動こうとしない」 cf. **baning** 「囲炉裏」

matu-busluk (= **matu-haliv** と同義。) cf. **ma-busluk** 「乾いている」

matu-danghas 「(夕焼けで空が) 赤い」「叩かれたところが痣になり赤くなっている」 cf. **ma-danghas** 「赤い」 e.g. **bantas mais tal-hanunus-an hai, matu-danghas.**

matu-diav 「バナナが熟して黄色くなった状態 (= **matu-zaum**)」

matu-duhlas 「白くなっている、白みを帯びている、夜が明ける直前に空が白み始めている」 cf. **ma-duhlas** 「白い」

matu-duldul 「(すでに) 立ち上がっている状態にある」 cf. **min-duldul** 「立ち上がる、起立する」

matu-dumdum 「雲や霧が出てきて、暗くなる。雨が降りそうだ。」 cf. **ma-dumdum** 「暗い」 e.g. **na hudan-an i, matu-dumdum a dihanin=an.**

matu-haiklas 「死んだ動物の肉が、時間が経過して硬くなっている；肉を冷凍庫に入れたので硬くなっている」 cf. **ma-haiklas** 「硬い」 e.g. **bantas mais tin-puskuz hai, matu-haiklas.**

matu-haisun 「ご飯、おかずが腐って臭いがするようになった状態」 cf. **ma-haisun** 「ご飯、おかずが腐って臭いがする」 e.g. **haising=an hai, malbuntu=in hai, matu-haisun. saak-un. tahdupaian=in matu-haisun.** 「黴が生えている」

matu-haisbut 「人を見てもうれしくない、しゃべらない、顔が怒っている」

matu-haishais

matu-haliv 「(a) (木の枝が) 枯れて乾いている、(b) (生きている木が) 葉がない、(c) 子供が (栄養不足で) 病気ばかりしている、元気がない、(d) (女が) 子供が産めない」 cf. **ma-haliv** 「乾いている」

matu-halpispi 「髪がくしでとかしていないので、乱れている」 (= cf. **ma-halupatpat**)

matu-halput 「瓜 (**tangkui**) が日に当たってしぼむ。しわしわになる。形が変わってしまった状態」 cf. **ma-halput.** e.g. **'adii 'uvaaz=a hai, supah a kaun-un hai, nitu talsusuus. matu-halput.**

matu-hanimulmul 「さびしい、悲しい」 e.g. **laupang saitia pingaz mataz hai, nii tu kunata, ilumah sisivung matuhanimulmul. cf. ma-hanimulmul**

matu-hanivaang 「例えば女が子供にも死なれ、夫にも死なれ、ひとりぼっちで寂しくなり、自殺してしまいたいと思う」 **uka sui tu na siza pingaz tu uvaaz, matuhanivaang 'is'aang miliskin. na maaz a is-siza pingaz=tia. supah a 'iniliskinan. cf. ma-hanivaang**

matu-haspan 「動物の毛皮が (工程を経て) 柔らかくなった、着やすくなった」 cf. **haspan**

matu-hatba 「<古>=**matu-haiklas**」

matu-hauthaut 「地面に挿した木や柱が容易には動かなくしっかりしている；人が命令されても動かない、じっとしている状態」 cf. **ma-hauthaut**

matu-hayav 「長期間病気で寝ていて、顔色が悪くなる」 cf. **hayav** 「布」

matu-hula 「声がかすれている（長時間はなしをして）」 cf. ma-hula 「声がかすれている（風邪をひいたせいで）」

matu-hultis 「死んだ人が顔がこわばって口を開けられないでいる」 cf. ma-hultis

matu-kuis 「栄養不良や病気のために（子供が）大きくならないでやせ細っている」 cf. ma-kuis 「細い」

matu-kulaaz 「やせ細っている」

matu-laitaz 「ひとが一時間でできる仕事をのろのろやって三時間もかかるような状態」 cf. ma-laitaz

matu-laizu 「草が日に当たってしおれる；人が（暑いので）元気がない」 cf. tin-laizu 「しおれる」

matu-mangha 「（人と話をするときに直に相手の顔を見ないで）上を仰ぎ見ている状態」 cf. mal-mangha

matu-nailang 「こそこそ聞く」 cf. ma-nailang

matu-naingkal 「こそこそはっきり聞く（スパイが敵の行動を盗み聞きするように）」 cf. ma-naingkal

matu-naskal 「（ひとがお土産をくれて）うれしい」 cf. ma-naskal

matu-nuas 「声がしゃがれている（風邪をひいて歌えない）」 cf. ma-nuas

matu-nungsiv 「黙っている」 masial a adii uvaaz=a hai, matu-nungsiv isnava-an. 「あの子供はよい、教わるとき静かにしている」 cf. ma-nungsiv

matu-ngalbah 「口をぽかんと開けたままにしている（まるで話すことができないよう）」 cf. ma-ngalbah 「口を開けている」

matu-ngiit 「人を見るとうれしそうにしている、ユーモアがある」 cf. ma-ngiit 「微笑む」

matu-panu 「仕事をしろといわれても、（疲れているかだるいので）やりたくない状態。」 cf. ma-panu

matu-pushun 「肉（や魚）が腐って臭いがするようになった状態」 cf. ma-pushun

matu-salpu 「心配して、何も話さないで、泣かないで、見たら悲しそう（正確な意味がわからなかったため、調査協力者の日本語による内省報告をそのまま記録した）」 cf. ma-salpu 「心配する、だれだれがいらないのをさびしく思う」

matu-sanglav 「(1) 肉が腐って青みがかっている。(2) 叩かれたところ（尻など）が痣（あざ）になり青くなっている。(3) 相撲をとるときに馬力がない、元気がない。」 cf. ma-sanglav 「青い、緑の」

matu-sauk 「（顔を見られないように）うつむいている状態にいる」 cf. pis-sauk 「おじぎをする」

matu-savai 「makunivkuniv 負けたくない、勝ちたいとがんばっている状態」 cf. savai 「勝つ」

matu-suhdung 「かがんだ状態にいる」 cf. min-suhdung 「かがむ」

matu-suhtis 「??」 'asa tu matu-suhtis mais lus'an.

matu-suzuk 「命令されて、怒りたい、うれしくない」 cf. ma-suzuk 「とがっている」

matu-tahdung 「黒くなる、黒い状態を呈する」 cf. ma-tahdung 「黒い」

matu-taimang 「元気がなくて少し聞こえない」 cf. ma-taimang

matu-taula 「まったく聞こえない、長い間病気をして聞こえなくなった状態」 cf. ma-taula

matu-va'va 「木が腐って真ん中の芯だけが残り、かたくなった状態（家を建てる時土の中に入れても堅いから虫に食われない） cf. va'va 「木の真ん中の芯（堅い部分）」

matu-vaivi 「客が大勢来たので、純な酒 (mashing) に水を加えて味の薄い酒 (tamal) になったとき、matu-vaivi=in. という」 cf. vaivi 「違う」

matu-visvis 「??」

matu-zaingu 「??」 cf. ma-zaingu 「??」

matu-zaum 「冷蔵庫に入れておいた魚が、冷気（冷媒）がなくなって、やわらかくなった（食べられない）状態、バナナが熟して黄色くなった状態」 cf. ma-zaum 「軟らかい」

付録 2. ブヌン語の接頭辞 **matu-** と歴史的に関係があるかもしれない他の言語の接頭辞

サオ語には **matu-** という接頭辞が次の一つの語基で確かめられているという：/wishwish/ 'whirl around'；/matu-wishwish/ 'whirl, as a violent wind'。

トバ・バタック語には、**pa-** + **tu-** という接頭辞があり、きわめて望ましくないものを表す ("expresses a high degree of something undesirable") という (Nababan 1981:100)。以下は、Nababan (1981: 100) からの引用：paturápar 'suffer extreme famine; starve', from rápar 'go without food; suffer hunger'; patuŋÓŋÓŋ 'stand completely idle', from ŋÓŋÓŋ 'do nothing'; patusáOk 'be in utter confusion', from sáOk 'fry without fat'; turn over and over as in such frying'.

参考文献

Blust, Robert. 2003. Thao Dictionary. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office)

林太、曾思奇、李文甦、卜袞 (2001) 『Isbukun 布農語構詞法研究』台北市：讀冊文化

Nababan, P.W.J. 1981. A Grammar of Toba-Batak. Pacific Linguistics D-37. Canberra: The Australian National Univeristy

ヒャルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言の格体系

鈴木 博之

キーワード：ヒャルチベット語、格体系、能格

[要旨] 本稿では、中国四川省松潘県で話されるヒャルチベット語山巴 [sKyangtshang] 方言における格とその用法の包括的な記述に向けての素描を提示する。S/A/P を標示する格と S/A/P を標示しない格に分けて記述を進め、また特に能格の用法に注意して考察を試みる。

1 はじめに

本稿では、鈴木・供邱澤仁 (2009) に続いて、中国四川省阿壩藏族羌族自治州松潘県で話されるヒャルチベット語山巴 [sKyangtshang] 方言の格体系の記述を行う¹。ヒャルチベット語に属する方言の格体系は先行研究によって明らかにされてはいない。本稿はその不足を埋める性格も持つ^{2,3}。

チベット語は文語・各種方言ともに特定の条件下で動作主が能格で標示されるという特徴をもつ言語である。ところがヒャルチベット語では、必ずしも能格標識が現れない⁴。この点で本稿では、sKyangtshang 方言の格体系の素描とともに、特に能格に注目し、その用法について考察する。

2 格標識一覧

2.1 格標識の形態に基づく一覧

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
gə		属格
ɣə	能格	具格
ɣe	与格	与格/位格
nɛ: / nə		奪格
ɕã ^m bo		比較格
無標 (φ)	絶対格	(位格)

以上のうち、能格/具格および位格/与格はそれぞれ形態的に同じである。ただし格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、分離して扱う。なお、与格/位格は実際の発音上しばしば [ɣə] になる⁵が、格標識自体を発音すると [ɣe] となるため、/ɣe/とする。属格もまた、初頭子音が弱化し [ɣə] と発

¹ sKyangtshang 方言の概況は同論文を参照。ヒャルチベット語のチベット語方言群における位置づけは鈴木 (2009) を参照。

² 本稿の構成は澤田編 (2010) になるべく近づけている。同書には他のチベット語の格体系として、海老原 (2010)、星 (2010)、鈴木 (2010) が収められている。

³ ただし sKyangtshang 方言がヒャルチベット語全体を代表する格体系を備えているかどうかはまだ明らかにされていない。「ヒャルチベット語」という区分は筆者が提唱しているものであるから、周辺のヒャルチベット語諸方言やアムドチベット語、カムチベット語諸方言における格体系との対比も必要な作業である。

⁴ 一方、動作主を強調する目的でかなりの程度語用論的に能格標識を用いるチベット語方言もある (鈴木 2010)。

⁵ 実際鈴木・供邱澤仁 (2009) では与格をɣəと統一して記述した。

音されることもある。音声学上の変異を考えると、属格/能格/具格/与格/位格は事実上同一になることとなる。

一方、絶対格は無標であり、例文中に ϕ で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なるため、例文中に ϕ で示すものが位格と判断されることもある。

2.2 格標識と人称代名詞

人称代名詞の単数⁶および人を尋ねる疑問代名詞については、格によって音形式が変化する。

格	格標識	1人称	2人称	3人称	誰
絶対格	無標	ŋa / °ŋa	°tɕʰəʔ	tə / °kʰo	°sʰu
属格	gə	ŋə	°tɕʰi gə	°ti gə / kʰo gə	°sʰu
能格	ɣə	ŋi	°tɕʰiʔ	°ti / °kʰə	°sʰu
その他	ɣe など	ŋa ɣe	tɕʰəʔ ɣe	te ɣe / kʰo ɣe	°sʰu ɣe

1人称属格、疑問詞属格、各人称能格の場合は格標識を用いない1音節形式となる。疑問詞の場合、絶対格と能格は区別されない。

なお、話者によっては1人称単数能格を [ŋe] と発音する場合がある⁷。また、2人称の (°)tɕʰəʔ という形式は、人によっては (°)tɕʰoʔ となる場合もある。3人称形式は tə rə や kʰo rə というように rə を挿入する人もいる。これは格標識が独立の音形をもつ場合、格標識の直前に挿入される。

3 S/A/P を標示する格と用法

sKyangtshang 方言において、S/A/P は絶対格、能格、与格のいずれかで標示される。ただし、与格による標示の出現頻度は低い。

3.1 格と用例

1. 絶対格

自動詞の主語、他動詞の被動作主、感情動詞の主体、対象、自動詞の被使役者などを表す。場合により他動詞の動作主も絶対格で現れる。

自動詞の主語

- (1) ŋa ʰdɔ-go
私 [絶] 行く-[未来]
私は（これから）行きます。
- (2) nã ϕ mboʔ-ɣə
雨 [絶] 降る-[状]
雨が降っています。

⁶ 人称代名詞複数の場合は、語構成として必ず複音節であり、語末音節は tɕʰo である。この要素は音変化せず、各種格標識が後続することで格を表す。

⁷ sKyangtshang 方言において、通常/i/は [e] を異音に含まない。

他動詞の被動作主

- (3) ɲi °tɕʰəʔ ϕ ʰdzaɸ
私 [能] あなた [絶] 叩く
私はあなたを叩きます。
- (4) ɲi pe: jɪɸ ϕ °coŋ ma-ŋõ
私 [能] チベット文語 [絶] 学ぶ [否]-[経]
私はチベット文語を学んだことはありません。

感情動詞の主体、対象

- (5) ɲa °tɕʰəʔ {ϕ / γe} ʰga
私 [絶] あなた {[絶] / [与]} 愛する
私はあなたが好きです。

他動詞の動作主

- (6) ʰta ʃʰi: {ϕ / γə} °tɕʰəʔ ϕ ʰdzaɸ
[人名] {[絶] / [能]} あなた [絶] 叩く
タシはあなたを叩きます。
- (7) ʰdza ʰtsʰo {ϕ / γə} tɕʰəʔ γe °tɕə tsə ϕ ɕi-te
[人名] {[絶] / [能]} あなた [与] 何 [絶] 与える-[完]
ジャンツォはあなたに何をあげたのですか？

自動詞の被使役者

- (8) °ti °ɲa °tsʰə re °xʰoɸ ʰdzoɸ-γə
彼 [能] 私 [絶] こちら 来る させる-[状]
彼は私を来させます。

また、述語動詞文⁸の主語、述語を構成する名詞句はともに絶対格で標示される⁹。

- (9) ɲa peʔ ϕ jɪ
私 [絶] チベット人 [絶] [判]
私はチベット人です。
- (10) ɲa °ɕʰə nə ϕ joʔ
私 [絶] 家 中 [位] [存]
私は家の中にいます。

2. 能格

他動詞の動作主を表す。能格をとる動詞の場合、主語が人称代名詞単数の場合はほぼ確実に能格で表示されるが、一般の名詞の場合は能格標識を用いるかどうかは任意で、発話の意図により選

⁸ 「述語動詞」とは、星 (2003:5) の定義を参考にする。述語動詞文とは、いわゆる判断動詞と存在動詞を用いる文のことをさす。

⁹ ただし位置を示す名詞の後は位格と分析される。詳細は後述の位格の項を参照。

択可能である。ただし動作主、被動作主ともに名詞の場合、動作主には能格標識が付加されることが多い。能格をとる動詞は、たとえ発話に被動作主が現れなくとも能格で標示されうる。

(11) ɲi °tɕʰəʔ {φ / γe} peʔ h̄kɛʔ φ °h̄tso-go
私 [能] あなた {[絶] / [与]} チベット語 [絶] 教える-[未来]
私はあなたにチベット語を教えます。

(12) °h̄ta f̄hi: γə d̄e: ma φ f̄dzaɸ
[人名] [能] [人名] [絶] 叩く
タシはドマを叩きます。

(13) ɲi mə le:
私 [能] [否] する
私はしません。

(14) °tɕʰiʔ °tɕə tsə φ le:-go
あなた [能] 何 [絶] する-[未来]
あなたは何をするつもりですか？

また、使役文の使役者も能格で標示される¹⁰。

(15) ɲi te γe za ma φ °h̄tɕʰaʔ-tə °tɕʰuɸ-ŋō
私 [能] 彼 [与] ごはん [絶] 食べる-[名] させる-[経]
私は彼にごはんを食べさせたことがあります。

3. 与格

感情動詞の感情の向かう対象を表す用法と、被使役者を表す用法がある。前者については出現頻度が低く、与格標識は往々にして省かれる¹¹。

感情動詞の感情の向かう対象

(16) ɲa °tɕʰəʔ {φ / γe} f̄ga = (5)
私 [絶] あなた {[絶] / [与]} 愛する
私はあなたが好きです。

他動詞の被使役者

(17) ɲi te γe za ma φ °h̄tɕʰaʔ-tə °tɕʰuɸ-ŋō = (15)
私 [能] 彼 [与] ごはん [絶] 食べる-[名] させる-[経]
私は彼にごはんを食べさせたことがあります。

以上、格標示の具体例を示したが、次に動詞連続の場合について解説する。sKyangtshang 方言では、「～することが好きだ」「～して行く」「～しに来る」などは、単純な動詞連続で表すことができるが、そ

¹⁰ sKyangtshang 方言の使役文は動詞に使役を表す助動詞的要素 °tɕʰuɸ / f̄dzoɸ を加える方法とともに、使役の内容を表す動詞句を名詞化して「させる」を意味する動詞 °tɕʰuɸ を置いて形成される。後者の場合、使役者が能格で標示されるのは、動詞 °tɕʰuɸ が能格での標示を要求していると考えられる。

¹¹ 話者によっては、この与格による表示を文語やアムドチベット語などの外的要因による形式とし、sKyangtshang 方言の形式ではない、とみなすことがある。

の場合、動作主（主語）は「愛する」「行く」などでは絶対格に置かれるはずであるが、実際は「～する」の部分（第1の動詞）が能格をとる場合は能格で標示されることがある。

(18) ɲi °tɕo^htsə ϕ le: ^{fi}ga
 私 [能] テーブル [絶] 作る 愛する
 私はテーブルを作る（修理する）のが好きです。

(19) °nə ko zē nə ϕ °tɕ^{hi}? °k^hɯ °s^hoŋ
 これ 服 この [絶] あなた [能] かつぐ 行く
 この服はあなたが持っていきなさい。

ただし、動詞連続を形成しない以下のような場合は、最後の動詞の要求する格が現れる。

(20) ɲa tə tɕ^ho ϕ °hta-tə ^ɳqo-γə
 私 [絶] 彼ら [絶] 見る-[名] 行く-[状]
 私は彼らを見に行く途中です。

3.2 能格の用法

sKyangtshang 方言では、先に述べたように、一定の他動詞の動作主が能格で標示されるが、必ずしも能格標識が現れるわけではない。その場合は格標識として音形が存在しなくなるため、絶対格とみなされうる¹²。

現段階の調査では、能格標識の有無そのものが発話において意味的に大きな影響を与えることはないと思われるが、以下の場合には能格での標示が通例のようである。

- (a) 動作主が人称代名詞単数の場合
- (b) 動作主、被動作主ともに名詞の場合
- (c) 述語が非未来を表している場合
- (d) 動作主の有生性が高い場合

(a) 動作主が人称代名詞単数のときは、能格をとることのできる動詞ならばほとんどの場合で能格形が用いられ、絶対格形を用いると非文と判断されることもある¹³。

(21) {ɲi / *^{fi}ɲa} °hta f^{hi}i: ϕ ^{fi}dzaɬ
 {私 [能]/*^{fi}私 [絶]} [人名] [絶] 叩く
 私はタシを叩きます。

(b) 動作主、被動作主ともに名詞のときは、動作主を明示する必要性から、能格標識が用いられるという見方ができるが、実際の言語使用では能格標識が省略されることも高い頻度で見出せる。そのような場合、発話において動作主/被動作主が自明であることに起因する可能性が高いが、必ずしもそうではないこともある。

(c, d) 述語が非未来を表しているという場合と動作主の有生性が高い場合は先に述べなかったが、収集

¹² なお、Nicolas Tournadre 氏（個人談話 2008）によれば、チベット語はそもそも一定の動詞の動作主が能格で標示される構造を原初から持つ言語であるとし、sKyangtshang 方言のような能格・絶対格標示の揺れについて、能格標識の脱落によるものであると考えることを妥当とする。

¹³ 母語話者それぞれによって判断基準が違い、絶対格形を許容する人もいるが、絶対格形は文法的に非文とみなされないものの、発話として不自然さがあるという判断になる。

なお、人称代名詞の場合は能格標示の形態がいわば曲用という形式を取るため、独立した音形式を持つ能格標識を用いる場合とは異なって取り扱う必要性もあるだろう。また、この人称代名詞の事例は上注で述べた Tournadre 氏の見解を支持する1つの根拠ともなりうる。

した例文での能格の現れから判断すると、能格をとることのできる動詞で、その動詞が表す動作がすでに起こり継続または完了している場合、能格標識が未来すなわちこれから起こることを表す場合と比べてよく現れることがいえる¹⁴。また、動作主が人間または人格をもつと考えられる場合は能格がよく現れることがいえる。これらに関連するものとして、以下のような例があり、能格が現れることに違和感があるという母語話者の判断も見られた。

- (22) °zoɸ {φ / ?γə} °hɬsa φ ʰdze:-tʰə
 牛 {[絶] / ?[能]} 草 [絶] 食む-[完]
 牛は草を食べました。

以上の文では、「動作主、被動作主ともに名詞」で「述語が完了を表す」という2つの能格が現れやすい環境にあるが、動作主の「牛」は有生性が人間より低く、かつ動作主/被動作主の関係が常識の範囲内で固定されているなどの状況が動作主を能格で表示しにくい原因になっていることが考えられる。

4 S/A/P を標示しない格と用法

1. 属格

主に所有、所属、属性などの関係を表す。

- (23) ɲə °hka: jə:
 私 [属] 碗
 私の碗

- (24) °h[ɑ fʰi: gə °su
 [人名] [属] 本
 タシの本

なお、「～の（所有する）もの」という表現は、属格標識の代わりに名詞化接辞 tə がつくことで成立する。ただし注意すべきは、人称代名詞類の場合は属格を示す形式に tə がつく点で、その際 gə を伴う場合は gə を脱落させる。

- (25) °shu-tə
 誰 [属]-[名]
 誰のもの（ですか？）

- (26) {ɲə / °tɕʰi / °hlo zəŋ}-tə
 {私 [属] / あなた [属] / [人名]}-[名]
 {私 / あなた / ロゾン}のもの 注¹⁵

cf. *°tɕʰi gə-tə
 あなた [属]-[名]

2. 与格

S/A/P を表さない場合として、受領者を表す用法がある。形態的には位格と同一であるが、格標識が脱落するのはまれである。

¹⁴ しかし動作が完了している場合でも能格が現れない場合もある。cf. 例文 (7)。

¹⁵ 2人称単数属格は °tɕʰi gə の2音節で構成されるが、第1音節の形式が属格に特有であるため、この例文の語積では °tɕʰi に対して「あなた [属]」とした。

(27) ɲi °tɕʰəʔ γe ɕĩ
私 [能] あなた [与] 与える
私はあなたにあげました。

(28) ɲi te γe dzi:-tʰə
私 [能] 彼 [与] 言う-[完]
私は彼に言いました。

3. 位格¹⁶

位置とともに着点も表す。形態的には与格と同一である。実際の発話では格標識が脱落する場合があるが、それは位格で標示されるべき名詞句が絶対格になる、ということの意味しているわけではないため、文意によって音形がない場合も位格と解釈する必要性がある。一方、動詞「行く」などと共起する位置を示す名詞句に位格標識がつくのは不自然と判断されることがある。

(29) tɕõⁿdzə γe tɕa °hnoŋ gə
コップ [位] 茶 [存] gi
コップにお茶があります（入っている）。

(30) °tɕʰəʔ ta la ke:χaŋ {φ / °γe} ʰdɔ-^{fi}dza
あなた [絶] 今 街 {[位] / °[位]} 行く-[未来+疑] 注¹⁷
あなたは今街へ行くつもりですか？

また、nə / nō 「中」、tʰoɕ / ʰgo 「上」など場所を表す特定の要素は位格標識を伴わず句中において場所を表せる。その際には、それぞれに先行する名詞との間にも属格など他の格標識を挿入することはない¹⁸。このような特定の要素が付加されているものは、自動的に位格標識が脱落したの¹⁹と考える。

(31) °tɕo^htsə °tʰoɕ φ
テーブル 上 [位]
テーブルの上に

(32) ^{fi}dɔ ma tɕaw sə nə φ °hnoŋ gə
[人名] 教室 中 [位] [存] gi
ドマは教室の中にいます。

¹⁶ 鈴木・供邱澤仁 (2009) では、ここでいう「位格」も「与格」として語釈を与えたが、本稿では格標識の脱落の可否という観点から「与格」と「位格」を分けることにする。S/A/P に関わる与格は格標識が脱落するが、S/A/P に関わらない与格は基本的に格標識が脱落しない。位格はかなりの程度格標識の脱落が許容される。

¹⁷ 文末の ^{fi}dza は未来を表す接辞 ^{fi}dzə と疑問小辞 ?a の縮約形式である。疑問小辞 ?a は通常動詞もしくは助動詞に先行するが、sKyangtshang 方言ではときどき文末に置かれる現象が見られる。

¹⁸ ゆえに、これらを「場所名詞」というカテゴリーを設けて普通の場所を表す名詞と区別する必要がある。「場所格」を細分化してそれぞれ格標識の形式とみなす考え方もありうるが、現段階ではこれらの要素がすべて名詞由来であり、複数の語形が同一の「上」などの意味カテゴリーに並存するものがあるため、「格」と呼ぶまで文法化が進んでいないものとする。

¹⁹ この場合に位格標識が顕在化するのとは不自然であると判断される。

4. 具格

道具、手段を表す。形態的には能格と同一である。格標識が脱落することはない。

- (33) tə tʰoŋ γə tʰe: φ ʰtuʔ
 ナイフ [具] 野菜 [絶] 切る
 ナイフで野菜を切る

5. 奪格

空間的な起点を表す。格標識は nə である²⁰が、強調して発音する場合 ne: と発音される。

- (34) ʰkʰo koŋ na nə fi-nə reʔ
 彼 [絶] どこ [奪] 来る-[名] [判]
 彼はどこから来たのですか？

- (35) ŋa zō tʰu nə fi
 私 [絶] [地名] [奪] 来る
 私は松潘から来ました。

6. 比較格

比較の対象を表す。比較格の格標識は通常 ɕã mbo であるが、人によっては fia ʰdʒi という形式を用いる人もいる。

- (36) ʰta fʰi: ʰdo dze ɕã mbo tʰe-γə
 [人名] [人名] [比] 大きい-[状]
 タシはドジェより（体格が）大きいです。

略号表

[絶]	絶対格	[判]	判断動詞
[能]	能格	[存]	存在動詞
[与]	与格	[進]	進行
[属]	属格	[状]	状態
[位]	位格	[完]	完了
[具]	具格	[経]	経験
[奪]	奪格	[否]	否定辞
[比]	比較格	[疑]	疑問小辞
[名]	名詞化標識		

²⁰ nə という音形式は「中」を意味する場所名詞や人を表す名詞化接辞のそれと同一になるが、文脈もしくは動詞との関連から意味の混乱は起きないようである。

付録：sKyangtshang 方言の音体系

超分節音

レジスター 2 種が認められる。

緊張性 (°で示す)

弛緩性 (無標)

母音

以下の各要素について、長/短および鼻母音/非鼻母音の対立がある。

i	u	ɯ u
e	ə ə	o
ɛ	ɔ	
a	ɑ	

子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	tʰ		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̚		k		ʔ
	有声	b	d	d̚		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	f ^h / x ^h		
	無声	ɸ	s	ʃ	ɕ	x	χ	h
	有声		z		ʒ	ɣ	ʁ	ʕ / fi
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ		
流音	有声		l, r					
半母音		w			j			

- /f^h/ : 前部硬口蓋および後部軟口蓋における同時調音による無声摩擦音
- /ʕ/ : 有声咽頭蓋音摩擦音

子音連続として、主に前鼻音と前気音が見られる。

参考文献

海老原志穂 (2010) 「アムド・チベット語の格体系」澤田編 43-64

澤田英夫編 (2010) 『チベット=ビルマ諸言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

鈴木博之 (2009) 川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類 《漢藏語學報》第 3 期 17-29

—— (2010) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言 (丹巴県) の格体系」澤田編 95-108

鈴木博之・供邱澤仁 (2009) 「ヒャルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言における *snang* の用法」大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 1, 123-132

星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

—— (2010) 「チベット語ラサ方言の格標示形式の体系」澤田編 65-93

[付記]

本稿の草稿段階において澤田英夫氏より有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)

なお、本稿の記述は、漢語からの翻訳形式から採取したものと sKyangtshang 方言話者の自然発話の中に観察された用法を総合的に判断して行った。また、容認度の判断に関わる調査には、主にコンチョ・ツェリン (供邱澤仁) [dKon-mchog Tshe-ring] さん、ソナン・チョンチ [bSod-nams Khyung-skyid] さんに協力していただいた。

硬口蓋調音の多様性とその表記

—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—*

鈴木 博之

キーワード：硬口蓋音、前部硬口蓋音、国際音声字母、カムチベット語

[要旨] 本稿では、硬口蓋における調音について、国際音声字母 (IPA) において登録されていない前部硬口蓋閉鎖音 [t, d] 及び同鼻音 [ɳ] の使用の妥当性と必要性を、主に雲南省で話されるカムチベット語の2方言の記述から具体的に示す。

1 はじめに

口腔内における調音器官において、硬口蓋は調音点として広範囲を含む部位のひとつであろう。それに対し国際音声字母 (以下「IPA」) では字母表において [c, ʃ, ɟ, ɕ, ʝ, ɰ] が登録され、欄外に [f] (硬口蓋入破音) と [ç, z] (前部硬口蓋音) が登録されている。より詳細に調音点を示す必要がある場合、これらに補助記号を付加して表現することができる。

チベット語をはじめ、チベット・ビルマ系言語 (以下「TB 言語」) に属する言語の記述において、硬口蓋音の記述に対して [ç, z] およびその破擦音 [tç, dz]、そして IPA に定義されないが中国の言語学で用いられる [ɳ] (前部硬口蓋鼻音) が頻出する。これらは音声学的にはそれぞれ [ç, ʃ, cç, ʝ, ɰ] ではなく、いくつかの言語 (方言) では前部硬口蓋音と硬口蓋音は確かに対立を形成する。前部硬口蓋音は IPA において摩擦音を表す字母のみが登録されているにとどまり、それ以外の調音方法については、原則的には補助記号を付加して表すことになるが、便宜的に硬口蓋音の字母で代用されることも珍しくない。中国の言語学では、前部硬口蓋音について IPA に定義されない音声記号が割り当てられ、その使用も行われているが、中国以外ではこれら IPA にはない音声記号を冷遇する傾向もあり、実際の発音はどうあれ、IPA に定義されない文字は使うべきでない、という原則論に立つ主張さえ見受けられる。

しかしそのような習慣や傾向は、ある種のチベット語諸方言の記述に確実に悪影響をもたらすことになる。前部硬口蓋音と硬口蓋音 (もしくは後部硬口蓋音) が摩擦音、破擦音以外にも弁別される方言が存在することが近年の調査によって分かってきたからである。IPA において、前部硬口蓋音について摩擦音を表す文字のみが登録されている現状は、前部硬口蓋における調音を認めながらも摩擦音以外の音を表記する手段を与えておらず、閉鎖や鼻腔共鳴を伴う場合に対応できない点で問題である。朱曉農 (2009:135) はシナ・チベット語の研究において必要な閉鎖音の目録を提出し、同時に明確に印欧語の音を出発点とした子音表と比較した場合の異なりを提示しているが、その記述を見れば、後者が主体となる IPA の体系そのままを TB 言語へ適用するだけでは不十分であることが明確に理解できる。

本稿では、IPA に定義されない前部硬口蓋に関する字母の使用の利便性と妥当性、そして記述研究上の意義を中国雲南省で話されるカムチベット語方言の具体例によって示すことを目的とする。

* 本稿の執筆に当たり、草稿段階において遠藤光暁、林範彦、藤原敬介の各氏から有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

2 中国の言語学における硬口蓋音の音標文字とその問題

ここでは、まず中国の言語学における TB 言語の記述に用いられる硬口蓋音の音標文字について整理し、先行研究における音標文字の用いられ方を概観しつつ問題点を指摘し、ついで次節以降で用いる筆者の音表記について定義を与える。

2.1 記述において頻繁に用いられる文字

中国の TB 言語の記述において、硬口蓋をめぐる音表記に頻繁に用いられる文字には、以下のようなものがある¹。

	前部硬口蓋	硬口蓋
閉鎖音		c, ʃ
破擦音	tʃ, dʒ	cç, ʃj
摩擦音	ç, ʒ	ç
鼻音	ɲ	
流音		ʎ

このほかにも、やや古い文献では [t, d] が用いられているが、それが表す音価の定義はあいまいである。また、中国の言語学における TB 言語の記述で [j, ɲ] はほとんど用いられていないほか、流音の前部硬口蓋音を表す専用の文字は未見である。

2.2 先行研究に見られる問題

文字の形態から言えば、[t, d] は [ç, ʒ] に対応する調音点における閉鎖音と推測できるが、実際の文字使用を見れば、前者は [c, ʃ] と区別なく用いられていると判断できる事例がある²。たとえば、カムチベット語 Chamdo (昌都) 方言では、硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] をもつという記述 (格桑居冕・格桑央京 2002:75) と前部硬口蓋閉鎖音 [t^h, t, d] をもつという記述 (金鵬 1958:48) がある。筆者の調査では、同方言では硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] が用いられていることを確認したが、この先行研究ごとの記述の差異が生じた原因は実際のところ特定できていない。加えて Lhasa 方言の場合、さらに問題が複雑になり、金鵬主編 (1983:4) における「c, ch (または t, th)」という記述のほか、硬口蓋閉鎖音 [c^h, c] をもつという記述 (格桑居冕・格桑央京 (2002:7)、Tournadre & Sangda Dorje (2003:387-388)) と口蓋化軟口蓋閉鎖音 [k^{jh}, k^j] をもつという記述 (星 2003:xii) がある。筆者の調査では、同方言では口蓋化軟口蓋閉鎖音が用いられていることを確認した。これを考えると、[k^j] という音声に [t] (または /t/) が当てられているということにもなる。

また、[tʃ, dʒ] は [tç, dʒ] と書かれる場合がある³が、実際の発音は前者の方が正確である場合が少なくない。調音法の定義されている [ç, ʒ] に戻って考えると、これらの調音点は後部歯茎に程近い硬口蓋の前寄りの点と舌背で形成され、特に重要なのは舌尖が下を向いている点にあると言える。それに比べて対応する破擦音の場合、閉鎖を作る部位は舌背とともに舌尖がより後部歯茎に接近している点に特徴がある。閉鎖の開放とともに [ç, ʒ] の調音の態勢に入るのが多く観察される事例である。これは閉鎖と摩擦が同一の調音位置で行われていないことを意味し、一見より精密に見える [tç, dʒ] といった表記は必ずし

¹ 以下の表において、有声硬口蓋音破擦音が ʃj ではなく jʃ となっているが、実際に用いられるのは後者が圧倒的に多い。

² 金鵬 (1958:1, 3) では、チベット語 Lhasa (ラサ) 方言では /t/ を認め [c] が条件異音であるという記述をしているため、調音音声学上は [t] と [c] は区別されていることになる。

³ 星 (2003:xii) など。

も的確ではない場合があるということに留意する必要がある。

このことはすなわち、実際の調音動作として閉鎖音 [t, d] が頻繁に行われるものでないことも意味している。これらの音標文字を依然として後部歯茎に程近い硬口蓋の前寄りの部位と舌背で形成される調音点で発せられる閉鎖音を表すものであると定義すると、これらは [c, ʃ] と同一ではないし、その調音時には舌尖が下を向いているため、決して [t, d] の口蓋化を意味する [tʰ, dʰ] と同一でない⁴。[tʃ, dʒ] と [cç, ʃj] を混同する記述が存在しないのと同様に、[t, d] と [c, ʃ] は混同されてはならないといえる。そして、これと同様に、[ŋ] と [ɲ] は確かに調音点の異なる2つの独立した音価を表しているのであり、同一ではないから、後者を前者の代用として用いるのは音声記述上理にかなっていないとはいえない。

以上の議論に基づいて、本稿では閉鎖音、破擦音、摩擦音、鼻音について以下のように音標文字を定義する。

	前部硬口蓋	硬口蓋
閉鎖音	t, d	c, ʃ
破擦音	tʃ, dʒ	cç, ʃj
摩擦音	ç, ʒ	ç, ʃ
鼻音	ŋ	ɲ

前部硬口蓋音における調音動作は、硬口蓋の前寄りの部位と舌背で形成されるとともに、舌尖が下を向いていると定義する。硬口蓋音は硬口蓋の中央部から後ろよりにかけての部位と舌背で形成されると定義でき、舌尖は通常下を向いている⁵。

以上、TB 言語の記述で一般に必要とされる調音点を基礎に、硬口蓋における調音について「空き間」がある点に相応の音標文字を当てたわけであるが、これを利用する必要のある言語/方言が少数であれば、これらの音標文字の必要性があるといえる⁶。

3 新たに記述されたチベット語諸方言からの考察

本稿では、雲南省で話される主に2種のチベット語方言の事例を基礎に、上で議論した硬口蓋音をめぐって2つの問題を取り上げる。

チベット語の表記について、個々の分節音に関しては実際の発音をもっともよく表す IPA もしくは本稿で拡張定義した音標文字を用い、音連続に関しては鈴木 (2005) の表記法に準じる。超分節音 (声調) については別途表記法を与える⁷。

⁴ [c, ʃ] もまた [k, g] の口蓋化を意味する [kʰ, gʰ] と同一でない。

⁵ 音標文字の定義及びその字形には、中国で用いられているものを基本としている。一方、Canepari (1999) はイタリア語向けに IPA を拡張した音標文字 (*can IPA*) を提示しているものであるが、その子音表が Canepari (1999:556-557) に示されている。そこにおいて [t, d] (実際の字形は [t, d]) のように足が長く、その足の先端部分を丸める) は apico-palatale (舌尖硬口蓋音) とされ、異なる発音を表す。prepalatale (前部硬口蓋音) は [t, d] と表記される。ただし Canepari (1999:551) では prepalatale は postalveo-dorsali (後部歯茎舌背音) と呼ばれている。

⁶ 以上に述べた観点とは異なって、調音音声学の観点からまったく別個に音声記号を整理したものに、朱曉農 (2009) がある。同論文では筆者が以上に示した鼻音以外の音声記号が調音法とともに定義されているだけでなく、口腔内調音の全体像を示してある。なお、以下で議論される [t] 類については、少数の漢語方言にも見受けられる (朱曉農 2009:135)。

⁷ 本稿で扱うチベット語諸方言における声調は、すべて語声調で、語頭に以下の記号を付して表す。

ˀ: 高平 ˁ: 上昇 ˂: 下降 ˃: 上昇下降

3.1 [t, d] と [c, ʃ] の対立

前部硬口蓋閉鎖音/^ht, t, d/と硬口蓋閉鎖音/^hc, c, ʃ/とが対立する方言に Lamdo (浪都) 方言がある。Lamdo 方言は雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県格咱郷浪都村で話される方言で、カムチベット語 Sems-kyi-nyila 方言群に属すると考えられるが、方言所属の下位区分について未決定である⁸。

Lamdo 方言では、以下のような対立例が見られる。

ʰta 「茶」
ʰca 「髪」

この両者は音声学上それぞれ [t]、[c] 以外の調音点と自由変異を見せることはほとんどなく、精密音声表記には補助記号を付加する程度で事足りる。先述のように、[t] は [tʰ] を含まないし、[c] は [kʰ] を含まない。言い換えれば、これらの音標文字を使用しなければ、音声記述は不適切になるといえる。

これらは後続する母音が前舌狭母音であっても、それぞれ [t] / [tʰ]、[c] / [kʰ] の対立が認められる。

ʰhɪ 「小便」
ʰhɪʔ 「チーズケーキ」
ʰce re: 「タオル」
ʰke rãʔ 「ベルト」

また、前部硬口蓋音は閉鎖音と破擦音も対立する。硬口蓋音はその対立がない。

ʰdə wa 「蚤」 ʰchə wa 「胆嚢」
ʰtə wa 「大便」 *cç 類 なし

さて、前部硬口蓋閉鎖音と硬口蓋閉鎖音の対立をもつチベット語方言は、現段階で筆者の知りうる限り、Lamdo 方言を除いて存在しない⁹。前部硬口蓋閉鎖音もしくは硬口蓋閉鎖音のどちらかが音体系に含まれる方言ならば、その数は少なくないが、前者をもつ方言はかなりの程度限定される¹⁰。Lamdo 方言の存在は、前部硬口蓋閉鎖音と硬口蓋閉鎖音が混同できない方言に対し、それに見合った音標文字の設定を要請する 1 つの事例となる。[t, d] と [c, ʃ] は、このような方言の記述のために正確に定義され、用いられなければならないといえる。

3.2 [n] と [ɲ] の対立

上に続き、Lamdo 方言では鼻音についても前部硬口蓋音/^hn/と硬口蓋音/^hɲ/とが対立する。

ʰnɔ 「ナシ族」
ʰɲo: pa 「速い」

以上の例に示すとおり、Lamdo 方言では初頭子音が前部硬口蓋鼻音と硬口蓋鼻音のみで対立を形成するペアがある。鼻音の場合でも、閉鎖音と同じく [n]、[ɲ] はそれ以外の調音点による自由変異を見せる

⁸ 筆者によるカムチベット語 (一部) の方言下位区分については、Suzuki (2009:17) を参照。

⁹ 中国側の先行研究でも報告されていないと見られる。cf. 張済川 (2009)。

¹⁰ 筆者の資料では、チベット語において前部硬口蓋閉鎖音は他に雲南省香格里拉県格咱郷納格拉村で話される Nagskerag (納格拉) 方言、四川省稻城县金珠鎮で話される nDappa (稻城) 方言、四川省若爾蓋県阿西茸郷で話される Askyirong (阿西茸) 方言に見られる。

ことはほとんどない。ただし、先の閉鎖音の事例と違って、初頭子音が鼻音のみにおける場合の対立のペアはきわめて少なく、例をさらに挙げるのは難しい。

さて、同様の現象について、Lamdo 方言に比べて発展途上段階にあるとみなすことができる方言に、sPomtserag (奔子欄) 方言¹¹がある。sPomtserag 方言は雲南省迪慶族自治州徳欽県奔子欄郷で話される方言で、カムチベット語 sDerong-nJol 方言群 sPomtserag 下位方言群に属する。この下位方言群に属する方言の地点は非常に少なく、点的な分布をなしている。

sPomtserag 方言では、前部硬口蓋破擦音 [tɕ^h, tɕ, dz] と硬口蓋閉鎖音 [c^h, c, ʃ] について対立が認められる¹²。硬口蓋閉鎖音は後部硬口蓋で調音される傾向にあるが、軟口蓋での調音と交替せず、[k^h, k, g] という表記は音声学的には適切性を欠いている。

^htɕa 「乗る」

ˈca 「茶」

ただし閉鎖/破擦音以外の調音法については硬口蓋内部における対立は現在のところ見られない。しかし有声の前部硬口蓋破擦音と硬口蓋閉鎖音に前鼻音がついている場合、事情はやや変わってくる。

ˈndze: 「変わる」

ˈɲɲ: 「升平鎮(地名)」

sPomtserag 方言をはじめ、Lamdo 方言も含む雲南省および同省に隣接する地域で話されるチベット方言には、鼻音を先行要素とする子音連続において2種類の対立が認められ、たとえば^mb/とmb/のように書き表している。前者は前鼻音部の聞こえが後続子音より軽微であるもので、後者はその聞こえに十分な継続時間があり、場合によっては鼻音の継続が延長し後続する閉鎖音部の聞こえが低くなるという現象が認められる¹³。

sPomtserag 方言の調査を進めていくと、壮年層以上では前鼻音つき子音であるものが、若年層での発音をみると鼻音のみになっている例が確認される。そしてそのような語では、若年層において前鼻音つき子音の発音が有標とみなされる。その中に先に挙げた2例が含まれ、実際には若年層では [ndz] と [ɲɲ] の部分がそれぞれ [nʰ], [ɲʰ] というように発音され始めているのである¹⁴。これら両者は未だ完全に鼻音化しているとはみなせないが、これらは完全に対立する要素として弁別され、調音の混同は許容されない。つまり、近い将来上の2例はそれぞれ /^hne:/, /^hɲe:/ として実現されるようになることが予測され、現在の発音の中に /n/ と /ɲ/ の対立を認める端緒が現れているといえる。

鼻音が有声閉鎖/破擦音に先行するこの種の発音様式は、Lamdo 方言にも少なからず確認される。以下のような例では、初頭子音について将来的に /n/ と /ɲ/ の対立になっていくことが予測される。

^hɲɔʔ [ˈ^hɲɔʔ, ˈndɔʔ, ˈn^hɔʔ, ˈnʰɔʔ] 「龍」

^hje: [ˈ^hje:, ˈɲje:, ˈn^hje:, ˈnʰje:] 「米」

¹¹ sPomtserag 方言については、鈴木(2009)を参照。同論文には2種の変種が収められているが、本稿では断りのない場合 sPomtserag/Shogsum (書松)方言の音形式を採用する。

¹² 張済川(1993:302)では、後者は硬口蓋破擦音とされているが、筆者の観察では閉鎖音のみが確認された。

¹³ 鼻音部の調音が後続子音より強くなる現象は、朱曉農(2007:10)で「後爆鼻音」と呼ばれるものに近いと考えられる。なお、朱曉農(2009:141)では、筆者の記述による^mb/とmb/をそれぞれmb/とm^b/のように書くことにしている。

¹⁴ この現象は壮年層で^hndz/、^hɲj/と記述される一部の語にも見られる。

直前の2例の初頭子音は、基本的に前鼻音を伴う形式が単独で発音される場合に現れるが、話者によって差は大きいものの、発話速度が速い場合には鼻音のみになることもあるのが現状である。

チベット語諸方言を対照すれば、他の方言で前鼻音つき子音であるものが Lamdo 方言や sPomtserag 方言では鼻音のみになっている例が散発的にはあるが確認される。このため、以上の現象は前鼻音つき子音に由来する形式から各方言において別々に発展した形式と考えることができる。そしてこのような状況は、前部硬口蓋音と硬口蓋音が対立する方言で、なおかつそれらに先行する鼻音要素について2種類の発音様式が存在するかもしれないもしくは鼻音要素が十分な調音時間を有するタイプの子音連続を形成する方言であるという条件にあわなければ生じえない。前部硬口蓋音と硬口蓋音が対立する方言は少なくない¹⁵し、鼻音要素をめぐる上の記述に適合する方言も雲南省に分布するものを中心に、少ないとはいえない¹⁶のであるが、両者を兼ね備えているものとなると、Lamdo 方言や sPomtserag 下位方言群以外には見られないというのが現状である。

以上に述べた現象を的確に記述する場合、前部硬口蓋鼻音を表す文字が定義されていることが必要不可欠で、硬口蓋鼻音と完全に異なる調音であることが明示されなければならない。この意味で、[ŋ] という音標文字はこれらの方言の記述にとって必要とされているし、[ŋ] と [ɲ] は異なる調音を表すということを理解する必要性もある。

4 まとめ

本稿で主に紹介した2つのチベット語方言は、多彩な方言を抱えるチベット語の中の単なる2つの変種に過ぎない。しかしその中に見られる言語現象は、これまで IPA に定義されることなく、また中国においてもあいまいに用いられていた [t, d, ŋ] が重要な役割を果たすことを明らかにし、それらの使用が有益であることを示している。

確かに [t, d, ŋ] は IPA に登録されておらず、IPA に存在する文字に補助記号を用いて表記するのが筋であるという主張もあるかもしれない。しかし IPA を絶対視するのは明らかに問題がある。事実 Canepari (1999) や朱曉農 (2009) は IPA では対処しきれない音声現象の記述のために精密な調音法の定義とそれに耐えうる音標文字の必要性を主張している。本稿では、前部硬口蓋音と硬口蓋音の間に対立が存在するチベット語の2つの方言の記述に際して、次のことを定義した。

- 前部硬口蓋音とは、調音方法として後部歯茎から前部硬口蓋にかけて舌背と接近または接触させ、舌尖が下を向いている状態で行われるものをさす。
- [t, d, ŋ] はそれぞれ前部硬口蓋の無声閉鎖、有声閉鎖、鼻音を表し、[c, ɟ, ɲ] はそれぞれ硬口蓋の無声閉鎖、有声閉鎖、鼻音を表す。
- [t, d, ŋ] と [c, ɟ, ɲ] の関係は、IPA における [ç, ʝ] と [ç, j] の関係に並行する性格のものである。

以上、[t, d, ŋ] の調音音声学上の定義によって、前部硬口蓋音系列は IPA に元来ある [ç, ʝ] を加えて IPA の子音表の一部を構成するに足る字形を備えているといえる。[t, d, ŋ] を IPA に加え、かつその子音表を書き換えるための何らかの方策を考える必要性もあろう。

本稿の議論は一貫してチベット語方言の共時的記述に終始した。チベット言語学の分野では、チベット文語形式との比較を通じた通時的研究もまた要請される。前部硬口蓋音と硬口蓋音の来源を探る作業は稿を改め行いたい。

¹⁵ 筆者の調査では、前部硬口蓋破擦音 (tç 類) と硬口蓋閉鎖音 (c 類) が対立する方言が複数存在する。

¹⁶ ただし朱曉農 (2009:141) によると、「後爆鼻音」自体をもつ言語 (方言) は少ないという。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- (2009) 「カムチベット語奔子欄 [sPomtserag] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 4 号 219–258
- 星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Canepari, Luciano (1999) *Manuale di Pronuncia Italiana*, seconda edizione, Zanichelli
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report Vol.3*, 15–34, National Museum of Ethnology
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje [gSang-bdag rDo-rje] (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*, Langues & Mondes — L'Asiathèque
- 金鵬 (1958) 《藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究》科學出版社
- 金鵬 主編 (1983) 《藏語簡誌》民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 張濟川 (1993) 藏語方言分類管見 戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297–309 中央民族學院出版社
- (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社
- 朱曉農 (2007) 說鼻音 《語言研究》第 3 期 1–13
- (2009) 說阻音 《東方語言學》第六輯 123–150

[付記]

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)

なお、調査に当たっては瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮 (昆明) の関係各位の協力を得た。Lamdo 方言の主な調査協力者はケゾン・ドマ [skal-bzang sGrol-ma] さん及びツェリン・ピンツォ [Tshe-ring Phun-tshogs] さんで、sPomtserang/Shogsum 方言の主な調査協力者はケゾン・チュドゥン [sKal-bzang Chos-sgron] さんである。

伊良部島方言における述語部分の焦点化について

下地理則

群馬県立女子大学

(shimoji@gpwu.ac.jp)

1. はじめに

本稿の目的は、南琉球宮古伊良部島方言（以下、伊良部島方言）の述語部分への焦点標示を記述することである。宮古方言を含め、琉球語諸方言には焦点標示システムが確認されており、そのシステムについて、多くの先行研究が存在する（野原 1984, 内間 1985, 名嘉真 1992, Serafim and Shinzato 2000, Shinzato and Serafim 2003, Shimoji *in.press*）。これらの研究における主な考察対象は、主語や目的語などの名詞句への焦点化と述語の結びの対応である。伊良部島方言を例に挙げれば、以下の (1a) のようなタイプの構文に関心が集まっていたといえる。一方、以下の (1b) に見るように、伊良部島方言を含む宮古語諸方言・その他琉球語諸方言の焦点標示は名詞句だけにとどまらず、述語動詞の語幹の焦点化も生産的である（野原 1998, Hayashi and Takubo 2009）。

- (1) a. *sinsii=ga=du* *až-tar.*
先生=NOM=FOC 言う-PST
「先生が言った。」
- b. *sinsii=ga* *až=du* *s-tar.*
先生=ACC 言う=FOC する-PST
「先生が言った。」（直訳：言いぞした）

これまでのほとんどの先行研究において、述語焦点化は上記の (1b) のように「V ぞする」のような分析的な構文（動詞語幹＋焦点標識＋軽動詞）として記述されてきた。野原（1998: 411）では、動詞語幹＋焦点標識＋軽動詞の構造が 1 語のような働きをしていると述べているが、その根拠は示されていない。

そこで本稿では、伊良部島方言を対象に、述語焦点化の構造を詳細に記

述する。その結果、伊良部島方言の述語焦点化は（野原の指摘するように）形態論的な現象として扱うべきであることを指摘する。すなわち、以下の(1c)のように動詞の内部に生じる述語焦点接辞（グロスは VFOC）によって行くと記述すべきである。

- (1) c. *sinsii=ga* *až-dus-tar*.
先生=ACC 言う-VFOC -PST
「先生が言った。」(cf. (1b))

上記の新しい分析にともない、2つの重要な問題が生じる。それは、①述語焦点接辞が動詞形態論のどのスロットに生じるのかという問題と、②この接辞が派生接辞なのか屈折接辞なのかという問題である。本稿ではこの2点についても議論する。①に関して、述語焦点接辞は、これまで分かっている伊良部島方言の動詞構造における語幹と屈折接辞の間に生じるという点を明らかにする。さらに、②に関して、この述語焦点接辞自体を屈折接辞として扱ってもよいという結論を示す。このように、述語焦点化という、これまであまり注目されなかった現象は、伊良部島方言の動詞形態論全体の再考につながるほど重要な現象である。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節において伊良部島方言の音韻表記を示し、動詞屈折形態論の概説を行う。3節では、いまだ記述の進んでいない伊良部島方言の係り結びについて、その形態統語的な概要を示すことで、それに続く述語焦点の議論の前提とする。続いて4節において述語焦点に的を絞り記述を行う。5節で結論を述べる。

2. 伊良部島方言

2.1. 表記

本稿では、伊良部島方言の音素分析（Shimoji 2008）に従い、以下の簡易表記を採用する。長母音、長子音は同一音素の連続と解釈し、同一アルファベットの連続を用いて表す（*aa* [a:] 「粟」、*mm* [m:] 「芋」）。なお、*z* は摩擦の弱い [z] ないし接近音化した [z]（無声音のあとでは [s]）に近い音声実態を有する。*r* は音節頭で [r]、それ以外で [ʀ] として実現する（例：*turair*

[*turai*]「取られる」). 括弧つきの音素 (*h, w, e, o*) は, 借用語に偏るなど分布が限られている.

- (2) 子音 : *p, t, k, b, d, g, f, s, c (/ts/), z (/dz/), (h), m, n, v, ž (/z/), r(/r/)*
半母音 : (*w, j*)
母音 : *a, i, u, (e), (o)*

2.2. 動詞屈折形態論の概観

表 1 に示すように, 伊良部島方言の動詞はまず従接 (風間 2009, いわゆる「きれつづき」) の状態に応じて下位区分される. すなわち, 文末終止可能な定動詞と, 文末終止を行えない副動詞である. 定動詞のうち, 連体終止形は文末終止以外にも連体節の述語になることができる. 副動詞は種類が多く, さまざまな副詞節の述語を形成するが, 本稿では扱わない (Shimoji 2008 を参照).

表 1. 伊良部島方言の動詞

		文末終止可能	テンスの対立
定動詞	連体終止形・終止形	+	+
	希求諸形	+	-
副動詞	接続形・条件形など	-	-

定動詞のうち, 連体終止形と終止形はテンス (過去の *-tar*・非過去の *-Ø/-r*; 詳しくは次節) で屈折する. 一方, 定動詞希求諸形は上記のテンス接辞を伴わず, ムードのみで屈折する.

2.3. 定動詞の屈折

以下の表 2, 表 3, 表 4 に定動詞 (連体終止形, 終止形, 希求諸形) の屈折パラダイムを示す. これらの屈折の特徴は後述する.

表 2. 連体終止形（語幹-（否定）-テンス）

	Class 1 <i>mii-</i> 「見る」		Class 2 <i>tur-</i> 「取る」	
	非過去	過去	非過去	過去
肯定	<i>mii-r</i>	<i>mii-tar</i>	<i>tur-∅</i>	<i>tur-tar</i>
否定	<i>mii-n-∅</i>	<i>mii-t-tar</i>	<i>tur.a-n-∅</i>	<i>tur.a-t-tar</i>

表 3. 終止形（語幹-（否定）-テンス-ムード）

	Class 1 <i>mii-</i> 「見る」		Class 2 <i>tur-</i> 「取る」	
	非過去	過去	非過去	過去
肯定	<i>mii-r-m</i>	<i>mii-ta-m</i>	<i>tur-∅-m</i>	<i>tur-ta-m</i>
否定	なし	<i>mii-t-ta-m</i>	なし	<i>tur.a-t-ta-m</i>

表 4. 希求諸形（語幹-ムード）

	Class 1 <i>mii-</i> 「見る」	Class 2 <i>tur-</i> 「取る」
意志形	<i>mii-di</i> 「見よう」	<i>tur.a-di</i> 「取ろう」
願望形	<i>mii-baa</i> 「見たい」	<i>tur.a-baa</i> 「取りたい」
命令形	<i>mii-ru</i> 「見ろ」	<i>tur.i-∅</i> 「取れ」
禁止形	<i>mii-rna</i> 「見るな」	<i>tur-na</i> 「取るな」
否定意志	<i>mii-djaan</i> 「見まい」	<i>tur.a-djaan</i> 「取るまい」

上記の定動詞屈折に関して、注意点を挙げる。

まず、伊良部島方言の動詞語幹には主要な活用クラスが 2 つあり、それによって語尾の形が異なることがある（例えば表 2 と表 3 における非過去肯定の *-r/-∅*、表 4 における命令の *-ru/-∅*、禁止の *-rna/-na*）。Class 1 は */i/* で終わる語幹であり、Class 2 は子音で終わる語幹である。

Class 2 の動詞では、語幹と屈折接辞の間に語幹拡張母音が生じることがある (*tur- + -n* → *tur.a-n*)。拡張母音とその直前の子音との境界は以下の表ではピリオドで表すが、例文では特に表示しない。

表 2 と表 3 に見るように、連体終止形と終止形には肯定否定の形態論的な対立があり、否定接辞の *-n* は、過去テンス接辞の */t/* に同化して *-t* と

して現れる¹。本稿では肯定否定を屈折として扱う。

表 3 に関して、過去テンス接辞 *-ta(r)* における (r) は、ムード接辞 *-m* (話者の確信を示す接辞) の接続で脱落する (*-tar + -m* → *ta-m*)。

表 3 に関して、終止形には非過去の否定形がない。確信のムードが非過去の否定と共起しにくいという意味的な制限によると考えられる (Shimoji 2009)。

表 4 に関して、希求諸形は語幹にムード接辞を接続させることで形成される。意志形、願望形、命令形、禁止形、否定意志形などが区別される。

希求諸形はこのほか、連体修飾節を伴う名詞句の主要部名詞としての形式名詞が連体修飾節の述語動詞に取り込まれるという文法化によって生じた二次的な屈折形式もある。

(3) *vva=ga* *nkai-r* *kutu=du* *a-tar.*
2SG=NOM 迎える-NPST OBL=FOC COP-PST
「あなたが迎えるべきだった」

(3') *vva=ga* *nkai-kutu=du* *a-tar.*
2SG=NOM 迎える-OBL=FOC COP-PST
「あなたが迎えるべきだった」 (lit. 「あなたが迎えべきだった。」)

上記のような形式名詞起源の屈折語尾は *-kutu* と *-gumata* があり、いずれも「すべきだ」「することだ」などの判断のモダリティや、「するはずだ」などの蓋然性のモダリティを表す。

3. 焦点システム

3.1. 焦点標識

伊良部島方言の焦点標識は全てクリティックである。以下に見るように、焦点標識の種類は平叙文、Yes-No 疑問文、Wh 疑問文によって異なる。

¹ 通時的には非過去の *-n* と過去の *-t* は別の形態素にさかのぼる可能性が高い。後者について、否定副動詞語尾 **-da* 「-せずに」にさかのぼるとい説がある (沢木 2008)。すなわち、伊良部島方言の *-t + -tar* は、「せずにいた」という分析的な表現から発達した可能性がある。しかしながら、共時的にこの *-t + -tar* を否定副動詞語尾+過去の語尾として分析するメリットがないので、本稿では形態音韻論的な規則を立てることで *-n* と *-t* を同一形態素の異形態として記述する。

- (4) *pžsara=nkai=du iki-i t-tar.*
 平良=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST
 「平良へ行ってきた。」【平叙文】
- (5) *pžsara=nkai=ru iki-i t-tar(=ru)?*
 平良=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)
 「平良へ行ってきたのか？」【Yes-No 疑問文】
- (6) *pžsara=nkai iki-i t-tar(=ru)?*
 平良=ALL 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)
 「平良へ行ってきたのか？」【Yes-No 疑問文】
- (7) *nza=nkai=ga iki-i t-tar(=ga)?*
 どこ=ALL=FOC 行く-CVB.SEQ 来る-PST(=Q)
 「どこへ行ってきたのか？」【Wh 疑問文】

(5) と(7) に示したように、疑問文における焦点標識は、焦点化されている名詞句以外に、文末にも焦点標識と同音の形式がコピーされることがある((6) については後述)。このコピー形式の出現は現時点では随意的であるとは言いえないが、なんらかの条件にもとづいているかもしれない。今後の調査によって明らかにする必要がある。

このコピー形式は焦点標識と異なる形態音韻論を有している。例えば、鼻音終わりの動詞に接続した際に同化する (*ttam*「来た」(終止形) +=*ru* → *tam=mu?*; 詳細は Shimoji 2008: 448 を参照)。さらに機能の点でも、すでに焦点標識がある場合にも出現可能であることから、焦点化の機能ではなく疑問標識(日本語の「か?」)としての機能を持っていると言える。よって、この文末に生じる形式は焦点標識とは別形態素であると分析する(=Q とグロスを振ってある)。なお、(5) と (6) はともに Yes-No 疑問文であるが、(5) では疑問の範囲が場所「平良」にあるのに対し、(6) では行為の成立を問うという違いがある。(6) の場合、文末にある唯一の=*ru* は随意的であり、かつ焦点標識と異なる形態音韻論を有するので、(5) における文末の=*ru* と同様、疑問標識として機能していると分析できる。

3.2. 結びの形

焦点標識が同一節内に出現すると述語動詞の屈折（すなわち「結び」の形）に制限が生じ、終止形をとることが出来ない（Shimoji *in.press*). それ以外の屈折は可能である（宮古諸方言における結びの制限の弱さに関して内間 1985 も参照）。命令文に関しては、少なくとも自然談話の中に焦点標識と命令形屈折の共起の例がなく、面接調査でも、そのような共起が可能という話者と不可能という話者がおり、今後のさらなる調査が必要である。以下では平叙文で例示するが、疑問文でも同じ制限が適用される。

- (8) *agu=u=du* *jurav-Ø*.
友人=ACC=FOC 呼ぶ-NPST
「友人を呼ぶ」【結び：定動詞連体終止形】
- (9) *agu=u=du* *juraba-di*.
友人=ACC=FOC 呼ぶ-INT
「友人を呼ぼう」【結び：定動詞意志形】
- (10) *agu=u=du* *juraba-baa*.
友人=ACC=FOC 呼ぶ-OPT
「友人を呼びたい。」【結び：定動詞希求形】
- (11) **agu=u=du* *jurav-Ø-m*
友人=ACC=FOC 呼ぶ-NPST-RLS
「友人を呼ぶ」【結び：定動詞終止形】

4. 述語焦点

4.1. 概観

伊良部島方言の述語は動詞述語と名詞述語に大別される。本稿の考察対象は動詞述語とその焦点化であるが、その議論に移る前に、簡単に名詞述語の構造および名詞述語の焦点化の方法も示しておく。以下の(12)に見るように、名詞述語は述語名詞句とコピュラ動詞からなる。

- (12) *kari=a* *imi-pžtu=u* *ara-n-Ø.*
 3SG=TOP 小さい-人=TOP COP-NEG-NPST
 「彼（女）は小さい人ではない。」

コンピュータ動詞は非過去・肯定の場合で、かつ述語が主節の場合には現れない。

- (13) *kari=a* *imi-pžtu.*
 3SG=TOP 小さい-人
 「彼（女）は小さい人（だ）。」

以下の (14) に示すように、名詞述語の焦点化は、述語名詞句に名詞焦点のマーカ―を接続させることで行う。

- (14) *kari=a* *imi-pžtu=du* *a-tar.*
 3SG=TOP 小さい-人=FOC COP-PST
 「彼（女）は小さい人だった。」

一方、本稿の考察対象である動詞述語の焦点化では、動詞焦点接辞 (VFOC) を動詞語幹に接続させるという方法を用いる²。

- | | | |
|-------------------------|---|--------------------------|
| (15) 語幹-屈折語尾 | → | 語幹-VFOC-屈折語尾 |
| a. <i>mii-tar</i> | → | <i>mii-dus-tar</i> |
| 見る-PST | | 見る-VFOC-PST |
| 「見た」 | | 「見た」 |
| b. <i>mii-tar(=ru)?</i> | | <i>mii-rus-tar(=ru)?</i> |
| 見る-PST | | 見る-VFOC-PST |
| 「見た？」 | | 「見た？」 |

上で示したように、動詞焦点接辞は通常の焦点標識同様、構文の種類によ

² この接辞が正確にどの位置に接続するかという問題と、この接辞が語幹に属するのか屈折に属するのかについては 4.3 で扱う。

って形式が異なる。平叙文用の *-dus*、Yes-No 疑問文用の *-rus* があるが、Wh 疑問文用の動詞焦点接辞は存在せず、この点で名詞焦点標識と異なる。以下では、<*-dus*>という表現で、*-dus* も *-rus* も表すものとする。通時的に見れば、<*-dus*> は (16) のような軽動詞（「する」）を用いた構文を経て発達したと思われる（ほかの琉球諸語について名嘉真 1992 など）。

(16) STEM=*du* *s*-INFL
語幹=FOC 軽動詞語幹-屈折語尾

↓

(17) STEM=*dus*-INFL
語幹-VFOC-屈折語尾

すなわち、現在の伊良部島方言に見られる <*-dus*> の /*du*/ は、かつては焦点標識のクリティックであったと考えられ、/s/ は軽動詞語幹の一部であったと考えられる。伝統的に琉球語学では、現在の琉球諸語の述語焦点の構造を (16) のように分析することが普通である。それに従えば、<*-dus*> は以下のような構造になっていると記述されるだろう。

(18) *mii=du* *s-tar*
見る=FOC する-PST
「見た」(lit. 見ぞした)

しかし現在の伊良部島方言の文法システムにおいて (16) ではなく (17) の構造を想定する必要があるのは、以下の理由による³。

- (19) a. フット形成という韻律面の現象に照らして、<*-dus*> が 1 つの形態素として扱われている。
b. <*-dus*> の *du* と *s* の間に別の形態素が侵入不可能である。
c. <*-dus*> が接続するのは語ではなく語幹である。

³ 査読者の方より、これらの証拠に加えて意味的な証拠の提示があったほうがよいとの指摘をいただいた。たしかに軽動詞「する」の意味を保持しているかどうかという点は重要である。しかし、筆者の調査不足により、現時点で有意義な議論を行える用意がなく、この意味的な問題については今後の課題としたい。

(19a), (19b) は, <-dus> が単一の形態素であることを示す証拠であり, 通時的に見た場合に最も重要な伊良部島方言の <-dus> の変化特徴である. (19c) はその形態素が (クリティックではなく) 接辞であることを示す証拠である.

以下 4.2 は, 上記 (19) をひとつひとつ検証し, 述語焦点化が接辞によってなされるという分析, 言い換えれば述語焦点化は動詞形態論において扱う現象であるという分析を提案する. それを受けて 4.3 では, <-dus> が動詞のどの部分に挿入されるのかという点を記述し, さらに, 名詞焦点化と同様に語尾の取り方に制限が生じるかどうかを記述する. 最後に, 述語焦点接辞が派生接辞なのか屈折接辞なのかという点についても記述する.

4.2. <-dus> の述語焦点接辞としての分析

4.2.1. 韻律的に <-dus> が 1 つの形態素として扱われている

伊良部島方言の韻律は, フット形成とトーンの付与という 2 つのプロセスで説明される (Shimoji 2009a). フットは 2 モーラフットが基本であり, 音韻語 (クリティック含む) の左端からフットが作られていく. それによって 1 モーラ余る場合は 3 モーラフットを形成する. 例えば *midum* 「女」は (midu)m ではなく (midum) であり, *banckira* 「グアバ」は (ban)(cki)ra ではなく (ban)(ckira) である.

フット形成には形態素境界も影響する. 紙数の都合上ここで伊良部島方言の韻律の詳細を述べることは出来ないが, <-dus> の分析に関しては以下の点に注目するだけで十分である. すなわち, ある語幹 A に別の形態素 (あるいは異形態) B が接続して合成語 A+B を作る場合, B が 1 モーラであれば, 形態素境界は無視され, 語幹 A と一緒になったうえでフット形成が行われるが (以下の (20), (22) 参照), B が 2 モーラ以上の場合, 形態素境界でフットの境界が入る. よって, この場合 B は必ず独立したフット形成を行うという制限がある ((21), (23) 参照. なお (22), (23) はゼロの屈折を伴った定動詞連体終止形非過去).

- | | | | | | | |
|------|---------------|------|---|----------------------|--|---------------|
| (20) | <i>budur-</i> | 「踊る」 | + | <i>-na</i> (禁止形) | | (budu)(rna) |
| (21) | <i>budur-</i> | | + | <i>-tar</i> (連体終止過去) | | (budur)(tar) |
| | | | | | | *(budu)(rtar) |

- (22) *budur-Ø* + =*ti* (引用「と」) (budu)(rti)
 (23) *budur-Ø* + =*tii* (= *ti* の異形態) (budur)(tii)
 *(budu)(rtii)

語幹 A に 1 モーラの形態素が 2 つ後続する場合と、2 モーラの形態素が 1 つ後続する場合とではフット形成が異なる。例えば以下の例は (20) *budur-na* 「踊るな」にさらに引用のクリティック =*ti* 「と」をつけたものである。フット形成の点で言えば、形態素境界は関係なく、(20) が 1 モーラ分だけ拡張されたにすぎない。それにもとづいて音韻語の左端から通常のフット形成が行われるだけである。音韻語の最終フットは、余りを回避するための 3 モーラフットになっている。

- (24) *budur-* + *-na* (禁止形) + =*ti* 「と」 (budu)(rnati)

同じ語幹に 2 モーラの形態素が接続した (21) と対照されたい。

ここで、上記の語幹 *budur-* 「踊る」に <-*dus*> を加えた形式を考えてみよう。もし <-*dus*> が =*du* (焦点) と *s-* 「する」の 1 モーラ形態素 2 つから成り立っているのであれば、(25a) のパターンに従うはずであるが、実際は (25b) のパターンに従う。

- (25) a. *budur-du-s* 「踊る」 (budu)(rdus)
 b. *budur-dus* 「踊る」 (budur)(dus)

よって、韻律的な観点から見ると、<-*dus*> は 2 モーラの形態素であると考えることができる。

4.2.2. <-*dus*> の *du* と *s* の間に別の形態素が侵入不可能

前節で韻律面で <-*dus*> が単一の形態素として扱われていることを見たが、形態面でもそれは成り立つ。すなわち、この形式はいかなる形式によっても分断できない。これは焦点 =*du* に軽動詞 *s-* 「する」が後続する別の構文 (27) と比べるとはっきりする。

(26) *ba=a budur-dus-tar.*
 1SG=TOP 踊る-VFOC-PST
 「私は踊った。」

(27) a. *ba=a budur=ru=du (a)s-tar.*
 1SG=TOP 踊り=ACC=FOC する-PST
 「私は踊りをした。」

b. *ba=a budur=ru=du, unusjuku (a)s-tar.*
 1SG=TOP 踊り=ACC=FOC かなり する-PST
 「私は踊りをかなりした。」

(27) では焦点標識と軽動詞の間に副詞の *unusjuku* 「かなり ; そんなに」が挿入可能であるが, (26) では不可能である (他の語, たとえば間投詞の *naugara* 「なんか」, *anu* 「あれ」なども可能). 一方, (27) の述語焦点の場合, 間にいかなる要素も介入できない. なお, (27) において, 軽動詞は /a/ が生じることもある. この異形態 *as-* があることも軽動詞の特徴である. それに対し, (26) のような述語焦点の形式において, <-dus> が /-duas/ のようにはならない.

このように, 形態論的に見ても, <-dus> をひとつの形態素と分析するほうがよい.

ただ, 一点だけ注意すべき点がある. 自然談話資料を書き起こす過程で, <-dus> の /du/ と /s/ の間に談話標識 =*ra* (語調の緩和 ; *softener*) が割り込んだ以下のような例を 1 例だけ確認している.

(28) *vva=ga mii=du=ra s-Ø.*
 2SG=NOM 見る=FOC=SFN する-NPST
 「あなたが見るのよ」(命令を和らげる口調として)

しかし, この例はこの自然談話の話者である 102 歳 (2007 年当時) の話者からしか収集できておらず, かつ他の話者によると, こういう言い方は現

在では普通しないという。この年齢層以上に見られる古い表現なのか、たまたま出現した言い淀みなのか、今後の調査が必要である。この例がかつて実際に生産性を持っていたのであれば、4.1 で考察した通時的な発達過程における (16) の構造を反映していると考えられる。

4.2.3. <-dus> が接続する語幹は拘束形式

前節までで、<-dus> が1つの形態素であることを韻律面、形態面から示した。本節ではその形態素がクリティックではなく接辞であることを示す。

クリティックは統語的には句をスコープに入れており、句を単位に接続する。音韻的には句の終端の語に接続する。したがって、クリティックは必ず自由形式にのみ接続する⁴。

以下に見るように、Class 1 の動詞語幹 (2.2 参照) は拘束形式であり、これに <-dus> が接続可能であることから、<-dus> がクリティックとは異なることが分かる。

(29)	<i>mii-</i>	「見る」	+ <i>-dus</i>	→	<i>mii-dus</i>
	<i>nkai-</i>	「迎える」	+ <i>-dus</i>	→	<i>nkai-dus</i>
	<i>idi-</i>	「出る」	+ <i>-dus</i>	→	<i>idi-dus</i>

Class 2 の動詞語幹は見かけ上、ゼロで屈折する定動詞連体終止形非過去と同形である。よって、例えば (31) で <-dus> が語幹に接続しているのか屈折した連体終止形に接続しているのかすぐには判定できない。

(30) *budur-* 「踊る」 (語幹)

budur-∅ 「踊る」 (定動詞連体終止形非過去)

(31) *budur-dus*

⁴ ただし、ごく少数の例外がある。例えば1人称単数の代名詞 *ban* と主格クリティック=*ga* は音韻的に融合し、*ba=ga* となる。この際、*ba-*は拘束形式である。*=ga* は、この場合を除き、必ず自由形式に接続する。よって、1人称単数代名詞との結合の際にのみ生じる例外的な形態音韻変化であると言える。(29) に見る動詞語幹と <-dus> の結合は事情が異なる。<-dus> は規則的に、Class 1 の動詞語幹 (すべて拘束形式) に接続可能である。

しかし、*budur-dus-tar* (踊る-VFOC-PST)「踊った」(定動詞連体終止形過去)のように、さらに過去の接辞を加えることができることから、<-dus> が屈折した語形に接続しているという可能性は否定される。つまり、<-dus> は拘束形式の語幹に接続しているのである。

次に、選択制限の点でも、<-dus> が接辞であるという分析が妥当である。クリティックは句を単位に接続するので、音韻上のホストである句末の語の品詞は 1 つに限られない。一方、接辞は名詞語幹専用、動詞語幹専用、というのが普通である (Shimoji 2008)。この特徴に照らせば、<-dus> は直前の語幹が動詞語幹のみであり、この点でもまたクリティックとは異なり接辞的である。

4.3. 動詞屈折形態論と述語焦点接辞

これまで、<-dus> が述語焦点接辞として分析できることを見た。すなわち、<-dus> は動詞形態論で扱うべき形式である。よって、この接辞が動詞のどのスロットに立つのか、という点を記述しなければならない。さらに、4.1 で述べたように、述語焦点接辞が係り結び構文から発達したことに関連して、この接辞が出現した際に屈折語尾に制限が生じるのかという問題も考察する必要がある。最後に、この接辞が屈折接辞なのか派生接辞なのか、という問題が生じる。以下、これらの 3 つの点について順に記述する。

4.3.1. 述語焦点接辞の出現位置

伊良部島方言の動詞の形態構造は以下のように定式化される。

(32) [語根 (-使役) (-受け身) (-尊敬)]_{語幹} (-拡張母音) -屈折

以下の例に見るように、<-dus> は、語幹の最後尾、すなわち尊敬の接辞より後、2.2 で見た屈折接辞より前に接続する。

(33) *zau-midum-gama-ta=kara=du unusjuku budur-as-ai-tar.*
よい-女-DIM-PL=から=FOC たいそう 踊る-CAUS-PASS-PST
「いい娘さんたちから (先に)、たいそう踊らされた。」

(33') *zau-midum-gama-ta=kara unusjuku budur-as-ai-dus-tar.*
 よい-女-DIM-PL=から たいそう 踊る-CAUS-PASS-VFOC-PST
 「いい娘さんたちから、たいそう踊らされた。」【<-dus>は使役接辞と受け身接辞のあとに出現】

(34) *tin=kai=du ur-ama-tar.*
 天=ALL=FOC いる-HON-PST
 「天にいらっしやった。」

(34') *tin=kai ur-ama-dus-tar.*
 天=ALL いる-HON-VFOC-PST
 「天にいらっしやった。」【<-dus>は尊敬接辞-(r)ama のあとに出現】

なお、<-dus> が接続する際、Class 2 語幹は拡張母音をとらない。よって、<-dus> が生じる際の承接関係は以下のようなになる。

(35) [語根 (-使役) (-受け身) (-尊敬)]_{語幹}<-dus> -屈折

上記の承接関係において、<-dus> が語幹に属するか屈折に属するかが明確ではない、これは 4.3.3 で検討する。

4.3.2. 述語焦点接辞と語尾の制限

<-dus> が出現すると、語尾に明確な制限が生じる。すなわち、定動詞連体終止形でしか屈折しない。これは伊良部島方言の通常の焦点化（項や補部などの焦点化）よりも制限が強い（3.2 参照）。これまであげた述語焦点化の全ての例で、述語動詞は連体終止形として屈折している。

4.3.3. 述語焦点接辞は屈折か派生か

4.3.1 で明らかにしたように、述語焦点接辞はあらゆる派生接辞に後続し、一番屈折接辞に近い位置に立つ。よって、この接辞が屈折接辞であるという可能性もある。以下ではそれを簡単に検証してみたい。

本稿では、屈折と派生の区別は程度問題であるという考え方に従う (Bybee 1985, Corbett 1987, Plank 1994, Haspelmath 1996) ⁵. ここでは述語焦点が伊良部島方言の典型的な屈折接辞にどれほど近いかを議論してみたい. 一般的に、屈折は以下の特徴を持っていると考えられる (以下の (36a-b) は Haspelmath 1996: 47 の提案する 3 つの特徴のうち 2 つ, (36c) は Zwicky and Pullum 1983, Bybee 1985) ⁶.

- (36) a. 規則性が高い (語幹と組み合わせたときに予想外の機能を持つことが少ない)
b. 一般性が高い (語幹の語彙的な制限によらず適用される)
c. 語形成を閉じる (その接辞の接続で語として自立し、その際、それ以上の接辞の接続が許されない)

Anderson (1992) や Booij (1996), Bickel and Nichols (2007) などの類型論的研究では、さらに以下のような統語的な特徴も重要であるとされる.

- (37) 統語条件に左右される (例えば名詞の性・数に応じて変化するドイツ語の形容詞屈折, 従接に応じて語形を変える日本語や伊良部島方言の動詞屈折など)

伊良部島方言の典型的な屈折接辞はムード接辞 (例えば意志形の *-di* 「-しよう」) である. (36) に関して、この接辞は高い規則性を持ち、ほぼどのような動詞語幹にも接続するため高い一般性を持つ. しかも、この接辞の接続によって動詞は自立し、さらに接辞を接続することができなくなる. (37) に関して、ムード接辞を伴った定動詞は文末終止の述語としてのみ機能する. すなわち、文末終止という統語条件に左右されている.

ムード接辞ほどではないが、テンス接辞もかなり屈折的である. まず (36)

⁵ 伊良部島方言の文法 (Shimoji 2008) の記述においては屈折形態論と派生形態論に二分して整理し、グレイゾーンのケースは個別に取り上げるというスタンスに立った. グレイゾーンとして問題になるのは、日本語と同様 (風間 1992), 否定のカテゴリーである. なお、述語焦点は否定より後に出現する (後述する表 4 参照).

⁶ Haspelmath (2004) は、上記の (36a-b) に加えて「高い生産性」を挙げているが、本稿筆者にとってこれと (36b) との相違が明確ではないため、ここでは採用しなかった.

に関して、テンス接辞は (36a-b) を満たすが、(36c) を完全には満たさない。すなわち、連体終止形の場合はテンス接辞の接続を持って語を自立させることができるが、そのあとにムード接辞を接続して終止形を形成できる (2.3 の表 3)。 (37) に関して、テンス接辞は定動詞の特定の形式 (終止形と連体終止形) にしか出現しない。定動詞と副動詞は統語的な条件で選択されるのだから、テンス接辞の出現可能性は、統語的な条件に左右されているといえる。

ここで <-dus> について考察してみると、この接辞はテンス接辞ほどではないが、屈折と派生の両端のスケールで考えれば屈折的であることが分かる。まず、この接辞は高い規則性を持つ。すなわち、どの語幹に接続しても、述語焦点化という機能だけを持つ。さらにこの接辞は一般性が高い。筆者の調査では、述語焦点化ができない語幹はコピュラ動詞だけである。コピュラ動詞は名詞述語文を構成する要素であり、名詞述語の焦点化は名詞に通常の焦点標識を接続することで行う (4.1 参照; 下地 2009)。コピュラ動詞が <-dus> によって焦点化できないのはこのような理由があり、不規則的なギャップではない。一方、<-dus> は語を閉じる性質を持っていない。例えば、*budur-dus-tar* (踊る-VFOC-PST) 「踊った」のように、あとに屈折接辞を接続しなければならない。テンス接辞はそれで語を自立させることができる点で(36c)の一部を満たしていたが、<-dus> は (36c) を完全に満たさない。

(37) について、<-dus> は統語的な条件に左右されている。まず、この接辞は節内のほかの要素に焦点標識が接続していない場合にのみ出現可能である。次に、この接辞は定動詞連体終止形にのみ出現可能である。連体終止形は文末終止位置と連体節の述語という位置で生じるが、連体節内部に焦点標識が生じないという別の制限があるため、結果的に主節の文末終止位置に限定される。このように、述語焦点の出現を記述する場合は以上のような統語環境に言及しなければならず、(37) を満たしている。

以上のように、<-dus> は、テンス接辞に次いで屈折的であると言える。したがって、伊良部島方言の記述においてはこれを屈折形態論で扱ってよいだろう。その際、屈折カテゴリーをどのように立てるかという問題が生じるが、これはラベルの問題であり、言語事実の記述において大した問題

ではないと思われる (Haspelmath 1996: 49). 仮に, 焦点標示というカテゴリーを立て, 述語焦点の有無を屈折パラダイムに組み込んだ場合の案を以下に書いておく. なお, 前節で述べたように, 焦点形は連体終止形に限られるので, 連体終止形のサブパラダイムとして整理する.

表 4. 連体終止形 (語幹- (否定) -(焦点)-テンス)

		Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
		非過去	過去	非過去	過去
非焦点形	肯定	<i>mii-r</i>	<i>mii-tar</i>	<i>tur-∅</i>	<i>tur-tar</i>
	否定	<i>mii-n-∅</i>	<i>mii-t-tar</i>	<i>tur.a-n-∅</i>	<i>tur.a-t-tar</i>
焦点形	肯定	<i>mii-dus-∅</i>	<i>mii-dus-tar</i>	<i>tur-dus-∅</i>	<i>tur-dus-tar</i>
	否定	<i>mii-n-dus-∅</i>	<i>mii-n-dus-tar</i>	<i>tur.a-n-dus-∅</i>	<i>tur.a-n-dus-tar</i>

5. おわりに

本稿では, 伊良部島方言を対象に, これまであまり研究されてこなかった述語焦点化について記述した. その結果, これまでの大半の解釈(「見ぞする」のような軽動詞構文)と異なり, 述語焦点化が形態論的な現象であることが明らかとなり, かつ屈折接辞として解釈可能であることも明らかとなった.

参考文献

- Bickel, Balthasar, and Johanna Nichols. (2007) Inflectional morphology. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description* (3), 2nd edition, 169–240, Cambridge: Cambridge University Press.
- Booij, Greet. (1996) Inherent versus contextual inflection and the split morphology hypothesis. In Booij, Greet, and Jaap van Marle, eds., *Yearbook of morphology 1995*, 1–16, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: a study of the relation between meaning and form*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin's Publishing Company.
- Corbett, Greville G. (1987) The morphology/syntax interface: evidence from possessive adjectives in Slavonic. *Language* 63: 299–345.

- Haspelmath, Martin. (1996) Word-class-changing inflection and morphological theory. In Booij, Greet, and Jaap van Marle, eds., *Yearbook of morphology* 1995, 43–66, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hayashi, Yuka, and Yukinori Takubo. (2009) Kakarimusubi in Miyako Ryukyuan. Paper read at the 1st Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research. UCLA.
- 風間伸次郎. (1992) 「接尾辞型言語の動詞複合体について」宮岡伯人 (編) 『北の言語－類型と歴史』, 241–260, 東京:三省堂.
- 風間伸次郎. (2009) 「副動詞の類型論的研究」記述言語学研究会口頭発表. 東京外国語大学.
- 名嘉真三成. (1992) 『琉球方言の古層』東京:第一書房.
- Plank, Frans. (1994) Inflection and derivation. In Asher, R. E., ed., *The Encyclopaedia of Language and Linguistics* (3), 1671–1678, Oxford: Pergamon Press.
- Serafim, Leon A. and Rumiko Shinzato. (2000) Reconstructing the Proto-Japonic *kakari musubi*, *-ka ...-(a)m-wo. *Gengo Kenkyū* 118: 81–118.
- Shinzato, Rumiko, and Leon A. Serafim. (2003) *Kakari musubi* in comparative perspective: Old Japanese *ka/ya* and Okinawan *-ga/-i*. *Japanese/Korean Linguistics* 11: 189–202.
- Shimoji, Michinori. (2008) A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. A PhD thesis, the Australian National University.
- Shimoji, Michinori. (2009a) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo Kenkyū* 135: 85–122.
- Shimoji, Michinori. (2009b) Epistemic modality in Irabu Ryukyuan. *Shigen* (Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistics Papers) 5: 25–42.
- Shimoji, Michinori. (*in.press*) Quasi-Kakarimusubi in Irabu. *Japanese/Korean Linguistics* 18: 114–125.
- 内間直仁. (1985) 「係り結びの係りの弱まり－琉球方言の係り結びを中心に」 『沖縄文化研究』 11: 223–244.
- Zwicky, Arnold M., and Geoffrey K. Pullum. (1983) Cliticization vs. inflection. *Language* 59: 502–513.

ナゴヴィシ・シベ語の類別詞

稲垣 和也

キーワード：ナゴヴィシ・シベ語，パプア諸語，類別詞，形態法，多重類別型言語

1 はじめに

1.1 言語の概要

本論文は、パプア・ニューギニアのブーゲンヴィル南部で話されているナゴヴィシ・シベ語の類別詞について記述することを目的とする。ナゴヴィシ・シベ語には十分な記述が無く、本論文で提示するデータは、2009年8月の筆者の現地調査に基づく^{注1}。

本論文が対象とするナゴヴィシ・シベ語は、エスノログ (Lewis 2009) によると、「シベ語」と呼ばれている。その別名としては、(i) ナゴヴィシ語、(ii) シッベ語、(iii) シベ・ナゴヴィシ語などがあげられている。この中で、特に、ブーゲンヴィル研究で著名なダグラス・オリバーの言及もあって (Oliver 1973, 1991)^{注2}、ナゴヴィシという呼称はよく知られている。現地社会の中での使用を観察すると、ナゴヴィシの人々によって話されている言語を指すために、「シベ (Sibe)」という呼称が広く知られている。本論文では、(a) 現地社会での使用、(b) エスノログの使用、(c) ブーゲンヴィルの先行研究での使用を考慮し、「ナゴヴィシ・シベ語」という表現を用いることにする。

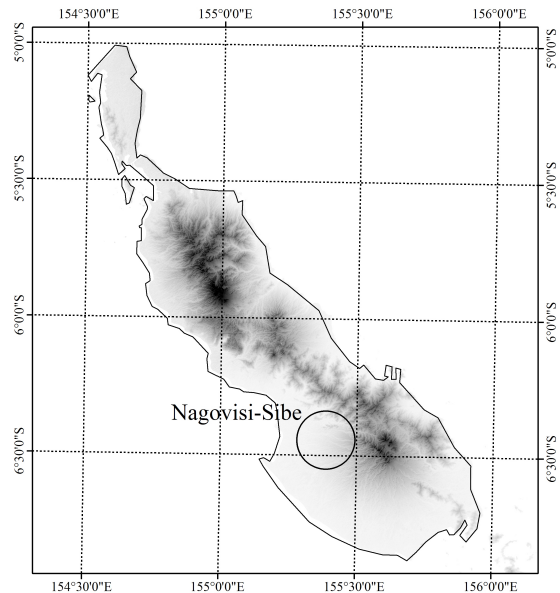


図1 ブーゲンヴィル

^{注1} 筆者による言語調査とは、(i) ソロモン諸島北部に位置するブーゲンヴィルのバナ地方アガバイ地区ベロ村で10日間、(ii) パプア・ニューギニアの首都ポート・モレスビーで7日間、母語話者と共におこなったものである。この調査は、文部科学省の平成21年度科学研究費、基盤研究(B)「パプア諸語の比較言語学的研究—南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(研究代表者：大西正幸；課題番号20320065)の援助を受けている。調査にあたって、大西正幸先生、テレザさん (Therese Minitong Kemelfield) には話者の紹介や調査方針の相談等、貴重な助言を賜った。マーガレット (Margaret Makaa Luku)、ピーター (Peter Luku) をはじめ、協力してくれた母語話者の皆さん、特に Isiras, Theresa Sipona Wilolopa, Vincent Wilolopa Leelanu, Cecilia Tamukai Hasola, Theresa Nalokata Suagotsu, Thomas, エミル (Emil Mahutz Mehu) とその家族、ポール (Paul Kaabe)、アイサク (Isaac Sipu)、クリス (Christopher Kena)、マガライ (M. Magalai) の各氏に感謝する。また、総合地球環境学研究所の長田俊樹先生主催の言語記述研究会のメンバーから多くの助言をいただき、大西正幸先生、千田俊太郎氏、松本亮氏には本稿の内容について貴重なコメントをいただいた。地球研の寺村裕史氏には、地図の作成作業を手伝っていただいた。この場を借りて御礼申しあげたい。

^{注2} Oliver (1955: 6–7) には、“*Sibbe* (the language spoken by the Nagovisi)”, すなわち「シッベ」という呼称が、ナゴヴィシの人々によって使われている言語を指す、と記されている。

ナゴヴィシ・シベ語の話者数は、1935–1955 年の間で約 3,500 人 (Oliver 1955: 6) 注³ , 1963 年の時点で 4,619 人とされている (Allen & Hurd 1965: 4, Oliver 1973: 188)。また, Lewis (2009) によると, 1975 年には 5,000 人と報告されている。

パプア・ニューギニアの 2000 年のセンサス (Office 2002) には, 使用言語ごとの人数は挙げられていないが, ブーゲンヴィル州の行政上の区画ごとの世帯数, および人数 (男女) がしめされている。

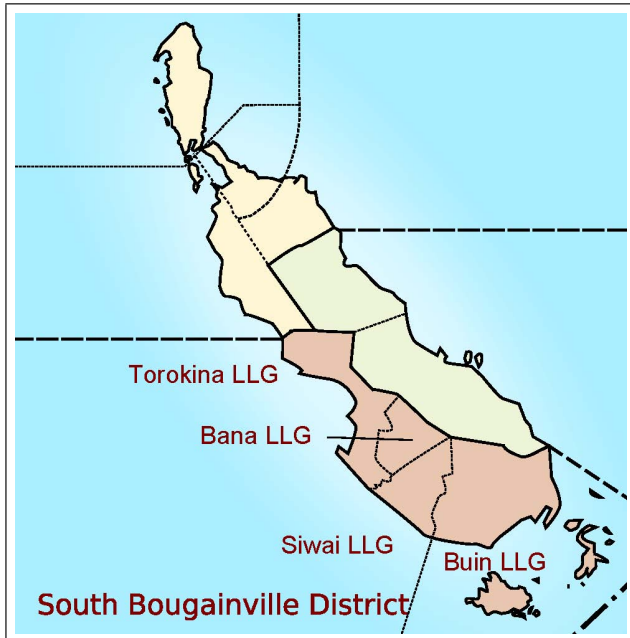


図2 ブーゲンヴィル州の行政区画

ナゴヴィシ・シベ語の話者は南ブーゲンヴィル地方 (South Bougainville District) に多い。南ブーゲンヴィル地方には, (1) にしめす基礎自治体があり, “LLG” (Local Level Government) と呼ばれている。

- (1) a. ブイン LLG (Buin)
- b. シワイ LLG (Siwai)
- c. バナ LLG (Bana)
- d. トロキナ LLG (Torokina)

これらの LLG の下位には, それぞれ区 (ward) という区分があり, バナ LLG の, 東ラマネ区, 南ラマネ区, トマウ区, ヴェリペ区, および, トロキナ LLG のトベラキ区の居住者のうち, 多くはナゴヴィシ・シベ語の話者と考えられる。Office (2002) にしたがって, それぞれの居住者をしめすと, 表 1 のようになる。

表 1 のナゴヴィシ・シベ語話者の多い地域には, 近隣のナーシオイ語 (Hurd & Hurd 1966), モトウナ語 (Onishi 1995), ブイン語 (Laycock 2003) の話者も居住していると思われる。そのため, 2000 年の時点でのナゴヴィシ・シベ語の話者数は, 10,000 人に満たないと予測される。

以下の (2) に, 数人の母語話者から得た, ナゴヴィシ・シベ語の方言名と, それぞれが話される地名を挙げる。この方言区分は, 詳細な調査に基づいていないものであり, 参考として提示する。本論文では, (2b) の太字でしめした方言の類別詞について記述する。

(2) ナゴヴィシ・シベ語 (Nagovisi-Sibe)

- a. ウェリペ方言: クネカ, コーロー, マナナウ, レーラー
- b. トベラキ方言: アガバイ, クボン, ソヴェレ, ターロバ, **ネギタン**, メンダイ, モシノ, ロペレ
- c. トマウ方言: タケマリ, ローマリ, ワタウーナ
- d. ラマネ方言: シアネキ, シアングロー, シコレワ, シピー, パーナン, バコラン, ポペー

表 1 ナゴヴィシ・シベ語話者の多い地域

LLG	区	居住者数 (人)
バナ	東ラマネ	2,336
	南ラマネ	1,834
	トマウ	3,116
	ヴェリペ	1,978
トロキナ	トベラキ	1,510
計		10,774

注³ Oliver (1955: 6) では, ブーゲンヴィルの地図上にナゴヴィシ・シベ語話者の地域がしめされている。その地域内に, 50 人を 1 点として, 70 個の点が描かれている (50 人 × 70 箇所 = 3500 人)。

(6) 人称代名詞：

	1 人称		2 人称		3 人称	
					男性	女性
単数	<i>ni</i>	<i>la'</i>	<i>tee</i>	<i>teng</i>		
双数	<i>ningga</i>	<i>langga</i>	<i>tei</i>			
複数	<i>nii'</i>	<i>lii'</i>	<i>tewoo</i>			

また、名詞句において、名詞を限定する指示詞は、名詞の数と性に関して一致する。(7)に指示詞のパラダイムを挙げる。文法的数は、人称代名詞と同じく、単数・双数・複数が区別され、文法的性は、単数においてのみ区別される。

(7) 指示詞：注⁷

	近称				遠称			
	単数		双数	複数	単数		双数	複数
(性)	男性	女性			男性	女性		
	<i>oo</i>	<i>ang</i>	<i>ai</i>	<i>awoo</i>	<i>tee</i>	<i>teng</i>	<i>tei</i>	<i>tewoo</i>
場所	<i>aa'</i>				<i>te'</i>			
様態	<i>awa</i>				<i>tewa</i>			
種類	<i>awato'</i>				<i>tewato'</i>			

動詞は、(i) 当該の動作・状態をおこなう動作者および被動者の人称、(ii) 文法的数、(iii) 肯否、(iv) 時制・相などにより屈折し、総合的な構成をなす。これらの範疇をあらわす形態素には、それぞれ音韻論的に条件付けられた異形態があり、しばしば音韻論的融合が起こる。動詞は、他動詞、自動詞に分けられ、自動詞には不規則に屈折する「居る」「行く」「来る」「死ぬ」「泣く」の5つがある。

1.3 類別詞

“Classifier”は、「類別詞」「類別辞」「分類詞」「分類辞」という術語で知られている(亀井ほか 1996: 1398–1399)。日本語の術語に見られる「～詞」や「～辞」は、どの形態論的単位を指すかによって使い分けられる場合がある。おおむね、「詞」は、語や自由形態素をあらわし、「辞」は、接辞や拘束形態素をあらわすという具合である。ただ、常に厳格な使い分けがおこなわれているわけではない。「助詞」や「助動詞」が自立的でない形態素を指す通り、「～詞」という表現が言語単位の自立性に関わらず、カバータムのように柔軟に使われている。本論文も、このような柔軟な使い分けに準じ、ナゴヴィシ・シベ語のそれが拘束形態素ではあるが、「類別詞」という名称で呼ぶことにする。

類別詞とは、一般的に言って、名詞類のカテゴリー化をおこなう形態統語的・語彙的な手段(ないし装置)のことである注⁸。ただし、「名詞類のカテゴリー化」と言っても、様々なシステムがある。名詞類別のシステムの中には、(i) 語彙的なシステム、(ii) 文法的なシステム、という二つの極があり、典型的な

注⁷ 「場所」「様態」などは、文法的性的一种(cf. モトゥナ語 Onishi 1995, ナーシオイ語 Hurd 1977),あるいは、クラス標識(class marker: 大西私信)と考えることもできるだろう。

注⁸ 類別詞は、特定の条件下で顕在化する形態素であり、類別詞構文をつくり、関連する名詞が指している物の、知覚特徴ないし属性をしめす(Allan 1977: 285)。類別詞システムのタイプは、(i) 意味、(ii) 目録のサイズ、(iii) 形態統語的なステータス、(iv) 語用論的な使用によって分けられる(Grinevald 2004: 1016)。

類別詞システムとは、両者の中間に位置するようなシステムとされている。このことを、図3に、名詞類別のシステムの略図としてしめす。

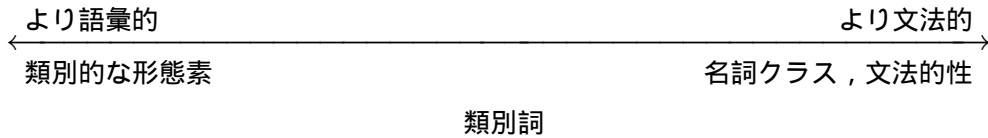


図3 名詞類別のシステム：Grinevald (2000: 61) に基づく

図3の通り、より文法的な名詞類別システムとして、名詞クラスと文法的性 (gender) の、2つのシステムがある。名詞クラスのシステムは、バントゥ諸語に広く見られる。文法的性のシステムは、様々な言語に広く見られ、印欧諸語の例がよく知られている。これら2つの名詞類別システムには次のような特徴が共通している：(i) 全ての名詞類を類別する、(ii) 類別的特徴の種類が少ない(例：男性、女性、中性...)、(iii) 類別される名詞への、類別特徴の割り当てが非有契的である場合がある。

また、図3の、「より語彙的な、類別的な形態素」とは、(8)のラマ語 *-kat* [木、固く長い物] のような形態素のことを言う。

- (8) ラマ語 (チブチャ語族, ニカラグア, Grinevald 2000: 59–60)
-kat [木、固く長い物 (=棒)]
- a. *patang-kat* 「マングローブの木」
 - b. *sumuu-kat* 「バナナの木」
 - c. *kiing-kat* 「首 (頭 + 棒)」
 - d. *kwiika-kat* 「腕 (手 + 棒)」

このような「類別的な形態素」は、新たな名詞を派生しているにすぎず、量化表現や他の構文ではもちいられない (Grinevald 2000: 60)。したがって、文法的な役割ではなく、語彙的な、レキシコンに関わる役割を果たすものとみなされる。

類別詞の中では、例えば日本語で動物を数えるために使う「匹」等の、助数詞がよく知られている (Aikhenvald 2000: 98, Grinevald 2004: 1019)^{注9}。Aikhenvald (2006: 466) によると、助数詞は東南アジアに集中する孤立型の言語に比較的好く見られる。また、南アメリカの諸言語、日本語、朝鮮語、トルコ語等の膠着型の言語や、ドラヴィダ諸語などの融合型の言語も助数詞を持っている^{注10}。助数詞を持つ言語の分布を地域別に見た場合、アフリカではかなり稀であり、オーストラリアでは皆無である (Aikhenvald 2000: 124)。

Gil (2005) は、助数詞に関して、世界の言語を次の3種類、すなわち、(1) 助数詞を持たない (260言語)、(2) 数える際に使用が随意的な助数詞を持つ (62言語)、(3) 数える際に必須の助数詞を持つ (78言語) に分け、図4の分布図を提示している。

以下では、南ブーゲンヴィル諸語の中のナゴヴィシ・シベ語における類別詞について記述する。

^{注9} 後述する「多重類別型言語」の表2からも、助数詞の用法が最も広く見られることがわかる。

^{注10} Dixon (1986: 109) も、言語の古典的な類型 (屈折 (=融合), 膠着, 孤立) と、当該の言語がとる名詞類別のシステム間の相関性、含意的傾向を指摘している。

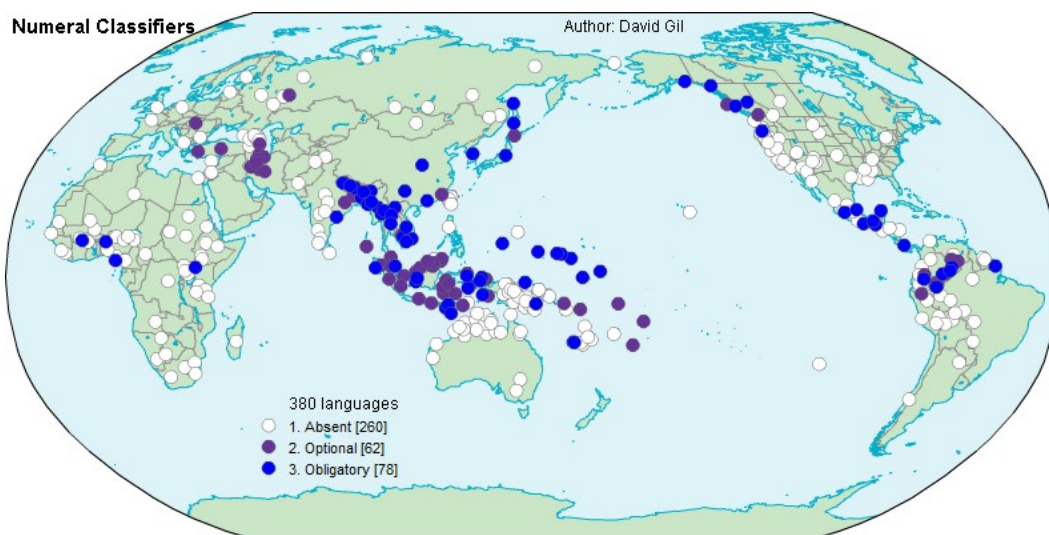


図4 助数詞を持つ言語の分布 (Gil 2005)

2 類別詞の構文

南ブーゲンヴィル諸語は、類別詞として機能する多くの形態素を持っている。その形態素は拘束形態素であるため、「類別辞」と呼ぶこともできるだろう。ナーシオイ語の類別詞の数は100を超える (Hurd 1977)。モトゥナ語には少なくとも51個の類別詞があり (Onishi 1995)、ブイン語には少なくとも29個の類別詞がある (Laycock 2003: 246–250)。

多数の類別詞を持つ言語はいくつか知られているが、類別詞が幾つもの形態統語的な環境、ないしロカス (locus) に出現する点で、ナーシオイ語やモトゥナ語が言語類型論的に注目されている。Aikhenvald (2000) は、その環境を (i) 形容詞, (ii) 助数詞, (iii) 名詞, (iv) 動詞, (v) 所有^{注11}, (vi) 位格, (vii) 直示、と7つに分け、一つの類別詞のセットを複数の環境で繰り返し使うタイプの言語を「多重類別型言語」 “Multiple Classifier Language” と呼んでいる。ナーシオイ語やモトゥナ語は、この多重類別型言語の一つとして紹介されている。

表2 類別詞のセットを複数の環境で用いる多重類別型言語：Aikhenvald (2000: 207) に基づく

環境の数	形容詞	助数詞	名詞	動詞	所有	位格	直示	言語
2	–	✓	–	✓	–	–	–	アニンディリャグワ語
	–	–	–	✓	–	✓	–	イーヤック語
3	✓	✓	–	–	–	–	✓	ネワール語
	✓	✓	–	✓	–	–	–	ワウラ語, マチゲンガ語
4	✓	✓	✓	–	–	–	✓	タイ語
	–	✓	✓	–	✓	–	✓	フモン語
	✓	✓	–	✓	–	–	✓	ヤワ語, ムンドゥルク語
5	✓	✓	–	✓	✓	–	✓	ナーシオイ語, モトゥナ語

注¹¹ 所有類別詞は, Grinevald (2000: 66), Grinevald (2004: 1021) にあるように, 属格類別詞 (genitive classifier) と呼んでもよいだろう。

類別詞のセットが、(i) 形容詞、(ii) 助数詞、(iv) 動詞、(v) 所有、(vii) 直示に、共通して使われることはほとんどない (Aikhenvald 2000: 219)。しかし、ナーシオイ語とモトゥナ語は、このうちの 4~5 種類の環境で類別詞を使うため、類型論的に稀なタイプの言語とみなされている^{注12}。

南ブーゲンヴィル諸語の一つであるナゴヴィシ・シベ語では、数詞・指示詞・不定表現・疑問詞・代名詞・形容詞の拘束形式に類別詞を添加することができ、多様な名詞句表現をつくることができる。特に、助数詞の構文においては義務的に用いられる (cf. Gil 2005)。これは、ナゴヴィシ・シベ語のほとんどの数詞が、拘束形態素であり、かつ、名詞に直接付加できないため、数詞とともに必ず助数詞を使わなければならないからである (本論文の注 14 も参照されたい)。

現段階で、ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は 59 個見つかり、それらを使い分けることによって、名詞の指す事物を様々に描写することができる。

以下、§ 2.1 では、ナゴヴィシ・シベ語における名詞句での類別詞の使用について述べ、§ 2.2 では、助数詞を記述する準備として、数詞、計数のしくみ、名詞の数え方について概観する。

2.1 名詞句

ナゴヴィシ・シベ語では語類横断的に類別詞を添加し得る。厳密に言うと、様々な語類の拘束形式に類別詞を添加することができ、その結果、様々な類別詞構文を作ることができる。特に、類別詞は名詞句が持つ意味内容の大部分を表示する役割を担う。本小節では、(9) に挙げる語類の拘束形式を扱う。

- (9) a. 指示詞： (11); **a-**「この」、**te-**「あの」
 b. 「他の」： (12a); **mooka-**「他の」
 不定： (12b); **nii'na-**「何かの」
 c. 疑問詞： (13); **ai'na-**「何の、どの」
 d. (所有) 代名詞： (16); **nggana-**「私の」、**lakana-**「あなたの」、**wakana-**「彼(女)の」
 e. 形容詞： (17); **paga-**「大きい」、**waika-**「小さい」、
nelaka-「新しい」、**ulika-**「古い」

以下、*buu'*「川、水」のための類別詞 **-wili'** を例に記述をおこなう。他の類別詞については § 3 にリストしてあるので、そちらを参照されたい。

(10) は、指示詞の拘束形式に類別詞が添加した例で、その名詞句の主要部は *buu'*「川、水」である。この例では、(10a) は、近称・単数・男性の指示詞の自由形式 *oo* と拘束形式 **a-** による例、(10b) は、遠称・単数・男性の指示詞の自由形式 *tee* と拘束形式 **te-** による例であるいずれも、[指示詞拘束形式 + 類別詞] という構成の語を含む。

- (10) *buu'*「川」
 a. *oo (buu') awili'* 「この川」
 b. *tee (buu') tewili'* 「あの川」

(10) のような名詞句では、主要部名詞の *buu'*「川」が随意的である。したがって、(10a)「この川」は、*oo awili'*、(10b)「あの川」は、*tee tewili'* のように、主要部欠如の名詞句を作ってもかまわない。注意したいのは、[指示詞拘束形式 + 類別詞] を省略し、**oo buu'* や、**tee buu'* とすることができない点である。つまり、「この川」や「あの川」のような名詞句では、類別詞が義務的に用いられる。

^{注12} 南ブーゲンヴィル諸語の類別詞が使われる、(a) 指示詞、(b) 冠詞、(c) 「他の」、(d) 疑問詞の 4 つは、「決定詞」“determiner”として一つにまとめられ、直示と同様に扱われている (Aikhenvald 2000: 220)。

さらに, *nawato'* 「ある種の」を使って, (11) のように表現することもできる。

- (11) a. (*buu'*) *awili' nawato'* 「この種の川」
 b. (*buu'*) *tewili' nawato'* 「あの種の川」

次の (12) は, 「他の」や, 不定をあらわす拘束形式に類別詞 *-wili'* が添加した例である。

- (12) a. *mookawilikoo* 「他の川で」
 b. *nii'nawilikoo* 「どの川でも」

(12a) では *mooka-* 「他の」, (12b) では *nii'na-* 「どの」という拘束形態素に類別詞が添加し, 末尾には格標識 *-koo* が接尾している。このような名詞句では, *buu'* 「川」はふつう使われない。

ここで, ナゴヴィシ・シベ語における「他の」, 不定をあらわす語について概観しておきたい。表 3 にしめすように, 「他の」や, 不定表現は, 意味と用法が互いに重なり合っている。

表 3 「他の」および不定をあらわす幾つかの語

	-la 「(物)」	-mo 「(人)」	-wato' 「(種類)」	-wa 「(方法)」
mooka-	<i>mookala</i> 「他」	<i>mookamo</i> 「他の人」	<i>mookawato'</i> 「他の種」	
nii'na-	<i>nii'nala</i> 「他の物」	<i>nii'namo</i> 「誰か」	<i>nii'nawato'</i> 「ある種」	<i>nii'nawa</i> 「何とか/他の方法」
peeka-	<i>peekala</i> 「何か(大)」			<i>peekawa</i> 「何としても」

特に, *nii'nawa* は「他の方法」「何とかして」をあらわし, *nii'ngang* (以下の (14) を参照) は「他の時」「ある時」をあらわす。このため, 「他の」と不定は, 一つのまとまった不定表現と考えてよいだろう。(12) で, 両者を一まとめに例示したのはこのためである。

(13) は, 疑問詞の拘束形式 *ai'na-* に類別詞が使われる例である。あわせて, (14) に 3 つの疑問詞 *alewato'* 「どの種」, *alewa* 「どのように」, *ai'ngang* 「いつ」を挙げる。これら 3 つの疑問詞は, 不定表現を派生する際にも使われる接尾辞, *-wato'* 「(種類)」, *-wa* 「(方法)」, *-ng* 「(時)」が添加したものである。

- (13) *ai'nawili'* 「何の川, どの川」

(14)	-wato' 「(種類)」	-wa 「(方法)」	-ng 「(時)」
ale-	<i>alewato'</i> 「どの種」	<i>alewa</i> 「どのように」	
ai'na-			<i>ai'ngang</i> 「いつ」
(nii'na-	<i>nii'nawato'</i> 「ある種」	<i>nii'nawa</i> 「何とか」	<i>nii'ngang</i> 「ある時, 他の時」)

(13) の疑問表現においても, (12) と同様, 名詞 *buu'* 「川」を使う必要はない。

(6) で見たように, 人称代名詞は, 人称のみならず, 数と性が区別される。(15) に人称代名詞の所有形のパラダイムをしめす。(6) の人称代名詞では, 3 人称単数に男性・女性の別々の形式があるが, 以下の所有形では, 人称と数のみが区別される。語形の末尾に共通して現れる *-ng* についてはよくわかっていない。同系統のモトゥナ語において, *-ng* は被所有者の文法的性に一致する形態素である (Onishi 1995)。

(15) 人称代名詞所有形 (自由形式) :

	1 人称	2 人称	3 人称
単数	<i>nggang</i>	<i>lakang</i>	<i>wakang</i>
双数	<i>neekang</i>	<i>leekang</i>	<i>weekang</i>
複数	<i>niikang</i>	<i>liikang</i>	<i>wiikang</i>

(16) に、人称代名詞による所有名詞句を挙げる。所有名詞句の構成には、主に二種類あり、(i) 所有名詞句の主要部名詞 (*buu'* 「川」) と、所有の自由形式を用いるか、(ii) 所有の拘束形式と、類別詞 (*-wili'* : 主要部名詞を類別する) を用いるというパターンがある。

- (16) a. 「私の川」: *buu' nggang, ngganawili'*
 b. 「あなたの川」: *buu' lakang, lakanawili'*
 c. 「彼(女)の川」: *buu' wakang, wakanawili'*

ここまで見てきたように、不定表現、疑問詞、人称代名詞所有の拘束形式は、末尾の *na* という音節が共通している ((9) を参照されたい)。この *na* は、それぞれの拘束形式と類別詞を結びつける際に必要な形態素であると分析できる。

(17) に、形容詞の拘束形式に類別詞が添加される例を挙げる。(16) の人称代名詞の所有名詞句と同様、連体的な形容詞を用いた名詞句にも二種類の構成パターンが見られる：(i) 主要部名詞と、形容詞の自由形式の構成、(ii) 形容詞拘束形式と、類別詞の構成である。

- (17) a. 「大きい川」: *buu' panna', pagawili'*
 b. 「小さい川」: *buu' waikesi, waikawili'*
 c. 「新しい川」: *buu' nelakala, nelakawili'*
 d. 「古い川」: *buu' ulikala, ulikawili'*

現段階で、類別詞が付く形容詞の拘束形式としては (17) の「大きい」「小さい」「新しい」「古い」の 4 つが見ついている。ここで注意しておきたいのは、(17a) と (17b) の形容詞語根が、自由形式と、拘束形式との間で形が違う点である。このような語根の形式的相違は、(17c) の「新しい」と (17d) の「古い」との間には見られない。実は、拘束形式の *paga-* 「大きい」と *waika-* 「小さい」は、それぞれ、「多い」と「少ない」に対応している。

- (18) a. *panna'* 「大きい」 — *paga-* (形容詞拘束形式) — *pagago* 「多い」
 b. *waikesi* 「小さい」 — *waika-* (形容詞拘束形式) — *waikalaa'* 「少ない」

以上、本小節では、ナゴヴィシ・シベ語において、一つの類別詞が様々な語類に付属することを観察した。ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は、Aikhenvald (2000) の類型論的枠組みの観点から見ると、表 2 の中の「形容詞」「所有」「直示」という、少なくとも 3 つの形態統語的環境で使われる。次小節では、助数詞を観察する準備として、ナゴヴィシ・シベ語の計数のしくみについて記述する。

2.2 計数のしくみと名詞の数え方

ナゴヴィシ・シベ語の数のあらわし方は、五を基準にした五進法である。これは片手の指の数に由来した数え方である。母語話者に、0 や 1 から 10 まで数を数えてもらおうと、以下の表 4 のようになる。

表4 計数：0~10

0 kaamoi	
1 nabile'	6 <i>nabileke noola</i>
2 keboleka	7 <i>kebolekai noola</i>
3 weelegoi'	8 <i>weelegoike noola</i>
4 posi'nami'	9 <i>posi'namike noola</i>
5 pa'noko'	10 noola

0, 5, 10 と 1~4 は 1 語だが, 6~9 は, 1~4 の形式と 10 の形式を組み合わせた句であらわされる。6~9 は, おおむね, 「10 に向かうときの *x*」と読み取れるような句を形成する。その句に含まれる, 「向かうときの」にあたる形式には, -ke と -i の異形態がある。双数をあらわす -ka の直後に生起して [- 双数 - 向かうときの] となるときに限り, -ke が添加した -ka-ke ではなく, -ka-i となる。これは, k...k の隣接を避けて kake の後部の /k/ を削除し, その後 kae の音素配列 /ae/ を避けて /e/ を /i/ で代用するプロセスが生じ, その結果 kei [- 双数 - 向かうときの] が得られるのだと考えることができる^{注13}。

表5 計数：11~50

11 <i>noola nabile'</i>	16 <i>noola (maka') nabileke noola</i>
12 <i>noola keboleka</i>	17 <i>noola (maka') kebolekai noola</i>
13 <i>noola weelegoi'</i>	18 <i>noola (maka') weelegoike noola</i>
14 <i>noola posi'nami'</i>	19 <i>noola (maka') posi'namike noola</i>
15 <i>noola pa'noko'</i>	20 nannamoo'
21 <i>nannamoo' nabile'</i>	26 <i>nannamoo' nabileke noola</i>
22 <i>nannamoo' keboleka</i>	27 <i>nannamoo' kebolekai noola</i>
23 <i>nannamoo' weelegoi'</i>	28 <i>nannamoo' weelegoike noola</i>
24 <i>nannamoo' posi'nami'</i>	29 <i>nannamoo' posi'namike noola</i>
25 <i>nannamoo' pa'noko'</i>	30 <i>nannamoo' noola (20+10)</i>
31 <i>nannamoo' noola nabile'</i>	36 <i>nannamoo' noola maka' nabileke noola</i>
32 <i>nannamoo' noola keboleka</i>	37 <i>nannamoo' noola maka' kebolekai noola</i>
33 <i>nannamoo' noola weelegoi'</i>	38 <i>nannamoo' noola maka' weelegoike noola</i>
34 <i>nannamoo' noola posi'nami'</i>	39 <i>nannamoo' noola maka' posi'namike noola</i>
35 <i>nannamoo' noola pa'noko'</i>	40 nangkemooka
41 <i>nantkemooka nabile'</i>	46 <i>nantkemooka nabileke noola</i>
42 <i>nantkemooka keboleka</i>	47 <i>nantkemooka kebolekai noola</i>
43 <i>nantkemooka weelegoi'</i>	48 <i>nantkemooka weelegoike noola</i>
44 <i>nantkemooka posi'nami'</i>	49 <i>nantkemooka posi'namike noola</i>
45 <i>nantkemooka pa'noko'</i>	50 <i>nantkemooka noola (40+10)</i>

注13 モトゥナ語には, 様々な機能を持つ具格接尾辞 -ki (~ngi~i) がある。この接尾辞は, 「道具」以外にも, 場所名詞を主要部とする名詞句内に添加して「通過点」をあらわすが, 計数の形式においても 10 や 20 に向かうときの「通過点」をあらわす (Onishi 2004: 93, 96-97)。ナゴヴィシ・シベ語の -ke (~i) がモトゥナ語の -ki (~ngi~i) と同源なのは間違いないが, ナゴヴィシ・シベ語の具格の考察は今後の課題としたい。

11~50 のあらわし方は、表 5 にしめした通りである。11~19 は、*noola* 「十」を使って、「10 と 1」, 「10 と 2」, 「10 と 3」... のような句を形成し、21~29, 31~39, 41~49 も同様に、20, 30, 40 それぞれの表現に、1~9 を加えてあらわす。その際、*maka* 「~と」が随意的に使われる場合がある。

表 6 計数：20~200

20	<i>nannamoo'</i>	120	<i>nannauloke nalai'</i>
40	<i>nangkemooka</i>	140	<i>nangkeulokai nalai'</i>
60	<i>nanweenalou</i>	160	<i>nanweenalouke nalai'</i>
80	<i>nangkalenalou</i>	180	<i>nangkalenalouke nalai'</i>
100	<i>nanwounalou</i>	200	<i>nalai'</i>

表 7 計数：200~1000

200	<i>nalai'</i>
400	<i>kenaika</i>
600	<i>weekaipi</i>
800	<i>kalekaipi</i>
1000	<i>kokolei namoo</i>

表 5 を見ると、**20** *nannamoo'*、**40** *nangkemooka* は 1 語だが、それ以外の数は、1~4, 5, 6~9, 10 を組み合わせた句で表現することがわかる。例えば、「36」は、「20 と 10, および 10 に向かうときの 1」のような句をつくってあらわす。

表 6 にしめした通り、二十を基準として、20~200 の数があらわされる。二十を基準とした計数は、両手両足の全ての指の数、つまり 1 人の人間の指の数に由来した数え方である。ここで、20~200 の計数と、表 4 の 0~10 の計数の間に類似点が見られることに注意したい：**20, 40, 60, 80, 100, 120, 140** と **200** は 1 語であり、160, 180 は、**60, 80** と **200** の形式を組み合わせ、「200 に向かうときの 60」「200 に向かうときの 80」のような句を形成してあらわす。

さらに、200~1000 の数え方は、二百を基準としておこなわれる。1~200 によって 399 まで表現することができるが、400 をあらわすためには、それ特有の表現が必要になる。そのため、二百ごとに特有の単語 1 語が使われるのである。

表 4, 6, 7 に見られる語の形式から、以下の (19) にしめす通り、「一~五」の数語幹、すなわち数詞の拘束形式を分析することができる (nan(g)- については § 3 の [44] の解説および、(25) を参照されたい)。

(19) 数語幹：

- | | | | | | |
|-------------------|-----|--------------|--------------|-------------|-------------|
| a. na- ： | 「一」 | 1 (-bole'), | 20 (-moo'), | 120 (-ulo), | 200 (-lai') |
| b. ke- ： | 「二」 | 2 (-bole), | 40 (-moo), | 140 (-ulo), | 400 (-nai) |
| c. wee- ： | 「三」 | 3 (-legoi'), | 60 (-nalou), | | 600 (-kai) |
| d. kale- ： | 「四」 | | 80 (-nalou), | | 800 (-kai) |
| e. wou- ： | 「五」 | | 100 (-nalou) | | |

ただし, (19e) の「五」をあらわす **wou-** は, 5 にも 1000 にも使われず, 計数の例においては, 100 の一例のみに見つかっている。

以下の (20) に, 名詞を数える名詞句の構成を, *buu'* 「川」を使って例示する。(20e) の **wou-** 「五」には, 異形態として **bou-** があることがわかる。これらは, b~w の自由異音による異形態である。

- (20) *buu'* 「川」
- | | | |
|----------|---------------------------------------|---------------------------------|
| a. 1 つ : | <i>buu' nawili'</i> | (<i>nabole'</i> 「一」) |
| b. 2 つ : | <i>buu' kewilika</i> | (<i>keboleka</i> 「二」) |
| c. 3 つ : | <i>buu' weewilika</i> | (<i>weelegoi'</i> 「三」) |
| d. 4 つ : | <i>buu' kalewilika</i> | (<i>posi'nami'</i> 「四」) |
| e. 5 つ : | <i>buu' wouwilika, buu' bouwilika</i> | (<i>pa'noko'</i> 「五」) |
| f. 6 つ : | <i>buu' nawilike noola</i> | (<i>naboleke noola</i> 「六」) |
| g. 7 つ : | <i>buu' kewilikai noola</i> | (<i>kebolekai noola</i> 「七」) |
| h. 8 つ : | <i>buu' weewilikai noola</i> | (<i>weelegoike noola</i> 「八」) |
| i. 9 つ : | <i>buu' kalewilikai noola</i> | (<i>posi'namike noola</i> 「九」) |
| j. 10 : | <i>buu' noola</i> | (<i>noola</i> 「十」) |

名詞を数える名詞句にも, §2.1 のものと全く同じ類別詞 **-wili'** がもちいられる。なお, (20j) の「10 筋の川」では, 類別詞を使わず, 数詞が直接的に名詞を修飾することが可能である。しかし, それ以外の「1 筋~9 筋」の場合, 類別詞は義務的に用いられる^{注14}。

(20) の例と, 計数の例を比較すると, 幾つかの助数詞を分析することができる。それは, 表 4-7 で見えた数詞に含まれている助数詞である。以下の (21) に, その助数詞を列挙する。

- (21) a. **-bole(?)** : *nabole'* 「1」(*naboleke noola* 「6」), *keboleka* 「2」
 b. **-legoi(?)** : *weelegoi'* 「3」(*weelegoike noola* 「8」)
 c. **-moo** : *nannamoo'* 「20」, *nangkemooka* 「40」
 d. **-nalou** : *nanweenalou* 「60」, *nangkalenalou* 「80」, *nanwounalou* 「100」
 e. **-ulo** : *nannauloke nalai'* 「120」, *nangkeulokai nalai'* 「140」
 f. **-lai'~-nai** : *nalai'* 「200」, *kenaika* 「400」
 g. **-kai** : *weekaipi* 「600」, *kalekaipi* 「800」

§3 の (25) でも言及するが, (21a, 21b) の **-bole(?)**, **-legoi(?)** は「石」「星」「部屋」「芋」[果物等の実全般]などに使う一般的類別詞であり, その他, (21c-21e) の **-moo**, **-nalou**, **-ulo** は「人」に使い, (21f) **-lai'~-nai** と, (21g) **-kai** は「10 人」という一かたまりに使われる。

以下の §3 では, 現段階で見つかっている類別詞を取り上げ, 助数詞の構文における形態法に基づいて, 類別詞の分類・記述をおこなう。

^{注14} そのため, 図 4 で見た Gil (2005) による助数詞のタイプ分けの観点から見ると, ナゴヴィシ・シベ語は, 1~9 を使って名詞を数える際, 義務的に助数詞を使うタイプの言語と言えるが, 10 の場合に助数詞を使わない点には注意すべきだろう。

3 類別詞のリストと形態法

ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は、拘束形態素であり、「類別辞」と呼ぶこともできるが (cf. 稲垣 2009), § 1.3 でも述べたとおり、「類別詞」というカバータームを用いることにする。

ここでは、[数語幹 - 類別詞 - 文法的数の接尾辞] という内部構造を持った計数の形式を 1~5 まで例示し、(i) 文法的数 3 つを区別するタイプ 1、(ii) 2 つの数を区別するタイプ 2、(iii) 3 つの数を区別し、異形態が語彙的に条件付けられているタイプ 3、(iv) 「1」の数をあらわす形式が、序数 (= 「1 番目」) と同じ形式をとるタイプ 4、(v) 「2」の数までしかあらわせないタイプ 5 の類別詞に分けて記述をおこなう。

(22) 計数の形式の内部構造： 数語幹 - 類別詞 - 文法的数の接尾辞

- a. タイプ 1：文法的数が 3 つ区別される。類別詞には音韻論的に条件付けられた異形態があり得る
- b. タイプ 2：文法的数が 2 つ区別される。類別詞には音韻論的に条件付けられた異形態があり得る
- c. タイプ 3：文法的数が 3 つ区別される。類別詞には語彙・形態論的に条件付けられた異形態がある
- d. タイプ 4：「1」の数をあらわす形式が、序数 (= 「1 番目」) と同じ形式をとる
- e. タイプ 5：「2」の数までしかあらわせない

それぞれの類別詞は、添加される文法的数の形式に基づいてアルファベット順に列挙する。その中で、類別詞自体の形式もアルファベット順に並べる。類別詞ごとに記述する内容は、(i) [番号]、(ii) 「類別詞の意味」、(iii) (数える対象をあらわす名詞)、(iv) 計数の形式と「その意味」である。

■ タイプ 1：3 つの文法的数；異形態 (音韻論的)

このタイプの類別詞の形式は、音韻論的に条件付けられた、規則的な異形態を持つ場合がある。その異形態のほとんどは、末尾に声門閉鎖音を持たない形式 **-FORM** と末尾に声門閉鎖音を持つ形式 **-FORM'** の交替によるものである。そのため、類別詞の形式は **-FORM(?)** のように表示する。

類別詞の形式に含まれる末尾の声門閉鎖音は、「語末」という環境でのみ顕現する。したがって、「語中」という環境に置かれると現れない。これは、(23) のような、直後に音が続く場合に声門閉鎖音を削除する規則として定式化できる。この規則は、(12) で見たように、格標識が続く場合も適用される。

(23) /' / → ∅ / __ C or __ V

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-ba$ ；複数 $-bi$

[1] **-lu**：「本 (太)」 (*bana* 「(支える) 杖・棒」, *koiwala* 「キャッサバ・タピオカ」, *luubu* 「舞踊の槍」);
na-lu- \emptyset 「1 本」, ke-lu-ba 「2 本」, wee-lu-bi 「3 本」, kale-lu-bi 「4 本」, bou-lu-bi 「5 本」

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-da$ ；複数 $-du$

[2] **-bo**：「10 豚等」 (*poulo'* 「豚」等); na-bo- \emptyset 「10 頭」, ke-bo-da 「20 頭」, wee-bo-du 「30 頭」,
kale-bo-du 「40 頭」, bou-bo-du 「50 頭」

[3] **-ma**：「房 (バナナ)」 (*wila* 「バナナ」); na-ma- \emptyset 「1 房」, ke-ma-da 「2 房」, wee-ma-du 「3 房」,
kale-ma-du 「4 房」, bou-ma-du 「5 房」

- [4] **-me** : 「台」 (*taatalu* 「キッチン両端の長椅子」 (= *sigesige*), *tammaa* 「ベッド」); *na-me-∅* 「1台」, *ke-me-da* 「2台」, *wee-me-du* 「3台」, *kale-me-du* 「4台」, *bou-me-du* 「5台」
- [5] **-we** : 「歯」 (*kaliwe* 「歯(全部)」, *kawe* 「歯(一本)」); *na-we-∅* 「1歯」, *ke-we-da* 「2歯」, *wee-we-du* 「3歯」, *kale-we-du* 「4歯」, *bou-we-du* 「5歯」
- [6] **-wi** : 「本(細)」 (*aime* 「釣糸」, *mou* 「ココナッツ 10個のストリング」, *nabiya'* 「調理したサゴ」, *puli* 「主根」, *simee* 「紐」, *walaama* 「鰻」, *witu* 「縄」); *na-wi-∅* 「1本」, *ke-wi-da* 「2本」, *wee-wi-du* 「3本」, *kale-wi-du* 「4本」, *bou-wi-du* 「5本」

[2] に挙げた計数の形式は、10~50頭をあらわすものである。ここで用いられる類別詞は、10頭を一かたまりとみなす。そのため、10頭は単数、20頭は双数、30頭以上は複数というように、文法的数の形態素との共起が見られる。

数：単数 *-∅*；双数 *-ka*；複数 *-aa*

- [7] **-lii**(?) : 「飾」 (*wiasii'* 「貝貨」^{ばいがか}, *biili* 「ビーズ首飾り」, *padapada* 「首飾り」); *na-lii'-∅* 「1飾」, *ke-lii-ka* 「2飾」, *wee-lii-aa* 「3飾」, *kale-lii-aa* 「4飾」, *bou-lii-aa* 「5飾」
- [8] **-mii**(?) : 「山」 (*bui* 「ヤム」, *kanukana'* 「コンコンタロ」, *koiwala* 「キャッサバ」, *naana'* 「タロ」, *sapaia'* 「薩摩芋」); *na-mii'-∅* 「1山」, *ke-mii-ka* 「2山」, *wee-mii-aa* 「3山」, *kale-mii-aa* 「4山」, *bou-mii-aa / pa'noko'* 「5山」
- [9] **-muli**(?) : 「黍」 (*buulika* 「玉蜀黍^{とうもろこし}の一種」, *kousopa'* 「玉蜀黍」); *na-muli'-∅* 「1黍」, *ke-muli-ka* 「2黍」, *wee-muli-aa* 「3黍」, *kale-muli-aa* 「4黍」, *bou-muli-aa* 「5黍」
- [10] **-(wee)li**(?) : 「本」 (*aibrid* 「鯉」, *kalege* 「魚」, *lapo* 「髪」, *nawato* 「羽」, *niili'* 「釘」, *pensolo* 「鉛筆」, *sikaala'* 「煙草」, *soosesi* 「ソーセージ」, *tukaa'* 「矢」, *waapau'* 「槍」); *na-(wee)li'-∅* 「1本」, *ke-(wee)li-ka* 「2本」, *wee-li-aa* 「3本」, *kale-li-aa* 「4本」, *bou-li-aa / pa'noko'* 「5本」
- [11] **-wili**(?) : 「筋(川)」 (*buu'* 「川」); *na-wili'-∅* 「1筋」, *ke-wili-ka* 「2筋」, *wee-wili-aa* 「3筋」, *kale-wili-aa* 「4筋」, *bou-wili-aa* 「5筋」

-weeli' 「本」には、音韻論的に条件付けられた *-weeli' ~ -weeli ~ -li' ~ -li* という異形態がある。*-weeli' ~ -weeli* および *-li' ~ -li* の交替は(23)の規則によるものだが、*-weeli' ~ -li'* および *-weeli ~ -li* の交替はそれ以外の要因による。「3本」の場合、仮に *-weeli* をそのまま使うと、*wee-weeli-aa* となり、*/wee/* という音節が重複してしまう。この重複は、類別詞の初頭音節を削除することで回避され、その結果、*wee-li-aa* という形式となる。ここで生じる類別詞の短縮形 *-li* が、類推によって「4本」「5本」の計数にも使われる。「1本」「2本」の場合は、類別詞の短縮形が随意的に使われる。

数：単数 *-∅*；双数 *-ka*；複数 *-i*

- [12] **-lo**(?) : 「切(細長)」 (*kololo'* 「バナナの皮、縄の一種」, *latakasi* 「豚の切り身」, *poulo'* 「豚」); *na-lo'-∅* 「1切」, *ke-lo-ka* 「2切」, *wee-lo-i* 「3切」, *kale-lo-i* 「4切」, *bou-lo-i / pa'noko'* 「5切」
- [13] **-male**(?) : 「年」 (*mai* 「年」); *na-male'-∅* 「1年」, *ke-male-ka* 「2年」, *wee-male-i* 「3年」, *kale-male-i* 「4年」, *bou-male-i / pa'noko'* 「5年」

- [14] **-ne(?)**:「枚(小)」 (*baalo*「布」, *kaato'*「サゴの葉」, *kone*「ココヤシ葉」, (*laka*)*lakamaa*「毛布」, *pada'*「葉」, *peepa*「紙」); *na-ne'-∅*「1枚」, *ke-ne-ka*「2枚」, *wee-ne-i*「3枚」, *kale-ne-i*「4枚」, *bou-ne-i*「5枚」
- [15] **-wolo(?)**:「頭」 (*mookono*「亀」, *nabiya'*「未調理サゴのパック」, *poulo'*「豚」); *na-wolo'-∅*「1頭」, *ke-wolo-ka*「2頭」, *wee-wolo-i*「3頭」, *kale-wolo-i*「4頭」, *bou-wolo-i*「5頭」, *na-bo*「10頭」

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-ka$ ；複数 $-li$

- [16] **-mage**:「膳」 (*kasou'*「二枚貝(食器用)」, *pooku*「フォーク」, *sipunu*「スプーン」); *na-mage-∅*「1膳」, *ke-mage-ka*「2膳」, *wee-mage-li*「3膳」, *kale-mage-li*「4膳」, *bou-mage-li*「5膳」
- [17] **-wedo(?)**:「枚(大)」 (*kubi*「扉」, *tapee'*「板」, *tapesiko*「板」); *na-wedo'-∅*「1枚」, *ke-wedo-ka*「2枚」, *wee-wedo-li*「3枚」, *kale-wedo-li*「4枚」, *bou-wedo-li*「5枚」

ちなみに, *kemageka* は「2膳(の食器)」をあらわすが, 一方で「蟹」もあらわす。蟹は, エサを掴んだり, 口に運んだりするための「ハサミ」を2つ持っているからである。**-mage** という形式は, *mage*「爪」と関連している。

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-ka$ ；複数 $-pi$

- [18] **-liau(?)**:「袋」 (*besa'*「籠」, *bokata'*「(男の)網袋」, *kakau*「カカオ」, *koopii*「珈琲」, *laisi*「米」, *peku'*「ココヤシの葉で作った手提カバン」, *piinat*「落花生」); *na-liau'-∅*「1袋」, *ke-liau-ka*「2袋」, *wee-liau-pi*「3袋」, *kale-liau-pi*「4袋」, *bou-liau-pi*「5袋」^{注15}
- [19] **-wiaa(?)**:「実(バナナ)」 (*wila*「バナナ」); *na-wiaa'-∅*「1実」, *ke-wiaa-ka*「2実」, *wee-wiaa-pi*「3実」, *kale-wiaa-pi*「4実」, *bou-wiaa-pi* / *pa'noko*「5実」

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-la$ ；複数 $-li$

- [20] **-lusi**:「歌」 (*sila*「歌」); *na-lusi-∅*「1歌」, *ke-lusi-la*「2歌」, *wee-lusi-li*「3歌」, *kale-lusi-li*「4歌」, *bou-lusi-li*「5歌」
- [21] **-mago**:「腿」 (*mago*「腿」); *na-mago-∅*「1腿」, *ke-mago-la*「2腿」, *wee-mago-li*「3腿」, *kale-mago-li*「4腿」, *bou-mago-li*「5腿」
- [22] **-miku**:「10キナ」 (*maani*「お金」); *na-miku-∅*「10キナ」, *ke-miku-la*「20キナ」, *wee-miku-li*「30キナ」, *kale-miku-li*「40キナ」, *bou-miku-li*「50キナ」
- [23] **-mono**:「10飾」 (*biili*「ビーズ首飾り」, *padapada*「首飾り」, *wiasii'*「^{はいか}貝貨」); *na-mono-∅*「10飾」, *ke-mono-la*「20飾」, *wee-mono-li*「30飾」, *kale-mono-li*「40飾」, *bou-mono-li*「50飾」

注¹⁵ 話者によって, **-liau(?)** ~ **-waake** の交替が見られる場合もある。その際の計数の形式は, *na-liau'-∅*「1袋」, *ke-waake-la*「2袋」, *wee-waake-lu*「3袋」, *kale-waake-lu*「4袋」, *bou-waake-lu*「5袋」である。ここでは, 類別詞の形式が単数の場合と非単数の場合とで異なっており, 「1袋」は補充形式である可能性がある。このようなケースはこの一例に限られるため, さらなる調査が必要である。

- [24] **-walo** : 「回」 (*watei* 「時」); na-walo- \emptyset 「1回」, ke-walo-la 「2回」, wee-walo-li 「3回」, kale-walo-li 「4回」, bou-walo-li 「5回」
- [25] **-wiku** : 「筋(道)」 (*toolulu* 「道」); na-wiku- \emptyset 「1筋」, ke-wiku-la 「2筋」, wee-wiku-li 「3筋」, kale-wiku-li 「4筋」, bou-wiku-li 「5筋」
- [26] **-wisi** : 「軒・艘・台」 (*balusi* 「飛行機」, *kaala'* 「車」, *laupai'* 「クラブハウス」, *pakaasi* 「カヌー」, *pawa* 「家」, *siipii* 「船」, *wiliwili* 「自転車」); na-wisi- \emptyset 「1台」, ke-wisi-la 「2台」, wee-wisi-li 「3台」, kale-wisi-li 「4台」, bou-wisi-li 「5台」
- [27] **-woto** : 「束」 (*kaato'* 「サゴの葉」, *koina'* 「木」, *sisilaki'* 「竹」, *tana* 「砂糖黍」, *wetuwetu* 「薪」); na-woto- \emptyset / *nawoko* 「1束」, ke-woto-la 「2束」, wee-woto-li 「3束」, kale-woto-li 「4束」, bou-woto-li 「5束」^{注16}

[22] と [23] に挙げた計数の形式は、それぞれ 10~50 キナ、10~50 飾をあらわすものである。[2] の類別詞のふるまいと同様、10 が単数、20 が双数、30 以上が複数である。

■ タイプ 2 : 2 つの文法的数 ; 異形態 (音韻論的)

タイプ 2 の類別詞は、大多数が声門閉鎖音を末尾に含む。そのため、タイプ 1 と同様、音韻論的に条件付けられた異形態を持つ。この異形態も、(23) の規則で記述できる。類別詞の形式は **-FORM(*)** のように表示する。

タイプ 1 との主な違いは、計数の形式の末尾に添加される文法的数が 2 種類しかない点である。タイプ 1 では、単数 / 双数 / 複数の 3 種類が区別されるが、タイプ 2 では、単数 / 非単数の 2 種類しか区別されない。文法的数の標識の分析については、§ 4 を参照されたい。

数 : 単数 $-\emptyset$; 非単数 $-ka$

- [28] **-lubo(*)** : 「滴」 (*apo'* 「雫」, *asaala* 「汗」, *talu'* 「涙」, *tuwaa* 「一日に降った雨の回数」); na-lubo'- \emptyset 「1滴」, ke-lubo-ka 「2滴」, wee-lubo-ka 「3滴」, kale-lubo-ka 「4滴」, bou-lubo-ka 「5滴」
- [29] **-meesi(*)** : 「区」 (*mesii'* 「土地」, *osi'* 「村」); na-meesi'- \emptyset 「1区」, ke-meesi-ka 「2区」, wee-meesi-ka 「3区」, kale-meesi-ka 「4区」, bou-meesi-ka 「5区」
- [30] **-mesi(*)** : 「土」 (*mesii'* 「土・地面」); na-mesi'- \emptyset 「1土」, ke-mesi-ka 「2土」, wee-mesi-ka 「3土」, kale-mesi-ka 「4土」, bou-mesi-ka 「5土」
- [31] **-miilu(*)** : 「深み」 (*bong'* 「沼地」, *mato'* 「深み」, *miilu'* 「深い場所」); na-miilu'- \emptyset 「1深み」, ke-miilu-ka 「2深み」, wee-miilu-ka 「3深み」, kale-miilu-ka 「4深み」, bou-miilu-ka 「5深み」
- [32] **-mui(*)** : 「泥」 (*meeto'* 「泥」, *mesii'* 「土地」); na-mui'- \emptyset 「1泥」, ke-mui-ka 「2泥」, wee-mui-ka 「3泥」, kale-mui-ka 「4泥」, bou-mui-ka 「5泥」
- [33] **-naasi(*)** : 「庭」 (*kasi'* 「プランテーション庭園」); na-naasi'- \emptyset 「1庭」, ke-naasi-ka 「2庭」, wee-naasi-ka 「3庭」, kale-naasi-ka 「4庭」, bou-naasi-ka 「5庭」

注16 「一束」を *nawoto* とするか、*nawoko* とするかは方言差による。

- [34] **-wagu(°)** : 「弓」 (*baa* 「弓」); *na-wagu*-∅ 「1 弓」, *ke-wagu-ka* 「2 弓」, *wee-wagu-ka* 「3 弓」, *kale-wagu-ka* 「4 弓」, *bou-wagu-ka* 「5 弓」
- [35] **-wile(°)** : 「芋」 (*bui* 「ヤム」, *koiwala* 「キャッサバ」, *sapaia* 「薩摩芋」); *na-wile*-∅ 「1 芋」, *ke-wile-ka* 「2 芋」, *wee-wile-ka* 「3 芋」, *kale-wile-ka* 「4 芋」, *bou-wile-ka* 「5 芋」
- [36] **-wola(°)** : 「森」 (*mesi* 「土地」, *pola* 「森」); *na-wola*-∅ 「1 森」, *ke-wola-ka* 「2 森」, *wee-wola-ka* 「3 森」, *kale-wola-ka* 「4 森」, *bou-wola-ka* 「5 森」
- [37] **-wuubu(°)** : 「張」 (*baanisi* 「豚飼育のフェンス」, *toloona* 「魚罟 (流れを塞ぎ止めるタイプ)」, *waakaane* 「魚罟 (筒タイプ)」); *na-wuubu*-∅ 「(網) 1 張」, *ke-wuubu-ka* 「2 張」, *wee-wuubu-ka* 「3 張」, *kale-wuubu-ka* 「4 張」, *bou-wuubu-ka* 「5 張」

数：単数 -∅；非単数 *-la*

- [38] **-leuku** : 「穴」 (*leuku* 「穴」, *kuula* 「穴」); *na-leuku*-∅ 「1 穴」, *ke-leuku-la* 「2 穴」, *wee-leuku-la* 「3 穴」, *kale-leuku-la* 「4 穴」, *bou-leuku-la* 「5 穴」
- [39] **-noowe** ~ **-loowe** : 「枝」 (*aagu* 「枝」); *na-loowe*-∅ 「1 枝」, *ke-noowe-la* 「2 枝」, *wee-noowe-la* 「3 枝」, *kale-noowe-la* 「4 枝」, *bou-noowe-la* 「5 枝」

[39] の **-noowe** 「枝」と、後述する [46] の **-nai(°)** 「10 人」には、それぞれ **-loowe**, **-lai'** という音韻論的に予測可能な交替が見られる。これらの交替は、類別詞の初頭音節子音の /n/ ~ /l/ の異音によるものである。[39] では、/l/ は「1 枝」に、/n/ は「2/3/4/5 枝」に観察され、その /n/ の分布の広さから、**-noowe** を基本形とみなすことができる。**-loowe** や **-lai'** が現れる条件は、数語幹の *na*-「1」が持つ音節頭の鼻音によると考えられる。すなわち、鼻音を頭子音として持つ音節 /na/ と /noo, nai(°)/ が隣接するのを回避するために異化が起こり、頭子音の鼻音性を失った /loo, lai'/ という音節が使われるのである。ただし、[14] の *na-ne'* 「1 枚」、[33] の *na-naasi'* 「1 庭」、[42] の *na-ne'* 「1 着」のように、鼻音性が保持される例もある。このことを考慮すると、/n/ から /l/ への異化プロセスは、散発的に起こるものだと言える。

■ タイプ 3：3 つの文法的数；異形態 (語彙・形態論的)

タイプ 1 とタイプ 2 の類別詞には、音韻論的に条件付けられた異形態があることを見た。以下に列挙するタイプ 3 の類別詞には、規則 (23) の声門閉鎖音に関わる異形態もあるが、音韻論的に予測できない特殊な異形態がある。この特殊な異形態は、語彙的ないし形態論的に条件付けられており、「3」以上の計数に補充形式として観察される。「3」以上の場合は複数が標示されるのだが、特殊な異形態を持つ類別詞の中には、複数をあらかず標識と融合して、[... 類別詞 - 複数] とは分節できず、[... 類別詞 + 複数] となっているようなものもある。この [... 類別詞 + 複数] のような形式の類別詞については後述する。以下では、まず、タイプ 1 の分析において明確に分節された標識 *-aa*, *-bi*, *-i*, *-li*, *-pi* (複数) を抽出し、[... 類別詞 - 複数] と容易に分節できるような例から見ていく。

数：単数 -∅；双数 *-da*；複数 *-li*

- [40] **-mala** ~ **-koumo** : 「切」 (*koina* 「木」, *koiwala* 「キャッサバ」, *puli* 「主根」, *sapaia* 「薩摩芋」, *wila* 「バナナ」, *witu* 「縄」); *na-mala*-∅ 「1 切」, *ke-mala-da* 「2 切」, *wee-koumo-li* 「3 切」, *kale-koumo-li* 「4 切」, *bou-koumo-li* 「5 切」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -aa

- [41] **-weemo(°) ~ -moi**：「本」 (*koina* '木', *padepade* '梯子', *wetuwetu* '薪'); na-weemo'-∅
「1本」, ke-weemo-ka「2本」, wee-moi-aa「3本」, kale-moi-aa「4本」, bou-moi-aa「5本」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -bi

- [42] **-ne(°) ~ -la**：「着」 (*kulukulu* '服', *monokulu* 'シャツ'); na-ne'-∅「1着」, ke-ne-ka「2着」,
wee-la-bi「3着」, kale-la-bi「4着」, bou-la-bi「5着」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -i

- [43] **-wela(°) ~ -wegila**：「月」 (*peigia* '月'); na-wela'-∅「1ヶ月」, ke-wela-ka「2ヶ月」,
wee-wegila-i「3ヶ月」, kale-wegila-i「4」, bou-wegila-i / pa'noko'「5ヶ月」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -li

- [44] **-la ~ -lala ~ -ki (~ -nalou)**：「10匹」 (*kalaa* '川の海老', *kokolei* '鶏', *silia* '高脚蟹(生)',
walege '鳥'等); na-la-∅「10匹」, ke-lala-ka「20匹」, kelalaka maka' nala「30匹」,
kale-ki-li「40匹」, bou-ki-li「50匹」, boukili maka' nala「60匹」, boukili maka' nala /
nan-wee-nalou maka' nala「70匹」, nang-kale-nalou「80匹」, nangkalenalou maka' nala
「90匹」, nam-bou-nalou「100匹」

- [45] **-wege ~ -wete**：「器」 (*diisi* '皿', *kaapu* '碗', *kepa* 'ココナツの殻(器用)', *kimaa* '蓋',
pelete '平皿'); na-wege-∅「1器」, ke-wege-ka「2器」, wee-wete-li「3器」, kale-wete-li
「4器」, bou-wete-li「5器」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -pi

- [46] **-nai(°) ~ -lai' ~ -kai**：「10人」 (*imaiko* '友達', *kitale* '子供', *manikumanaa* '女', *nammee* '人',
nugaannala '男'); na-lai'-∅「10人」, ke-nai-ka「20人」, kenaika (maka') nalai /
wee-kai-pi「30人」, kale-kai-pi「40人」(cf. [51] **-moo(°) ~ -nalou** '人(非親族)')

[44], [46] に挙げた計数の形式は、それぞれ、10~100匹、10~40人をあらわすものである。ここで、[2, 22, 23] で見たように、10が単数、20が双数、30以上が複数である。

この計数の形式は、他のものに比べ、不規則的である。「30匹」をあらわすために、wee-「3」を使わず、「20匹と10匹」という句をつくってあらわす。また、60以上の計数には、nan- ~ nang- ~ nam- という接頭辞が添加している。この接頭辞は、末尾の鼻音が調音位置の逆行同化を受けることによって形態音韻論的の交替を見せるため、基底形を /naN/ (/N/ は調音位置が未指定の鼻音) とみなすことができる。接頭辞 naN- は人の指の数、すなわち「20」をあらわしており、nan-wee-nalou [20 - 3 - 人] (= 20 × 3 = 60), nang-kale-nalou [20 - 4 - 人] (= 20 × 4 = 80), nam-bou-nalou [20 - 5 - 人] (= 20 × 5 = 100) のように、この接頭辞と数語幹の乗算によって計数が決まる。

[46] における **nai(°) ~ -lai'** の交替については、[39] の直後の記述を参照されたい。

数：単数 -∅；双数 -la；複数 -li

- [47] **-wali** ~ **-mono** : 「茎・樹」 (*asika* 「ヤシの一種」, *koina* 「木」, *maamioke* 「パパイヤ」, *mono* 「茎」, *moosii* 「檳榔」, *natuku* 「杭・柱」, *tubaa* 「支柱」, *wila* 「バナナ」); *na-wali-∅* 「1 茎」, *ke-wali-la* 「2 茎」, *wee-mono-li* 「3 茎」, *kale-mono-li* 「4 茎」, *bou-mono-li* 「5 茎」

「3 以上」の計数の形式において、どの部分が「複数」をあらわすかが不明確な場合がある。そのため、どの部分が類別詞の補充形式であるかということも明確でない。このような類別詞を以下に挙げる。

数：単数 -∅；双数 -da

- [48] **-lo** ~ **-na** : 「日・夜」 (*lou* 「日」, *muu* 「夜」); *na-lo-∅* 「1 日」, *ke-lo-da* 「2 日」, *wee-na* 「3 日」, *kale-na* 「4 日」, *bou-na / pa'noko'* 「5 日」

数：単数 -∅；双数 -ka

- [49] **-bole**(?) ~ **-legoi'** : 「個」 (*bootolo* 「ボトル」, *bui* 「ヤム」, *kaamoi'* 「丸・円」, *kasou'* 「(閉じた、生きている) 二枚貝」, *kaukana'* 「コンコンタロ」, *kobele'* 「石」, *kuluusi* 「西瓜」, *luung* 「部屋」, *maamioke* 「パパイヤ」, *moosii* 「檳榔」, *mou* 「ココナッツ」, *naana'* 「タロ」, *paangke* 「南瓜」, *painaapu* 「パイナップル」, *puuli* 「法螺貝」, *sapaia'* 「薩摩芋」, *silibe'* 「星」, *silia'* 「(縛られた、死んだ) 高脚蟹」, *toosipen* 「ポット」, *waasi* 「マンゴー」); *na-bole'-∅* 「1 個」, *ke-bole-ka* 「2 個」, *wee-legoi'* 「3 個」, *posi'nami'* 「4 個」, *pa'noko'* 「5 個」
- [50] **-mai** ~ **-mailagu** : 「丁」 (*aama* 「槌」, *maleke* 「斧」, *mosika* 「犬」, *naipe* 「ナイフ」, *soo* 「鋸」, *wila* 「バナナ (茎についたままでなっている実の、房の部分)」); *na-mai-∅* 「1 丁」, *ke-mai-ka* 「2 丁」, *wee-mailagu* 「3 丁」, *kale-mailagu* 「4 丁」, *bou-mailagu* 「5 丁」
- [51] **-moo**(?) ~ **-nalou** : 「人 (非親族)」 (*imaiko* 「友達」, *kitale'* 「子供」, *manikumanaa* 「女」, *nammee'* 「人」, *nugaannala* 「男」); *na-moo'-∅* 「1 人」, *ke-moo-ka(ala)* 「2 人」, *wee-nalou* 「3 人」, *kale-nalou* 「4 人」, *bou-nalou* 「5 人」 (cf. [46] **-nai** ~ **-lai'** 「10 人」)
- [52] **-moo**(?) ~ **-ng** : 「匹」 (*kalaa* 「川海老」, *kokolei'* 「鶏」, *silia'* 「高脚蟹 (生)」, *walege* 「鳥」); *na-moo'-∅* 「1 匹」, *ke-moo-ka(ala)* 「2 匹」, *wee-ng* 「3 匹」, *kale-ng* 「4 匹」, *bou-ng / pa'noko'* 「5 匹」
- [53] **-u**(?) ~ **-kago'** : 「つ」 (*igeige'* 「指」, *kalesaa'* 「ことば」, *kobonala* 「物語」, *kukumaka* 「鉤爪」, *mage'* 「爪」, *moola'* 「品詞 (?)」, *muu* 「夜」, *paakota'* 「双子」, *peekala* 「物」, *sikuluu* 「学校」, *siti* 「都市」, *taun* 「町」, *wau* 「食べ物」, *wetu'* 「角、継目」); *na-u'-∅* 「1 つ」, *ke-u-ka* 「2 つ」, *wee-kago'* 「3 つ」, *kale-kago'* 「4 つ」, *pa'noko'* 「5 つ」
- [54] **-ulo**(?) ~ **-nalou** : 「人 (親族)」 (*inaa* 「私の妻」, *inola* 「私の娘」, *inuli* 「私の息子」, *ing* 「私の夫」, *imali* 「私のきょうだい」, *mma'* 「私の父」, *nggo'* 「私の母」); *na-ulo'-∅* 「1 人」, *ke-ulo-ka* 「2 人」, *wee-nalou* 「3 人」, *kale-nalou* 「4 人」, *bou-nalou* 「5 人」

[48] を例にとると、他の類別詞と同様、「1 日」は [1 - 類別詞 - ∅]、「2 日」は [2 - 類別詞 - CV] と、タイプ 1 で見たように、単数および双数を分析することができる。しかし、「3 / 4 / 5 日」のなどの複数は、

(i) 計数の中の **-na** という部分が類別詞，続く $-\emptyset$ が文法的数を担うと見るか，(ii) 計数の中の **-na** という部分が類別詞と文法的数の両方を担うと見るか，2通りの分析が可能である。前者は膠着的な見方で，後者は融合的な見方と言えるだろう。ここでは，**-na** [類別詞 + 文法的数] という融合的な見方をとる。

そもそも，類別詞の異形態が不規則的であるため，[48]–[54]の計数の形式をどのように分析するにしろ，必ず類別詞には補充的な形式をみとめなければならない。言語分析一般に，いったん補充がみとめられれば，厳密に膠着的な分析をほどこす必要がなくなる。ここでも，膠着的な見方に固執せず，融合的な分析をとることにしたい。さらに，ゼロ形態の $-\emptyset$ を単数だけでなく複数をあらかず標識とみなすのは不自然である。仮にその見方をとると，「双数 vs. 非双数」という，ナゴヴィシ・シベ語内部には観察されない対立を新たにもうけることになる。このような分析は，現段階では非経済的である。以上から，[48]–[54]の類別詞の異形態を(24)に挙げる通りに記述する。

- (24) a. [48] : **-na** 「日・夜(複数)」
 b. [49] : **-legoi'** 「個(複数)」
 c. [50] : **-mailagu** 「丁(複数)」
 d. [51] : **-nalou** 「人(複数)」
 e. [52] : **-ng** 「匹(複数)」
 f. [53] : **-kago'** 「つ(複数)」
 g. [54] : **-nalou** 「人(複数)」

なお，[50]の**-mai**～**-mailagu**「丁」の場合，**-lagu**が複数をあらかず接尾辞であると分析する余地があるが，この類別詞だけに固有の複数接尾辞を認めることになるため，ここではこれ以上分析しない。

また，§ 2.2で既に見た，計数のしくみに使われる類別詞を見ておこう。以下の(25)に，表4–7の計数の形式と使われる類別詞を挙げる。

- (25) a. 表4 : 1~3 ; [49] **-bole(?)** ~ **-legoi'** 「個」
 b. 表6 : 20~100 ; [51] **-moo(?)** ~ **-nalou** 「人(非親族)」
 c. 表6 : 120~180 ; [54] **-ulo(?)** ~ **-nalou** 「人(親族)」
 d. 表7 : 200~800 ; [46] **-nai(?)** ~ **-lai'** ~ **-kai** 「10人」

「20~100」および「120~180」には，[44]で観察された /naN/「×20」の接頭辞が添加する。一方，「200~800」には /naN/「×20」の接頭辞が添加しない。「1~3」以外は，20を基準とした計数であり，人間の両手両足の20本の指を使ったものである。人間の指を使う「20~800」の計数において，人間を数える類別詞が使われるのもそのためであろう。

imaiko'「友達」，*manikumanaa*「女」，*nammee'*「人」，*nugaannala*「男」などの人間を数える際は類別詞(非親族の人間[51])を使うが，人数を不問とするときは，これらの名詞の単数形，双数形，複数形をしめすだけでよい。すなわち，「友達」は，単数 *imaiko'*，双数 *imaikokaala*，複数 *imaikoli*，「女」は，単数 *manikumanaa*，双数 *manikumaala*，複数 *maniku* のとなる。これは親族名称の場合でも同様である。

■ タイプ4：「1」の数が序数の形式と同じもの

タイプ1~3とは違い，タイプ4の類別詞は，単数の場合の計数が序数の形式であらわされる。このタイプの類別詞は，*mete'*「山」を数える (*weka'*)*nawe'* ~ *-we'*「岳」が見ついている。この類別詞は，音韻論的・形態論的に条件付けられた異形態があり，(i)「1岳」のときは *-nawe'*，(ii)「2~5岳」のときは

-weka'nawe', (iii) 「6~9 岳」のときは we(?) が現れる。文法的数については、タイプ 2 と同様、単数 (-∅) vs. 非単数の対立が見られる。「1」~「5」の非単数の形式は類別詞と融合しており、「6」~「9」の非単数の形式は -ka である。

数：単数 -∅；非単数（融合）, -ka

- [55] -(weka')nawe' ~ -we(?) : 「岳」 (mete' 「山」); mme'-nawe'-∅ 「1 岳, 1 番目の山」, ke-weka'nawe' 「2 岳」, wee-weka'nawe' 「3 岳」, kale-weka'nawe' 「4 岳」, bou-weka'nawe' 「5 岳」, na-we-∅-ke noola 「6 岳」, ke-we-ka-i noola 「7 岳」, wee-we-ka-i noola 「8 岳」, kale-we-ka-i noola 「9 岳」

■ タイプ 5：「2」の数までしかあわせない

これまでに見たタイプの類別詞は制限なく数えることができた。以下で見るタイプ 5 の類別詞は、「3」以上の計数の形式が無く、「1」と「2」のみに計数の形式がある。そのため、「1」を「片(方の) ~」、「2」を「両(方の) ~」と訳すことにする。このタイプの類別詞は、現段階で、-long(?) 「耳」、-luta 「目」、-welo(?) 「側」、-wete(?) 「面・方」の 4 つが見つかっている。使われる数語幹や文法的数の形式は、ほかのタイプの類別詞と変わらない。

数：単数 -∅；双数 -ka

- [56] -long(?) : 「耳」 (long 「耳」); na-long'-∅ 「片耳」, ke-long-ka 「両耳」
 [57] -welo(?) : 「側」 (toolulu 「道」や、「岸」); na-welo'-∅ 「片側」, ke-welo-ka 「両側」
 [58] -wete(?) : 「面・方」 (amo' 「頬」, kuluusi 「西瓜」, mou 「ココナツ」, noonoo' 「乳」, ukamaa' 「肩」); na-wete'-∅ 「片面」, ke-wete-ka 「両面」

数：単数 -∅；双数 -la ~ -∅

- [59] -luta : 「目」 (uta 「目」); na-luta-∅ 「片目」, ke-luta(-la) 「両目」

数語幹が na- 「1」、ke- 「2」のみ使われるように、文法的数の標識も単数と双数のみが使われる。[59] の「目」の場合、文法的数の標示は随意的であり、na-luta-∅ 「片目」、ke-luta-∅ 「両目」としてもよい。

4 文法的数の標識

前節 § 3 で見たように、計数の形式にはさまざまな文法的数の標識が添加される。文法的数の区別は、単数、非単数、双数、複数の 4 種類が観察される。本節では、それぞれの標識の交替について記述する。以下の (26)–(29) に、§ 3 で観察された文法的数の異形態をまとめて列挙する。

- (26) 単数：
 -∅； [1]–[59] (59 個)
- (27) 非単数：
 a. -ka； [28]–[37], [55] (11 個)
 b. -la； [38], [39] (2 個)

- (28) 双数：
- a. **-ba** ; [1] (1 個)
 - b. **-da** ; [2]–[6], [40], [48] (7 個)
 - c. **-ka** ; [7]–[19], [41]–[46], [49]–[54], [56]–[58] (28 個)
 - d. **-la** ; [20]–[27], [47], [59] (10 個)

- (29) 複数：
- a. **-aa** ; [7]–[11], [41] (6 個)
 - b. **-bi** ; [1], [42] (2 個)
 - c. **-du** ; [2]–[6] (5 個)
 - d. **-i** ; [12]–[15], [43] (5 個)
 - e. **-li** ; [16], [17], [20]–[27], [40], [44], [45], [47] (14 個)
 - f. **-pi** ; [18], [19], [46] (3 個)

(26) の通り，本論で扱う 59 個全ての類別詞において，単数は無標示である。

(27) の非単数の形式 **-ka**, **-la** は，(28) の双数の形式 **-ka**, **-la** と同一である。「1」, 「2」, … と数える際に，「2」の使用頻度が高いため，これの双数標識が，非単数標識として一般化されたと考えられる。さらに，非単数には，最も使用頻度の高い双数の形式 **-ka**, **-la** が使われている。

次に，(28) の双数，(29) の複数の組み合わせのパターンについて述べておきたい。まず，(30) と (31) に述べるのが成り立つ。

- (30) a. 複数の標識に **-aa** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
 b. 複数の標識に **-du** を使う類別詞は，双数の標識に **-da** を使う (逆は成り立たず)
 c. 複数の標識に **-i** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
 d. 複数の標識に **-pi** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
- (31) a. 双数の標識に **-ba** を使う類別詞は，複数の標識に **-bi** を使う (逆は成り立たず)
 b. 双数の標識に **-la** を使う類別詞は，複数の標識に **-li** を使う (逆は成り立たず)

(30) と (31) の記述は，「A ならば B」のように，前件 A が成り立つならば後件 B が成り立つと含意的に述べている。このような含意的な記述では，後件の事実の方がより無標である。したがって，これらの記述に依拠するならば，双数 **-ka**, **-da** と複数 **-bi**, **-li** は無標の形式であると言うことができる。(30, 31) の記述から漏れた，残りの [双数 : 複数] の組み合わせのパターンは合計 3 つあり，(i) [40] の [**da** : **li**]，(ii) [42] の [**ka** : **bi**]，(iii) [16, 17, 44, 45] の [**ka** : **li**] である。これらのパターンは，無標の **-ka**, **-da** (双数) と，無標の **-bi**, **-li** (複数) を組み合わせている^{注17}。

双数標識の異形態は，(32) に挙げる類別詞と共に起る。

- (32) a. **-ka** ; bole' lala liau' lii' lo' long' mage mai male' mii' moo' moo' muli' nai' ne' ne'
 u' ulo' wedo' (wee)li' weemo' wege welaa' welo' wete' wili' wiaa' wolo'
 (mage, mai, lala, wege を除き, / ' -__)
- b. **-la** ; lusi luta mago miku mono wali walo wiku wisi woto (/ μ μ -__)
- c. **-da** ; bo lo ma mala me we wi (mala を除き, / μ -__)
- d. **-ba** ; lu (/ μ -__)

^{注17} もう一つのパターンに [da : bi] があるが，この組み合わせの双数と複数を使う類別詞は見つかっていない。

(32a) の *mage*, *mai*, *lala*, *wege* を除くと、双数の **-ka** は、類別詞の末尾に声門閉鎖音 /' / がある場合に添加される形式であることがわかる。このうち、*mage* [16], *lala* [44], *wege* [45] は、[双数：複数] の特別なパターンの [**-ka**, **-li**] を持っており、/' / を末尾に持たなくとも、何らかの形態論的要因から、無標の双数 **-ka** を添加する^{注18}。また、*mai* [50] は、文法的数 (複数) と融合する類別詞 (§ 3 の [50] とその直後の解説を参照) の中で、*lo* [48] を除いて、唯一、末尾に /' / を持たない。このように、文法的数と融合する類別詞は、ふつう、無標の双数 **-ka** を添加する。

また、(32b, 32c, 32d) に挙げた、末尾に声門閉鎖音を持たない類別詞は、そのモーラ数 (μ の数) によって双数の形式が決まる。

(32b) の通り、双数標識 **-la** を使う類別詞は、必ず 2 モーラ以上で構成されている (ちなみに、声門閉鎖音 /' / の有無による、双数 **-ka**, **-la** の使いわけは、(27) の非単数の異形態にもあてはまる)。

末尾に声門閉鎖音を持たない 1 モーラの類別詞には、基本的に **-da** が使われる。ただし、2 モーラの *mala* (=32c) にも **-da** が添加される。双数 **-la** を使うと (ke-)*mala-la* が得られるが、*malala* 中の音節 /la/ の連続を避けるため、/l/ → d という異化を起こすのである。

[1] の類別詞 *lu* 「本 (大)」も 1 モーラだが (=32d)、これに添加される複数標識 **-bi** に対して類推がはたさき、複数標識と同じ頭子音 /b/ を持つ **-ba** を双数の標識とする。

複数標識の異形態は、(33) に挙げる類別詞と共に起る。

- (33) a. **-aa** ; *lii' mii' moi muli' weeli' wili'* (/i'-__ ただし *moi* を除く)
 b. **-pi** ; *kai liau' wiaa'* (/u'-__ /a'-__ ただし *kai* を除く)
 c. **-i** ; *lo' male' ne' wegila wolo'* (/o'-__ /e'-__ ただし *wegila* を除く)
 d. **-bi** ; *la lu* (/CV-__ ただし C = /l/)
 e. **-du** ; *bo ma me we wi* (/CV-__ ただし C = /l/ 以外)
 f. **-li** ; *ki koumo lusi mage mago miku mono* (/... $\mu\mu$ -__ ただし *ki*, *wedo'* を除く)
mono walo wedo' wete wiku wisi woto

類別詞末尾の声門閉鎖音 /' / の有無は、複数標識の異形態に大きく関わる。/' / が有れば、必ず **-aa**, **-pi**, **-i** が使われる。/' / が無ければ、主に **-bi**, **-du**, **-li** が使われる。さらに、(33a–33c) にしめたように、類別詞末尾の /' / の直前の母音が、(a) i か、(b) u/a か、(c) o/e かによって複数をあらかず形式が決まる。一方、(33d–33f) にしめたように、類別詞自体が (d) 1 モーラか、(f) 2 モーラ以上か、あるいは、類別詞の頭子音が (d) /l/ か、(e) /l/ でないかによって、複数標識の形式が左右される。

以上から、文法的数をあらかず標識の異形態は、ほとんどが音韻論的に条件付けられていることがわかった。すなわち、直前の類別詞の、(i) 声門閉鎖音、(ii) モーラ数、(iii) 母音の音色、(iv) 子音の音色などによって異形態の形式が決まる。ただし、各異形態がなぜ特定の音素を使うのか、それぞれの音韻論的条件による明確な動機付けは未だよくわかっていない。ただ、親族名称における [双数：複数] の標識に、[..la : ..bi], [..da : ..aa], [da : gu] などが見られるが、これらは文法的数の異形態と関連している可能性があるだろう。現段階では十分な分析はできないが、親族体系との関連も含め、今後の課題としたい。

^{注18} 一方、[双数：複数] の特別な組み合わせの、[**ka : li**] を使う [17] *wedo'* 「枚 (大)」や、[**ka : bi**] を使う [42] *ne'* 「着」には、末尾に声門閉鎖音 /' / がある。このうち、*ne'* 「着」という類別詞は、複数 (=3 以上) の場合に *la* という異形態が現れ、単数・双数 (=2 以下) の場合に *ne'* が現れるのだが、後者の単数・双数の場合は、別の類別詞の [14] *ne'* 「枚 (小)」を補充しているのではないかと思われる。

5 意味による類別詞の分類

どの言語においても、意味的な基盤を持たない類別詞は存在しない。各種の類別詞は、必ず何らかの意味と関連付けられており、類別詞を使い分けることで名詞をさまざまに描写することができる。本節では、ナゴヴィシ・シベ語が持つ類別詞を意味的な観点から分類する。

意味的な分類でしばしば援用されるのは、Allan (1977) の設定した、7 つの基本的な意味カテゴリーである。

(34) 7 つの意味カテゴリー (Allan 1977)

- a. 素材
- b. 形
- c. 一貫性
- d. 大きさ
- e. 場所
- f. 空間配置
- g. 量

当然、(34) の意味カテゴリーは、全ての言語に一律にあてはまるものではない。意味的な基盤は言語個別に設定すべきである。ここでは、Allan (1977) の分類基準を軸としつつ、ナゴヴィシ・シベ語の個別の意味カテゴリーに基づいて類別詞を分類する。

まず、類別詞の意味的な特徴付けとして、以下の3点に注目しておきたい。

- (35) a. 文化的：文化・社会に特化した概念の類別に使う
b. 一般的：意味的に希薄なため、他の類別詞で代用できる
c. 特定の：特定の概念のみの類別に使う

(35a) の、文化・社会にねざしたものとして、(36) の類別詞を挙げることができる。

(36) **-bo** 「10 頭 [2]」、**-miku** 「10 キナ [22]」、**-mono** 「10 飾 [23]」、**-mesi(?)** 「区 [30]」、**-wuubu(?)** 「張 [37]」、**-la ~ -lala ~ -ki (~ -nalou)** 「10 匹 [44]」、**-nai(?) ~ -lai' ~ -kai** 「10 人 [46]」、**-moo(?) ~ -nalou** 「人 (非親族) [51]」、**-ulo(?) ~ -nalou** 「人 (親族) [54]」

-bo、**-miku**、**-mono**、**-lala ~ -ki**、**-lai' ~ -kai** などは「10」を単位とする。「5」を基準とした五進法の計数体系を持つ一方で (cf. § 2.2)、動物、金銭、人間等には特別に「10」の単位を使う。**-mesi(?)** 「区」は土地の区画に関わり、**-wuubu(?)** 「張」は漁撈や養豚に関わる。**-moo(?) ~ -nalou** と **-ulo(?) ~ -nalou** は、「人」の類別詞だが、親族かどうかによる、特殊な使いわけがある。

(35b) の一般的な類別詞はそれほど多くはない。

(37) **-lu** 「本 (太い) [1]」、**-bole(?) ~ -legoi'** 「個 [49]」、**-u(?) ~ -kago'** 「つ [53]」

これらは、他の類別詞による言い換えが可能であり、そのことが「一般的」であることの証左となる。**-lu** 「本 (太い)」は、*koiwala* 「キャッサバ」等に使うが、*nalu* 「一本」を、さらに限定的な *nawile'* 「一芋」で言い換えることができる。**-bole(?) ~ -legoi'** 「個」は、§ 2.2 の表 4 に挙げたように、計数一般に使われることに加え、*sapaia'* 「薩摩芋」などの *nabole'* 「一個」を *nawile'* 「一芋」で言い換えることもできる。

-u(?) ~ -kago' 「つ」は、広く名詞一般に使うことができ、例えば *nau'* 「一夜」だけでなく、*nalo* 「一夜」による言い換えが可能である。

(35c) の特定のな類別詞には (38) に挙げるものがある。

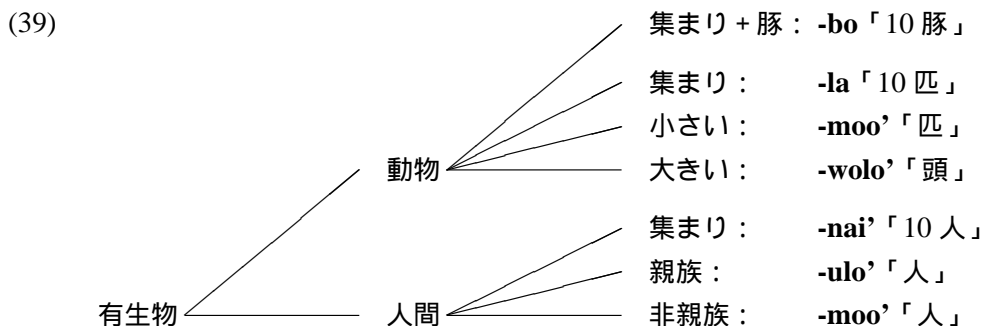
(38) -ma 「房 (バナナ) [3]」、-we 「歯 [5]」、-wili(?) 「筋 (川) [11]」、-male(?) 「年 [13]」、-wiaa(?) 「実 (バナナ) [19]」、-lusi 「歌 [20]」、-mago 「腿 [21]」、-miku 「10 キナ [22]」、-watei 「回 [24]」、-wiku 「筋 (道) [25]」、-naasi(?) 「庭 [33]」、-wagu(?) 「弓 [34]」、-leuku 「穴 [38]」、-noowe ~ -loowe 「枝 [39]」、-welaa(?) ~ wegila 「月 [43]」、-(weka')nawe' ~ -we' 「岳 [25]」、-long(?) 「耳 [56]」、-luta 「目 [59]」

ただし、-we 「歯」は、*kaliwe* 「歯 (全部)」と *kawe* 「歯 (一本)」に使う「歯」のための類別詞である。同じく、-leuku 「穴」も、*leuku* 「穴」と *kuula* 「穴」、つまり「穴」という概念のために使う。

以上、(35) の 3 つの観点から類別詞を分類したが、以下では個別の意味に基づいて分類する。有生物 vs. 無生物で大きく分け、それぞれの下位分類をおこなう。類別詞の代表形として、数語幹「1」と共起する形式を挙げることにする。

■ 有生物

有生物は、人間と動物に分かれる。人間の場合は、さらにその下位分類に、集団性と親族性、動物の場合は集団性とサイズの大小が関わる。



豚は、単体では -wolo(?) 「頭」の類別詞を使うが、10 匹単位の場合は豚に特別の -bo 「10 豚」を用いる。また、人間の「親族」「非親族」の区別は、(24) や [51], [54] で見たように、単数と双数に限られる。(39) の分類は、図 5 のように、意味成分に基づいたベン図であらわすことができる。

■ 無生物

有生物に対し、無生物は、(i) 一般、(ii) 身体、(iii) 自然、(iv) 人工物、(v) 単位、(vi) 植物、(vii) 形などに分けることができる。

1 つ目の「一般」の類別詞は、(37) で取り上げた -u(?) ~ -kago' 「つ」である。[53] に列挙した通り、さまざまな概念に対して使われる。

「身体」と「自然」の類別詞をそれぞれ (40) と (41) に挙げる。

(40) 身体: -mago 「腿」、-long' 「耳」、-luta 「目」、-we 「歯」

(41) 自然: -lubo' 「滴」、-wili' 「筋 (川)」、-wiku 「筋 (道)」、-mesi' 「土」、-miilu' 「深み」、-mui' 「泥」、-wola' 「森」、-leuku 「穴」、-nawe' 「岳」、-welo' 「側 (岸)」

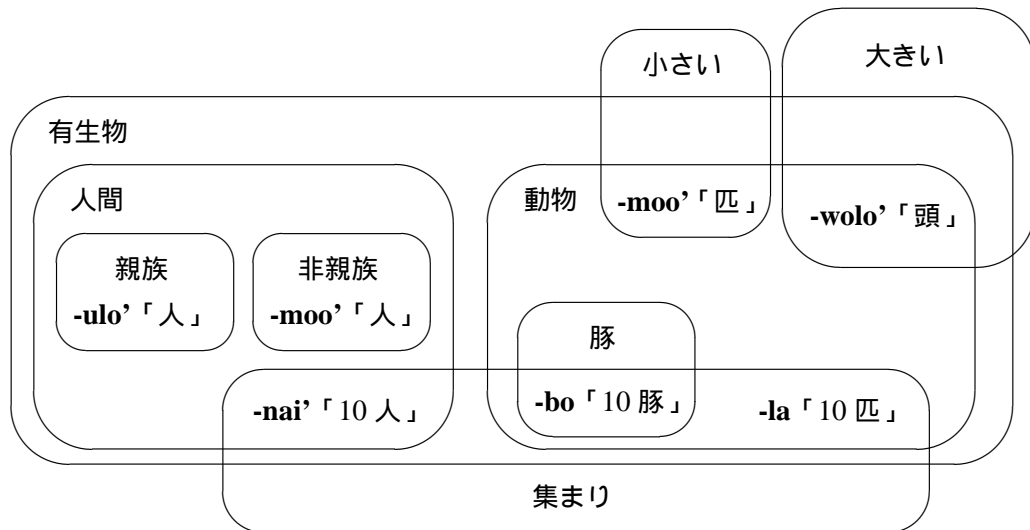


図5 有生物の類別詞の意味地図

「人工物」は、さらに無形と有形に分けられる。無形のものとして **-lusi**「歌」がある。有形のものとしては (42) に挙げるものが該当する。

(42) 人工物：有形；

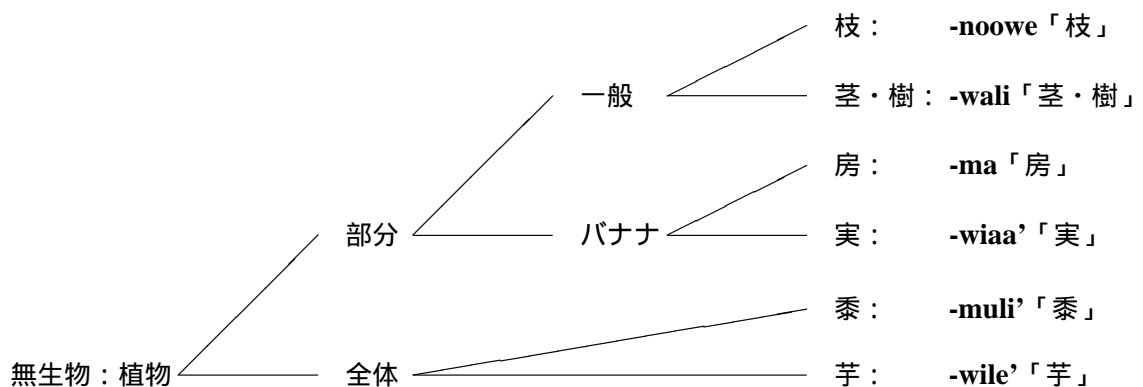
乗物の **-wisi**「軒・艘・台」、家具の **-me**「台」、食器の **-mage**「膳」、食器の **-wege**「器」、入れ物の **-liau**「袋」、衣服の **-ne**「着」、首飾の **-lii**「飾」、首飾+集まりの **-mono**「10 飾」、道具の **-mai**「丁」、武器の **-wagu**「弓」、金銭+集まりの **-miku**「10 キナ」、囲い^{はり}の **-wuubu**「張」、区画の **-meesi**「区」、庭の **-naasi**「庭」

「単位」は、日数の **-lo**「日・夜」、月数 **-wela**「月」、年数 **-male**「年」、回数 **-walo**「回」がある。

■ 無生物：植物

「植物」の中には、植物それ自体をあらわすものと、植物の部分をあらわすものがある。部分をあらわす類別詞には2種類あり、「バナナ」の部分のみを類別する特定のなものと、「植物一般」の部分进行分类する一般的なものに分けられる。

(43)



■ 無生物：形

「形」に関する類別詞は、意味的に最も入り組んでいる。一次元的に拡張する「長さ」と、二・三次元的に拡張する諸特徴に大きく分けることができる。さらに大きさ・太さなどで細かく分けられる。相互に作用する各特徴を表 6 にベン図によってしめす。

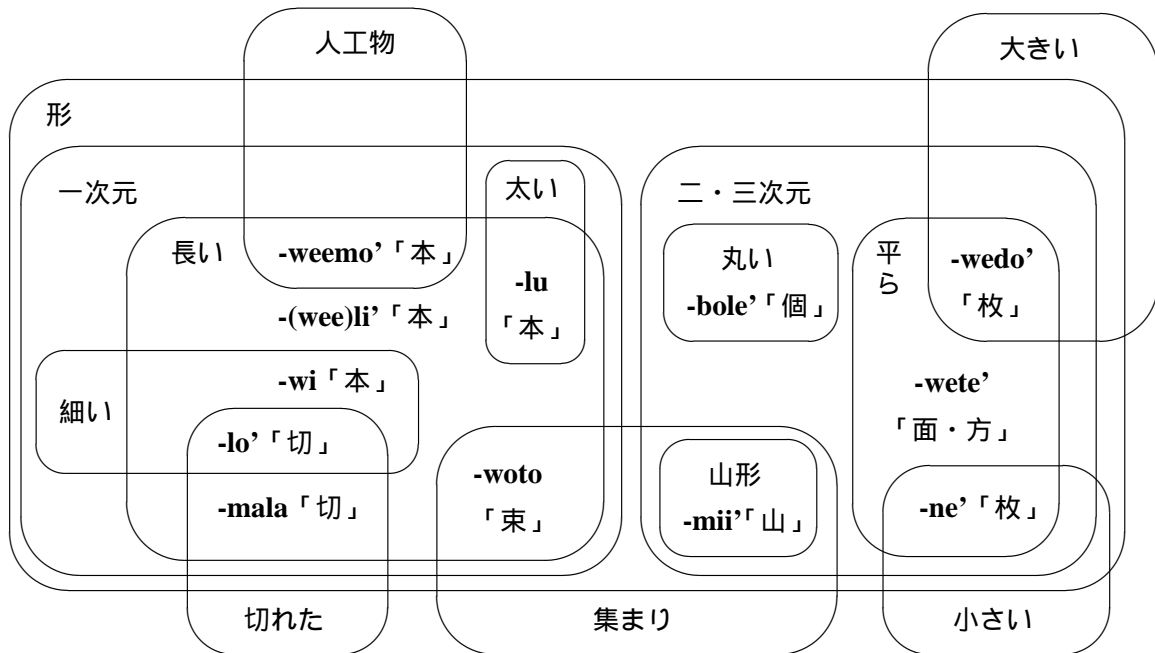


図 6 形の類別詞の意味地図

意味的に最も単純なのは、一次元の **-(wee)li'**「本」と、二・三次元の **-bole'**「個」および **-wete'**「面・方」である。これら以外の類別詞は、必ず二つ以上の意味成分と関連付けられており、それぞれが概念の詳細な類別に使われることがわかる。特に複雑なのは、**-lo'**「切」であり、[長い][細い][切れた]の3つの意味成分が関わる。§ 3 の [12] にも挙げたように、「バナナの皮、縄の一種」「豚の(頭から尾に向かって長く細く切った)切り身」など、文化的に特殊なものを類別する。

また、[集まり][大きい][小さい]は、有生物の図 5，人工物：有形の (42)，形の図 6 の意味分野に通じて見られ、実用性の高い意味成分だと言える。

6 まとめ

ナゴヴィシ・シベ語は、Aikhenvald (2000) の言語類型論の枠組みから見た場合、「形容詞」「助数詞」「所有」「直示」という、少なくとも4つの形態統語的環境で類別詞を使う「多重類別型言語」である。先行研究において、同じブーゲンヴィル諸語のナーシオイ語、モトゥナ語は、多重類別をおこなう、類型論的に稀なタイプの言語とみなされているが、本論文ではナゴヴィシ・シベ語もこのタイプの言語であることを明らかにした。ナーシオイ語、モトゥナ語では、さらに動詞にも類別詞が使われるが、ナゴヴィシ・シベ語でも同様かどうか、現段階では明らかではなく、さらなる調査と検証が必要である。

本論文では、助数詞として使われる際の形態論的特徴と、計数の形式的特性に依拠して、ナゴヴィシ・シベ語の59種類の類別詞を、5つのタイプに分けて分類し、[1]-[59]の通し番号をつけた。その中で、文法的数の区別、異形態の種類という形態論的特徴と、序数の形式を使うか、「3」以上をあらわす形式が

存在するかという計数の形式的特性を議論した。今後の調査から、新たな類別詞が見つかる可能性もあるため、本論文で提示したリストには暫定的に番号付けをおこなっていることに留意されたい。

類別詞の分類に用いた文法的数の区別には、単数 / 双数 / 複数のパターンと、単数 / 非単数のパターンがある。本論文では、文法的数の標識の異形態のほとんどが、類別詞の声門閉鎖音の有無、モーラ数、母音・子音の音色に条件付けられている、すなわち音韻論的に条件付けられた異形態であることを明らかにした。加えて、いくつかの標識に類推や形態論的要因が関わっていることも議論した。

また、類別詞の意味的な分類として、文化的類別詞、一般的類別詞、特定の類別詞を分けた。次に、より個別の意味によって、有生物と無生物に分け、無生物を (i) 一般、(ii) 身体、(iii) 自然、(iv) 人工物、(v) 単位、(vi) 植物、(vii) 形に下位分類することで、類別詞の意味的な分類を試みた。その結果、類別詞に反映されている、ナゴヴィシの文化と言語との関わりが明らかになった。動物では豚が、植物ではバナナが、形では長さ、丸さ、平たさなどが重要であるという点、人間、動物、価値交換媒体 (貝貨、キナ) が、10 の数をひとまとめに扱うという点、モノの「大きさ」や「集まり」が広く類別に関わっている点などは、ナゴヴィシ・シベ語の言語・文化に根ざした固有の事実である。

南ブーゲンヴィル諸語の記述および歴史言語学的分析は、現在、発展途上にある (cf. Evans 2010)。ナーシオイ語、モトゥナ語、ブイン語の記述は進んでいるが、ナゴヴィシ・シベ語の記述はほとんどなされていない。本論文で扱った類別詞は、南ブーゲンヴィル諸語の比較において、語彙と同様に有用だと思われる。「多重類別型言語」である南ブーゲンヴィル諸語の史的考察については、今後の課題としたい。

参考文献

- AIKHENVALD, ALEXANDRA Y. (2000) *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory. Oxford: Oxford University Press.
- (2006) Classifiers and noun classes: Semantics. In *Encyclopedia of Language & Linguistics*, ed. by Keith Brown, volume 2, 463–471. Amsterdam: Elsevier, 2nd edition.
- ALLAN, KEITH (1977) Classifiers. *Language* 53 (2). 285–311.
- ALLEN, JERRY, & CONRAD HURD (1965) *Languages of the Bougainville District*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- DIXON, R.M.W. (1986) Noun classes and noun classification in typological perspective. In *Noun Classes and Categorization: Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification, Eugene, Oregon, October 1983*, ed. by Clolette Craig, volume 7 of *Typological Studies in Language (TSL)*, 105–112. Amsterdam: John Benjamins.
- EVANS, BETHWYN (2010) Beyond pronouns: Further evidence for South Bougainville. In *Discovering History through Language: Papers in honour of Malcolm Ross*, ed. by Bethwyn Evans, volume 605 of *Pacific Linguistics*, chapter 3. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- GIL, DAVID (2005) Numeral classifiers. In *The World Atlas of Language Structures*, ed. by Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, & Bernard Comrie, chapter 55, 226–229. Oxford: Oxford University Press.
- GRINEVALD, COLETTE (2000) A morphosyntactic typology of classifiers. In *Systems of Nominal Classification*, ed. by Gunter Senft, volume 4 of *Language, culture and cognition*, chapter 2, 50–92. Cambridge: Cambridge University Press.

- (2004) Classifiers. In *Morphologie: Ein Handbuch zur Flexion und Wortbildung*, ed. by Geert Booij, Christian Lehmann, Joachim Mugdan, & Stavros Skopeteas, volume 17.2 of *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft (HSK)*, chapter 97, 1016–1031. Berlin: Walter de Gruyter.
- HURD, CONRAD (1977) Nasioi projectives. *Oceanic Linguistics* 16 (2). 111–178.
- , & PHYLLIS L. HURD (1966) *Nasioi Language Course*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- LAYCOCK, DONALD C. (2003) *A Dictionary of Buin: A Language of Bougainville (edited by Masayuki Onishi)*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- LEWIS, M. PAUL (ed.) (2009) *Ethnologue: Languages of the World*. Dallas, Tex.: SIL International. Online version [Accessed 29 December 2009]: <http://www.ethnologue.com/>, 16th edition.
- OFFICE, N. S (2002) *Census Unit Register: North Solomons Province*. Port Moresby: National Statistical Province.
- OLIVER, DOUGLAS L. (1955) *A Solomon Island society: Kinship and leadership among the Siuai of Bougainville*. Cambridge: Harvard University Press.
- (1973) *Bougainville: A personal history*. Victoria: Melbourne University Press.
- (1991) *Black Islanders: A personal perspective of Bougainville, 1937–1991*. Melbourne: Hyland House.
- ONISHI, MASAYUKI (1995) *A Grammar of Motuna (Bougainville, Papua New Guinea)*. Australian National University dissertation.
- (2004) Instrumental subjects in Motuna. In *Non-nominative Subjects*, ed. by Peri Bhaskararao & Venkata Subbarao, volume 2 of *Typological Studies in Language (TSL)*, chapter 4, 83–101. Amsterdam: John Benjamins.
- 稲垣和也 (2009) 「ナゴヴィシ・シベ語における類別辞の形態統語法と意味論」(口頭発表). 総合地球環境学研究所, 9月30日, 京都.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典: 術語編』, 第6巻. 東京: 三省堂.

モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化*

大西 正幸

1 序

本論は、モトゥナ語において、Ci/Cu 音節が一定の形態音韻的環境においてコーダ子音と交替する現象を扱う。下に挙げるような現象である。

- (1) a. *o-ng*
PROX-M
「この男 / これ / この人たち大勢」¹
- b. *o-nu-nno*
PROX-M-COMIT
「この男 / これ / この人たち大勢と一緒に」
- (2) a. *ro-omah*
2KINPOSS-sister.in.law
「あなたの義姉妹」
- b. *ro-omasi-ng*
2KINPOSS-sister.in.law-NSG
「あなたの義姉妹たち」
- (3) a. *ti-wa'*
DIST-CL:time/word
「その時 / 言葉」
- b. *tumika-watu-ng*
first-CL:time/word-M
「最初の時 / 言葉」

* 本論は、マックスプランク研究所(ライプツィヒ)の言語学部門で2006年に行った‘CV Reduction in Motuna’という題のセミナー発表を発展させたものである。この発表にあたり、さまざまな形でアドバイスをしてくれた Juliette Blevins と、セミナーに参加してくれた言語学部門のメンバー、とりわけ、有意義なコメントをしてくれた、Bernard Comrie, Martin Haspelmath に感謝する。また、本論で用いられる南ブーゲンヴィル諸語のデータのフィールド調査については、文部科学省科学研究費基盤研究(B)「パプア諸語の比較言語学的研究—南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(研究代表者:大西正幸、課題番号:20320065)の援助を受けている。中でも、モトゥナ語のデータおよびその分析については、著者の長年の研究協力者である、Therese Minitong Kemelfield さんと Dora Leslie さんに、ナーシオイ語のデータについては William Takaku さんに、バイツイ語のデータについては、Lydia Maniako さんと Rebecca Maniako さんに、おもにご教示いただいた。また、本稿を完成するにあたり、言語記述研究会の皆さん、とりわけ稲垣和也さんと千田俊太郎さんから、有意義なコメントをいただいた。心から感謝する。もちろん本論でのデータの扱いや分析については、筆者がすべての責任を負っている。なお、本論中に用いられる略号については、本論の末尾を参照のこと。

¹ モトゥナ語には、男/女/場所/指小の4つを区別する、「性」のパラダイムがある。すべての名詞は、このどれかの範疇に属し、接尾辞によって文法的一致を示す。M「男性」の接尾辞は、男性の生物名詞だけでなく、無生物を表す(中性)名詞や、大複数を表す名詞をも標示する。

(1) では /ng/ と /nu/ が、(2) では /h/ と /si/ が、(3) では /ʔ/ (声門閉鎖音音素) と /tu/ が交替している。このような交替における、前者三種類のコーダ子音を、coda consonants の略で、Cc と呼ぶことにする。

手順としては、まずこの形態音韻現象を共時的に記述したあと、その一般化について考察し、さらにはその歴史的起源にまで考察を広げることにする。この交替は、共時的には、いちおう両方向に考えられるので、中立的に「交替」と言った方がいいかもしれないが、本論では、「短縮化」という用語でこの形態音韻現象を一般化するとともに、この現象の基底となる音韻変化の、歴史的起源を指し示したい。その理由は議論が進むにつれて明らかになるはずである。なお、音韻現象のこのような扱いについては、Blevins (2004) に負うところが大きい。Blevins (2004) の方法論については、3.3 で触れることにする。

モトゥナ語はパプア・ニューギニアのブーゲンヴィル島南部で話される、パプア諸語、ないし非アウストロネシア諸語として分類される言語の一つである。周辺のいくつかの言語ないし方言との間の歴史的類縁関係が明らかでないため、これらの言語ないし方言は、Ross (2001) により、南ブーゲンヴィル語族と命名された。私もこの命名に従う。南ブーゲンヴィル語族に属する言語・方言群は下の通り。(位置関係については、地図 1 を参照。)

モトゥナ語 (2 つの方言)

バイツイ語

ナゴヴィシ・シベ語 (少なくとも 4 つの方言)²

ナーシオイ語 (8 つの方言)³

ブイン語 (5 つの方言)⁴

ウイサイ語

この言語・方言の分類は暫定的である。Ross (2001), Dunn *et al.* (2002), Evans (2010) などの最近の研究では、モトゥナ語、ナゴヴィシ (・シベ) 語、ナーシオイ語、ブイン語を主要 4 言語とし、ウイサイ語はブイン語の方言として扱っている。バイツイ語については特に記述がない。SIL (Summer Institute of Linguistics、夏期言語学協会) の言語学者たちは、ウイサイ語とバイツイ語を、言語 / 方言という観点からは中間的なもの (SIL の用語では 'sublanguage') として扱っている。



図 1 南ブーゲンヴィル語族

² この呼称および方言分類は稲垣 (2010, 本論集所収) に従う。

³ Hurd & Hurd (1966) に従う。なお、Hurd は、Hurd & Hurd (1966), Hurd & Hurd (1970), Hurd (1977) などの過去の文献では短母音で表記していた最初の音節「ナ」を、Hurd (2003), Hurd & Hurd (2009 (1970)) などの最近の文献ではナーシオイ (Naasioi) と長母音で表記している。音韻的にはこの方が正しい。

⁴ テレイ語、ルガラ語などの名称もあるが、話者の間でコンセンサスがないため、とりあえず、Laycock (2003) に従い、この呼称を用いる。なお、方言分類 (ウイサイ語を除く) も、Laycock (2003) に基づいている。

私にも、これ以上精密な分類を行うに十分なデータがあるわけではない。ただ、今回（2009年8月）のフィールド調査で、バイツィ語の基礎語彙のデータがある程度得ることができたが、音韻的には、まさにモトゥナ語とナゴヴィシ・シベ語のちょうど中間的な性格を持っていることが確認できた。⁵ また、ウイサイ語は、ブイン語の他の方言とはかなり異なった特徴を持っていると言われている。（Laycock (2003) 参照。また SIL は、ブイン、ウイサイの話者のために、別々の識字教育用の教科書を作成している。）こうした理由から、ここでは、暫定的に、個別の言語として扱っておく。

2000年の地域別人口統計 (Office 2002) に基づき、村落名をてがかりに、現地出身の研究協力者と各言語の話者人口を大まかに推定したところ、モトゥナ語とバイツィ語が併せて 16,000 人、ナゴヴィシ・シベ語が 12,000 人、ナーシオイ語が 22,000 人、ブイン語とウイサイ語が併せて 27,000 人、という数字を得た。

本論では、テーマが形態音韻論に限られているので、この語族の言語の統語的な特徴については特に触れない。ただ、限定的な文法格標示はあるものの、基本的には動詞に中核名詞句の人称と数が標示される、主要部標示の傾向が強い言語グループであることは断っておきたい。音韻的な特徴としては、5-7の母音音素⁶と比較的少数の子音音素を持ち、音節構造も CV を基本とした単純なものが多いこと。名詞類 / 動詞ともに、形態論的にはきわめて複雑であるが、膠着的な傾向が強いこと。名詞類には、言語によって異なる程度に文法化された性と類別詞による範疇分けがあること。格組織は、限定的に、いわゆる能格絶対格型の対立を持つこと。動詞のパラダイムに、中動相と他動相の対立（いわゆる diathesis）があること。また自動詞に動作自動詞 (active verbs)、中動自動詞 (middle verbs) の区別があること、などである。

2 モトゥナ語の音韻体系

2.1 音素

まず、モトゥナ語の音素をあげる。

表1 モトゥナ語の子音音素

	両唇音 (labial)	舌頂音 (coronal)	舌背音 (dorsal)	喉頭音 (laryngeal)
閉鎖音 (stops)	p	t	k	' [ʔ]
鼻音 (nasals)	m	n	ng [ŋ]	
摩擦音 (fricatives)		s		h
r 音 (rhotic)		r [r, d, r]		
わたり音 (glides)	w [w, β]		y [j]	

表2 モトゥナ語の母音音素

	前舌 (front)	中舌 (central)	後舌 (back)
高段 (high)	i		u
中段 (mid)	e		o
低段 (low)		a	

⁵ たとえば、バイツィ語には、ナゴヴィシ・シベ語の音素 /p/ がモトゥナ語音素 /h/ に変化する中間過程を示す、音素 /ɸ/ が存在する。その他の例については、本論 4.1 を参照。

⁶ どの言語も基本的には 5 母音。ただ、ナゴヴィシ・シベ語は 7 つの長母音を持ち（稲垣 2010, 本論集所収）、バイツィ語にはおそらく長母音が 6 つある。

2.2 モーラ

モトゥナ語はモーラ言語である。少なくとも次の3つの点で、モーラは重要な役割を果たす。

(A) 音韻語の最小単位は2モーラである。

たとえば、遠称指示詞の女性形と場所性形は、道具格を表す接尾辞 /-ki/ のついた表層形がそれぞれ /tii-ŋgi/, /ti-ki/ であることから、基底形をそれぞれ /tii/ ‘DIST.F’, /ti/ ‘DIST.L’ と指定するが、その無標の名前格 (Nominative) 形は、上の規則により、どちらも /tii/ と、2モーラとして現れる。

(B) ピッチアクセントが語末から数えて3モーラ目にある(3モーラ目から2モーラ目にかけてピッチが急激に下降する)。

下の例を参照。

(4) a. *miŋnong*

「私(男)は行くところだ」

b. *miŋna*

「私(女)は行くところだ」

(5) a. *hónna*

「大きい」

b. *poŋnaa*

「多い」

(C) 部分重複は、もとの語の最初の2モーラを前接する。⁷

下の例を参照。

(6) a. *toko=tokoh-ah* 「暑い」

b. *taa=taapu* 「助け合い」

c. *peh=pehkita* 「とても小さい」

2.3 音節

モトゥナ語の音節構造は次の通り。

(A) 音節初頭子音はモーラに数えない。

初頭子音 Co には、/ʔ/を除きすべての子音がなりうる。初頭子音なしの音節は語中では稀である。初頭子音が二つ以上立つことはない。

(B) 韻 (rhyme) の各要素はモーラに数えられる。

中核母音は、短母音 (V) または長母音 (VV)。音節末要素は、コーダ母音 (Vc) の /i/ または /u/、あるいはコーダ子音 (Cc) の /h/, /ʔ/, または鼻音。このコーダ鼻音を /Nc/ で表すことにする。/Nc/ は、語末では /ŋg/、語中では後続の子音と同調音位置の鼻音音素である。

音節のいくつかの例を挙げる。

⁷ 動詞や親族名称につく、数を標示する後接辞が、1モーラの重複を行う場合がある。3.1の(17b)を参照。

- (7) a. *a.na*
 「これ(女性形)」
 b. *mii.yoo*
 「塩」
 c. *Siu.wai*
 「シウワイ(地域名)」
 d. *eh.kong*
 「今」
 e. *kaah.waang*
 「彼らは彼/彼女を葬った」

(7a) は (Co)V (1 モーラ)、(7b) は CoVV (2 モーラ)、(7c) は CoVVc (2 モーラ)、(7d) は (Co)VCc (2 モーラ)、(7e) は CoVVcC (3 モーラ) の例である。

3 Ci/Cu 音節と Cc 交替の共時的記述

本論で扱う Ci/Cu 音節と Cc の交替現象は、共時的には、とりあえず、名詞類(名詞、形容詞、類別詞を含む)、動詞の 2 つの領域に分けて記述した方がよさそうである。(ただし、下に述べるように、名詞類の中でも親族名称は中間的な振舞いを見せる。)以下、この二つの領域を別々に取り上げたあと、3.3 で、全体をもう一度見渡して、一般化を試みることにする。

3.1 名詞類

まず、次の例を見てみよう。(a) は名詞ないし類別詞(と指示詞の組み合わせ)が無標の名前格(Nominative)で現れた場合、(b)、(c) はそれに格ないし性を表す接尾辞がついた場合である。((10a, b) は (3a, b) の再掲。)

- (8) a. *o-ng nungamong*
 PROX-M male.person
 「この男の人」
 b. *o-ng-ngi nungamong ~ nungamong-ngi* ⁸
 PROX-M-INST male.person male.person-INST
 「この男の人によって」
 c. *o-nu-nno nungamong ~ nungamonu-nno*
 PROX-M-COMIT male.person male.person-COMIT
 「この男の人と一緒に」
- (9) a. *Aanih*
 ‘female.name’
 「アーニヒ(女性名)」

⁸ 指示詞で名詞句の格を明示した場合は、名詞句内の他の要素、特に中核名詞に格接辞をつけるか否かは随意的であり、格接辞のついた形は強調形である。(8c) も同様。

b. *Aanih-ki*
 ‘female.name’-INST
 「アーニヒ（女性名）によって」

c. *Aanisi-nno*
 ‘female.name’-COMIT
 「アーニヒと一緒に」

- (10) a. *ti-wa’*
 DIST-CL:time/word
 「その時 / 言葉」
- b. *tumika-watu-ng*
 first-CL:time/word-M
 「最初の時 / 言葉」

ここに挙げた名詞 / 類別詞 / 指示詞は、無標の場合 ((8a), (9a), (10a)) や CV 音節が後続する場合 ((8b), (9b))、即ち音節境界の前では、語末が Cc で終わっているが、Cc で始まる要素が後接された時 ((8c), (9c), (10b)) Ci/Cu 音節が現れる。それぞれの Cc と交替する Ci/Cu 音節は、次のように定まっている : /ng/ ↔ /nu/, /h/ ↔ /si/, /’/ ↔ /tu/。

この現象については、少なくとも二つの分析の仕方が可能であろう。

まずは、これらの名詞 / 類別詞 / 指示詞が基底形として Ci/Cu の形を持ち、それが音節境界の前では Cc として現れる、という分析。これを定式化すると、

- (11) /nu/ /Nc/
 /si/ → /h/ / V__\$
 /tu/ /’/

もう一つは、Cc で終わる形を基底形と見なし、Cc で始まる要素が後接した場合、その子音をコードとする新たな音節を形成しなければならないため、次のような音韻的な交替が起きる、と記述する。

- (12) /Nc/ /nu/
 /h/ → /si/ / __#-Cc
 /’/ /tu/

(12) の分析の利点は、モトゥナ語には無標でも /nu/, /si/, /tu/ を語末に持つ名詞が存在する、という点である。これらの名詞が Cc によって後接された場合 ((13b), (14b), (15b))、もちろんこれらの Ci/Cu 音節は保たれる。⁹

- (13) a. *soukenu*
 crane
 「鶴」

⁹ このうち (14) については (19) の議論を参照。

b. *soukenu-nno kuuruu-nno*
crane-COMIT owl-COMIT
「鶴や梟と」

- (14) a. *pa-masi*
3KINPOSS-sister.in.law
「彼女の義姉妹」
b. *pa-masi-ng*
3KINPOSS-sister.in.law-NSG
「彼女の義姉妹たち」

- (15) a. *nimautu*
handsome.man
「美男」
b. *nimautu-nno niraweru-nno*
handsome.man-COMIT handsome.woman-COMIT
「美男や美女と」

もし、(11)のように、(8)–(10)の名詞 / 指示詞 / 類別詞の基底形を /-nu/, /-si/, /-tu/ で終わる形に措定するとすれば、なぜこれだけが Cc と交替し、(13)–(15) では交替しないのかを、説明しなければならない。

逆に、(12)の分析の問題点は、この変化が音声 / 音韻的に説明できない点である。この点、(11)の方が、後に述べるように、弱化 (lenition) や音消失 (syncope) といった、典型的に見て一般的な自然音韻変化によって説明できる。

ところで、親族名称のパラダイムの中に、これとは違ったタイプの交替が見られる。(親族名称は、所有者を表す前接代名詞と被所有者を表す語幹を必須要素とし、さらに、場合によっては性 / 数を表す接尾辞を伴う。)

- (16) a. *pa-an-na*
3KINPOSS-opp.sex.sib's.child-F
「彼 / 彼女の姪」
b. *pa-apu-ng*
3KINPOSS-opp.sex.sib's.child-M
「彼 / 彼女の甥」

- (17) a. *nee-'kino*
1INCKINPOSS-child-DU
「私たちの二人の子供たち」
b. *nee-ri-ri-'*
1INCKINPOSS-child-child-PCL
「私たちの三人以上の子供たち」

(16) においては、「異性の兄弟姉妹の子供」という意味の語幹が /an/~apu/ の交替を起こし、(17) においては、「~の子供」という意味の語幹が /'~/ri/ の交替を起こしている。(17b) は、大小複数を表す接尾辞 /-'/ が続くので、直前の語幹が /ri/ の形で現れ、それがさらに重複を起こして /ri-ri/ となったのである。) これらの場合、(12) の規則では (15b), (16b) に出てくる /pu/, /ri/ を予測できないので、(11) の規則に /pu/, /ri/ を加え、基底形の Ci/Cu が、音節境界前に短縮化を起こしたと見るのが妥当であろう。つまりこれを定式化するとこうなる。

(18) /nu/, /pu/ /Nc/
 /si/ → /h/ / V__\$
 /tu/, /ri/ /'/'

では、同じく親族名称である次の例はどうか。

- (19) a. *ro-omah ~ ra-masi*
 2KINPOSS-sister.in.law
 「あなたの義姉妹」
 b. *ro-omasi-ng*
 2KINPOSS-sister.in.law-PCL
 「あなたの義姉妹たち」
 c. *nee-na-mah-ro*
 1INCKINPOSS-LINK-sisters.in.law-DU
 「私たち二人、義姉妹たち」

「義姉妹」を表す語幹は、(19a) のように、2 人称単数が所有者の場合は、/-(o)mah/, /-masi/ の二つの形が共存している。一方、(19c) のように、非単数の所有者の場合は、/mah/ の形のみをとるし、(14a) で見たように、3 人称単数所有者の場合は、/masi/ の形しかない。後に 4.1 で述べるように、このような異形態の共存は、進行中の音韻変化 /si/ > /h/ を共時的に反映したものと見える。ここで、(19b) にある /-omasi/ を (19a) の /-omah/ の交替形と見なした時、形式上は (12) でも (18) でも説明可能であるが、(18) の説明の方が歴史的変化を忠実に反映していると言える。

そもそも、名詞類に関わる拘束形態素の中で、Ci/Cu と Cc の交替が起きる例はどれだけあるか。以下、今までに分かっているものをすべて挙げてみる。

表 3 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素 (1)

(i) 性 / 数を表す接尾辞

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
a.	M (男性、中性または大複数) NSG (非単数) PCL (大小複数)	-nu	-Nc
b.	PCL (大小複数)	-tu	-'

(ii) 動詞語幹から分詞を派生する語尾

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
	PARTIC (分詞)	-wasi	-wah

表3 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素(1)(続き)

(iii) 親族名称の語幹

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
a.	child 「～の子供」	-(o)ri	-(o)'
b.	opp.sex.sib's child 「反対の性の兄弟姉妹の子供」	-(a)pu	-(a)Nc
c.	sister.in.law 「義姉妹」	-(o)masi	-(o)mah
d.	clanmate 「同じクランのメンバー」	-motu	-mo'

性 / 数を表す接尾辞のうち、(i)(a) の /-nu/~/-/Nc/ は、注1 で述べたように、性のパラダイムの中では男性 / 中性名詞や大複数の名詞と一致する。また、親族名称や類別詞の語尾としては、語彙によって非単数を表したり、大小複数を表したりする。(i)(b) の /-tu/~/-/'/ も、同じく、特定の親族名称の語尾として、大小複数を表す。

なお、親族名称の最後に挙げた、 /-motu/~/-/mo'/ は、前者の形を避ける傾向があるようである。この他、類別詞の語幹の中にも Cc で終わるもののがかなりあるが、Ci/Cu との交替が確認できたのは(10) の /-watu/~/-/wa'/ だけである。

(8) に挙げた近称の指示詞 /o-nu/~/o-ng/ は、指示詞語幹 /o-/ に (i)(a) の性 / 数を表す接辞 /-nu/~/-/Nc/ がついたものである。また、名詞の /nungamonu/~/nungamong/ の末尾の /nu/~/ng/ も、同じ接辞が男性名詞の語尾として転用されたものと解釈することができる。

ところで、名詞類の中で、自立名詞や類別詞の語末の Cc が Ci/Cu と交替を起こす例は、実際には頻繁には見られない。たとえば、Cc ではじまる格接辞は、(8c) で見たように、同じ名詞句の中の指示詞だけにつければ十分なので、必ずしもこれらの名詞 / 類別詞につける必要はない。また、Cc と交替する Ci/Cu の分布を見ても、 /ng/ ↔ /nu/, /h/ ↔ /si/, /'/ ↔ /tu/ に限られている。一方、Cc で終わる親族名称の拘束語幹の場合、交替を起こす Ci/Cu 音節の種類に幅がある上、交替が義務的で、使われる頻度もきわめて高い。だから、(18) のような、これらの拘束形態素について当てはまる短縮化の規則を一般則と見て、自立名詞の短縮化を特殊な場合と考えた方がよさそうである。この考察を、次の動詞における例で、さらに進めてみる。

3.2 動詞

下の三つの例は、いずれも動詞の変化形における短縮化の例である。

- (20) a. *taapu-m-u-u-ng*
 help-1U-3A-RMPAST-M
 「彼 / 彼女が私を助けた」
- b. *taapu-m-u-ku*
 help-1U-3A-DYN:PFV:DS
 「彼 / 彼女が私を助けて、(彼 / 彼女以外の人が)、、、」
- c. *taapu-ng-ku*
 help-1U:3A-DYN:PFV:DS
 「彼 / 彼女が私を助けて、(彼 / 彼女以外の人が)、、、」

- (21) a. *aat-os-i-ng*
 sleep-1SACT-NRPAST-M
 「私（男）は寝た」
- b. *aat-oh-na*
 sleep-1SACT:NRPAF-F
 「私（女）は寝た」
- c. *aat-oh*
 sleep-1SACT:STAT:IMPF
 「私は寝たまま、（私は）、、、」

- (22) a. *poku'-ro*
 hide:3U:3A-DYN:PFV(:SS)
 「彼／彼女が彼／彼女を隠して、（その同じ人が）、、、」
- b. *po'k-∅-u-ro*
 hide-3U-3A-DYN:PFV(:SS)
 「彼／彼女が彼／彼女を隠して、（その同じ人が）、、、」

(20a) では、1 人称の被行為者を表す接尾辞 /-m/ と 3 人称の行為者を表す接尾辞 /-u/ の組み合わせである /mu/ が現れているが、それが (20b), (20c) のように、CV の前では、随意的に /Nc/ と交替することができる。(21a) では、動作自動詞 /aat-/ の 1 人称主語を表す接尾辞 /-os/ と近過去を表す接尾辞 /-i/ の組み合わせである /-osi/ の /si/ 音節が現れているが、それが (21b), (21c) では Cc の /h/ に義務的に交替する。また (22) では、他動詞語幹 /pokuk-/、3 人称の被行為者（無標）3 人称の行為者を表す接尾辞 /-u/ の組み合わせである /pokuku/ の二つ目の /ku/ 音節が (22a) で、また最初の /ku/ 音節が (22b) で、それぞれ Cc の /' / に交替している。これらのいずれの場合も、Cc 形から Ci/Cu 形を予測できないため、交替を短縮化と見なさなければならない。(20b), (20c) や (22a), (22b) のように交替が随意的であったり、動詞語幹によって交替するしないの語彙的制約があったり、といった問題をひとまず置くとすれば、この短縮化は規則的であり、しかも、名詞に比べてはるかに、交替する Ci/Cu 音節が多様である。これを形態音韻的な規則として、(18) のような規則を広げることで、一般化できるであろうか？

その一般化を試みる前に、まず、モトゥナ語の動詞の形態について、簡単にまとめておく。

モトゥナ語には、形態的には 3 種類の自動詞¹⁰ と、他動詞が存在するが、今は一番複雑な形態をとる他動詞の構造を示す。それぞれの動詞はさらに、文中の機能によって、文の題目の性 / 数を標示する「性標示形」GMV (Gender-Marked Verbs)、
 「性無標示形」NGMV (Non-Gender-Marked Verbs)、そして、「中止形」MEDV (Medial Verbs) の 3 つの形を持つ。

¹⁰ 動作自動詞 (active verbs) 中動自動詞 (middle verbs) 不規則自動詞 (irregular verbs) さらには、形態的には他動詞だが統語的には自動詞として振る舞う非人称動詞 (impersonal verbs) がある。

図2 動詞の形態構造

- (A) 「性標示形」GMV (Gender-Marked Verbs)
 語幹 {U人称 A人称 U/A数} TAM 性/数
- (B) 「性無標示形」NGMV (Non-Gender-Marked Verbs)
 語幹 {U人称 A人称 U/A数} (否定) TAM
- (C) 「中止形」MED (Medial Verbs)
 語幹 {U人称 A人称 U/A数} (否定) 態:アスペクト:(異主語)

この動詞構造の中で、短縮化が起きる領域の右端は、語末であると考えられる。3.1で挙げた、「性標示形」GMVの語末につく、男性/中性/大複数を表す /-nu/ /-ng/ である。基底形を /-nu/ として、語末でその短縮化が起きていると考えるのである。これに対し、同じ語末に現れる Ci/Cu の形を持つ形態素でも、指小性や双数/小複数を表す /-ni/ や、「中止形」MEDの語末に来る「動態/完了/異主語」(DYN:PFV:DS)を表す /-ku/ は、短縮化を起こさない。また、その一つ内側に現れる「習慣過去」(HABPAST)を表す /-ki/ も短縮化を起こさない。

一方、短縮化が適用される範囲の左端は、子音で終わる多音節語幹の動詞で、最後の音節に Ci/Cu を持つ場合である。ただし、すべての動詞語幹で短縮化が起きるわけではなく、この場合は語彙的な制約がある。

もう一つの制限は、A人称接辞を含む Ci/Cu 音節である。まず、(20b), (20c)で見たように、3A「3人称行為者」を表す /-u/ が、1U「1人称被行為者」の /-m/、2U「2人称被行為者」の /-r/、ないし無標の3U「3人称被行為者」を間にはさんだ動詞の語幹の最後の子音と組み合わせさせて、Cu音節を形成する場合。この場合は、短縮化が随意的になる。また、下の例に見るように、1A「1人称行為者」を表す /-ut/ との組み合わせで生じる Cu音節、2A「2人称行為者」を表す /-i/ との組み合わせで生じる Ci音節は、決して短縮化を起こさない。

これらの制限の下に、短縮化が、語末から始まり、右から左に向けて義務的に起きる過程であることを、下に示してみよう。まず、(20)に挙げた他動詞 /taapu-/ を例にとる。

- (23) a. *taapu-m-u-h-ni*
 help-1U-3A-DU:NRPAST-DuPc
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:二人)」
- b. *taapu-m-u-s-i-ng*
 help-1U-3A-DU-NRPAST-M
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:男)」
- c. *taapu-n-s-i-ng*
 help-1U:3A-DU-NRPAST-M
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:男)」

(23a)では、双数を表す /-ti/ と「近過去」を表す /-i/ の融合形 /-si/ が、双数の項が題目であることを示す /-ni/ の前で /h/ に短縮化される。(23b), (23c)では、まず男性の /-nu/ が語末で /ng/ に短縮化され、次の /-si/ は /ng/ に続くため短縮化されず、その左隣の /-m-u/ (「1人称被行為者」+「3人称行為者」) が短縮化の対象となる。この短縮化は随意的なため、(23b), (23c)の二つの形が可能なのである。

次に、(22) で挙げた他動詞 /pokuk-/ を例にとる。

(24) a. *po'k-∅-u-n-ni*

hide-3U-3A-PCL:RMPAST-DuPc

「彼ら（三人以上）が彼 / 彼女を隠した（題目：彼ら数人）」

b. *po'k-∅-u-r-u-ng*

hide-3U-3A-PCL-RMPAST-M

「彼ら（三人以上）が彼 / 彼女を隠した（題目：彼、または彼ら大勢）」

c. *poku'-r-u-ng*

hide:3U:3A-PCL-RMPAST-M

「彼ら（三人以上）が彼 / 彼女を隠した（題目：彼、または彼ら大勢）」

(24a) では、「大小複数」を表す /-ru/ と「遠過去」を表す /-u/ の融合形 /-ru/ が、小複数の項が題目であることを示す /-ni/ の前で /n/ に短縮化される。(24b), (24c) では、男性ないし大複数が題目であることを表す (/nu/ の短縮形) /-ng/ が語末にあるため、その左の /-ru/ は短縮化されず、そのさらに左隣の /-k-∅-u/（動詞語幹の末子音 + 「3 人称被行為者」 + 「3 人称行為者」）が短縮化の対象となる。この短縮化は随意的なため、二つの形が可能となる。短縮化した場合は (24c)。また、短縮化しなかった場合は、動詞語幹の第 2 音節の /ku/ が義務的に /' / に短縮化され、(24b) になる。

一方、この同じ動詞が、「1 人称行為者」、「2 人称行為者」を取る場合、「1 人称行為者」を表す /-uC/ との組み合わせで生じる Cu 音節、「2 人称行為者」を表す /-i/ との組み合わせで生じる Ci 音節は、決して短縮化を起こさないため、次の例のように、語幹が義務的に短縮化を起こす。

(25) a. *po'k-∅-ut-u-ng*

hide-3U-1A-RMPAST-M

「私が彼 / 彼女を隠した（題目：私（男）、または彼）」

b. **poku't-u-ng*

hide:3U:1A-RMPAST-M

「私が彼 / 彼女を隠した（題目：私（男）、または彼）」

(26) a. *po'k-∅-i-t-u-ng*

hide-3U-2A-DU-RMPAST-M

「あなた（たち 2 人）が彼（ら 2 人）を隠した（題目：あなた（男）、または彼）」

b. **poku'-t-u-ng*

hide:3U:2A-DU-RMPAST-M

「あなた（たち 2 人）が彼（ら 2 人）を隠した（題目：あなた（男）、または彼）」

最後に、動作自動詞語幹 /kopir-/ 「歩く」と他動詞語幹 /konin-/ 「建てる」の例を挙げる。これらの動詞の第 2 音節が短縮化されると、/kopir-/ では /pi/ が鼻音音素に代わり、さらにその後の /r/ と同化して /konn-/ の形となる。一方、/konin-/ では、/ni/ が鼻音音素に代わるためこれも /konn-/ の形となる。従って、(27b), (28b) のように、この形は同音異義となる。（なお、(28a) では、基底形は /konin-∅-u/ であるが、動詞語幹末の /n/ が直前の音節の /n/ と異化を起こして失われ、さらにそれに続く /u/ が直前の /i/ と同化した結果、表層的には /konii-/ となる。）

- (27) a. *kopi'-ki-ng*
 walk:3SACT-HABPAST-M
 「彼は歩いたものだ」
- b. *konn-u-ki-ng*
 walk-3SACT-HABPAST-M
 「彼は歩いたものだ」

- (28) a. *konii-ki-ng*
 build:3U:3A-HABPAST-M
 「彼はそれを建てたものだ」
- b. *konn-∅-u-ki-ng*
 build-3U-3A-HABPAST-M
 「彼はそれを建てたものだ」

ここで、動詞の変化形で短縮化が起きる要素を、右に位置する接辞からまとめて列挙すると、下のようになる。(男性/中性/大複数を表す /-nu/、分詞を派生する /-wasi/ については、表3の(i), (ii)で挙げたので、ここでは挙げるまい。)

表4 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素(2)

- (i) 双数を表す /-ti/ と、「近過去」(NRPAST) または「静態/未完了」(STAT:IMPF) を表す /-i/、ないし「遠過去」(RMPAST) を表す /-u/ の組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ti/ (DU) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-si	-h	義務的
b	/-ti/ (DU) + /-u/ (RMPAST)	-tu	-'	義務的

- (ii) 大小複数を表す /-ru/、またはこの形態素と「遠過去」(RMPAST) /-u/ の組み合わせ。または、この形態素と「近過去」(NRPAST) / 「静態/未完了」(STAT:IMPF) /-i/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ru/ (PCL) /-ru/ (PCL) + /-u/ (RMPAST)	-ru	-'/__C [-voice] -Nc/__C [+voice]	義務的
b	/-ru/ (PCL) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-ri	-'/__C [-voice] -Nc/__C [+voice]	義務的

- (iii) 動作自動詞または他動詞の「1人称行為者」を表す /-ot/ /-ut/ と、「遠過去」(RMPAST) /-u/ の組み合わせ。または、この形態素と、「近過去」(NRPAST) / 「静態/未完了」(STAT:IMPF) /-i/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ot/ (1SACT) + /-u/ (RMPAST) /-ut/ (1A) + /-u/ (RMPAST)	-otu -utu	-o' -u'	義務的
b	/-ot/ (1SACT) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF) /-ut/ (1A) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-osi -usi	-oh -uh	義務的

表 4 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素 (2) (続き)

(iv) 他動詞の「1 人称被行為者」を表す /-m/ または「2 人称被行為者」を表す /-r/ と、「3 人称行為者」を表す /-u/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-m/ (1U) + /-u/ (3A)	-mu	-N	随意的
b	/-r/ (2U) + /-u/ (3A)	-ru	-ʔ/ __C [-voice] -Nc/ __C [+voice]	随意的

(v) 動作自動詞の語幹末の子音と「3 人称行為者」 /-u/ との組み合わせ。または、他動詞の語幹末の子音、無標の「3 人称被行為者」 /-∅/、「3 人称行為者」 /-u/ の組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-k/ + /-u/ (3SACT) /-k/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-ku	-ʔ	随意的
b	/-t/ + /-u/ (3SACT) /-t/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-tu		
c	/-p/ + /-u/ (3SACT) /-p/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-pu	-Nc	随意的
d	/-n/ + /-u/ (3SACT) /-n/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-nu		
e	/-ng/ + /-u/ (3SACT) /-ng/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-ngu		
f	/-r/ (2U) + /-u/ (3A)	-ru	-ʔ/ __C [-voice] -Nc/ __C [+voice]	随意的
g	/-s/ + /-u/ (3SACT) /-s/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-su	-h	随意的
h	/-h/ + /-u/ (3SACT) /-h/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-hu		

(vi) 子音で終わる 2 音節以上の動詞語幹の、末子音前の Ci/Cu 音節。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ki-/	-ki-	-ʔ-	義務的
	/-ku-/	-ku-		
	/-tu-/	-tu-		
b	/-mu-/	-mu-	-Nc-	義務的
	/-ni-/	-ni-		
	/-nu-/	-nu-		
	/-ngi-/	-ngi-		
	/-ngu-/	-ngu-		
c	/-pi-/ followed by /-r/	-pi-r-	-nn-	義務的
	/-ri-/ followed by /-n/	-ri-n-		
d	/-si-/	-si-	-h-	義務的

(vi) の動詞語幹については、語彙的な制約があり、このような音節を持つ語幹がすべて短縮化を起こすわけではない。また、はじめから、決して Ci/Cu と交替しない Cc を語幹の一部としている動詞もある。これまでに確認できた、Ci/Cu ないし Cc を末子音の前に持つ、2 音節以上のすべての動詞語幹のリストを、補遺に挙げる。

さて、ここで、これまで議論してきた名詞類・動詞の短縮化の過程を要約すると、次のようになる。

(29) 短縮化の過程は、語末より、左に向けて進み、音節境界前の Ci/Cu 音節は対応する Cc へと短縮化される。その対応関係は、下のようである。

	Ci/Cu (基底形)	Cc (短縮形)	短縮化を起こす条件
a	/-tu-/ /-ki-/, /-ku-/	,	/V__\$
b	/mu/, /pi/, /pu/ /ni/, /nu/ /ngi/, /ngu/	Nc	/V__\$
c	/si/, /su/ /hi/, /hu/	h	/V__\$
d	/ri/, /ru/	Nc ,	/V__\$C [+voice] /V__\$C [-voice]

ただし、形態素や語彙によって、短縮化に次の制限がある：

- (i) 指小性 / 双数 / 小複数を表す /-ni-、「習慣過去」(HABPAST) /-ki-、「動態 / 完了 / 異主語」(DYN:PFV:DS) /-ku/ は、短縮化を起こさない。
- (ii) 重複によって形成される Ci/Cu 音節は、短縮化を起こさない。¹¹
- (iii) 「1 人称行為者」 /-u-、「2 人称行為者」 /-i- を含む Ci/Cu 音節は短縮化を起こさない。
- (iv) 「3 人称行為者」 /-u- を含む Ci/Cu 音節の短縮化は随意的である。
- (v) 動詞語幹の中に含まれる Ci/Cu 音節の短縮化に関しては、語彙的な制限がある。

3.3 まとめ

以上、3.1, 3.2 の議論から明らかのように、モトゥナ語における Ci/Cu 音節と Cc との交替を、語末から左に進行する短縮化という、形態音韻的過程として、かなりの程度一般化できる。この場合、短縮化が起きるのは基本的には拘束形態素であって、自立名詞の語末における交替は、この短縮化過程の類推として生じた、限られた現象と考えることができる。

ただ、この形態音韻的過程には、いくつかの制限がある上、動詞の形態素や語幹では、短縮化に付随するさらなる音韻変化まで起こしている (28a) を参照)。

もう一度、(29) を見てみよう。(29) において (i)–(iv) のような制限がある理由として、ここに挙げた形態素まで短縮化してしまうと意味伝達に支障が生じることが考えられる。特に (iii)–(iv) に関して言えば、項の人称を表す接辞は、モトゥナ語のように主要部標示の傾向の強い言語にあっては重要な要素なので、一般に短縮化を避ける傾向がある、という説明が成立しそうである。これらの音節まで短縮化を許した

¹¹ (17b) を参照。動詞の場合も、他動詞の二つの項がどちらも小複数ないし大複数の場合、大小複数を表す接辞 /-ru/ の重複が起きる。

場合、(25b), (26b) に見るような同音異義の動詞形が、頻出することになる。¹²

一方、この現象の音韻的な面、特に、基底形となる Ci/Cu 音節の形については、歴史的な変化を考察の対象に入れることによってその多くが説明されるのではないかと思う。

Blevins (2004) は、彼女の提唱する「進化音韻論」という方法論について、こう述べる。

「進化音韻論」は、共時的な音韻パターンについて、歴史的、非目的論的、音声学的な説明を提供する。偶然以上の確率で起きる言語横断的な類似性は、直接の継承か、平行進化の結果であると見なすことができる。非自然的な音韻変化のパターンもまた、(1) に描かれているような¹³ 規則的な歴史変化の結果と見なしうる。どちらの場合でも、共時的な音韻パターンの一義的な説明は、歴史的なものである。[...] 音声学的な説明を歴史的な要素に限ることによって、共時的な音韻システムの統一性は、妥協の余地がないものとなる。¹⁴

Blevins がここで述べるように、共時的な音韻現象のほとんどが歴史的変化に還元できるかどうかについて、私は懐疑的である。「自然音韻変化」と呼ばれるものの方向性が、おおむね歴史的に説明できるという考えには賛成だが、Blevins がここで言及している「非自然的な音韻変化のパターン」まで歴史的と言っていていかどうか、疑問が残る。こうしたパターンが生じる歴史的原因と彼女が言及しているもの(注13参照)には、類推という言葉で一括できそうな、自然音韻変化を逸脱したさまざまなパターンが分類されている。もしこのような変化も歴史的变化と呼ぶならば、確かに音韻現象は、そのほとんどが歴史的に説明できるということになるが、その場合の歴史性とは、個別言語の共時的構造の特殊性から一応は独立した概念である「自然音韻変化」とは、かなり質が違ったものである。「非自然的な音韻変化のパターン」は、個別言語の共時的な構造、特に超分節的な音韻構造や形態論的な構造に規定されて、おそらくはまったく異なった道筋を辿ることになる。

さて、次節では、Blevins の最初の論点に沿って、モトゥナ語の「短縮化」が、歴史的な自然音韻変化をどの程度反映しているかを、南ブーゲンヴィル語族の諸言語の今手元にあるデータを比較しながら検討してみたい。

¹² モトゥナ語の動詞には、ただでさえ同音異義の形が多い。例えば、次に挙げる、他動詞 /tani-/ 「起こす」の動詞形の例では、接尾辞 /-i/ の基底形として () の中に示した 4 通りの組み合わせが可能なことから、4 通りの読みが生じる。

/tani-∅-i-ng/

wake-3U-2/3A:NRPAST/RMPAST-M

「あなたが彼 / 彼女をさっき起こした。」(/-i/ (2A) + /-i/ (NRPAST))

「彼 / 彼女が彼 / 彼女をさっき起こした。」(/-u/ (3A) + /-i/ (NRPAST))

「あなたが彼 / 彼女をずっと前に起こした。」(/-i/ (2A) + /-u/ (RMPAST))

「彼 / 彼女が彼 / 彼女をずっと前に起こした。」(/-u/ (3A) + /-u/ (RMPAST))

¹³ Blevins (2004:67) 参照。Blevins はここで、analogy, rule inversion, rule telescoping, accidental convergence の 4 つの変化のパターンを挙げている。

¹⁴ 大西訳。原文は以下の通り。

“Evolutionary phonology proposes historical, non-teleological, phonetic explanations for synchronic sound patterns. Cross-linguistic similarities which occur with greater than chance frequency are viewed as the result of direct inheritance or parallel evolution. Unnatural sound change patterns can also be viewed as the result of regular historical changes like those sketched in (1). In either case, the primary explanation for a synchronic sound pattern is historical [...] By limiting phonetic explanation to the diachronic component, the integrity of synchronic phonological systems remains uncompromised.” (Blevins 2004:81)

4 Ccの歴史的派生の検討

この節では、3節で扱った形態音韻的な現象の音韻面を、比較言語学的視点から検討してみる。まず4.1において、モトゥナ語における3種類のCcの起源を、基礎語彙の同源語の比較から跡づけることを試みる。続けて、4.2において、3節で扱った形態素のいくつかの起源を跡づけることを試みる。

ここでは、次のデータを用いる。

ナーシオイ語キエタ方言	大西(フィールドデータ)、Hurd(2003)
ナゴヴィシ・シベ語トベラキ方言	稲垣(2010, 私信)
バイツイ語	大西(フィールドデータ)
モトゥナ語中央方言	大西(フィールドデータ)、Onishi(1995)
ブイン語中央方言	Laycock(2003)

ナーシオイ語キエタ方言のデータについては、大西のフィールドデータをもとに、Hurd(2003)で随時確認をとった。以下にあげたデータに関しては、この二つにおいて、すべて一致している。また、ナゴヴィシ・シベ語トベラキ方言に関しては、これに近い方言であるモシノ方言についての大西のフィールドデータも参照した。

以下の表で、空欄の部分は、当該言語におけるデータがまだ得られていないことを、また()で示された形態素は、同源語ではないことを表す。バイツイ語については、データが限られているので、特にデータがない場合は欄そのものを省略している場合もある。

なお、南ブーゲンヴィル語族の祖語である原SBの再構形は、ナーシオイ語、ナゴヴィシ・シベ語の2言語と、モトゥナ語またはブイン語のうち少なくとも一つの言語に、同源語が得られた場合にのみ、立てている。ナーシオイ語が多くの場合祖形に最も近い形を残していること、ナゴヴィシ・シベ語はナーシオイ語からさらに歴史的に発展した形を反映していること、モトゥナ語の同源語はブイン語またはナゴヴィシ・シベ語のそれから発展した形を示しており、しかもブイン語に同源語がある場合はモトゥナ語にきわめて近い形である場合が多いこと、などがその理由である。ただ、そのようにして再構された祖形でも、不確定な要素(特に母音の長短や声門閉鎖音の有無)がある場合がある。それらについては、()で示したり、‘?’を付したりした。

4.1 モトゥナ語におけるCcの起源

4.1.1 /h/

Ccとしての/h/の起源については、ほぼ確実に推定できる。ここでは、モトゥナ語の基礎語彙のいくつかにおいて、音節境界前に現れる/h/についての比較データを挙げて、可能なものについて再構を試みる。

表5のナーシオイ語、ブイン語における“-ti”は、音韻表記で、実際の発音は、前者が[si]、後者が[(t)si]である。(この2言語において、/s/は独立の音素としては存在しない。)ナゴヴィシ・シベ語では、[s]を独立音素として扱うべきかどうか、微妙である(稲垣私信)。限られた語彙において、/a/、/o/の前に[t]と[s]が分布しているので、いちおう/s/を立てた。この音素は、[i]の前では常に[j]で、しかも語末における[i]は無声化している。一方、バイツイ語では/s/が音素として存在し、表5(e)のように、モトゥナ語のような/si~/h/の対応を示す例もある。モトゥナ語のCcとしての/h/は、従って、(30)のような母音消失と中和の結果、生まれたものと考えられる。

表5 /h/の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツイ	モトゥナ	ブイン
a	畑		(mintoong)	kasi'		koh	koti
b	竹	*beti	bei	busi		pih	piti
c	虱	*panti'	panti'	pasi'		hoh	oti
d	長い	*itika	itikaa	isikalou		ihkita, ihkaato	itigou
e	義姉妹	*-maati(')	-maati'	-maasi	-(o)mah/-masi	-(o)mah/-masi	-mati
f	埋葬する	*ka(a)te(')	kate'-			kaahy/w-~ kaasiy/w-	kaati-(P)
g	分詞形成語尾		NA	-wasi		-wah	-wati

- (30) a. */ti/ [tsi ~ si] > */ti/ [s(i)~ ʃ(i)] / V__\$
 b. */si/ [s ~ ʃ] > /h/ [h] / V__\$

モトゥナ語においてはこの変化はほぼ完了している。¹⁵ この歴史的変化は、表5 (e) の /-(o)mah/ ~ /-masi/ や、(g) の /-wah/ ~ /-wasi/ の場合、直接、共時的な短縮化に反映されている。

4.1.2 /ʃ/

/ʃ/ は、ナーシオイ語では、語中と語末において音素として現れ、そのうち語末のものはナゴヴィシ・シベ語にもある程度その反映が見られるが、モトゥナ語にはまったく反映されていない。(表6の、(i)(a)「涙」や、(ii)(a)「昨日」を参照。)一方、モトゥナ語では、*/ru/, */ri/, */ku/, */ki/, */tu/ から、新たに Cc としての /ʃ/ が成立したのが見える。

表6 /ʃ/の比較データ

(i) */ru/, */ri/

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	涙	*ta'ru(')	ta'ru	talu'	to'	toru(pi)
b	首	*kuru	kuru	kulu	ku'	ou
c	心臓		murukeu		mu'king	morugumoi
d	古い	*urika(a)	urikaa	ulikala	u'kisa	uni-
e	はえ	*sirimpaa	sirimpau'	siligaa	singnga	timuka

(ii) */ki/, */ku/, */tu/

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	昨日	*ke'maaki'	ke'maaki'	kemaaki	kinaa'	
b	トカゲ	*mairauke'	mairobe'	mailaaki'	meera'	maurugu
c	女	*manikuma	manikuma	manikumanaa	moni'mo	

¹⁵ アウストロネシア諸語からの借用語である /hakaasi/ 「カヌー」 (< pakaasi (POC)) に /si/ を残しているのは、この借用が SB 諸語の歴史的変化よりも後であることを示しているのであろうか。その一方で、同じく借用が期待される「犬」の意のモトゥナ語の単語は /mahkata/ で、アウストロネシア語との関係がはっきりしない。ナーシオイ語の /mosi'/、ナゴヴィシ・シベの /mosika/ と比較すると、/si/ > /h/ の変化を示しているようであるが、母音の /o/, /a/ の対応は不規則である。

表6 /ʔ/の比較データ(続き)

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
d	叫ぶ	*boku-	boku-	woku-	pukuy/w-~pu'y/w-	puku-
e	隠す	*baku'-	baku'-	waku'-	pokuk~po'kuk-	
f	始まる / 始める		tutung-		tutun-~tu'n-	turo-g/d

以上の例から分かるように、モトゥナ語の Cc /ʔ/ は、次のような母音消失、中和の結果生じたものと想定される。

- (31) a. */ri/, */ru/ > */r/ / V__ \$
 */ki/, */ku/ > */k/ / V__ \$
 */tu/ > */t/ / V__ \$
 b. */r/, */k/, */t/ > /ʔ/ / V__ \$

このうち */ru/, */ri/, */ki/ に対応する /ʔ/ については、語末、または無声子音が後続しているという条件のものしか見出されていないが、*/ku/, */tu/ に対応する /ʔ/ の場合は、後に鼻音が来る場合にも見出される。もちろん、これだけでは、モトゥナ語動詞の共時的な短縮化において、*/ru/, */ri/ が、無声子音が後続している時は /ʔ/ に代わり、有声子音が後続する場合は /Nc/ に代わる、という条件が、歴史的起源を持つかどうか、明らかではない。ただし、上の例のうち、(i)(e)「はえ」の /singnga/ が、ブインの /timuka/ ではなくナゴヴィシ・シベの /siligaa/ に由来するとすれば、この条件をみたすことになる。¹⁶ この仮定が正しければ、(31b) を修正して、次のような変化を想定しなければならない。

- (31) b'. */k/, */t/ > /ʔ/ / V__ \$
 */r/ > /Nc/ / V__ \$C [+voice]
 > /ʔ/ / V__ \$C [-voice]

4.1.3 /N/

ナーシオイ語、ナゴヴィシ・シベ語、ブイン語には、語頭に立ついわゆる成節的鼻音と、同調音点の鼻音や破裂音との連続が存在する。原 SB にもおそらくあったこれらの成節的鼻音と破裂音の連続は、ナーシオイ語には特によく保たれているが、モトゥナ語においては、これらの連続は、すべて単独の鼻音ないし破裂音に変化した。

- (32) */Mm/ > /um/
 */Mp/ > /up/
 */Nt/ > /t/ (before */o/), /n/ (Elsewhere)
 */Nd/ > /r/ [r~d] (before */o/), /n/ (Elsewhere)
 */NGk/ > /ng/

¹⁶ さらに、ナーシオイ語動詞語幹の /-ri/ で終わるものに、モトゥナ語の語幹交替で /-nn/ に対応するものがある。「寒くなる」 /kamaari-/ (Naasioi) ↔ /kamarin/~kamann-/ (Motuna)、「買う」 /boori-/ (Naasioi) ↔ /puuri/~puunn-/ (Motuna)。ただ、モトゥナ語の動詞語幹末の /-n/ の由来は不明である。

表 7 語頭の成節的鼻音と破裂音の連続の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツイ	モトゥナ	ブイン
a	私の父	*Mma'	Mma'	Mma'	moomoo	umoka, moomoo	moka
b	弓	*Mpaa(ng)	Mpaang	baa		upa	puara
c	私の年下の兄弟姉妹	*Ntarama-	Ntarama-	inalama-	narama-	naramo-	roromo-
d	水	*Ntong	Ntong	buu'		tuu	tuu
e	私の子	*Nduri(ng)	Nnuring	inuli	nuri	nuri	rung
f	耳	*Ndome'	dome'	long'		rung	nume
g	私の	*NG-ka-	NG-ka-	NGnga-	nga-	ngo-	NG-ko-

また、語中における */mp/ の組み合わせは、多くの場合、モトゥナ語の /p/ に、また */ngk/ はモトゥナ語の /ng/ に対応する。

表 8 mp, ngk の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツイ	モトゥナ	ブイン
a	父の姉妹	*-kaampo	-kaampo	-kaabo	-kamo	-kapu	-gagu
b	異性の兄弟 / 姉妹の子	*-mpu(ru)	-mpu(ru')	-bu(lu)	-(a)βu~-(a)m	-(o)pu~Nc	-(a)gu
c	孫	*-dompe(ng)	-dompeng	-lobe	-me	-(o)pi	-u/oge
d	老婦	*pangka	pangka-ni	pagaa'		hanga-	(maire)

表 8 の (b) に見るように、モトゥナ語の親族名称や動詞語幹において、/pu/, /pi/ が /' / ではなく /Nc/ と交替するのは、それが、原 SB の */mp/ の閉鎖音 */p/ と鼻音 */m/ の両方を反映しているからである。バイツイ語の同源語では、/βu/, /βi/ と /m/ が交替する。

一般に、モトゥナ語の Nc には、下の例にあるように、原 SB における *(p)u, *me の組み合わせに由来するものが多い。

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツイ	モトゥナ	ブイン
a	皮	*kampu	(dopa')	kabu		kang	kagu
b	耳	*ndome	dome'	long		rung	nume
c	蚊	*taamuka	muitaka	taangka		taangka	taamuka
d	青		(kankong)	mumuleng		munninu	mumurerup-

*/me/ の場合は、(33a') のような、高母音化の過程があったと思われる。

- (33) a. */mpu/ > */mu/ [m(u)] / V__ \$
 a' */me/ > */mi/ [m(i)] / V__ \$
 b. */mu/, */mi/ [m] > /Nc/ / V__ \$

この他にも、モトゥナ語の Cc の由来として、4.1.2 で述べたように、おそらく原 SB における有声子音の前の */ru/, */ri/, */ni/ ¹⁷ などがあるのではないかと思うが、まだこれを証明するのに十分なデータが得られていない。

4.2 モトゥナ語における拘束形態素の起源

4.2.1 「男性 / 中性 / 大複数」 /-nu/

モトゥナ語の /-nu/ は、「男性 / 中性 / 大複数」を表す接辞として、所有代名詞の語尾の被所有者との一致、名詞句内修飾要素の中核名詞との一致、性標示形動詞語尾の文の題目との一致など、広い文法的機能を持つ。また、親族名称のパラダイムの中では、「夫」の語幹や、「異性の兄弟」や「弟」等の語彙の男性を表す語尾も、同じ形態である。ここでは、こうした異なった環境における /-nu/ が、他の言語のどのような形態素に対応するかを比較してみる。下に見るように、男性 / 中性と大複数とでは、モトゥナ語とパイツイ語以外の言語では接辞の形が異なる。

表 9 「男性 / 中性」

	意味 / 機能	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツイ	モトゥナ	ブイン
a	近称	a-ung	o-o	a-n	o-ng	(a-ko)
b	動詞節の名詞化語尾	-ung			-ng	-ru, -nu /i, n _
c	所有 / 不定語尾	-rung	-ng	-n	-ng	NA
d	夫	-'ung	-ng	-n	-ng	-ru
e	年下のきょうだい	-'nung	-ng	-n	-ng	-ru

表 10 「大複数」

	意味 / 機能	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツイ	モトゥナ	ブイン
a	近称	a-ing	a-woo	a-n	o-ng	(a-ko)
b	動詞節の名詞化語尾	-ing			-ng	-ro-go, -no-go /i, n _
c	所有 / 不定語尾	-ing	-ng	-n	-ng	-ma

「男性 / 中性」の接辞は、/-ru/, /-nu/ がナーシオイ語やブイン語に出ていることから見て、ここでは */-ndu(ng)/ と再構する。(*/Ndu/ はモトゥナ語の /nu/ に対応する。4.1.3 の表 7 (e) の、モトゥナ語 /nuring/ 「私の息子」の再構形 */Nduring/ に準じる。) ナーシオイ語の接辞末の /-ng/ は後代に加えられた可能性がある (4.2.2 を参照)。

「大複数」を表す接辞の再構については、十分なデータがないので、今は保留にしておく。

4.2.2 「近過去」 / 「静態 / 未完了」 /-i/、「遠過去」 /-u/

「近過去」または「静態 / 未完了」の */-i/、「遠過去」の */-u/ の再構に関しては、特に問題はないのではないかと思う (表 11)。ナーシオイ語の接辞末の /-ng/, /-nung/ は、直接法の語尾として、おそらく後から加えられたものである。

¹⁷ ナーシオイ語動詞語幹の /-ni'/ で終わるものに、モトゥナ語の語幹交替で /-nn/ に対応するものがある。「建てる」 /kani'-/ (Naasioi) ↔ /konir/~konn-/ (Motuna)。モトゥナ語の動詞語幹末の /-r/ の由来は不明である。また、*/ri/, */ru/ については、注 16 を参照。

表 11 「近過去」 / 「静態 / 未完了」, 「遠過去」

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	近過去	*-i	-i-ng	-i	-i-Gender	-i
	静態 / 未完了相		-i		-i	
b	遠過去	*-u	-u'-nung	-u	-u-Gender	-u

4.2.3 「双数」 /-ti/、 「大小複数」 /-ru/

表 12 「双数」, 「大小複数」

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	双数	*-re(t)	-(r)e(t)	-re	-ti (-si, -h)	-re~-ri
b	大小複数	*-ndi(nd)	-(r)i(r)	-ri	-ru (-', -n)	-ru~-ng

モトゥナ語の双数接辞 /-ti/ の初頭子音 /t/ の起源が不明である。ナーシオイ、ナゴヴィシ・シベ、ブインの形からは、*/-re(t)/ が再構される。同様に、モトゥナ語の大小複数接辞 /-ru/ の中核母音 /u/ の起源が不明である。ナーシオイ、ナゴヴィシ・シベ、ブインの形からは、*/-ndi(nd)/ が再構される。

4.2.4 動詞の人称接辞

他動詞の被行為者 (U) と行為者 (A) の接辞を比較する。

表 13 動詞の人称接辞

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	1 人称被行為者 (1U)	*-m	-m		-m	-m
b	2 人称被行為者 (2U)	*-r	-r		-r	-r
c	3 人称被行為者 (3U)	*-∅	-∅		-∅	-∅
d	1 人称行為者 (1A)	*-a(mp, t)	-a(mp, t)		-u(mp, t)	-o(mp, t)
e	2 人称行為者 (2A)	*-e	-e		-i	-e
f	3 人称行為者 (3A)	*-u	-u		-u	-u

上に見るように、行為者を示す母音 (で始まる) 接辞は、原 SB の低段母音や中段母音が高母音化を起こした結果、モトゥナ語において高段母音に反映されるが、被行為者を示す子音接辞は、原 SB と同形である。

5 結論

以上、本論では、モトゥナ語の Ci/Cu 音節と Cc との交替現象を、共時的観点と通時的観点の両方から検討してみた。以上の検討から言えることを下にまとめてみたい。

- (1) この形態音韻的現象は、共時的には、モトゥナ語の音節構造とモーラ構造の特徴、および、拘束形態素（とりわけ親族名称と動詞）の膠着的な多音節構造に依存している。CV 音節が連続する長い親族名称や動詞形を発音する場合、同じパターンで繰り返し現れる、頻度の高い特定の形態素が形成する Ci/Cu 音節が、弱化と中和によってモーラ子音に短縮化されるのは、自然の成り行きと思われる。
- (2) その場合、形態素のうち特に重要な要素、たとえば動詞の項の人称標示などの短縮化には、一定のブロックがかかる。
- (3) 多音節動詞語幹の場合、最後の音節が短縮化されるされないの区別がなぜ生じたかはよくわからない。使用頻度と関係があるのではないかと、というのが一つの仮説である。確かなのは、語幹が名詞類から派生したタイプの語幹は、決して短縮化されないということである。（補遺のデータ参照。）
- (4) この短縮化の音韻的な面は、モトゥナ語にこれらのモーラ子音が形成された歴史的過程をそのまま反映している。多くの場合、短縮化が起きる形態素の基底形は、原 SB にまで遡る。
- (5) 自立名詞で、語尾に交替が起きる例は、おそらく、拘束形態素のこのような短縮化の類推によって生じたものと思われる。これらの名詞の Ci/Cu 形は、歴史的に遡ることはできない。ただ、/h/ が /si/ と交替することについては、これが基本的なパターンであり、また歴史的過程をたどっていることから理解できるが、/ʔ/ と /tu/、/Nc/ と /nu/ の交替については、なぜこのような類推をたどるのか、今のところ説得的な理由が見当たらない。¹⁸

(3) (4) については、まだ十分なデータがあるとは言えない。周辺言語のより詳細なデータを得、比較研究を進めることによって、はっきりした姿を描くことを今後の課題としたい。

本文で用いた略号

略号	英語	日本語
A	Actor	行為者
C	Consonant	子音
Cc	Coda consonant	コーダ子音
CL	Classifier	類別詞
Co	Onset consonant	音節初頭子音
COMIT	Comitative case	共格
DIST	Distal demonstrative	遠称指示詞
DuPc	Dual-Paucal number (in gender paradigm)	双数 / 小複数
DS	Different Subject	異主語
DYN	Dynamic verb	動態動詞
DU	dual number	双数
EXC	exclusive	除外
F	Feminine gender	女性
GMV	Gender-marked verb	性標示形
HABPAST	Habitual Past ATM	習慣過去
INC	inclusive	包括

¹⁸ 同じ調音タイプの子音の中では、舌頂 (coronal) の位置にあるものが音節初頭子音としては最も無標である、というような類型的な議論が成り立つかどうか、課題の一つである。

INST	Instrumental case	具格
IPFV	Imperfective aspect	未完了相
KINPOSS	Kin Possessor	親族所有者
L	Local gender	場所性
LINK	Linker	連結辞
LOC	Locative case	所格
M	Masculine gender	男性
MED	Medial verb	中止形
N	Nasal	鼻音
Nc	Coda nasal	コーダ鼻音
NGMV	Non-gender-marked verb	性無標示形
NOM	Nominative case	名前格
NSG	non-singular number	非単数
NRPAST	Near Past ATM	近過去
PC	paucal number	小複数
PCL	paucal or plural number	大小複数
PFV	Perfective aspect	完了相
PL	plural number	大複数
POSS	Possessor/Possessive pronoun	所有者 / 所有代名詞
PROX	Proximal demonstrative	近称指示詞
PTCP	Participle	分詞
REDUP	Reduplication	重複
RMPAST	Remote Past ATM	遠過去
S	intransitive subject	自動詞主語
SACT	S of active intransitive verb	動作自動詞の主語
SG	singular number	単数
SIRR	S of irregular intransitive verb	不規則自動詞の主語
SMID	S of middle intransitive verb	中動自動詞の主語
SS	Same Subject	同主語
STAT	Stative verb	静態動詞
U	Undergoer	被行為者
1	1st person	1人称
2	2nd person	2人称
3	3rd person	3人称

補遺

表 I 短縮化が起きる動詞語幹

(A) 短縮形/’/ (基底形は、/kiC-/、/kuC-/、/tuC-/)

(i) 基底形/kiC-/

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hahakiy-/~/hahakuy-/	haha’y-	‘to work on’	transitive
/hakik-/	ha’k-	‘to decorate’	transitive
/hokir-/	ho’r-	‘to cut/break’	transitive
/kanakiy-/	kana’y-	‘to eat as protein food’	transitive
/pakir-/	pa’r-	‘to shake/swing’	transitive

表 I 短縮化が起きる動詞語幹 (続き)

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/raakir-/	raa'r-	'to bring upwards'	transitive
/rakir-/~/rakuk-/	ra'k-	'to bark (a tree)'	transitive
/rikir-/	ri'r-	'to untie'	transitive
/rokit-/	ro't-	'to take down'	transitive
/sukik-/	su'k-	'to make sth/sb jump'	transitive
/tuukik-/	tuu'k-	'to make sth/sb crawl'	transitive
/uukiy-/	uu'y-	'to ask sb (about sth)'	transitive

(ii) 基底形/kuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/kukuk-/	ku'k-	'to dig'	transitive
/pokuk-/	po'k-	'to hide'	transitive
/pukuk-/	pu'k-	'to prevent sb from sth'	transitive
/pukuy-/	pu'y-	'to shout'	SACT
/rukuk-/	ru'k-	'to cook by boiling'	transitive
/ukuy-/	u'y-	'to pick from ground'	transitive

(iii) 基底形/tuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hotun-/	ho'n-	'to kindle (fire)'	transitive
/rutun-/	ru'n-	'to ring/beat'	transitive
/totuk-/	to'k-	'to hold/touch'	transitive
/tutun-/	tu'n-	'to begin'	transitive

(B) 短縮形 h (基底形は常に/siC-/)

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/asik-/	ahk-	'to tell sb to go'	transitive
/hisik-/	hihk-	'to break (solid food) into halves'	transitive
/hisit-/	hiht-	'to turn the skin of sb's penis'	transitive
/hosik-/	hohk-	'to pick (fruit)'	transitive
/isir-/	ihr-	'to replace'	transitive
/kaasiy-/	kaahy-	'to cremate'	transitive
/kokisik-/	kokihk-	'to season with salt'	transitive
/kusik-/	kuhk-	'to put down'	transitive
/nisik-/	nihk-	'to hit'	transitive
/nuposik-/	nopohk-	'to get puffed up' 'to become pregnant'	impersonal SACT
/otosik-/	otohk-	'to play a trick on'	transitive
/pisik-/	pihk-	'to look for'	transitive
/peesik-/	peehk-	'to come upon'	transitive
/resin-/	rehn-	'to sway/bend'	SACT
/rusi=rusiy-/	ruh=ruhy-	'to comb sb's hair'	transitive
/rusik-/	ruhk-	'to submerge'	transitive
/tusir-/	tuhr-	'to cut surface of'	transitive
/waasiisik-/	waasiihk-	'to tell (story)'	transitive

表 I 短縮化が起きる動詞語幹 (続き)

(C) 短縮形 N (基底形は、/niC-/、/nuC-/、/ngin-/、/ngung-/、/mung-/、/pir-/、/rin-/)

(i) 基底形/niC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/honik-/	hongk-	'to hang'	transitive
/hunik-/	hungk-	'to push in'	transitive
/konin-/	konn-	'to build'	transitive
/monit-/	mont-	'to stamp on'	transitive
/nuunin-/	nuunn-	'to kiss'	transitive
/nununit-/	nununt-	'to press'	transitive
/onin-/	onn-	'to tie'	transitive
/raanik-/	raangk-	'to rub/wipe'	transitive
/renin-/	renn-	'to shake and carry'	transitive
/ronin-/	ronn-	'to make sb tumble down'	transitive
/runin-/	runn-	'to cook under charcoal'	transitive
/ruunin-/	ruunn-	'to lower'	transitive
/tonin-/	tonn-	'to spread'	transitive
/tutunik-/	tutungk-	'to feel wet and cold'	impersonal

(ii) 基底形/nuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hinung-/	hingng-	'to break (mountain)'	transitive
/kinung-/	kingng-	'to think of'	transitive
/miinut-/	miint-	'to massage'	transitive
/minuk-/	mingk-	'to play'	transitive
/ninut-/	nint-	'to make (waves)'	transitive
/pokono=minung-/	pokono=mingng-	'to name after'	transitive
/rinuk-/	ringk-	'to pass by'	SACT/transitive

(iii) 基底形/ngin-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/tongin-/	tonn-	'to cut (thread)'	transitive

(iv) 基底形/mung-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/tomung-/	tongng-	'to pound'	transitive

(v) 基底形/pir-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/haapir-/	haann-	'to dawn'	SACT
/kopir-/	konn-	'to walk'	SACT

(vi) 基底形/rin-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/itarin-/	itann-	'to disallow'	transitive
/kamarin-/	kamann-	'to feel cold'	impersonal
/kokirin-/	kokinn-	'to bite'	transitive
/puurin-/	puunn-	'to buy/pay'	transitive

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹

(A')

(i') /kiC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
tokis-	'to cut, sever'	transitive

(ii') /kuC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hokut-	'to cross over'	transitive
kukuh-	'to weed'	transitive
rokut-	'to bury'	transitive
tokur-	'to harvest taro'	transitive
raku=rakuk-	'to feel/be light in weight'	impersonal (nominal)
topukuk-	'to feel/be wet'	impersonal (nominal)
okur-	'to be tired'	active intr.

(iii') /tuC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
katuk-	'to trim'	transitive
motuk-	'to spare'	transitive
potung-	'to call sb's name'	transitive
riituh-	'to fix'	transitive
neetuk-	'to ripen'	impersonal (nominal)
hotuk-	'to stick on'	active intr.

/ruC-/、/riC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hirit-	'to pull apart'	transitive
eerih-	'to hide'	transitive
irit-	'to tear'	transitive
rorih-	'to forget'	transitive
torik-	'to count'	transitive
korih-	'to have lots of fruit'	active intr.
maarit-	'to have a rest'	active intr. (nominal)
morik-	'to return home'	active intr.
urik-	'to go up'	active intr.
karuk-	'to tie'	transitive
kurut-	'to cover, bury'	transitive
paaruk-	'to smoke'	transitive (nominal)
pipiruh-	'to open'	transitive
piruk-	'to overturn'	transitive
poruk-	'to put on top'	transitive
ooruh-	'to be afraid'	impersonal
muruk-	'to turn round and see'	active intr.

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹 (続き)

(B')

/hiC-/ , /huC-/ , and /suC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
kuhir-	'to cut (tree)'	transitive
huhut-	'to deceive'	transitive (nominal)
kahuk-	'to baricade'	transitive
kehur-	'to write'	transitive
tuhut-	'to pierce through'	transitive
pohur-	'to go very far'	active intr.
urisih-	'to leave'	transitive
pisuk-	'to paddle'	transitive

(C')

(i') /niC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hinik-	'to chop'	transitive
iinih-	'to move out of way'	transitive
kaaning-	'to bend'	transitive
psiining-	'to ignore'	transitive
sinih-	'to cut/split into fine strips'	transitive
tinir-	'to move from one place to another'	transitive
manik-	'to hunt possums'	transitive (nominal)
ponit-	'to go on top'	middle

(ii') /nuC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
honung-	'to feel by touch'	transitive
aanut-	'to put in the water to be carried away'	transitive
tunup-	'to straighten'	transitive
hunuk-	'to increase'	middle

(iii') /ngiC-/ and /nguC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hingir-	'to dig'	transitive
pongir-	'to break (long obj)'	transitive
ronguh-	'to finish by eating'	transitive
tanguh-	'to slap, clap'	transitive

(iv') /miC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
komik-	'to finish'	transitive

(v') /puC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
tupur-	'to burn in the garden'	transitive (nominal)
sapuk-	'to chop, break'	transitive
maapuk-	'to fill'	transitive

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹 (続き)

(vi') /riC-/ and /ruC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hurir-	'to blow'	transitive
pirir-	'to scatter'	transitive
aaring-	'to jump over, enter'	transitive
haring-	'to feel sad'	impersonal (nominal)
haarung-	'to feel pity on'	transitive (nominal)

表 III Cc が Ci/Cu と交替しない動詞語幹

(A)

/`C-/で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
ha'h-	'to throw (sth) towards'	transitive
ku't-	'to take off clothes'	transitive
mu'h-	'to be unable'	transitive
kunu'h-	'to dip in water'	transitive
sii'h-	'to put oil on'	transitive
naa'h-	'to be lazy'	impersonal (nominal)
ru'h-	'(plant) to grow, (the sun) to rise'	Impersonal
mu'=mu'h-	'to be unable to say through'	middle
mumu'y-	'to be quiet'	middle
mu'y-	'to prevent self to proceed'	middle
ne'y-	'to sit'	middle
ku't-	'to be like'	active intr.
ni'r-	'to be surprised'	active intr.
tuu'k-	'to slide on the ground'	middle

(B)

/hC-/で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
tuht-	'to thread (with a needle)'	transitive
hahk-	'to throw over towards'	transitive
kihy-	'to peel, husk'	transitive
mihy-	'to move/jump vigorously'	middle
muh=muhy-	'to whisper'	middle
ruriht-	'to slip'	middle

(C)

/NC-/で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
mimint-	'to massage'	transitive
siimp-	'to sweep'	transitive (nominal)
nangk-	'to hit, bash'	transitive
nin=ningng-	'to shake'	transitive
nunn-	'to swallow'	transitive
paatungk-	'to carry on a pole'	transitive (nominal)
pinann-, pinangng-	'to coil over'	transitive
rurinn-	'to slide'	middle

参照文献

- BLEVINS, JULIETTE (2004) *Evolutionary Phonology: The Emergence of Sound Patterns*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DUNN, MICHAEL, GER P. REESINK, & ANGELA TERRILL (2002) The East Papuan languages: A preliminary typological appraisal. *Oceanic Linguistics* 41 (2). 28–62.
- EVANS, BETHWYN (2010) Beyond pronouns: Further evidence for South Bougainville. In *Discovering History through Language: Papers in honour of Malcolm Ross*, ed. by Bethwyn Evans, volume 605 of *Pacific Linguistics*, chapter 3. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- HURD, CONRAD (1977) Nasioi projectives. *Oceanic Linguistics* 16 (2). 111–178.
- (2003) Naasioi dictionary. Unpublished manuscript.
- , & PHYLLIS HURD (1966) *Nasioi Language Course*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- , & PHYLLIS HURD (1970) Nasioi verbs. *Oceanic Linguistics* 9. 37–78. Revised in 2009.
- LAYCOCK, DONALD C. (ONISHI, MASAYUKI ed.) (2003) *A Dictionary of Buin: A Language of Bougainville*, volume 537 of *Pacific Linguistics*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- OFFICE, NATIONAL STATISTICAL (2002) *Census Unit Register: North Solomons Province*. Port Moresby: National Statistical Province.
- ONISHI, MASAYUKI (1995) *A Grammar of Motuna (Bougainville, Papua New Guinea)*. Australian National University dissertation.
- ROSS, MALCOLM (2001) Is there an East Papuan phylum? Evidence from pronouns. In *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in honour of Tom Dutton*, ed. by Andrew Pawley, Malcolm Ross, & Darrell Tryon, volume 514 of *Pacific Linguistics*, 301–321. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- 稲垣和也 (2010) 「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集 2』 京都：総合地球環境学研究所.

編集後記

この論集は、地球研言語記述研究会、通称「記述研」のメンバーが中心となってつくられました。出版に至るまで、記述研のメンバーの皆様には、様々なかたちで御協力いただき、心より感謝しています。

言語の記述には終着点がありません。生きている言語が変化することはよく知られていますが、変化の続く限り言語の記述は終わらないと言えるでしょう。私は、フィールドワークに出かけると、現地の人々に「いつ勉強(=研究)は終わるんだ」と尋ねられますが、いつも「わからない」あるいは「死ぬまで」と答えることにしています。もちろん言語変化などの事情も説明します。しかし、「わからない」、つまり「終着点が見えない」ことを理解してもらえずに話が終わるのもなんなので、「辞書ができたら」などと適当なことも言います。

さて、『地球研言語記述論集』も第2巻となりましたが、これからも記述研をもりあげていきたいと思います。ホームページの更新は諸々の事情でいつも遅れがちなのですが、充実した内容になるよう工夫していく予定です。また、地球研のサーバーディレクトリの整理がおこなわれたため、本論集の第1号でお知らせしたホームページのURLは変更されました。新しいURLは、http://www.chikyu.ac.jp/indus/ki_jutsuken/です。是非一度ご覧下さい。

(2010年3月、稲垣和也記)

地球研言語記述論集 2

大西正幸・稲垣和也（編）

言語記述研究会

総合地球環境学研究所プロジェクト H-03

「環境変化とインダス文明」

（プロジェクトリーダー：長田俊樹）

2010年3月30日発行

発行：総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト

京都市北区上賀茂本山 457 番地 4

<http://www.chikyu.ac.jp/indus/kijutsuken/>

印刷・製本：中西印刷株式会社

京都市上京区下立売通小川東入ル西大路 146 番地

ISBN 978-4-902325-51-5